

ヨネ・ノグチという文化現象:名声の軌跡

Yone Noguchi as a Cultural Event:
The Trajectory of His Fame

国際基督教大学 大学院
アート・サイエンス研究科提出博士論文

2013年4月10日

星野文子
Hoshino, Ayako

目次:

はじめに …… 3

第1章: ヨネ・ノグチとアメリカ …… 16

- 1.1 ウァキーン・ミラーおよび詩作との出会い ・ 16
- 1.2 西海岸での英詩集出版とその評価 ・ 24
- 1.3 フランク・パットナムおよびジャポニズムとの出会い ・ 43
- 1.4 編集者レオニー・ギルモアと小説出版 ・ 49

第2章: ヨネ・ノグチとイギリス …… 59

- 2.1 自費出版した英詩集と1900年のイギリス文学 ・ 59
- 2.2 日英同盟と英詩集の評価 ・ 62

第3章: ヨネ・ノグチと夏目漱石 …… 76

- 3.1 明治初期における官費留学の概要 ・ 77
- 3.2 海外滞在中の日本との繋がり ・ 81
- 3.3 現地社会との繋がり ・ 89

第4章: ヨネ・ノグチと西脇順三郎 …… 97

- 4.1 何故はじめに日本語ではなく英語で詩を書いたのか ・ 97
- 4.2 イギリスで自費出版した英詩集の評価 ・ 100
- 4.3 日本語の詩集の評価 ・ 106
- 4.4 ノグチとエズラ・パウンドおよびイマジズムとの関係 ・ 123

第5章: ヨネ・ノグチと戦争 …… 133

- 5.1 日清・日露戦争、および第一次世界大戦におけるノグチの言動 ・ 134
- 5.2 日中戦争:ノグチの国粹主義と国際性 ・ 141
- 5.3 *Emperor Shomu and the Shosoin*(1941)について ・ 147
- 5.4 第二次世界大戦でのノグチの言動 ・ 149

結論 …… 165

参考文献 …… 170

Appendices: 年表、参考写真(遺族提供のものを含む) …… 177

はじめに

ヨネ・ノグチこと野口米次郎は、その文学作品を通して同時代の海外で名が知られた最初の日本人である。そして、それはノグチを日本国内でも有名にした。本論文は、生前には名声が高かったものの今日、殆ど忘れさられているヨネ・ノグチを、文化現象という視点から考察するものである。

ヨネ・ノグチは19世紀の終わり、満18歳にならぬ若さで単身渡米した。資金や知り合いなどもなく、英語もままならなかったノグチは、アメリカ人の詩人ウァキーン・ミラー(Joaquin Miller: 1837?-1913) との出会いを機に詩人を志すようになり、渡米三年後の1896年、日本人として初の英詩集 *Seen and Unseen: or Monologues of a Homeless Snail*¹ をサンフランシスコで出版した。日本人はまだ差別を受けていた時代、21歳のノグチの英詩集はアメリカ大陸を横断して東海岸でも話題を呼び、*New-York Tribune* でも“Oriental Whitman”と評された²。二冊目の英詩集 *The Voice of the Valley*³ を出版後に東海岸へ行き、1902年には、ニューヨークで英語の小説 *The American Diary of a Japanese Girl*⁴ を出版した。日本人が出版した初の英語小説であり、ジャポニズム全盛期であったアメリカでは、最終的に約70もの書評が書かれたほど話題となった。ニューヨークから渡英し、1903年にロンドンで自費出版した英詩集 *From the Eastern Sea*⁵ は、日本人がロンドンで出版した初の英詩集として、現地の作家たちも注目した。現在でも英文学史に名前を刻むような、ウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti: 1829-1919)、W・B・イエイツ (William Butler Yeats: 1865-1939)、アーサー・ランサム (Arthur Mitchell Ransome: 1884-1967) などと交流をもったノグチは、当時としてはもちろん、現代に移しても破格といえる広い交流を経験したのである。

日露戦争の始まった1904年、11年に及ぶ英米生活から帰国したノグチは、海外で有名になった日本人として日本で大歓迎を受けた。明治の大文豪、幸田露伴も『読売新聞』に「野口米氏に寄す⁶」という長詩を発表したほどである。帰国直後にノグチがアメリカのフランク・パットナム(Frank Putnam: 生没年不詳) に送った手紙には、ノグチは連日、訪問し訪問され、あちこちで歓迎会が催されるほど多くの日本人が彼に関心を持っており、自分自身のための時間が全くない程多忙だと書かれている⁷。

ノグチはその後、二度と海外に移り住まなかったものの、彼の活動は世界を舞台に繰り広げられた。慶應義塾で英米文学を教える傍ら、英語と日本語で精力的に執筆し続け、膨大な数の著書

¹ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. (San Francisco: Gelett Burgess & Porter Garnett, 1897).

² 野口米次郎『英米の十三年』(東京: 春陽堂, 1905) p. 4

³ Noguchi, Yone. *The Voice of the Valley*. (San Francisco: William Doxey, 1897).

⁴ Noguchi, Yone. *The American Diary of a Japanese Girl, by Miss Morning Glory*. (New York: Frederick A. Stokes & Co., 1902).

⁵ Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea*. (London: self-published, 1903).

⁶ 『読売新聞』1904年9月17日および18日

⁷ From Yone Noguchi to Frank Putnam. September 1904. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 34.

を出版した。帰国後に出版された『帰朝の記⁸』と『英米之十三年⁹』には、タイトルのとおり彼の英米での挑戦や経験が記録としてまとめられており、本文の半分ほどは英語で書かれている。詩集に至っても、ウァキーン・ミラーとの共著 *Japan of Sword and Love*¹⁰ をはじめ、*The Summer Cloud, Prose Poems*¹¹、*The Pilgrimage*¹² などの英詩集を出版している。

1906年には、「あやめ会」を設立した。ノグチを中心とし、日本詩人の団結を第一の目的として立ち上げられた同会は、日本と西洋の詩人たちを繋ぐ架け橋として、お互いの文学的な相互発展を願って設立されたものである。ノグチに賛同した日本人は、岩野泡鳴、土井晩翠、小山内薫、蒲原有明、河合醉茗、高安月郊、上田敏、前田林外、児玉花外、山本露葉、平木白星、薄田泣菫の12人であった。その他に、イギリス人が9人¹³、アメリカ人が11人¹⁴であった。「あやめ会」は二冊の詩集を出版したものの、最終的には日本人会員間の揉め事のため、わずか半年で解散した。だが、この「あやめ会」に、これだけの錚々たる顔ぶれが集まったということは、ノグチの知名度を表しており、当時、このような日本人作家たちが帰国後のノグチに惹かれていた証拠とも言える。

ノグチは英米の文学界とも関係を保ち続けていた。1913年にはオックスフォード大学モダレン・カレッジから招聘され、「日本詩歌論」について発表した。ノグチを招待したのは、当時のイギリス桂冠詩人、ロバート・ブリッジズ (Robert Bridges:1844-1930) であり、同校としては19世紀のフランスを代表する詩人、ステファヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé: 1842-1898) 来訪以来の記念すべき出来事であったという¹⁵。この講演は、後に英語と日本語の両方で *The Spirit of Japanese Poetry*¹⁶ および『日本詩歌論¹⁷』という著書にまとめられた。1919年にはアメリカの団体「ポンド・ライセム・ビューロー」から招聘され、米国各地の大学で日本詩歌について講演した。また、イギリスで出版した *The Spirit of Japanese Poetry* がアメリカでも広く読まれていることを確認したのである。

1921年に、ノグチにとって初めての日本語詩集『二重国籍者の詩¹⁸』を刊行してからは、日本語詩集を何冊か続けて刊行した。また1925年からは、野口米次郎ブックレットシリーズを立て続けに刊行した。その内容は、芭蕉、蕪村、万葉論などの日本の作家や文学、歌麿、北斎、広重、春信、清長などの浮世絵師、光琳、乾山、包一、光悦などの芸術家、ポオやホイットマン、ロセツ

⁸ 野口米次郎『帰朝の記』(東京:春陽堂, 1904)

⁹ 野口米次郎『英米の十三年』(東京:春陽堂, 1905)

¹⁰ Miller, Joaquin and Noguchi, Yone. *Japan of Sword and Love*. (Tokyo: Fuzanbo, 1905).

¹¹ Noguchi, Yone. *The Summer Cloud, Prose Poems*. (Tokyo: Shunyo-do, 1906).

¹² Noguchi, Yone. *The Pilgrimage*. (Kamakura: The Valley Press / Yokohama: Kelly & Walsh, 1909).

¹³ 1)Laurence Binyon, 2)Laurence Housman, 3)Thomas Hardy, 4)Lewis Morris, 5)W.B. Yeats, 6)Alfred Austin, 7)Arthur Symons, 8)Duchess of Sutherland, 9)Alice Meynell.

¹⁴ 1)Charles Warren Stoddard, 2)Louise Imogen Guiney, 3)Joaquin Miller, 4) Mary McNeil Fenollosa, 5)Madison Cawein, 6)Bliss Carman, 7)Frank Putnam, 8)Edith Thomas, 9)Josephine Peabody, 10)John B. Tabb, 11)Richard Hovey

¹⁵ 和田桂子「野口米次郎のロンドン(7)」『大阪学院大学 外国語論集』(第40号)(大阪学院大学外国語学会、1996) 原文は、野口米次郎『欧州文壇印象記』(東京:白日社, 1916)の奥付裏広告ページ。「『日本詩歌論』は最近著者が英国モウダレン大学に招聘せられ、同大学其他に於いて講演せし世界的名著にして、当時の英国は驚喜して氏を迎へ(中略)『仏蘭西の詩人マラルメを歓迎して以来の出来事である』と驚歎せるによりても、本書が以下に英国文壇を感激せしめしかを知るに足らむ。」

¹⁶ Noguchi, Yone. *The Spirit of Japanese Poetry -Wisdom of the East-*. (London: John Murray, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).

¹⁷ 野口米次郎『日本詩歌論』(東京:白日社, 1915)

¹⁸ 野口米次郎『二重国籍者の詩』(東京:玄文社, 1921)

ティやイエイツなどイギリスやアメリカ、アイルランドの海外作家や海外文学についての論考、それに「独語」「随筆」などの自由な題材や、「松の木」「神秘」などの日本に関する論考にも及んだ。

第二次世界大戦中も『宣戦布告¹⁹』『八紘頌一百篇:野口米次郎詩集²⁰』などの詩集を出すなど、その執筆活動の手を緩めなかった。だが、戦後、疎開先の茨城県結城郡豊岡村(現在の茨城県常総市)で肝臓ガンを患っていると診断され、回復することなく1947年7月13日、71歳の生涯を閉じた。死亡記事は『朝日新聞』や『読売新聞』の他、*The New York Times* にも同年7月15日という早さで掲載され、“Yone Noguchi, Japanese poet, died yesterday..... Critics noted that his later works disclosed an increasing fondness for English language, which, it was remarked he used with extraordinary facility.²¹” とその死がアメリカに知らされた。ノグチが71年の生涯で刊行した著書は100冊以上にのぼり、英語と日本語の両方で出版されたものや、増補されたものも含めると200冊近い。また、著書に加えて、おびただしい数の記事をアメリカ、イギリス、日本、インドなどの新聞や雑誌に寄稿したのである。

多岐におよぶ題材について膨大な数の著書を世に送り出したノグチであるが、彼は何よりも自身を詩人と評価されることを望んでいた。それは、ノグチが51歳の時、彼の詩生活30周年を記念した年に書かれた記事「五十歳の所感」にも見られる。

果たして私に後世に伝へる事が出来るやうな著書があるだらうか。この問題は私は答へることが出来ない。然し私は過去三十年を詩人として生きたものである ... 上出来にしる、不出来にしる、私の詩集で私の価値は定まらねばならない。人によると、私の詩より散文の方がいい、私の評論の方が詩以上に価値があると思はれてゐる。この意見の人が日本ばかりでなく西洋にも沢山ある。然し私は詩人であると信じて、過去三十年を経てきたものである。私の価値は私の詩で定められたいと希望せざるを得ない。²²

ノグチの詩集をまとめてみると、現在わかる範囲では次の表のようになる。

詩集名	出版社	出版年月	詩の数
<i>Seen and Unseen</i> (1st ed.)	San Francisco: Gelett Burgess & Porter Garnet	1896	50
<i>The Voice of the Valley</i>	San Francisco: William Doxey	1897	8
<i>From the Eastern Sea</i> (2nd ed.)	London: Unicorn	1903	36
<i>Japan of Sword and Love</i> (Joaquin Miller との共著)	東京: かなお文永堂	1905	20

¹⁹ 野口米次郎『宣戦布告』(東京:道統社, 1942)

²⁰ 野口米次郎『八紘頌一百篇:野口米次郎詩集』(東京:富山房, 1944)

²¹ *The New York Times*. 15 July 1947. “Yone Noguchi” (Obituary).

²² 『読売新聞』1926年2月8日

<i>The Summer Clouds, Prose Poems</i>	東京:三陽堂	1906	62
<i>The Pilgrimage</i>	Yokohama: Kelly&Walsh	1909	84
	Kamakura: The Valley Press ²³		
<i>Kamakura</i>	Yokohama: Kelly&Walsh	1910	1
<i>Japanese Hokkus</i>	Boston: The Four Seas Co.	1920	84
二重国籍者の詩	東京:玄文社	1921.12	66
野口米次郎英詩選集	東京:アルス社	1922	53?
林檎一つ落つ	東京:玄文社	1922.4	85
沈黙の血汐	東京:新潮社	1922.5	60
山上に立つ	東京:新潮社	1923.1	63
最後の舞踏	東京:金星堂	1923.4	74
我が手を見よ	東京:アルク	1923.5	67
表象抒情詩1	東京:第一書房	1925.12	59
表象抒情詩2	東京:第一書房	1926.9	52
表象抒情詩3	東京:第一書房	1927.3	87
表象抒情詩4 (散文詩)	東京:第一書房	1927.6	80
<i>The Ganges Calls Me, Book of Poems</i>	東京:教文館	1938	66
強い力弱い力	東京:第一書房	1939	19
宣戦布告	東京:道統社	1942.3	6
起きてよ印度	東京:小学館	1942.6	64
八紘頌一百篇	東京:富山房	1944	102
<i>Blood of Silence and Other Poems</i> ²⁴	Unpublished		21
合計 25 冊			1369

ここに上げた詩集の中には、増補している詩集もあり、詩によってはいくつかの改訂版が複数の詩集に掲載されている場合もある。ノグチの著書は、約100冊のうち、約4分の1が詩集ということになる。

だが、これだけ活発に活動していたノグチにも影があった。約11年に及ぶ海外生活で、現地の社会でインサイダーとなろうとしたほど異文化の社会に深く適応したノグチは、帰国後の日本社会でインサイダーとなり切れなかった。1926年7月、詩生活30周年を記念した文章を『三田文学』に発表した。その中に次のようなくだりがある。

私は十八九の頃から十数年間、英米両国²⁵に於てエトランゼとして生活した。エトランゼには、如何なる国に彼が滞在しても、其国の人々に許されない自由が許される。独

²³ この出版社は、米次郎が同書の私家版を出すために Léonie Gilmour に作らせた出版社だという。ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上) (東京:講談社, 2003) p. 138

²⁴ Noguchi, Yone. *Collection of Letters and Papers from Yone Noguchi*. BANC MSS C-H 127. The Bancroft Library, University of California, Berkeley に、原稿のみまとめて保存されている。

²⁵ 本論文中では、ヨネ・ノグチの邦文について、原文に見られる旧字体を当用漢字で統一して置き換えた。

立が許される。エトランゼは其国の歴史を知らないであらう。伝統を知らないであらう。又これを知らないことを喜ぶであらう。彼は精神的放浪人である。精神的治外法権の特別地帯の住人である。(中略)漫遊客は、その理性をためて感情に動くことが出来る特権を持つて居る。この特権がすべてのエトランゼを詩人たらしめるであらう。²⁶

「エトランゼ(異邦人)」という立場をむしろ前向きに、有益に捉えようとしてきたのは、ノグチが書いた次の文章にもあらわれている。

私共は日本人として今日現に日本に住んでゐるが、外国人のやうな心持ちで日本の現実に触れないと新鮮な文学的理智が開けてこないと思ふ。日本人として日本の現実世界に捲き込まれると、私共には整理がない、批評がない。整理のない批判のない文学に大した価値はない。故に外国人の心持ちで日本に住むと、私共は混雑した伝統に捉へられる心配がない²⁷。

ノグチが自らを表現した「エトランゼ」という言葉は、多くの日本人によるノグチの見方をあらわしているようでもあった。

また、ノグチが 1921年、帰国から17年後に46歳で出版した初の日本語詩集『二重国籍者の詩』で、英語と日本語のどちらの言語にも自信がないと自嘲した「自序」はよく知られている。

日本人が僕の日本語の詩を読むと、
「日本語の詩はまづいね、だが英語の詩は上手だらうよ」といふ。
西洋人が僕の英語の詩を読むと、
「英語の詩は読むに堪へない、然し日本語の詩は定めし立派だらう」といふ。

実際にいふと、
僕は日本語にも英語にも自信が無い。
云はば僕は二重国籍者だ……
日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ……
不徹底の悲劇……
馬鹿な、そんなことを云ふにはもう時既に遅しだ。
笑つてのける、笑つてのける！²⁸

ノグチをどう取り扱えばいいかと考えあぐねていた日本人たちは、「二重国籍」という表現を待望していたかのようであった。この「二重国籍」という表現は、まるでノグチのトレードマークのようになって

²⁶ 野口米次郎「過去30年を振り返る」『三田文学』1926年4月号(東京:三田文学, 1926)

²⁷ 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局, 1975)p. 151

²⁸ 野口米次郎『二重国籍者の詩』(東京:玄文社, 1921)pp. 1-2

た。

だが、当時の日本社会にはノグチのような「二重国籍者」や「エトランゼ」を受入れる素地がまだなかったといえる。ノグチを知る者たちの中には、彼が日本で正しく理解されていないことを心苦しく思っている者も少なくなかった。金子光晴の言葉、「日本の詩人よりはむしろ世界的詩人として知られた野口米次郎...名声ほどに日本人の間で親しまれなかったのは、日本人の偏狭さの故があったとしたら、多いに反省しなければならないことであろう。...世界のヨネ・ノグチは、日本の中ではいつも窮屈そうにみえた。²⁹」のように、それは日本人の偏狭さ故であったかもしれない。また、今日も世界的名声を博する『武士道』を1899年にアメリカで出版した新渡戸稲造が、ノグチを次のように表現して、日本人を代表する功績と称えたが、ノグチの国際的な業績は、新渡戸のように、海外に精通した者のみが理解できたのかもしれない。

A scientific man, disposed to test Japanese vitality, might try an experiment by picking out a normal young man from among us, and transplanting him to an alien soil, subjecting him to new conditions and observing his growth. Such an experiment is taking place on quite an extensive scale on the Pacific Coast of America. If but one out of a hundred thrives, it may prove the vitality, not of the particular individual only, but of the whole race. We have a remarkable case of this kind in the person of Yone Noguchi.³⁰

新渡戸の序文を受けて、英文学者の齋藤勇は、「新渡戸稲造の序文において、東西西洋文化の連絡を遂げる適任者として推賞されているにもかかわらず、ヨネ・ノグチの真価は母国においてどれほど認められたであらう。(中略)『二重国籍者』の孤独を彼はしみじみと感じたであらう³¹」と論じる。詩人の服部嘉香も、「野口米次郎さん、あなたの詩歴は、アメリカと日本でかなりの年月にわたっていたにも拘らず、正当な評価を受けていないように思われます。いいかえれば、あなたの詩業に対して、御他界後17年も経っていながら、輝かしい定評が現れていないのです。わたくしはそれをいつも不当のことだと思っていました。あなたも、御生前から無念のことと思われていたのではないのでしょうか。³²」との文章を寄せている。

このように、どこか日本の社会に収まり切っていない側面があり、どこか正しく評価されていないと思われていた節もありながら、日本においてノグチの生前の知名度はきわめて高かった。その私生活にわたる言動までもが時によって新聞や雑誌に掲載されるほどでもあった。例えば、『読売新聞』の「よみうり抄」には、ノグチが11年ぶりの帰国直後に津島の両親を訪問の際に、「野口米

²⁹ 金子光晴「野口米次郎・人と作品」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局, 1975) pp. 93-96

³⁰ Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanzo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 3

³¹ 齋藤勇「ヨネ・ノグチ」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻(東京:造形美術協会出版局, 1963) pp. 26-27

³² 服部嘉香「野口米次郎論」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻(東京:造形美術協会出版局, 1963) pp. 135-136

次郎氏 昨日出発郷里尾張に赴き十数日間滞在する由³³と書かれたのを皮切りに、同欄にはその後約30年に亘り、彼個人の言動が折に触れて記載されている。当時、同欄において、このように注目を受けていた作家たちには、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎、上田敏、北原白秋、堀口大学、与謝野鉄幹、与謝野晶子、北原白秋、鈴木三重吉らがいた。また、ノグチがどれだけ日本人の間で知られた人物であったかは、例えば1935年に明治天皇の御製をノグチが英訳して各国の主賓へ贈呈したということや³⁴、1937年に上野公園で生まれたキリンの子供の名前の審査委員の一員であったことなど³⁵、国民を捲き込んだ話題にヨネ・ノグチの名前がしばしば登場していることから読み取れる。また、他界後も著名な作家の一人として、その作品は、例えば次にあげる文学選集にも収められてきた。『日本現代詩大系(6)³⁶』(1951年)、『現代日本文学全集(73)³⁷』(1956年)、『日本の詩歌(12)³⁸』(1969年)、『現代日本文学大系(41)³⁹』(1972年)などである。ところが、ヨネ・ノグチを今日知る人はごくごく僅かである。英米文学を研究する者の中にはノグチを知る者もいるが、一般的には殆ど忘れ去られており、まして彼を詩人として知る人はきわめて少ない。ノグチの息子には世界的に著名な彫刻家となったイサム・ノグチがおり、ヨネは、没後20年以上経った今も知名度の高いイサムの父としての方が知られているといえる。このように、ヨネ・ノグチの生前の知られ方と今日の忘れられ方に横たわる溝はきわめて広く深い。何故だろうか。

ノグチが語り継がれにくかった様々な要因はいくつか考えられる。まず、ノグチが成し遂げたことが多岐に亘るため、一つの分野で納まりきらず、研究者が扱いにくかったと考えられる。例えば、詩においても、彼は英語と日本語の両方で書いた。英詩においては、当時彼を評価した人達は、英語母語話者が普段使わない独特のユニークさや東洋的発想に注目したが、それは欧米の文化や言語に精通していなければ理解し難い。同様に、日本語の詩に関しても、ノグチと同時代の詩人たちが注目した点は、西洋的な思想の表れや発想の展開、または、日本語としてのぎこちなさなどで、それらは余程日本語に精通していないと読み取れない。これら両方を踏まえて、ノグチの詩を網羅的に理解して評価するのはきわめて困難である。また、ノグチの著書や彼について書かれた資料は世界各地に点在しており、まとまっていない。さらに、それらを読み解くには日本語と英語の両方に精通しているのが必須条件となる。アメリカにおいても、西はサンフランシスコやオークランド、東はシカゴ、ニューヨーク、ボストン、ワシントン DC など、彼がある程度の期間を過ごした都市がいくつもあるのだ。日本国内でも愛知県津島市や東京、神奈川県藤沢市や鎌倉市、茨城県常総市などがあり、その他にロンドンやインドもある。世界各地の地元のメディアをその

³³ 『読売新聞』1904年10月4日

³⁴ 『朝日新聞』1935年5月25日

³⁵ 『朝日新聞』1937年7月25日

³⁶ 『近代詩 第3』日本現代詩大系6(東京:河出書房、1951)

³⁷ 『野口米次郎・三木露風・千家元麿・日夏耿之介集 現代日本文学全集』73(東京:筑摩書房、1956)

³⁸ 『木下杢太郎・日夏耿之介・野口米次郎・西脇順三郎 日本の詩歌』12(東京:中央公論社、1969)

³⁹ 『千家元麿・山村暮鳥・福士幸次郎・佐藤惣之助・野口米次郎・堀口大学・吉田一穂・西脇順三郎集 現代日本文学大系』41(東京:筑摩書房、1972)

時々で賑わせ、その都度、現地の歴史の一ページに名前を刻んできた筈であるが、それらはアーカイヴとして纏まってはいないのである。

さらに、第二次世界大戦も大きな要素であった。これは、ノグチにとって精神的に容易な状況ではなかった。日本の敵は、ノグチが第二の故郷と呼んだアメリカだったからである。他の多くの海外経験のない日本人作家たちも、どこまで国粹主義の活動をするかを決断せねばならぬ時である。ノグチの場合、国粹主義に関わることは、戦争を肯定することに加え、第二の故郷を裏切り、敵に回すことを意味したのである。それでもノグチは覚悟を決めたかのように、ある程度は国粹主義の立場から戦争詩を書いたり、新聞に投稿したりと、戦争に協力したと見受けられる。ノグチが第二次世界大戦中、どの程度国粹主義であったのか、それは限られた資料しか残されていない今、明解な答えのない問いかもしれない。だが、日本人として米英で文学を通して名が知られ、それ以来、日本と西洋との架け橋となることを目標にしてきたノグチが、戦時中どのようにして国粹主義になったのか、その国粹主義はどこからくるのか、そして彼の国際性にはどのような変化があったのか、などは重要な問題である。ところが、ノグチは、終戦後丸二年経たず、病でその命が絶たれてしまった。同年代の人物で同じく戦争に協力したと言われる高村光太郎などは、終戦後、反省しながら生き続けて自身で名誉挽回したのに比べて、ノグチはその機会がなかったのも、彼が一般的に忘れられて来た理由の一つだろう。

ノグチの早すぎる他界は、自身による戦後の名誉回復の機会を奪ってしまっただけでなく、自身の著書に関しても見通しを立てられなくした。ノグチは他界する二週間ほど前に、長女^{ひふみ}一三三の夫・外山卯三郎に、野口米次郎全集を出版したいという望みを伝えた。だが、遺族の中にそれを意欲的に推進する者がおらず、彼の望みは実現されなかった。外山卯三郎は、英文の方がノグチの功績が表れていると思い、アメリカにいたヨネの息子イサム・ノグチに、ノグチの英文全集出版について打診したところ、「アメリカでは既にヨネ・ノグチは忘れられているから不可能」という返事で諦めたという。ノグチの著書が手に入りにくいという状況は、研究者を遠ざけたかもしれない。

このような状況の中、ヨネ・ノグチ研究は、途絶えはしなかったものの、近年まで盛んにはならなかった。ノグチの詩集、日本文学精神、自然観、イマジズムとの関係、英語俳句、英語小説やその小説に出てくる朝顔嬢、英米の暮らしなど、研究テーマはさまざまであったが、それらは網羅的に行われていたとは言いがたい。ノグチの没後17年を過ぎた頃から立ち上がったヨネ・ノグチ・ソサイエティは、ヨネ・ノグチ研究を推進した唯一の集まりで、先述の外山卯三郎、現在は東京大学名誉教授である亀井俊介、それに当時青山学院大学の教員であった渥美育子の三名で構成されていた。ソサイエティの歴史は、亀井俊介の「ヨネ・ノグチ研究の極私的展望⁴⁰」に詳しいが、彼らは英語の手紙集 *Yone Noguchi Collected English Letters*⁴¹ や、『詩人ヨネ・ノグチ研究⁴²』三巻などを出版し、それらは細々と続いていたヨネ・ノグチ研究の非常に貴重な資料となっているもの

⁴⁰ 亀井俊介「ヨネ・ノグチ研究の極私的展望―序に代えて」星野文子『ヨネ・ノグチ：夢を追いかけた国際詩人』（東京：彩流社、2012）

⁴¹ Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975).

⁴² 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局、1963-1975）

の、ヨネ・ノグチ研究を活発にはさせなかった。

近年、このようなヨネ・ノグチ研究の低迷期を破ったのは、まず、ドウス昌代著『イサム・ノグチ 宿命の越境者⁴³』であろう。同書はノンフィクションで、ノグチの伝記も含まれている。ノグチの出版や功績よりも、彫刻家イサム・ノグチの父、またイサムの母であるアメリカ人レオニー・ギルモアの「夫」としての観点が強いが、現代人がヨネ・ノグチという人物を知るきっかけとなった。同書を元に、映画『レオニー』(松井久子監督、2010年)も製作、公開された。塩崎智『日露戦争もう一つの戦い—アメリカ世論を動かした五人の英語名人』は一般書であるが、岡倉覚三、金子堅太郎、朝河貫一らと並んでノグチが海外で発信した内容が紹介されている⁴⁴。研究者向けの著書としては、2007年から2009年に刊行された亀井俊介および国際日本文化研究センター教授稲賀繁美の解説付きの『ヨネ・ノグチ英文著作集⁴⁵』(全12冊)があり、ノグチがアメリカやイギリスで初めて出版した英詩集や小説をはじめ、文学評論、散文など、数々の英文著作の復刻版が初めて手に入りやすくなった。また、日本語の著作に関しては、現在は国立国会図書館近代デジタルライブラリーにおいて、多くを閲覧できるようになった。2012年に刊行された堀まどか著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』では、その生涯における数々の業績が、詳細な研究調査を基にはじめて網羅的に発表された。同書で堀は、ノグチを「ようするに、戦争協力者、巧みに世界進出した二流詩人、アイデンティティも思想も定まらない〈二重国籍者〉、日本語の下手な〈外人〉の情操を持つ日本人、そして白人女性と子を捨てた身勝手な〈男〉といったイメージが一般的に定着してきた」と論じ、その人生と作品を「一九世紀末から二〇世紀初頭の世界状況、国際的文化交流の中で問い直す」と掲げている⁴⁶。だが、ノグチの著書は膨大な数であり、彼女の研究に含まれていない部分も多い。アメリカでは、日本人学者である伯谷嘉信が1990年および1992年に、*Selected English Writings of Yone Noguchi* の二巻本を刊行している。伯谷は一卷目の序文で、ノグチとイマジズムの関係を検証している。現在もノグチがイマジズムに与えた影響を研究する学者はアメリカに少なくないようである。2000年頃からは、いくつかのアメリカ詩アンソロジーに、ノグチの詩が数篇ずつ含まれている⁴⁷。2012年に刊行された *Queer Compulsions: Race, Nation, and Sexuality in the Affairs of Yone Noguchi*⁴⁸ では、初めてノグチのセクシュアリティに光が当てた議論を展開している。同書はノグチやその周辺の人物たちの数多くの手紙を使いながら、ノグチとチャールズ・ウォレン・ストッダード (Charles Warren Stoddard: 1843-1909)、またノグチと他の日本人男性などとの関係を分

⁴³ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(東京:講談社, 2000)

⁴⁴ 塩崎智『日露戦争もう一つの戦い—アメリカ世論を動かした五人の英語名人』(東京:祥伝社新書, 2006)。

⁴⁵ 『ヨネ・ノグチ 英文著作集』(東京: Edition Synapse, 2007-2009)

⁴⁶ 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) pp. 5-6

⁴⁷ 1). Axelrod, Steven Gould; Roman, Camille; Trivisano, Thomas. ed. *The New Anthology of American Poetry: 1900-1950* (New Brunswick, N.J.: Rutgers State University of New Jersey, 2005)

2). Gioia, Dana; Mason, David; Schoerke, Meg. ed. *Twentieth-Century American Poetry* (Boston: McGraw Hill, 2004)

3). Granger, Edith; Kale, Tessa. ed. *The Columbia Granger's index to Poetry in Anthologies* (New York: Columbia University Press, 2007)

4). Hass, Robert. *American Poetry: The Twentieth Century, Volume I. Henry Adams to Dorothy Parker*. (New York: Library of America, 2000)

⁴⁸ Sueyoshi, Amy. *Queer Compulsions: Race, Nation, and Sexuality in the Affairs of Yone Noguchi*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 2012).

析しようとするものである。日本で教鞭を執る Edward Marx は、ノグチが W・B・イエイツの能楽研究に与えた直接的な影響⁴⁹などの研究のほか、ノグチの英語小説 *The American Diary of a Japanese Girl* の注釈版⁵⁰、2013年2月にはノグチが1922年以降1947年に他界するまでに英語で執筆した記事集 *Later Essays*⁵¹ を出版し、これらはノグチの英語圏における執筆活動をより網羅的に理解しやすくした。また、2013年1月に出版された、*Britain & Japan: Biographical Portraits (Vol.viii)*⁵² には、日本とイギリスに関係している作家の一人としてノグチが含まれている。だが、これら全てをまとめても、ノグチの著書の数に対して、研究の数がきわめて少ない、というのが現状である。

近年に刊行されたこれらの研究でも深く検証されていないのは、生前にこれだけ著名であったヨネ・ノグチがなぜ、没後そこまで忘れられてきたかという点である。言い換えれば、何故ノグチは限られた時代において有名だったのかという点である。過去にも、1985年に高井蒼風がその著書『英詩人 ヨネ・野口の栄光:その英米における遍歴苦闘の秘録』で、ノグチの業績に対する評価が何故驚く程に遅れているのかと問いかけている。ノグチの「世界に広く日本の芸術精神を闡明した一大功績はラフカディオ・ハーン以上の文化的偉業であり、日本有史以来、日本の和歌、俳句、美術、能楽から万葉集、日本書紀などの古典文学の真髄までを広いレパートリーを把握して外国に日本文化精神を闡明した功績は文学者のまさしく第一人者と賞讃しても過言ではない」のにもかかわらず、「政府は文化勲章ひとつ与えていない」どころか、「日本のマスコミや、有名な雑誌社、出版社の不認識も甚だしく、一社としてこの詩人の死後、その大芸術を認めず、一冊の伝記すらいまだなく、死後四〇年になんなんとする現在[1985年、昭和60年]まだ全集一つ出していないのである」と続く⁵³。

高井とは逆に、ノグチの生前の知名度に疑問を投げかける議論もある。アメリカ人の日本文学者アール・マイナーは、ノグチの英詩について、その著書『西洋文学の日本発見』で次のように論じている。

一時代前の読者が日本を広く紹介したという点ではハーンの後継者ともいうべきヨネ・野口の作品に感激したなどという驚くべき事実や、ヨネ・野口はジョン・グールド・フレッチャーへも周知のような影響を及ぼしていることは、かなり思いきって歴史的精神をほしいままにしなければ、とうてい納得できることではない。結局、ヨネ・野口を賞賛しているのは、リチャール・ル・ガリエンヌ、ブリッス・カーマン、メレディス、リチャード・ガーネット、ウィリアム・ロセッティ、ハーディなどであるが、なぜ彼らはヨネ・野口を賞賛したのだろうか。(中略)野口の評判が異常に高かった理由の説明としては、少なくとも二つある。

⁴⁹ Marx, Edward. "No Dancing: Yone Noguchi in Yeats's Japan." Warwick Gould. ed. *Yeats Annual 17, Influence and Confluence*. (London: Macmillan, 2007).

⁵⁰ Noguchi, Yone. *The American Diary of a Japanese Girl: An Annotated Edition*. Marx, Edward. and Franey, Laura. ed. (Philadelphia: Temple University Press, 2007).

⁵¹ Noguchi, Yone. Marx, Edward, ed. *Later Essays*. (Botchan Books, 2013).

⁵² Cortazzi, Hugh. ed. *Britain & Japan: Biographical Portraits*. Vol. viii. (Leiden-Boston: Global Oriental, 2013).

⁵³ 高井蒼風『英詩人ヨネ・野口の栄光:その英米における遍歴苦闘の秘録』(東京:紀尾井書房, 1985) pp. 2-3

まず第一に、彼はたまたま英語を使って書いたほんものの日本詩人だと考えられていたことである。いかに彼がほんものではなかったかということは、彼の『日本の発句』(1920)を読むとわかるが、そのなかで彼は、シラブルを数える日本の詩型の保存を計り、また或る時は、単に「発句精神」の複製版を試みたりしている。しかし、この俳句精神というものが、過去三世紀にわたる詩人たちにとって何を意味したかを顧みるならば、決してそんな生やさしいしろものではなかったのである。さらにいえば、この俳句精神なるものがヨネ・野口にとってどういう意味をもっていたか、という点もはっきりしていない。というのは、彼は「発句」のあいだに、俳句が出現するよりも約七世紀も前に死んだ紀友則、その他の歌人の作った短歌を数篇まぜて、翻訳しているからである。しかし、日本語について何も知らぬ当時の人びとには、野口はいかにほんもののように見えたのである。⁵⁴

マイナーにとって、ノグチの評判の高さは「異常」と表現するほどに納得がいかなかったのである。マイナーの指摘どおり、ノグチは、「英語を使って書いたほんものの日本詩人」ではなく、たまたま西洋において英語で詩を書き始めた日本人であった。大学も中退し、満18歳にもならず渡米したノグチは、日本に関する知識もそこまで深くはなかったであろう。だが、ノグチのような人物が他にいなかったことが大きく手伝って、ノグチは当時注目を集めていたと思われる。

マイナーはノグチが「ほんものではなかった」という点に関して、次のように続けている。

彼の人気の第二の理由は、彼がその当時の英国詩人たちのスタイル、時にはその最悪のスタイルを用いたというまことに皮肉な事実によるのであった。彼の「発句」は、英国人たちの発句同様に、異国的なものであり、彼の自由詩は明らかにホイットマンより靈感を受けたものであった。また彼の「散文詩」の実験は、その技法において、エイミー・ローウェルの「調べのある散文」とほとんど同一であった。当時流行の英詩のセンチメンタル型を反映することに大童になり、しかもなお一個の日本人たることから抜け切れないという、——これが野口の本領であった。野口は、その時代の人びとに、彼らの自身のつくる作品が本当に日本より靈感を受けたものであるかのごとき確信を与えた

⁵⁴ マイナー・アール著 深瀬基寛、村上至孝、大浦幸男訳『西洋文学の日本発見』(東京:筑摩書房, 1959) pp. 212-213 同箇所英文は次のとおり。 “It requires a certain indulgence of the historical spirit to deal with the marvelous fact that readers a generation ago were excited by the writing of Yone Noguchi, the successor to Hearn as popularizer of Japan, and an acknowledged influence on John Gould Fletcher. He was praised, after all, by Richard Le Gallienne, Bliss Carman, Meredith, Richard Garnett, William Rossetti, Hardy, and others. But why? *Seen and Unseen* (1897) with its apt subtitle --“Monologues of a Homeless Snail”—echoes Emerson and Whitman more than the Japanese poets, and Noguchi kept echoing them in the unrhymed verse of *From the Eastern Sea* (1903), in the adaptations of Japanese poetic forms of *The Pilgrimage* (1912), and in the prose poetry of *The Summer Clouds; Prose Poems* (1906). There are at least two explanations for Noguchi’s extraordinary popularity. To begin with, he was taken to be a real Japanese poet who just happened to write in English. How little he was the real poet can be seen from his *Japanese Hokku* (1920) where he sometimes tries to maintain the Japanese syllabic form and sometimes attempts merely to reproduce “the haiku spirit”—no mean thing when haiku has meant very different things to three centuries of poets. Furthermore, what this spirit meant to him is hard to say, since he translated, among other “hokkus,” a few tanka by poets like Ki no Tomonori who died some seven centuries before the haiku form was evolved. But Noguchi seemed like the real thing to a generation who knew no Japanese.” Miner, Earl. *The Japanese Tradition in British and American Literature*. (Princeton: Princeton University Press, 1958). pp. 186-187

のであった⁵⁵。

我々ヨネ・ノグチ研究者は、このような評価も十分に踏まえていかなければいけない。だが、マイナーもノグチが有名であったことは否定していない。ノグチが有名であった故の論点なのである。つまり、ノグチをめぐる一種の現象が起きたといえる。ヨネ・ノグチが、その評価には賛否両論あるものの、生前に著名であったことは誰も否めない事実として受け取れよう。このことから、ノグチがきわめて特殊な存在であったといえるだろう。ノグチは日本人でありながら、アメリカとイギリスという二つの英語圏の大国で、その名が知られていた。そして、日本でも、イギリスとアメリカで名の知られた日本人として知名度があった。どちらにとっても象徴的な存在だったノグチの位置づけは、異例であった。それは20世紀前半、第二次世界大戦前という限られた時代と社会を背景にして起こったことであった。そして、戦後、社会が変化したのと同時に忘れ去られてしまったのだろう。本論文では、限られた時代において名声のあったヨネ・ノグチを文化現象としてとらえたい。文化現象という言葉は、長年ヨネ・ノグチ研究を続けてこられた亀井俊介も最新のノグチに関する文章で、ノグチの「文化」現象という観点からの研究の可能性を指摘している際に使われている⁵⁶。筆者がはじめてこの言葉を耳にしたのは、2011年2月、明治学院大学名誉教授新倉俊一との話の中であった。氏もある程度漠然とした総括的な言葉として使われたであろうし、私自身もそのまま受け取ったのである。だが、この文化現象という言葉は、ヨネ・ノグチの神話化された名声を解きほぐす視座を提供するのではないか。

このような観点から、本論文では、ノグチがどのような時代背景で、どのような処に注目されてその名が知られるようになったか、次にあげる五つの観点から、その名声の作られ方に光をあてる。

まず、第1章では、ノグチのアメリカにおける執筆活動によって作られた名声に注目する。これまでの多くの研究では、ノグチの努力が実らせた成功物語として語られることが多かったが、実際にはノグチ自身の努力に加えて、ウァキーン・ミラー(Joaquin Miller)、フランク・パットナム(Frank Putnam)、チャールズ・ストッダード(Charles Warren Stoddard)、レオニー・ギルモア(Léonie

⁵⁵ マイナー・アール著 深瀬基寛、村上至孝、大浦幸男訳『西洋文学の日本発見』(東京:筑摩書房, 1959) pp. 212-213 同箇所の英文は次のとおり。“The second reason for his popularity is the ironic fact that he adopted the styles, often the worst styles, of contemporary poets in English. His “hokkus” are as exotic as any of theirs, his free verse is obviously inspired by Whitman, and his experiments with “prose poems” are almost indistinguishable from Amy Lowell’s ‘cadenced prose’ in technique. Here was Noguchi, doing his best to reflect current English modes of the more sentimental variety, and yet a Japanese: he reassured the age that their own work was truly inspired by Japan.” この後、次のように続く。「しかし、彼が『鳥居を通して』(1922)のなかで、単に暗示だけが日本の詩を理解する鍵のすべてではないと、及ばずながら講義したのは立派であった。なぜかという、全体的にいて、あまりにも多くの詩人たちが、えせ三段論法—日本の詩や芸術は暗示的である、詩 X は日本の詩または芸術を取り扱っている、故に X は暗示的であり、極めて現代的なり—という論法にまどわされて、彼らの分別を失ってしまったからである。ノグチの評論は、彼の詩どれよりも、いま読み返してみると、筋が通っている。」“It is to his credit, however, that he protested, though in vain, in *Through the Torii* (1922), that suggestion was not the whole key to Japanese poetry. To his credit, because altogether too many poets were seduced out of sense by the false syllogism that Japanese poetry and art are suggestive, the poem *x* treats Japanese poetry or art, and therefore *x* must be suggestive and very modern. Noguchi’s critical essays make more sense in retrospect than any of his poems.” Miner, Earl. *The Japanese Tradition in British and American Literature* (Princeton: Princeton University Press, 1958). pp. 186-187

⁵⁶ 亀井俊介「ヨネ・ノグチ研究の極私的展望一序に代えて」星野文子『ヨネ・ノグチ:夢を追いかけた国際詩人』(東京:彩流社, 2012)p. 16

Gilmour) の四人を初めとするアメリカ人の支援なくしてはあり得なかった。彼らの貢献度についても、残された手紙や文章などを通して浮き彫りにし、彼らの手によって作られたノグチのエキゾティシズムや、そのエキゾティシズムが得た反応や評価の内容の詳細を見ることで、当時のアメリカにおけるノグチの知名度の中身を再考する。

第2章では、ノグチが1903年にロンドンで自費出版した英詩集によって築かれた名声に注目する。同英詩集はアメリカで出版した詩集や小説以上に多くの反応を得たが、どのような理由で、ノグチに注目が集まったのか。19世紀に第一線で活躍した著名な作家や評論家たちの多くがまだ健在であったという当時の時代背景や、1902年の日英同盟という社会背景、さらに初めて英語で詩を書いた日本人という要素を踏まえ、ノグチの詩集に集まった注目の意味を再検証する。

第3章では、ヨネ・ノグチと夏目漱石を、その海外経験という側面から比較する。現在も確かな知名度を持つ夏目漱石は、イギリスに居た時期がノグチとほんの数週間ほど重なっていた。ところが、ノグチは私費で渡航したのに対し、夏目は官費留学であった。二人はロンドン滞在経験の受け止め方が全く違い、夏目はその滞在を「不愉快な二年」と形容したのに対し、ノグチはその人気を欲しいまま手にしたのである。その違いは、官費留学という枠組みがもたらした期間や目的、予算などの決められた条件に対して、私費で渡航したがゆえに得た自由かもしれない。滞在中の日本との繋がり、現地社会への適応度合いという二つの点において、彼らの海外滞在を比較する。

第4章では、今日詩人として忘れられているノグチと、多くの共通点を持ちながら今日も詩人として知られる西脇順三郎を比較する。ノグチと西脇とは、20世紀はじめにロンドンで英詩集を自費出版したという共通の出発点を持っている。しかし、イギリスや日本の作家たちとの関わり、また1910年代から起きたヨーロッパでのイマジズム及びモダニズムの受け取り方、などにおいて大きな違いを持つ。この共通点と違いとに注目し、当時に限らずその後にいるまでの評価を決めた彼らの詩作に対する姿勢や時代の受け取り方、受け取られ方に光をあてる。

第5章は、ノグチと戦争である。ノグチの生涯を見てみると、日清・日露戦争、第一次および第二次世界大戦が勃発した。ノグチは、平和時には日本と西洋の狭間に立っていたものの、戦争時は国粋主義と国際性との間で選択しなければいけない立場に立たされた。著名であるが故に国民を代表して物を言う立場に立ち、日本人として戦争を生き抜いたノグチの言動から、当時のノグチの知名度を確認し、同時にその後の評価への影響の要素として検討したい。

これらの観点から、ヨネ・ノグチが生前に持った名声の真意に迫り、いかに特有の時代背景、社会背景の中で知られた人物であったかを浮き彫りにしたい。そうすることで、ノグチをある種のロールモデルとして再評価するきっかけにもなり、戦後から今日に至るまで、なぜ殆どの一般の人たちの目に留まらなかったのか、という理解にも繋がるであろう。また、ノグチという人物をひとつの文化現象という観点から論じて歴史的な位置づけをすることで、今後のヨネ・ノグチ研究に新たな視座をもたらしたい。

なお、文中に引用したノグチの英語は、文法的な間違いが多々あるものの、原文のままである。

第1章：ヨネ・ノグチとアメリカ

ヨネ・ノグチは、1875年12月8日、現在の愛知県津島市本町で生まれた。本名を野口米次郎という。英語を学んだ幼少期から英米生活に関しては、半生をつづった彼の自伝 *The Story of Yone Noguchi, Told by Himself*¹ に書かれており、第4章でも触れるが、幼少期から英語と異国文化に興味を抱き、英文学が好きな少年であった。ノグチは慶應義塾を辞めた17歳の時、世話になっていた東京の志賀重昂邸^{しげたか}で、アメリカから一時帰国中の菅原伝の訪問に遭遇した。ノグチは思いがけず菅原のアメリカでの話を襖越しに耳にし、渡米を決意したのであった。ノグチは1893年11月3日に横浜港から汽船ベルジック号に乗り、20日弱の船旅を経て、同年11月20日にサンフランシスコに到着したのである²。

アメリカで何をするかという具体的な目標もないまま到着したノグチは、詩作するに至り、他のアメリカ人同様に東海岸にまで進出し、当時全盛期であったジャポニズムを踏まえながら売れる作品を作ろうと懸命になり、実際に多くの話題を集めたのであった。

本章では、その文学作品の執筆過程およびその評価を分析し、ノグチが文学を通して得た知名度に検討する。

1.1 ウァキーン・ミラーおよび詩作との出会い

ノグチが渡米したサンフランシスコ周辺を含むカリフォルニア州は少なくとも二つの側面から変動していた。一つ目はアジアからの移民の増加である。ノグチの渡米した1890年代は、1880年代と比較してアメリカに渡った日本人は急増していた。1890年にアメリカ本土における日本人の人口が2039人であったのに対し³、1890～1894年の間にはさらに6636人もの日本人がアメリカ本土へ渡った⁴。これらの日本人の多くは出稼ぎを目的としていた。1882年に中国人排斥法が実施され、中国人労働者の担っていた農業や鉱山などの仕事を日本人移民が穴埋めしたのも大きな要素のようである⁵。当時日本人は「ジャップ(Jap)」という差別用語で呼ばれ、見下されていた時代であった。ノグチと同じ年に日本からサンフランシスコに渡り、スクールボーイをしていた牧野義雄(1870-1956)は、1ブロック歩くだけで日本人だからと毒づかれ、罵倒されたり唾をかけら

¹ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007).

² 従来、ヨネ・ノグチがアメリカに到着したのは12月上旬と考えられていた。Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). ではアメリカ到着に際する描写が2カ所あり、そこにはそれぞれ12月に到着した(p. 8)、ある日曜日に着いた(p. 26)、と記載があった。おそらく、これを参考に外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻(東京: 造形美術出版局、1963)の年表に「12月初旬のある日曜日にサンフランシスコに到着」(p. 323)と記入したのであろう。ところが、2012年4月、津島の星野正臣・美恵子夫妻宅を筆者が訪問中にヨネ・ノグチが到着翌日に津島の父親に到着無事を知らせるハガキが見つかり、到着日がはじめて明らかになった。星野文子『ヨネ・ノグチ: 夢を追いかけた国際詩人』(東京: 彩流社, 2012) pp. 34-35

³ 鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日本人』(東京: 日本放送出版協会, 1977) p. 36

⁴ 村山祐三『アメリカに生きた日本人移民 日系一世の光と影』(東京: 東洋経済新報社, 1989) p. 30

⁵ 岡本彩子『アメリカを生き抜いた日本人』(東京: 日本経済新聞社, 1980) p. 31

れたりし、カリフォルニアを離れて10年以上経っても当時の嫌な経験を夢に見たほどだという⁶。1904年に日露戦争が始まると日本人への差別が益々悪化し、遂には日本からの移民を受入れなくなる。ノグチが11年間の滞在を経て帰国したのは丁度日本人への風当たりが強く厳しくなる直前のことであつたとはいえ、その期間中も多くの日本人にとっては明るい日々ではなかつた。サンフランシスコ辺りでもうひとつ起こっていた変動は、アメリカ人の西海岸への移動である。これは1849年頃のゴールド・ラッシュを機に急増したが、それに合わせてジャーナリズムを中心とする文学活動も盛んになったのである。カリフォルニアで、後にノグチに好意的に接したアメリカ詩人たちも、この仲間であつた。ノグチは、アメリカに憧れて到着し、はじめは他の日本人と同じ路線を歩んでいたものの、詩人ウァキーン・ミラーとの出会いがきっかけで、日本人コミュニティから外れ、アメリカ人の作家たちを中心とするコミュニティの仲間入りを果たしたのである。そのような点から、ノグチのアメリカでの体験は変動の中で起きたユニークな出来事であつたと言える。

単身渡米したノグチは、詩作を始めるまでのアメリカ生活も決して平坦ではなかつた。多くの日本人と共に到着したノグチは自信のあつた英語も使い物にならず、到着当初は紙とペンを持ちながら英語を使い、耳の不自由な人と間違えられたこともあつた。ノグチは到着の翌日、菅原伝を頼りに愛国同盟の会合に参加した際、当時ハワイ独立の為に活動していた愛国同盟の熱意に魅せられ、単なる少年と見られたくないという意地も手伝い、日本からの所持金を、全額寄付してしまつた。その後ノグチは菅原伝が関係していた愛国同盟の活動や、邦字日刊紙『桑港新聞』の配達をしながら何とかアメリカ生活を始めた。『桑港新聞』は200部ほどしか発行部数がなく、ノグチを含めた5、六人が食べて行くほどの利益は出ず、給料の話も出なかつたという。ノグチたちは大家も家賃を請求してこないような古いビルに入っている新聞社のテーブルに新聞を敷き詰め、*Encyclopædia Britannica* を枕に寝泊まりしていた。ノグチはそれでも時間の許す限りイギリス詩人バイロン卿の詩や、シェイクスピアの *Hamlet* などを読んでいたという。

ところが、遙々アメリカまで来て、狭い日本人社会に留まる暮らしに疑問を感じたノグチは、現地の新聞広告を通じてスクールボーイの仕事を得、アメリカ社会へ入る一步を踏み出した。スクールボーイとは、住み込みで白人家庭の家事手伝いをしながら昼間は公立の学校へ通うことができ、当時ノグチのように資金がなく若くしてアメリカに渡つた日本人がはじめに見つける仕事であつた。雇い主たちは日本人の名前は発音しにくいからと覚えようとせず、ノグチたちのようなスクールボーイは、本名の代わりに *John* や *Charlie* などの英語名で呼ばれることが多かつた。先にふれたように一般的に日本人は見下されていた時代であつたが、日本人はスクールボーイとしては定評があり、「真面目で礼儀正しく従順によく働き、従つて一度日本人のスクールボーイを経験した白人は、先任が辞める時にまた日本人を雇いた⁷」があつたという。ノグチに関しては、英語学習に対する意欲が高いという印象は与えたであろう。あるユダヤ人の家では1ダースの卵を買いに使いに出され、英語のフレーズを声に出すのに気が取られて卵を落とし、家主は怒つて卵代を賃金から引

⁶ 牧野義男著 恒松郁夫訳『霧のロンドン —日本人画家滞英記—』(東京:雄山閣, 2007) pp. 9-10

⁷ 岡本彩子『アメリカを生き抜いた日本人』(東京:日本経済新聞社, 1980) p. 21

いた、という苦い思い出もある。パロアルトというスタンフォード大学に隣接している街の弁護士家庭では、ノグチの本好きを認識した婦人はノグチが前の晩遅くまで本を読んで寝坊してしまうと自ら薪をくべて火をおこしてくれるような理解のある雇い主であった。パルアルトでは、昼間はスタンフォード大学の予備校にあたるアンザニータホールで、教室の掃除と寄宿生の食事の給仕をしていた。講義に正式に参加できていたのかは不明だが、スタンフォードの静かで礼儀正しく、好意的な校風を好んでいた。だが、ノグチは汚れた服や踵の無い靴など自身の身形に居心地の悪さを感じ始め、メンロウパークホテルで皿洗いを始めた。

1894年7月、日清戦争が勃発したが、戦争が悪化するにつれて『桑港新聞』のノグチは仲間たちとの情報交換や討論を求めてサンフランシスコに戻った。その後数ヶ月、英字新聞から戦争に関するニュースを翻訳して『桑港新聞』に掲載するのを、20歳前のノグチが担当していたこともあった。

アメリカ詩人ウァキーン・ミラーと出会ったのは、アメリカに来て二年七ヶ月ほどこのような暮らしをしていた頃であった。ノグチはメンロウパークホテルにいた頃、日本人の知り合いに、読書する時間が欲しいため無報酬でよいから、少しの労働で置いてくれる先を探していると言うと、ミラーを紹介された。その友人から聞いたミラーは、仙人のような人で、近代化に反対しており、バラとカーネーションを育てるのが唯一の仕事、さらに日本に親近感を持っている人、という風変わりな人物であった。ミラーは以前にも日本の若者を居候させていたという。ノグチは皿洗いで使うソーダで手が腫れ、睡眠もままならず、とにかく貧乏でアメリカでの生活に希望を失っていた時である。ミラーの暮らしを聞き、さらに自身の生活が惨めに思えたという。その半年後、ウェブスター大辞典でミラーの名前を見つけたノグチは、その著名度を確認し、ミラーを訪問してみる決意をした。ノグチはサンフランシスコから、対岸のオークランドにあるミラーの「高丘」^{ザ・ハイト}へ行くため、当時所持していた本のうち、愛読していたエドガー・アラン・ポオの詩集以外の六、七冊の本を売って旅費を生み出した。この訪問が、詩人ヨネ・ノグチを生み出した全てのはじまりであった。

ミラーはノグチを歓迎した。ノグチを最も喜ばせたのは、ミラーが“Mr. Noguchi”と呼びかけたことであった。ノグチはアメリカに来て初めてアメリカ人から自分の名前が呼ばれたのである。さらにミラーは「これはノグチ君という日本からの珍客だ、すべての日本人が詩人であるやうに、野口君も恐らく詩人であらう⁸」と言って、ノグチを母親に紹介したのであった。その日、ミラーの母親が用意した食事は、渡米以来アメリカの家庭で困んだものの中で最も簡素であり、かつ心の満ちたものであったと回想している。ノグチのそれまでの苦しいアメリカ生活やアメリカ人との付き合い方は、ミラーとの出会いで一変した。ノグチはその夜、“I secretly decided that I would become a poet”と心で誓ったのだという⁹。亀井俊介は、これは後からの「ドラマチックな記述だろう」と分析しながらも、「沈黙を強調するミラーの人柄や言葉がノグチの『日本人の心』に強く訴えたことは確かである」

⁸ 野口米次郎「米国文学論『野口米次郎選集』第3巻(東京:クレス出版,1998)pp. 41-42

⁹ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 41

と論じている¹⁰。ミラーも、ノグチに、「生き生きとして、ロマンチックで、才気が感じられ、また人を魅せずにはおかないもの」を感じたようで、一目で気に入ったという¹¹。ノグチはその日、一旦サンフランシスコに戻り、『桑港新聞』の仲間の日本人たちに別れを告げ、翌朝、松尾芭蕉の句集、ある僧の語録、それにポオの詩集を抱えてミラーの「高丘^{ザ・ハイ}」に引き返した。それから四年間、ノグチはそこに居候した。これは、まるで日本人社会からアメリカ社会への移動を象徴しているかのような出来事であった。

ここで、この詩人ミラーと、ミラーを取り巻くバイエリアの作家たちについて記しておく必要がある。彼は詩人ウァキーン・ミラーとして知られているが生年月日や本名などは二説ある。研究者による伝記 *Joaquin Miller*¹², *San Francisco's Literary Frontier*¹³, *Splendid Poseur*¹⁴ などには、Cincinnatus Heine Miller で生まれは1837年9月8日と書かれており、*Who was Who in America*¹⁵ には Cincinnatus Heine Miller で生まれは1841年11月10日と記されている。ミラーは事実よりも彼が理想とした姿を強調した傾向にあり、研究者たちは、彼が書いたり話したりした自身の人生について引用する場合は、もし彼の言葉をその通りに信じると、などというただし書きを付けざるを得なかったようである。ミラーはインディアナ州の北東に位置するリバティ市の近くの街で生まれ、幼い頃に両親と共に幌馬車でオレゴン州に移ったようである。成人となったミラーはジャーナリストとしてオレゴン州ユージーン市の新聞記者をしたり、炭坑で料理人を勤めたり、弁護士などしていたが、最初の妻テレサ・ダイアーと新婚旅行でサンフランシスコを訪れた時に転機が訪れた。サンフランシスコを含むバイエリアの作家たちに刺激を受け、本気で作家になりたいと思ったのである。バイエリアとは、サンフランシスコ湾を取り囲むサンフランシスコ市、オークランド市、バークレー市などの都市一帯を指している。

19世紀後半から20世紀のアメリカは、近代化を押し進める動きと、それに反対し、目に見えない価値を大切にしたい生き方を考えようとする人たちが入り交じっていたと言える。産業革命の影響を受けて工場化が進み、近代化していく様子を、アメリカ国内のあちこちの都市でほぼ隔年ごとに万国博覧会を開催して、世界に宣伝していた。そのような近代化の流れに逆らい、自分たちが納得できる中身のある人生を求めようとした人たちが比較的多く集まっていたのが、バイエリアだった。カリフォルニアは、1850年、正式にアメリカ合衆国の中の一州と数えられるようになったが、その一年前のゴールド・ラッシュを機に、おびただしい数のアメリカ人がカリフォルニアへと殺到したのは先述したとおりである。ゴールド・ラッシュの影響もあり、サンフランシスコの街には暴力的な事件が絶えず、新聞には多数の死亡記事が見られた¹⁶。アルコール中毒やギャンブル中毒にかかっていた人たちも少なくはなかった。カリフォルニアは、自分の土地を持ちたいというアメリカ人が

¹⁰ 亀井俊介『解説 復刻版 ヨネ・ノグチの英文著作集～詩集・小説・評論～』（東京：Edition Synapse, 2007）p. 12

¹¹ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』（上）（東京：講談社, 2003）p. 28

¹² Frost, O.W. *Joaquin Miller*. (New York: Twayne, 1967). p. 11

¹³ Walker, Franklin. *San Francisco's Literary Frontier*. (University of Washington Press, 1970). p. 87

¹⁴ M.M. Marberry. *Splendid Poseur—Joaquin Miller, American Poet*. (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1953).

p. 2

¹⁵ *Who was Who in America*. (New Providence, N.J.: Marquis Who's Who, 1993).

¹⁶ Starr, Kevin. *Americans and California Dream 1850-1915*. (Oxford: Oxford University Press, Inc., 1973). p. 70

夢を叶えられる場所でもあったが、鉄道が開通し、貧富の差は広がる一方だ、とその繁栄ぶりを懸念していた声もあった。だが、東海岸のような、しきりに固執し複雑な人間関係の上に成り立つ社会と違い、カリフォルニアは自分自身の可能性や天職を探し求めている様な人たちの目的地であり、新しく作り上げて行く雰囲気は漲り、多くの人を惹き付けていた。当時の人々にとってのカリフォルニアの魅力は、バンクロフト (Hubert Howe Bancroft: 1832-1918) が “CA [California] encouraged small men to reach beyond themselves ... CA liberated energies and ambitions¹⁷” という言葉に代表されていたとも言えるだろう。

バイエリアの歴史は、短いながらもこの繁栄に伴い、ジャーナリズムも瞬間に盛んになり、*Californian, Californian Star, The Herald, The Era, Alta California* などの新聞が拡大した。これらの新聞の発展は、書くことに情熱を感じている多くの若者を集め、また他の多くの若者たちを執筆に目覚めさせた。その若者たちとは、ジョン・フェニックス (John Phoenix)、ブレット・ハート (Brett Harte)、アイナ・クールブリス (Ina Coolbrith)、ジョシュア・ロイス (Josiah Royce)、ジョン・ミューア (John Muir)、ヘンリー・ジョージ (Henry George)、チャールズ・ウォレン・ストッダード (Charles Warren Stoddard)、アンブローズ・ビアス (Ambrose Bierce)、マーク・トウェイン (Mark Twain)、プレントイス・マルフォード (Prentice Mulford) などである。彼らは新聞や雑誌のほか、各自で作る小冊子のようなものを通じての作品の発表をしており、執筆を通して暮らしを立てようとしていた。

ウァキーン・ミラーがこのような作家たちに初めて触れたのは1863年であった。だが、他の作家たちに魅せられてサンフランシスコに留まったものの、作家として認識されるような業績はなかなか作ることができなかった。そこで、1870年にニューヨーク経由でロンドンへ渡り、詩集を出版しようとしてロンドン中の出版社にあたった。全ての出版社に断られたミラーは1871年の春、*Pacific Poems* という詩集を自費出版し、ロンドンの作家や評論家たちに送った。それが話題を集め、第二版は題名を改め *Songs of the Sierra* とし、ミラーの名はロンドンで知れ渡った。中でもウィリアム・マイケル・ロセッティという、ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman: 1819-1892) の代表作である *Leaves of Grass* をイギリス人として初めて賞賛した人物が “... America may be proud of him” とミラーの詩集を絶賛した¹⁸。一躍有名になった32歳のミラーは、ロバート・ブラウニング (Robert Browning: 1812-1889)、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti: 1828-1882)、ウィリアム・モリス (William Morris: 1834-1896)、アルジャーノン・スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne: 1837-1909) など時の詩人たちと交流したのであった。ところが、一年間滞在したロンドンからサンフランシスコに戻ると、作家仲間たちはミラーの詩に憤慨していたのを発見した。ミラーの詩集は西海岸カリフォルニアをロマン化して詠ったものであったが、馬の窃盗や、インディアンの女性と暮らしたということまでロマン化したミラーを、彼らは侮辱したのであった。ミラーはアメリカの読者の心は掴めなかったのである。

¹⁷ *Ibid.* p. 119

¹⁸ Walker, Franklin. *San Francisco's Literary Frontier*. (University of Washington Press, 1970). p. 330

とはいえ、他の作家たちにとって、ミラーの成功は羨ましいものであった。ミラーのようにカリフォルニアを題材にロンドンで成功した者もいれば、マーク・トウェインのようにヨーロッパに憧れていたカリフォルニアの人々に向けて記事を書き成功した者もいた。これらの事例は他の作家たちを刺激した。そして、ブレット・ハート、アンブローズ・ビアス、ストッダードなど当時の若者が、ベイエリアから東海岸やヨーロッパへと離れて行った。

このような背景のあるミラーをノグチが訪ねたのは、1885年にミラーが引退してから住んだ「高丘^{ザ・ハイト}¹⁹」であった。それは、オークランド市の中心から遠くない所に位置している28万平方メートルもの広大な土地で、ノグチが半分雲の中に居るようだと言ったとおりの小高い丘である。そこからはサンフランシスコ湾をとその一帯を見渡すことが出来、日没時には太平洋に沈む夕日が辺り一帯をオレンジに染める。この広大な土地で、ノグチはミラーのコテージの隣の小屋に住み始めたのである。

ノグチは初めから、詩人になりたいとミラーにも公言していたのだろう。ミラーは詩に関して教えることは何もない、と言いつつ、ノグチも、四年間の滞在中でミラーの詩作については何も聞かなかった、と言うほど、二人とも詩については語らなかったようである。だが、ミラーはノグチにホイットマンやソローなどの作品を紹介した。ミラーはホイットマンに憧れ、その詩や生き方を尊敬していた。ミラーは、ロンドンから帰国後に手紙を書いたのをきっかけにホイットマンと知合いになり、機会があれば訪ねていたようである²⁰。亀井俊介は、ミラーは、結局その詩においては「Whitman の声をマスターできなかった」と分析しているが²¹、生活の面ではウォルデンに住んだソロー (Henry David Thoreau: 1817-1862) や、キャムデンに住んだホイットマンの暮らしに影響を受け、大学から教職のオファーがあっても断り、「高丘^{ザ・ハイト}」で生活していた²²。このようなミラーから、ホイットマンとの思い出についてノグチが聞いていたとしても不思議ではない。というのは、ホイットマンはノグチにとってもあこがれの詩人のひとりとなり、やがてその詩のスタイルまでも真似るようになるからだ。ノグチが訪ねた当時のミラーの家にある本といえば、ミラーの著書のみであったが、そこでノグチは、ミラーがロンドンで自費出版した詩集を手にし、それは後にノグチに大きなヒントを与えたと思われる。

その他、ノグチは、日常的にミラーが発した言葉を詩的な暮らしに重要な哲学と受け取った。例

¹⁹ 「高丘」(The Heights)は、ミラーの死後、オークランド市が Joaquin Miller Park として所有・管理している。

²⁰ ホイットマンもミラーを気に入っていた。1872年1月、35歳のミラーは *Leaves of Grass* 第5版を出版し終えたホイットマンに手紙を書いた。その手紙を受け取ったホイットマンは William Rossetti にミラーのことを “generous, impulsive, affectionate” と書いている (Miller, Edwin Haviland. *The Collected Writings of Walt Whitman, The Correspondence 1868-1875*. (New York: New York University Press, 1964). p. 6)。1872年7月、ミラーはホイットマンを訪ねた。ホイットマンは Peter Doyle に “I have been spending a couple of hours with Joaquin Miller—I like him very well—” と書いている (19 July 1872. *Ibid.* p. 181)。また、ホイットマンは Charles W. Eldridge 宛の手紙でも、“I am much pleased, (upon the whole) with him—really pleased & satisfied—his presence, conversation, atmosphere, are infinitely more satisfying than his poetry—he is, however, mopish, ennuyeed, a California Hamlet, unhappy everywhere—but a natural prince, may-be an illiterate one—but tender, sweet & magnetic—” (19 July 1872. *Ibid.* p. 182) と書いている。1881年、ホイットマンから John Burroughs の手紙にも “Joaquin Miller is here—is with me everyday—” とある。(24 September 1881. *Ibid.* p. 246)。

²¹ 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京: 研究社, 1970) p. 120

²² 同上 p. 120

えば次のポピーについて語った言葉もそれである。

The sweetest flowers grow closer to the ground; you must not measure Nature by its size: if there is any measure, it will be that of beauty; and where is beauty there is truth. First of all, you must know Nature by yourself, not through the book. It would be ten thousand times better to know by your own knowledge the colour, the perfume and the beauty of a single tiny creeping vine in the valley than to know all the Rocky Mountains through a book; books are nothing. Read the history written on the brows of stars! ²³

ミラーは沈黙を強調し、二人で伐採や植林、橋の建設や狩りなどに出掛けても殆ど会話をせず、ノグチはそれを、“Nature waste nothing—nothing; least of all does Nature waste time. And she is never in haste. Remember to go slowly and diligently toward the stars. Silence! and no debating there! What a saving of time!”²⁴” という言葉とともに、ミラーの哲学の表れと受け取った。以下のノグチの文章にもあるように、ミラーは詩に生きているようにノグチに映ったのである。

To live in poetry is ten times nobler than merely to write it; to understand it well is certainly far more divine than to speak it on the tongue. If there ever was a poet who fully lived or practiced poetry, it was that Joaquin Miller, even though he may not have been a great poet of words. ... ²⁵

ミラーと「^{ザ・ハイト}高丘」がノグチの詩作のきっかけであったことは間違いないだろう。後に、ノグチはミラーとの出会いの重要性について、次のように書いている。

実際考へると、若し私がミラーを知るに至らず、彼の山荘で四年を費やさなかったならば、今日のやうに私の詩の世界は開かなかったかもしれない。直接一字を教へられた恩が無いとしても、長い四箇年の年月の間、ミラー^{ママ}の文けが創造し得る雰囲気^{ママ}に包まれたといふこと自身が、所謂先生といふ以上の大きな恩でなくてなんであらう。矢張りミラーは私の先生も先生、大先生として敬意を表さねばならない人であったに相違ない。又私は一生の中一人でも先生と思ふことの出来る人を持ったといふことに対して深い感謝を捧げねばなるまい。²⁶

ノグチは「^{ザ・ハイト}高丘」に住み始めて二年目に詩を書き始めたと書いているが²⁷、ミラーを訪ねたのが

²³ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 63

²⁴ *Ibid.* p. 70

²⁵ *Ibid.* p. 71

²⁶ 野口米次郎「米国文学論」『野口米次郎選集 3 海外文学・持論』(東京:株式会社クレス出版, 1998) pp. 68-69

²⁷ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 77

渡米後二年七ヶ月経った5月であり²⁸、初めて詩を発表したのが1896年7月、「高丘」に四年滞在後にシカゴへ発ったのが手紙の日付などから割り出すと1900年5月であったことなどから、おそらくノグチは「高丘」に到着直後から詩を書き始めたのではないかと思われる。ノグチの詩作を支援したのが、ミラーの仲間のボヘミアンたちであった。

サンフランシスコのボヘミアンクラブというのは、ジャーナリストたちが日曜日毎に集まり会話を楽しんでいりから発展し、1872年に正式に組織化したクラブであった。ボヘミアは、元々はチェコのある地方を意味する言葉であったのが、次第にその地方の人々の特質である自由奔放な精神を指すようになる。次第に、ボヘミアンクラブには、ジャーナリストだけではなく作家、商人や専門職を持つ者、軍隊や海軍の役人などで芸術に強い関心を持つ者たちが集まり、彼らが“High Jinks”と呼ぶ会話と陽気な時間を楽しんだ²⁹。また、1870年代後半には、彼らの集まりは年に一度の合宿形式でアウトドアを舞台にも繰り広げられ、“Midsummer Jinks”と呼ばれたそれは、自然での生活と洗練された暮らし方の両面を合わせた、当時の象徴的な生き方であった³⁰。だが、1870年代後半は、ボヘミアンクラブの立ち上がり当初に比べて、クラブの構成メンバーたちの性質も変わって来ていた。当初、新聞社経営者や、カリフォルニア銀行頭取などは入会を拒まれていたが、時代の流れと共に、経済的に裕福な人物たちがクラブの大半を占めるようになったのであった³¹。同クラブは一時、マーク・トウェインやブレット・ハートが名誉会員でもあり、クラブには1884年当時、ジャーナリストや作家、芸術家など500人以上がそのメンバーとなっており、アメリカ国内でも代表的な位置づけであった³²。オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)、エドウィン・ブース(Edwin Booth)、ヘンリー・アーヴィング(Sir Henry Irving)、アンソニー・トロロープ(Anthony Trollope)、ジェイムズ・ブライス (James Bryce) など国内外の著名人がサンフランシスコを訪れた際の受け入れの中心機能を果たしていた点からも³³、ボヘミアンクラブがそれなりの認知度を確立していたのがわかる。だが、ボヘミアンクラブの内情は穏やかではなかった。1879年には、一部の会員から、クラブの集まりである“High Jinks”のドレスコードに燕尾服を提案され、それはクラブを立ち上げた現役ジャーナリストたちに阻止されたものの、この事例はクラブ構成メンバーに不和が生じ、それぞれが別の方向を向いている一つの表れであった。1882年にアメリカでの講演旅行の際に訪れたオスカー・ワイルドは、“[I] had never seen ‘so many well-dressed, well-fed, business-like looking Bohemians’³⁴” と、その驚きを皮肉って書いているように、彼らはボヘミアンとは言うものの、自由な精神よりも富と華やかさの方が際立って映ったのであった。当初の精神をわかち合うメンバーたちは、ボヘミアンクラブを離れてサンフランシスコ・プレス・クラブを立ち上げ、若者たち“Les Jeunes”は変わり果てたクラブのしきたりに対抗するために、*The Lark* という文

²⁸ *Ibid.* p. 40

²⁹ Starr, Kevin. *Americans and California Dream 1850-1915*. (Oxford: Oxford University press, Inc., 1973). p. 246

³⁰ *Ibid.* p. 246

³¹ *Ibid.* p. 282

³² 有馬研一『フランク・ノリスとサンフランシスコ』(東京: 桐原書店, 1996) p.41

³³ Starr, Kevin. *Americans and California Dream 1850-1915*. (Oxford: Oxford University press, Inc., 1973). p. 248

³⁴ *Ibid.* p. 282

芸雑誌を主宰した。この *The Lark* はボヘミアンクラブの図書館には並べられず、隅の机の一番下の引き出しにしまわれた、という。

ヨネ・ノグチの詩は、このような背景のある若者たちに見出され、*The Lark* に公表されたのである。

1. 2 西海岸での英詩集出版とその評価

ノグチはカリフォルニアにおいて、*The Lark* で詩人としてデビューを果たし、続いて *Seen and Unseen* (1896)、*The Voice of the Valley* (1897) の二冊の詩集を出版、その後は *The Twilight* という自筆の文芸雑誌を手がけた。本節では、それらの出版過程と評価を年代順に見て行く。

ボヘミアンの若者たち “Les Jeunes” の中でも、ジレット・バージェス (Gelett Burgess: 1866-1951) という当時29歳の青年は特にノグチと懇意であった。バージェスとポーター・ガーネット (Porter Garnett: 1871-1935) が創刊した *The Lark* は、ボヘミアニズムの月刊の文芸雑誌である。ナンセンスな詩、漫画、評論、ショートストーリーなどを扱う16頁だでの *The Lark* は、1895年5月～1897年5月の二年間に24巻が発行されており、先述したような背景があるものの、二年目に入った当時は三千部を発行していたほどの人気であった³⁵。*The Lark* がこのようにちょうど人気を得た二年目、ノグチは30篇ほどの詩を抱えてこの編集者たちを訪ねた。先にふれたように、ノグチが「高丘」で暮らすようになった直後に書き始めた詩であるから、その時携えた詩について亀井俊介は「詩らしいもの」であったと触れており³⁶、ノグチ自身も “let me call them poems” と書いている³⁷。バージェスとガーネットは、ノグチの詩をおもしろがり、すぐに掲載するはこびとなった。バージェスの目にはノグチやノグチの詩がどのように映り、何を念頭にノグチの詩を編集したのか、バージェスの書いた以下の紹介文に表れている。

..... An exile from his native land, a stranger in a new civilization, —a mystic by temperament, race, and religion,—these lines which I have rephrased, setting his own words in a more intelligible order, are his attempts to voice the indefinable thoughts that came to him on many lonely nights; the journal of his soul,—nocturness set to words of a half-learned, foreign tongue; in form vague as his vague dreams.

That these songs are sincere, must be evident from the lack of art (in its technical sense) in their construction; the pictures he tries to describe often bear no conscious relation to each other, save that they are coloured by the same mood.

I have retained his own words in almost every case, modifying only the connectives in accordance with his explanations, and with his consent, —preferring rather to excuse the liberties he has taken with the language, than to lose the vigor of his

³⁵ 亀井俊介『解説 ヨネ・ノグチ英文著書集3 ヨネ・ノグチとリトル・ポエトリー・マガジン』(東京: Edition Synapse, 2009) p. 16

³⁶ 同上 p. 16

³⁷ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 41

unworn metaphors, unfettered by the traditions of expression. G.B.³⁸

いくらナンセンスな詩ばかり扱う *The Lark* でも、ノグチの詩におけるユニークさは、このような説明文を必要とする程度に特殊な位置づけであったといえる。バージェスは、ノグチの外国人としての英語にはハンディキャップがあるため、詩には改善の余地が大きくあるのを認めつつ、敢えてノグチの作品を可能な限り原形にとどめた。それは、ノグチが“mystic”な存在であり、彼の詩は他のアメリカ人の詩とは別な基準で評価されているという点を読者に理解してほしいためだと見て取れる。ノグチが日本の冒涇と憤慨した当時流行のコミックオペラ「ミカド」をバージェスは相当気に入っていたというから³⁹、ノグチという日本人が英語で書いた詩にエキゾティシズムを見出したのではないだろうか。ドウス昌代も、バージェスは「米次郎の詩才を見いだしたというよりも、おもしろ半分にあたえた機会だったとおもわれる。在留日本人の大半が肉体労働者であったとき、英語で詩作する日本人青年というだけで、それは『話題』となりえた」と論じているが⁴⁰、詩才を見出されるほどの作品であったならば、バージェスも先に引用したような弁解が不要であったはずであるから、ドウスの論点は尤もと言えよう。

このようにして微調整を加えられたノグチの詩5篇は、*The Lark* (15号 1896年7月)に掲載された。詩の掲載されているページの上には、“Seen and Unseen: The Songs of Yone Noguchi”と書かれている。(“Seen and Unseen”は、この後初めて出版するノグチのはじめての英詩集の題名にもなった。)

次に紹介する詩は、五篇のうちの一つである。

The Brave Upright Rain

The Brave upright rains come right down like
errands from iron-bodied yoretime, never
looking back; out of the ever tranquil,
ocean-breasted, far high heaven – yet as high but as
the gum tree at my cabin window.

Without hesitation, they kill themselves in an
instant on the earth, lifting their single-noted
chants – O tragedy! – chants? Nay, the clapping sound
of earth-lips.

O, heavenly manna, chilly, delicate as goddess'
tears for the intoxicated mouth of the soil, this
gossamer-veiled day!

The universe now grows sober, gaunt, hungry,

³⁸ Burgess, Gelett. “The Night Reveries of an Exile” *The Lark*. no.15. July 1896. Kamei, Shunsuke. ed. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry. Collected English Works of Yone Noguchi*. (Tokyo: Edition Synapse, 2009). p. 1

³⁹ 有馬研一『フランク・ノリスとサンフランシスコ』(東京:桐原書店, 1996)p. 137

⁴⁰ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社, 2003)p. 30

froze-hearted, spiteful-souled; alone, friendless,
it groans out in the flute of the stony-throated
frog.

Resignedly, the fleeting mountain of tired cloud
creeps into the willow leaves – washed hair of
palace-maiden of old.

Lo, the willow leaves, mirrored in the dust-freed
Waters of the pond!⁴¹

ヨネ・ノグチの名は *The Lark* に掲載された詩をとおして広まった。ノグチが帰国後に執筆した『英米之十三年』で記述しているところによると、「高丘」にノグチを訪ねてくる者も多数おり、その中の一人はノグチの部屋から未発表の詩を取り去り、ある日、地元紙 *San Francisco Chronicle* の日曜版に無断で掲載したほどだったという⁴²。*The Lark* はシカゴや東海岸でも読まれていた雑誌であり、そこでもノグチが話題となった。ボストンの *Boston Evening Transcript* は、“it is always more fascinating to see the thoughts of a man from the Far East expressed in our Occidental speech than to read beginners poetry in native English”と書いている⁴³。これは、詩そのものというよりも、東洋人が西洋人の言語で詩を書いた点におもしろみを感じたバージェスと共感した書評と言える。他にも、*New-York Tribune* は、“It is like Stephen Crane with all the affectation removed, but more like an Oriental Walt Whitman, yet not so universal as personal⁴⁴”と書いている。また、*Buffalo Courier* には“One thing is very sure, his writing are immeasurably superior to Crane’s in the fineness of thought and the sweetness of the dreams he struggles to portray⁴⁵”と書かれたが、敢えて“struggles to portray”と書いたのは、ノグチの英語の不完全さにもかかわらず、きわめて好意的に読み取ったという証拠であろう。これらの書評に出てくるスティーヴン・クレイン (Stephen Crane: 1871-1900) は、1895年に僅か24歳で発表した *The Red Budge of Courage* という南北戦争が舞台の小説で、当時国際的に名を知られたセンセーショナルな作家であった。彼は後に、詩集としては *The Black Riders* (1895), *War is Kind* (1899) を出版しており、亀井は、詩人としてのクレインを「ニューヨーク第一のボヘミアンはディキンソンの影響を受けて自由詩を大胆に押し進め⁴⁶」た、と評価している。クレインは、戦争や、肉体的および精神的な暴力などに、まるで取り付かれていたように引き込まれていたほか⁴⁷、彼の詩やジャーナリズムや小説は、宗教的、社会的、

⁴¹ Noguchi, Yone. “The Brave Upright Rain” *The Lark*. No.15. July 1896. Noguchi, Yone. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi*. (Tokyo: Edition Synapse, 2009). p. 2

⁴² 野口米次郎『英米之十三年』(東京:春陽堂, 1905)pp. 5-6

⁴³ 同上 p. 4

⁴⁴ 同上 p. 4

⁴⁵ 同上 p. 4

⁴⁶ 亀井俊介「ヨネ・ノグチとアメリカ詩壇」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965) p. 67

⁴⁷ *The Norton Anthology of American Literature*. General ed. Baym, Nina. Shorter Fifth ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1999). p. 1702

文学的な反抗をあらわしていた⁴⁸、などの描写から、彼の少々荒っぽい、又は挑戦的な性格を想像でき、ノグチとは作品に取り上げる材料又は作品のテーマが異なっていたと思わせる。だが、上記に挙げたノグチの詩について書かれた二つの書評から、ノグチとクレインが同じ方向に向かっている詩人と見なされた、と亀井は論じており⁴⁹、それは、作品の特徴に違いはあるものの型にはまらない詩を作った二人であったということだろう。クレインは1897年には渡英し、結核と貧困から1900年にドイツで他界したため、ノグチとクレインが面識を持つことはなかった。亀井は「交際してほしかった … 直接会ったならば、二人が新しい詩の推進のために協力して働いたかもしれないことは、多いに想像し得る⁵⁰」と書いている。ちなみに、クレインは現在でも、アメリカ文学の *The Norton Anthology*⁵¹ などにその作品が含まれている。

The Lark はその後も四巻それぞれにノグチの詩を一篇ずつ掲載したから、最終的には五巻に合計九篇のノグチの詩が掲載されたことになる。次の詩も、*The Lark* (19号 1896年11月)に掲載された一つである。

Alone in the Cañon⁵²

The audible flakes of the snowy
coldness stirred by the silence-breaker
of the night,—the hoary-browed wind, wander down,
wander down the sleeping boughs unto my cañon bed.
“Good-bye my beloved family!”—I am, to-night, buried
under the sheeted coldness:
The dark weights of heavy loneliness make me
immovable!
Hark! The pine-wind blows,—blows!
Lo, the feeble obedient leaves flee down to the
ground, fearing the stern-lipped wind voices!
Alas, the crickets’ flutes, to-night, are broken!
The homeless snail climbing up the pillow, stares
upon the silvered star-tears on my eyes!
The fish-like night fogs, flowering with mystery on
the bare-limbed branches:—
The stars above put their love-beamed fires out, one
by one—
Oh, I am alone! Who knows my to-night’s feeling?⁵³

⁴⁸ *Ibid.* p. 1703

⁴⁹ 亀井俊介「ヨネ・ノグチとアメリカ詩壇」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京: 造形美術協会出版局, 1965) p. 67

⁵⁰ *Ibid.* 67-68

⁵¹ *The Norton Anthology of American Literature*. General ed. Baym, Nina. Shorter Fifth ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1999).

⁵² この後に刊行された英詩集 *Seen and Unseen* (1896) に掲載されたときは “Alone in the Canyon” と Cañon の表記が変更されている。

このように *The Lark* に詩が掲載され、ノグチの名前が次第に広がっていた時期、その動きを中断するかのような出来事が起きた。*Philistine* に掲載されたノグチの詩 “Mystic Spring of vapour” が、エドガー・アラン・ポオ (Edgar Allan Poe: 1809-1849) の詩 “Eulalie” からの盗作であると *San Francisco Chronicle* 紙面上で指摘されたのだ⁵⁴。ポオの作品 “Eulalie” は次のように始まる。

I dwelt alone
In a world of moan,
And my soul was a stagnant tide.

ノグチの詩の盗作と訴えられた部分は以下である。

I dwell alone,
Like one-eyed star,
In frightened darksome willow threads,
In world of moan,
My soul is stagnant dawn—⁵⁵

ノグチの支援者であるミラー、バージェス、ガーネットらは揃って、ノグチの作品は盗作ではないと抗議した。ノグチも次のように書いて反論したという。

Let critics say what they please! Poetry is sacred to me. It is not art for me, but feeling. My poems are simply my own journal of feeling—the footmark of my experience. I can stand anything but deceiving myself. I am not sorry a bit, if there be an exact correspondence in shape. I am thankful to God for giving me the moment when I felt the same thing with Poe. I cannot understand why you could not feel the same thing with Poe if you want to. It is not poetry at all, if you must express yourself in some other fashion when you think of one thing.⁵⁶

この後も *The Lark* (17号 1896年9月) に掲載された詩 “On the Heights: Two Moods” が、

⁵³ Noguchi, Yone. “Alone in the Cañon” *The Lark*. no.19. November 1896. Noguchi, Yone. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi*. (Tokyo: Edition Synapse, 2009). p. 1

⁵⁴ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p.42. 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 45

⁵⁵ 野口米次郎『英米の十三年』(東京:春陽堂, 1905) pp. 8-9

⁵⁶ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 42-43

ポオの “The Sleeper” からの盗作と言われた⁵⁷。ポオの “The Sleeper” の一連と、ノグチの “Two Moods” を並べると、次のようになる。下線部は、ポオとノグチの表現の似ている部分である。

“The Sleeper” By Edgar Allan Poe	“Two Moods” by Yone Noguchi
<p>At midnight, in the month of June, I stand beneath the <u>mystic</u> moon. An <u>opiate vapour</u>, dewy, dim, Exhales from out her golden rim, And, softly dripping, drop by drop, Upon the quiet mountain top, Steal drowsily and musically <u>Into the universal valley.</u> The rosemary nods upon the grave; The lily lolls upon the <u>wave</u>; Wrapping the fog about its breast, The ruin moulders into rest; Looking like Lethe, see! the lake A conscious slumber seems to take, And would not, for the world, awake. All <u>beauty</u> sleeps! - and lo! where lies Irene, with her Destinies!</p>	<p>Sliding through the window of sea-green heaven, Innocent <u>misty vapours</u> flit <u>into the roomy hall</u> <u>of the universe.</u> Exchanging from the formless chimney called Spring, out of sight, where the god alone, transmutes his poetry of <u>beauty.</u> The <u>opiate vapours</u>, in forless <u>waves</u>, rock about this dreaming shore of April-earth. Ah, the mother-cow with matron eyes utters her bitter heart, kidnapped of her children by the curling gossamer mists.</p>

この盗作の指摘の際、東海岸の多くの文芸雑誌がノグチを擁護したといい⁵⁸、例えば *Book Buyer* は、以下のように書いた。

He has originality enough, if that were the full equipment of a great writer. Beauty and delicacy of thought are in his work, and imagination to spare. But the imagery is often so exotic as to perplex, as when Oriental music falls on Western ears. But he did not steal his cadences from Poe, nor from anybody else.⁵⁹

ノグチの保護者代わりともいえるミラーや、兄のような存在であったバージェスがノグチを防御するのは理解しやすいが、東海岸の文芸雑誌までもが何故ノグチを防御したのだろうか。 *Book Buyer* に書かれているように、ノグチの詩にはオリジナリティがあるだろう。彼の詩の醸し出すイメージが、西洋人にとっては、困惑するほどにエキゾチックだと論じられている。だが、イメージだけでなく彼の英語に、おそらく母語話者のレベルとは違うエキゾティシズムを見出したのではないかと思われる

⁵⁷ *Ibid.* p. 42

⁵⁸ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 42

⁵⁹ *Ibid.* pp. 43-44

る。このような特徴のあるノグチの詩全体の中で、ある部分だけポオの詩ときわめて似ていたとしても、問題ではないと片付いてしまったようである。

盗作を指摘した人物は、ノグチが注目されていることに異義を唱えたかったのかもしれない。ノグチの詩をバージェスたちのように評価せず、恐らくこの盗作事件の結末にも不満を持っていたであろう作家に、フランク・ノリス (Frank Norris: 1870-1902) がいる。ノリスとノグチが個人的な知合いであったのは、後にノグチもノリスも移住したニューヨークで、ノリスからノグチへの手紙で “Of course I remember you perfectly well, and I hope to see you again if fortune favors.” という手紙のやり取りがあることからわかる⁶⁰。ノリスは、長編小説 *McTeague: A Story of San Francisco* (1899) や *The Octopus: A Story of California* (1901) でその名前が広く知れ渡った作家だが、ノグチが *The Lark* を通して有名になった1896年、ノリスは未だ無名であった。その数年後に刊行され、ノリスの代表作となった *The Octopus* は、その副題のとおり当時のカリフォルニアを元にしたフィクションであるが、ノリスはそこにノグチと確信できる人物を登場させている。というのは、ノグチという名前こそ登場しないものの、日本人詩人といえば当時はノグチの他にいないという事実に加え、*The Lark* に掲載されたノグチの詩 “The Brave Upright Rain” を引用していることからノグチと断定できるのである。ノリスは、そこでノグチとその詩を “a Japanese youth who wore spectacles and a grey flannel shirt and who, at intervals, delivered himself of the most astonishing poems, vague, unrhymed, unmetrical lucubrations, incoherent, bizarre; ” と描写している⁶¹。ノリスには、中国人や日本人に対する人種的偏見があったという意見もあり、ノリスがノグチを個人的に嫌っていた可能性などが指摘されている⁶²。人種的な偏見か、個人的な感情か、どちらの理由かは不明だが、ノリスが同小説中でロシアやギリシャ、インドや中国などからの移民のうち先述のノグチを含む20人ほどの特定できる人物たちを “Fake” “Sham” “Fakirs” として扱う一人にノグチが含まれており、ノリスは彼らを次のように論じるのである。

It was the Fake, the eternal, irrepressible Sham; glib, nimble, ubiquitous, tricked out in all the paraphernalia of imposture, an endless defile of charlatans that passed interminably before the gaze of the city..... The attention the Fake received, the time devoted to it, the money which it absorbed, were incredible.⁶³

ノリスがこのように書いた文章から、例え彼の人種差別を差引いたとしても、ノリスがノグチの詩のエキゾティシズムが過大なまでに評価された風潮に一石を投じたかったと読み取れる。(むろん、この小説が刊行されたのは1901年であるから、ノグチがカリフォルニアで発表した数々の詩の評価には響かなかった。)

⁶⁰ From Frank Norris (手紙集には Morris とあるが、Norris の間違いと思われる) to Yone Noguchi. 13 November 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 103

⁶¹ Norris, Frank. *Octopus*. (New York: Bernhard Tauchnitz, 1901; New York: Doubleday, 1952). pp. 28-29.

⁶² 有馬研一『フランク・ノリスとサンフランシスコ』(東京: 桐原書店, 1996) p. 62

⁶³ Norris, Frank. *Octopus*. (Bernhard Tauchnitz, 1901). (New York: Doubleday, 1952). pp. 29-30.

だが、盗作事件はノグチの詩作の妨げになることはなく、ノグチは支援者たちに援助され、*The Lark* にはじめて英詩が発表されてから半年後の1896年12月、彼はアメリカで日本人初となる英詩集 *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*⁶⁴ を出版した。約三年前にアメリカに到着し、当初はアメリカ人からヨネ又はノグチという名前と呼ばれることのなかった日本人スクールボーイが、ヨネ・ノグチという名前を英詩集を通して認知させたのだから、驚くべき進展である。ノグチの名は *The Lark* の時よりさらに広まり、好評を得た。*San Francisco Chronicle* は「言葉の不思議な積み重ねの新しい自然詩」と「ミラーの内弟子」と評したとのことであるが⁶⁵、「不思議な」「新しい」といった形容詞が、エキゾティシズムを含む作品を好意的に捉えた証であろう。ノグチは後に、この詩集ほど自分にとって思い出深いものはないと振り返っている。

本詩集の出版にあたり、バージェスとガーネットはノグチの詩を編集し、バージェスは序文を執筆し表紙もデザインした。表紙をめくると、イラストレーターのアーネスト・ペゾット(Ernest Peixotto: 1869-1940)によるノグチのまだ少年の趣が残る顔が描かれている。

バージェスの執筆した序文は部分的に引用すると以下ようになる。

I would have you think of him as I know him, a youth of twenty years, exiled and alone in love with sadness, watching to see if the old words can live in the Western civilization.

For here in these *Monologues*, he has written with absolute sincerity and simplicity, his very soul's journal, in nocturnes set to the music of an unfamiliar tongue, in form vague as his vague moods. Though *ever unknowing of Self*, he has given to these songs the truest lyric quality,—in his *lonely cabin, even yellow-jackets-abandoned-haunting the midnight garden*—alone in the *dream-muffled canyon; at shadeless noon, sunful-eyed*—in the *sober-faced evening*.....

Such moods and nuances of feeling as these are not translatable into the logical and definite processes of Occidental thought. And though on the other hand, they are not distinctively Japanese in sentiment or in art, yet one might illustrate their intangible delicacy, by one of the Ho-ku's or "inspirations" of his own "high qualified" Ba-sho, meaningless but wisdom-wreathed syllables,--elusive phrases—like opiate vapors changing to the changing mood.⁶⁶

この後、ノグチの英訳したであろう芭蕉の句が続く。前半部分からは、ノグチの詩を編集したバージェスとガーネットが、あくまでもノグチの表現を尊重していたのが読み取れる。そして、彼ら西洋人の思考回路には解釈できないとまで言い切るノグチの詩の持つ独特の雰囲気やニュアンスを

⁶⁴ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. (San Francisco: Gelett Burgess and Porter Garnett, 1896).

⁶⁵ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社, 2003)p. 32

⁶⁶ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kemei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). no page number.

敢えて紹介するという点で、バージェスがよほどノグチの詩の醸し出すエキゾティシズムに惹かれたと言える。堀まどかは「これはジャポニズムやエキゾティシズムの異質さを面白がられる意識から評価されたというよりは、より彼ら自身に近いものとして受容されたということである⁶⁷」と論じている。だが、“Western civilization” や “Occidental” という言葉を使って彼らの世界を定義し、そこにノグチが他所から入って来たという大枠をあえて作っているのであるから、ノグチを「彼ら自身に近いものとして受容」していたかどうかは疑問が残る。

Seen and Unseen の副題は “Monologues of a Homeless Snail” であった。前節で紹介した、*The Lark* にも掲載された、“Alone in the Cañon” に描かれているのは家のない蝸牛であるが、それに自分の姿を重ね合わせたのではないかと思われる⁶⁸。この副題に表れているとおり、詩集に含まれる多くの詩で、日常的に囲まれている自然である闇や雨、植物や虫との対話から、世界や宇宙での彼自身の孤独が、時に大げさと感じさせるまでに詠われている。ノグチは、巻頭には、次のような文章を掲載している。

Ah, who will care for my poetry?
I do not know yet but I dare
to hope that there may be some
unknown friends and to them I
lovingly dedicate these my songs.⁶⁹

同詩集は1920年にニューヨークで再版されたが、その序文には、同詩集は第一版を出した当時(1896年)のノグチの精神的な冒険の日記と書かれており、あえて孤独を題材にしたというより、アメリカという異国で社会に入り込もうとし、前例のない試み、つまり詩人として名を知られようとしたのがノグチの本心であったといえる。

この詩集には50篇の詩が収められているが、そのうちの八篇は、*The Lark* に掲載されたものである。ここで幾つか詩をみてみよう。まず “Like a Paper Lantern” だが、ノグチはこの詩を晩年まで大事にし、また後年「あかり」シリーズを生み出した息子のイサムにも影響を及ぼした詩であるという⁷⁰。

Like a Paper Lantern

“Oh, my friend, thou wilt not come back to
me this night!”

⁶⁷ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版, 2012)p. 43

⁶⁸ 堀まどかはこの副題の由来は Like a paper Lantern の snail に由来しているのではないかと考えている。同上 p. 52

⁶⁹ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kemei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). 表紙裏

⁷⁰ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版, 2012)p. 52

I am alone in this lonely cabin, alas, in
the friendless Universe, and the snail
 at my door hides stealthily[*sic*] his horns.
“*O for my sake, put forth thy honorable horns !*”
To the Eastward, to the Westward? Alas, where
is Truthfulness?—Goodness?—Light?
The world enveils me; my body itself this night
 enveils my soul.
Alas, my soul is like a paper lantern, its pastes
wetted off under the rainy night, in the rainy World. ⁷¹

この詩の最後の二行は、*Kansas City Star* の書評に引用され、“the beautiful lines and the beautiful thoughts in this little book are treasures to cherish.⁷²” と評された。同書評には、ノグチの書くものは “fragments, musical, beautiful, irregular, often obscure in expression, for his song is in an alien tongue” と論じられているものの、“working in an unmastered tongue, confused by immaturity of his thought; finding his speech unready and his fancies elusive, Yone Noguchi yet charms us into the region of his imagination” と留保をつけながらも、きわめて肯定的に書かれている⁷³。英語が彼にとって外国語というだけではなく、まだ完全に修得しきれていない言語であったと読まれていたこと、そして、そのような英語にも拘らず、読ませる詩であったことなどがこれらの書評から明らかである。

ノグチの英詩に関しては、1896年12月の *The Bookman* にも次のように書かれている。

Yone Noguchi, the young Japanese poet whose strange songs have been exploited in the *Lark*, the editor of which is his friend and “discoverer,” is just twenty-one years of age and a graduate of the University of Tokyo.

Mr. Burgess’s slight revision of Yone Noguchi’s contributions to the *Lark*, made necessary by their author’s excusable errors in English construction, has not disguised the strength and strange beauty one might expect from an exile struggling to express his melancholy in a strange and half-known tongue. These shifting dreams of the young poet are phrased with remarkable originality: his virile metaphors and luminous adjectives are so startling that the sublime often narrowly escapes being ridiculous.⁷⁴

⁷¹ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kemei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). XIX

⁷² Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kemei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). no page number.

⁷³ *Ibid.* no page number.

⁷⁴ *The Bookman, a Literary Journal*. IV. December no.4 (1896). p. 288 また、この記事に書かれている「東京大学卒業」は間違いで、ノグチは先述したように慶應義塾を中退している。

“strange” という形容詞が数回登場し、ノグチの英語がハンディキャップと見られていたのは、“struggling to express his melancholy in a strange and half-known tongue” に表れているだろう。それでも、日本人が書いたという英詩であるが故の “remarkable originality” が評価され、話題にもなっているのがわかる記事である。ヨネ・ノグチの研究を続ける和田桂子も「バージェスのねらいどおり、ノグチの舌足らずの英語は、斬新な言葉遣いとして評判を呼んだ。好意的な書評はどれもノグチのブローケン・イングリッシュを長所としてとらえていた」と書いている⁷⁵。

次に紹介する詩 “Seas of Loneliness” は *The Lark* (20号 1896年12月)にも掲載されている。

Seas of Loneliness

Underneath the void - colored shade of
the trees, my “self” passed as a dowsy
cloud into Somewhere.
I see my soul floating upon the face of
the deep, nay the facelss face of the deepless deep—
Ah the seas of Loneliness!
The mute-waving, silence-waters, ever shoreless,
bottomless, heavenless, colorless, have no
shadow of my passing soul.
Alas, I, without wisdom, without foolishness, without
goodness, without badness,—am like god, a
negative god, at least!
Is that a quail? One voice out of the back-hill
jumped into the ocean of loneliness.
Alas, what sound resounds; what color returns; the
bottom, the heaven, too, reappears!
There is no place of muteness! Yea, my paradise
is lost in this moment!
I want not pleasure, sadness, love, hatred, success,
unsuccess, beauty, ugliness—only the mighty
Nothing in No More.⁷⁶

この詩に表れているように “——less” “——lessness” という形式をノグチは当時、頻繁に使った。

⁷⁵ 和田桂子「野口米次郎のロンドン(2)」『大阪学院大学外国語論集』第34号、1996年9月 p. 118

⁷⁶ Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kemei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). XXXII

これらは強い印象を与えるような表現でありながら、ノグチが表現しようとしているものが抽象的な概念であるために、読者はそのもの自体を描写しにくく、意図しているものを掴みにくい印象すら与える。“—less”については、和田桂子も「ノグチの好きな無の境地、孤高の精神を表すのに都合のいい単語ではあるが、こう続けられると、ノグチの才能を発見したと言われる編集者のバージェスやガーネットは、これに少しも朱を入れようとは思わなかったのだろうか、と疑問がわく」と論じている⁷⁷。

1920年にニューヨークのオリエンタリア社から再版された同詩集に書評を寄せた一人に、詩人の西脇順三郎がいた。西脇については第4章でも触れるが、ノグチの英詩を原文のまま読んで、数少ない日本人の一人であろう。西脇は、彼自身が渡英する前の1921年、*Seen and Unseen* について、“Seas of Loneliness”を例に出しながら次のように論じている。

I must confess I am incompetent to be impressed with the absolutely mysterious world, where “the void-coloured shade of the trees” or the “facelss face of deepless deep,” may be piquantly felt. For my sense, long in the service of realism, fail to work so inwardly. To be brief, I am not qualified at all to penetrate the truth of his earlier poems, specially “Seen and Unseen.”

Still, I am certain that in these poems, however, Ralph Waldo Emerson might have found the lover of nature, a true poet. A strong aspiration for Nothing, or the Not Me, is evidently declaring itself there, in point, bitter, clanging tones of agony. So far as concerns these poems, he seems to be a philosopher and a poet at once rather than a poet.⁷⁸

西脇は自身を謙遜し、このようなノグチの詩に感銘を受けないのは西脇自身の落ち度だとし、エマソン(Ralph Waldo Emerson: 1803-1882)なら、自然を愛する彼を真の詩人と評価したかも知れない、と論じている。ここには二つの意味が読み取れよう。まず、エマソンだが、彼は詩人というよりも、思想家として知られている人物であり、そのエマソンがノグチを詩人と評価するだろうという暗示、更に西脇自身による評価としてノグチは単なる詩人ではなく哲学者であり詩人であろう、という点に、ノグチを純粹に詩人としては評価していない点が伺える。二つ目は、エマソンなら評価しただろう、という点に、ノグチの書く詩は19世紀というエマソンの時代に所属するような詩であり、20世紀にはもう時代遅れという暗示の意味もあった可能性である。ノグチはカリフォルニアに在住している当時、エマソンの書物を読んでいたようだが、ノグチはエマソンを哲学者として高く評価しながらも、詩人としては認めていなかったということである⁷⁹。つまり、西脇とノグチは、エマソンに関する評価では一致していたであろうが、ノグチの詩の評価となると意見が異なったということにな

⁷⁷ 和田桂子「野口米次郎のロンドン(2)」『大阪学院大学外国語論集』第34号、1991年 pp. 117-118

⁷⁸ 西脇順三郎 “A note on the poems of Mr. Noguchi” 『三田文学』1921年(大正10年)11月号 pp. 105-106

⁷⁹ 亀井俊介「ヨネ・ノグチの日本主義」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局, 1975)p. 136

る。

また、フジタ・ジュンも書評を寄せた。フジタは1923年に初めての詩集 *Tanka: Poems in Exile*⁸⁰ をシカゴで出版した、シカゴ在住の若い日本人詩人であった。フジタは *Poetry* に次のように論じている。

.....Ethical teachings, philosophy of life manufactured by human intellect, and long narrative stories were entirely absent from his poems. He wrote as he felt—this is the essence of oriental poetry. While the West was busy preaching to the people through its poetry, the East discarded intellectual discussions and devote itself to creating mood; if philosophy entered at all, it was the result of the poet's feeling and not of his intellect. Although the poems in *Seen and Unseen* were a little nebulous and undefined, they were the first poetry of an oriental expressed in English.

.....The free verse of today has moved far away from the example which Yone set during the nineties; but it owes something to him; it acknowledges frankly enough the oriental influence.⁸¹

フジタは、バージェスのように“mystic”などという形容詞や、単に西洋人には解釈しがたいとの論より一歩踏み込み、ノグチの詩の東洋的な部分を分析している。そして、不明瞭な部分があったとしても、とにかくこの英詩集の評価されるべき点は、東洋人が初めて英語で書いたという点であるとはっきり認めている。フジタも西脇と同様に、ノグチの詩のスタイルの時代遅れを指摘している点も興味深い。

一方、亀井俊介は同詩集に含まれているノグチの詩形はホイットマン的であると論じている⁸²。ホイットマンもエマソンと同じ時代のアメリカ人である。亀井は、ノグチは次の三つの点においてホイットマンから修得したと論じている。まず詩形だが、これは亀井がノグチの『野口米次郎詩論⁸³』言葉「ウキトマン等に贅を取った」をそのまま引用にしているとおりで⁸⁴。他に神秘的自然観、そして精神主義なナショナリズムとエゴティズムがあるが、ナショナリズムにおいては、ホイットマンの「建国の理想の崩壊にあるアメリカに精神的活力を復活せしめようとする努力——ノグチはこれをアメリカの物質主義に挑戦する東洋の精神主義の形に転化した」のであり、エゴティズムにおいては「精神主義のもっとも手近なあらわれとして自己を神にまでたかめる態度」であるという⁸⁵。そして、このように出来上がった詩集は「拙劣な英語と大胆な模倣とが、粗奔だがひたむきな精神主義と奇妙にマッチして、アメリカの読者には一種の新鮮味にうつった」と論じている⁸⁶。19世紀の詩人

⁸⁰ Fujita, Jun. *Tanka: Poems in Exile*. (Chicago: Covici-McGee., 1923).

⁸¹ Fujita, Jun. “A Japanese Cosmopolite” *Poetry: A Magazine of Verse* vol. XX. April-September 1922.

⁸² 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京:研究社, 1970)p. 356

⁸³ 野口米次郎『野口米次郎詩論』(東京:玄文社詩歌部, 1922)

⁸⁴ 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京:研究社, 1970)p. 358

⁸⁵ 同上 p. 358

⁸⁶ 同上 p. 358

ホイットマンの要素を持ち合わせる日本人の詩は、1896年の時点では「アメリカの読者には一種の新鮮味にうつつた」かもしれないが、1921年の再版の頃には時代遅れと映った可能性もある。

ノグチが *Seen and Unseen* (初版) を出版した五ヶ月後の1897年5月、*The Lark* は廃刊となった。*The Lark* は、それまで孤立していたカリフォルニアの作家たちと彼らの作品を、東海岸にまで紹介し、彼らとの橋渡しの役割を担っていたという点で大事な文芸雑誌であった。廃刊と同時に、その編集や執筆を手がけた若手作家たちが実際にアメリカの東海岸やヨーロッパへと発って行った。バージェスも、*The Lark* 終刊号発行前には東海岸へ移り、その後ロンドンへと渡った。ボヘミアンクラブのメンバーに仲間意識を抱いていたノグチは、彼らから取り残されたと認識し、周囲からもそのように見られた。シカゴの *The Chap-Book* は “Gelett Burgess and Ernest Peixotto are in New York, Bruce Porter and Florence Lundborg are headed toward Europe, and ‘the Homeless Snail’ Yone Noguchi, alone remains: Standing like a ghost in the smiling mysteries of the moon garden.”⁸⁷ とノグチの孤独について書いた。最後の一行は、ノグチの *Seen and Unseen* に含まれている “I am a shadow” という詩の冒頭である。

取り残されたノグチはヨセミテ溪谷へ徒歩旅行にでた。無銭であったため、薪割りをして食事と宿泊場所を提供してもらったり、インディアン之家に泊めてもらうなど、往復の道中は支援者に恵まれた。そして、ヨセミテで作った詩八篇から成り立つ二冊目の詩集 *The Voice of the Valley* は1897年12月に刊行された。*The Lark* も手がけたウィリアム・ドクシーが出版を支援した。序文を寄せたのは、チャールズ・ウォレン・ストッダードである。ストッダードとノグチは、ミラーを通して文通するようになった間柄であり、この時点では一度も面会していなかった。彼は各所でノグチを “The Dream Child”⁸⁸ “Dreamer”⁸⁹ と形容しており、夢に生きるノグチを最大級の褒め言葉を使って紹介した。

Noguchi is a word builder of startling originality and power; inspired by the charming audacity of innocence, he is unfaltering in his flights; the sensuous imagination of the Oriental has lost nothing of its fire and splendor, though the new medium of expression is the most literal English that ever was uttered: If he is sometimes obscure, it is because he has flown into cloud-land, where obscurity is a virtue; haunted by a memory of Yosemite, an occasional extravagance is surely permissible.⁹⁰

ストッダードも、ノグチの東洋的なセンスに触れている。また、彼がこの紹介文で意図的にノグチの

⁸⁷ 野口米次郎『英米之十三年』(東京春陽堂, 1905) p. 19

⁸⁸ “Heights” Stoddard, Charles Warren. “Stoddard, Charles Warren 1843-1909.” *BANC 82/2C. Box 1. The Bancroft Library, University of California, Berkeley.* p. 18

⁸⁹ From Charles Warren Stoddard to Yone Noguchi. 28 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters.* (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 125

⁹⁰ Stoddard, Charles Warren. *Noguchi, Yone. The Voice of the Valley.* (San Francisco: William Doxey, 1897). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay.* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). “Introduction”

表現の斬新さを “most literal English” と敢えて書いたところに、そのように弁護する必要があったとストッダードが感じた背景を読み取ることができる。

この小さな詩集には、ノグチがヨセミテの壮大な自然を最大限に表現しようとした努力がみえる。以下に紹介するのは、“Song of Day in Yosemite Valley” の前半三分の一の部分である。

Song of Day in Yosemite Valley

O thunderous opening of the
unseen gate of solemn Heaven's
Eternal Court!
Behold, clouds, tenants of the sky, sweep
down from the Heavens unto a secret
palace under the Earth!—
Aye, mighty Yosemite!—a glorious troop
of the unsuffering souls of gods
Marches on with battle-sound against the
unknown castle of Hell! —
Aye, a divine message of Heaven unto
Earth—the darksome house of mortals to awake!
Hark—the heart-broken cry of a great Soul!—
Nay, the tempestuous song of Heaven's
organ throbbing wild peace through the sky and land!
The Shout of Hell wedded to the Silence
of Heaven completes the Valley concert,
forms the true symphony—
The Female-light kissing the breast of the
the [*sic*] Male-shadow chants the sacred Union!
I, a muse from the Orient, where is
revealed the light of dawn,
Harken to the welcome strains of genii
from the heart of the great Sierras —
I repose under the forest-boughs that
invoke the Deity's hymn from the
Nothing-air.⁹¹

この詩集に寄せられた書評には以下がある。

⁹¹ Noguchi, Yone. *The Voice of the Valley*. (San Francisco: William Doxey, 1897). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). no page number.

This verse has picturesqueness and a naïve, fresh word use, due in part to the writer's origin. Now and then it is happy; the atmospheric effect is invigorating.⁹²

また、ジュン・フジタがこの詩の一行を引用し、1922年に執筆した次の書評がある。

The Shout of Hell wedded to the Silence of Heaven completes the Valley concert.

To feel that strange silence of the mountains and the sky in the roar of the fall is typically Japanese. To feel and create this poetic silence, and through it to suggest the roar, the power and the majesty of the fall without describing it, is the mission of Japanese poets. And if such a poem is successfully written it has infinitely stronger expression, at least to a Japanese, than hundreds of adjectives piled upon each other by western poets. Yone felt this silence, and had he been completely a Japanese poet, he would have centered his effort in the creation of the silence, instead of in describing the sublimity of the fall as he did in the opening of this poem: "O thunderous opening of the unseen gate!"

But this is not a Japanese poems. Yone felt the mood of Japanese poetry, and expressed it to a certain degree through the western medium. Should western readers discover that strange silence in his poetry, his mission will be fulfilled. Whether they do or not, time alone will tell.⁹³

アメリカ人はどちらかというと英語の使い方や表現しようとしている内容が東洋的だと論じてきたが、フジタは東洋的な感性をわざわざ表現しようとしているところが逆に西洋的であるというのだ。

西洋的であるという繋がりでは、亀井俊介は同詩集に含まれている詩 "The Song of songs which is Noguchi's" はホイットマンの "Song of Myself" と、そして同じように、そのうちの初めの一節のタイトル "I Hail Myself as I do Homer" はホイットマンの "I celebrate myself" の模倣である点を指摘している⁹⁴。内容に対しても、「自然に自己を同化した Whitman 的絶対境の東洋人的焼き直しにほかならない」と論じている⁹⁵。

アメリカの文芸雑誌の中にも、例えば *The Book News* は、同詩集から、亀井と同じく、ノグチがホイットマンから受けた影響について論じている。

Noguchi is a dreamer, rather than a thinker, but the uplift of his dreams, for those who yield themselves to it in the reading, is genuine. The influence of Walt Whitman upon his feeling for life, and upon his forms of expression, is even more noticeable than it is

⁹² Burton, Richard. "Book Buyer". Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea (3rd ed.)*. (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). 「野口米次郎氏著書目録」 p. 3

⁹³ Fujita, Jun. "A Japanese Cosmopolite" *Poetry: A Magazine of Verse*. vol. XX. (April-September, 1922).

⁹⁴ 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京: 研究社, 1970) pp. 359-360

⁹⁵ 同上 p. 360

in his previous work, but while he has almost outgrown his earlier habit, the habit of Whitman, as well, of dropping into definiteness of expression destructive to the poetic form, the present work is on the whole more clearly defined than any of his earlier poems.⁹⁶

ここでも“dreamer”と語られているところが特長的である。盗作疑惑のかけられた事件については既に述べたとおりであるが、*The Voice of the Vally* に含まれたホイットマンの「焼き直し」については批判した当時の書評などは見当たらない。*Seen and Unseen* と比較すると、この二冊目の詩集はそれほど大きな反響を呼ばなかったようである。

The Lark の廃刊から丸一年経った1898年5月には、*The Twilight* というノグチ主宰の文芸雑誌を出版した。表紙から裏表紙までがわずか八頁で、*The Lark* と同じく一冊10セント⁹⁷の薄い雑誌で全て手書きである。一卷目にはプロローグに続いて“Ode on Spring” “This and That” “War Peace”の三篇の詩が含まれており、翌月に出された二巻目には、序詞“World Built by Us”に続いて“A Last Word to Spring” “World of Fancy”の二篇の詩が収められている。この六篇の詩はおそらく英語母語話者による編集はされなかったと思われ、ノグチが公に出した、彼の未校閲の英語という意味では貴重な記録でもある。その中でも注目したい詩は、“A Last Word to Spring”である。この詩は、1903年にロンドンで出版された英詩集 *From the Eastern Sea* に“Spring”と改訂されたものが含まれているが、これはおそらくフランク・パットナムか、またはレオニー・ギルモア (Léonie Gilmour) によって編集されていると考えられる。*The Twilight* に掲載されているのを「初出」、*From the Eastern Sea* に掲載されているのを「決定稿」として、以下に並べてみる。

初出	決定稿
<p>A Last Word to Spring (<i>The Twilight</i>, 1898)</p>	<p>Spring (<i>From the Eastern Sea</i>, 1903)</p>
<p>Spring, winged spring—a laughing-souled butterfly, Flashes afar beyond mortal sight, beaming-Browed Spring—a moment-faced angel: The rosy-cheeked shadow of maiden spring—my lover perfumed, no fades, The shadow, spring’ golden shadow full of</p>	<p>Spring, Winged Spring, A laughing butterfly, Flashes away, Rosy-cheeked Spring, Angel of a moment. The little shadow of my lover performed,</p>

⁹⁶ On *The Book News*. Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). 「野口米次郎氏著書目録」 p. 3

⁹⁷ 1～12号までは1冊5セントであったという。有馬研一『フランク・ノリスとサンフランシスコ』(東京: 桐原書店, 1996) p. 84

<p>fluttering loves: Spring, naughty-sweet spring—a proud corutte born to laugh but not to live, Departs away from the world without fare- well, Spring, flying spring—an eloping lover with Laughters deseting me with tears: Spring, unvirtuous spring, my heart loves thee still, sweet-rotten spring. Thou left' me this—under balmy leaves, unknown even to god, this, the ripened honeys rich and rare: Spring, the hatest me, spring, my soul still woos thee till the dawn of spring next.⁹⁸</p>	<p>Maiden Spring, Now fades, The shadow, The golden shadow, With all the charm. Spring, Naughty sweet Spring, A proud coquette Born to laugh but not to live, Spring, Flying Spring, A beautiful runaway, Leaves me in tears, But my soul follows after, Till I catch her Next March. Spring, Spring!⁹⁹</p>
--	---

ここに並べた二つの詩は、改行のされ方から表れているように、歯切れの良さが顕著に違う。特に大きく変化があるのは Spring への呼びかけであるが、初出は Spring と呼びかけた後に同じ行から始まるのに対し、決定稿では必ず改行してある。内容としても、初出では “thee” “thou” などの二人称単数を表す古い英単語を使った Spring への直接の呼びかけであるが、決定稿では第三者へ Spring について語っているから、Spring には直接呼びかけていない。また、初出はハイフンで繋げた言葉が四つあるが、それは効果的と言える度合いを超していたのではないか。決定稿ではハイフンで繋げた言葉は一つしか出てこない。最後の数行はことに違う。初出は、次にいつ訪れるかわからないような Spring への呼びかけは過剰なまでに劇的なものに対し、決定稿は、翌年の三月になれば必ず訪れる Spring とあって、サラッと軽い。また、初出にある “deset” “corutte” はそれぞれ “desert” “coquette” のミススペルであろう。このような点を総合的に見ていくと、初出では必死に単語を繋ぎ合わせ、過度とも感じられる程に非現実的な雰囲気を作らせるのに対し、決定稿は全体的に穏やかで余裕があり、より共感の得られる詩としてまとまったと言える。これらは、パトナムやレオニーによる編集の成果と言える。

ただ、ノグチの雑誌 *The Twilight* のできた背景には不明な点が多い。一巻目には発行人としてノグチの名前と並んで M. Takahashi の名前があり、これはタカハシ・コウセン (Kosen M. Takahashi) という日本人のようである。だが、二巻目の発行人はノグチだけであり、最後のページ

⁹⁸ Noguchi, Yone. “A Last Word to Spring” *The Twilight*. no. 2. June 1898. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi*. (Tokyo: Edition Synapse, 2009).

⁹⁹ Noguchi, Yone. “Spring” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea (3rd Ed.)*. (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 51-52

をめくるとタカハシは九ヶ月も監獄に入れられており理由は不明だと書かれている。初めから年間購読料は一ドルと記載してあるにも関わらず、この雑誌はこの二巻で廃刊となったようである。タカハシが九ヶ月も不在であったのが真実だとすれば、この *The Twilight* はノグチの詩集 *The Voice of the Valley* の刊行される前からノグチとタカハシで準備していたことになる。そこへタカハシが投獄され、出獄を待ち切れないノグチは *The Twilight* の刊行に踏み切ったものの、事前に準備していた二巻以降、一人では手に負えなかった、という可能性が考えられる。

ここまで詩作と出版を重ねたノグチは、いよいよ自身も東海岸へ向かう決意をした。ノグチの英文手紙は残されているもののうち最も古いのが1896年10月であるから、*The Lark* に初めて詩集が掲載された数ヶ月後であるが、その頃から東海岸のニューヨークやボストン在住の人々と手紙のやり取りをしていた。ノグチが彼らをどのように知り得たのかは不明だが、殆どの手紙は、ノグチからの詩集または詩の受信を知らせていることから、ノグチは早くから将来、東海岸への進出を考えて行動していたと見られる。ノグチが日本人として英語で詩作していることに対するコメントが多く、それらは例えば、以下に四つ挙げた東海岸からの返信にも見られる。

It is a wonderful surprise that one not born to the language should attain such a mastery of its subtleties as to be able to achieve the exquisite phrasings scattered through your 'Song of Songs'.¹⁰⁰

I am glad that you like English literature and I congratulate you being able to write English so well not only in prose but, as is more difficult in verse. Do not cease to love literature but at the same time do not neglect what other duties you have to fulfill. I am afraid that since the first beginning of time literature has given its votaries, ... that is more substantial than fame unless perhaps it be the sympathy of congenial souls.¹⁰¹

I have read some of your lines before and they impress me as the out-put of a genuinely poetic soul but one struggling hard with a strange tongue. You are improving however and by and by, it may be, you will find yourself in full possession of the English language and then you should be able to give us a very new interesting comment upon Western life.¹⁰²

I should like very much to write an article about your poetry for some of our American magazines. Have you any photograph I could obtain to accompany article, as an illustration and may I ask you for a few date a few facts about your life—that is if you were born, as I fancy, in Japan and if you have adopted our country as your home. I

¹⁰⁰ From Edith Thomas to Yone Noguchi. 15 April 1897. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 7

¹⁰¹ From Lewis Morris to Yone Noguchi. 9 January 1899. *Ibid.* no. 31

¹⁰² From Hamlen Garland to Yone Noguchi. no date. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 32

have also great interest in knowing where you received the education that gives you such admirable use of English. Your poetry has a charming Oriental quality, beautiful fancy and poetical feeling, it seems to me.¹⁰³

このような返事から、ノグチが当時、如何にアメリカ人たちに興味を持たれていたかが浮き彫りにされる。そして、興味を示す手紙の数々を受け取ったノグチは、確かな出版の計画や契約がなくとも、東海岸へ渡る決心をしたのである。

1. 3 フランク・パットナムおよびジャポニズムとの出会い

ヨネ・ノグチは1900年5月末、四年間という長きに亘り居候したミラーの「高丘」^{ザ・ハイト}を去り、シカゴ経由でニューヨークへと向かった。ノグチがシカゴで滞在した期間は、手紙の投函場所から割り出すとわずか約一ヶ月であった。だが、シカゴでの、フランク・パットナム(Frank Putnam)というジャーナリストであり、詩作もしていた人物との出会いは、ノグチの人生において特筆すべき出来事と言えるだろう。フランク・パットナムに関する資料は非常に少ないが、彼は詩人としては名を馳せなかったようである。亀井俊介は、ノグチが帰国後に設立したあやめ会の詩集『豊旗雲』に掲載されている、妻を詠った詩“Mary”を引用しながら、「フランク・パットナムは恐らくどんな文学史にも登場しない人であろう」と論じている¹⁰⁴。カリフォルニア州立大学バークレー校バンクロフト図書館には、ノグチからパットナムへ宛てた手紙が数十通保管されており、それらの手紙から、パットナムがどれほどノグチを手助けしたかがわかる。ノグチは、パットナムを兄のよう慕って依存したと言っても過言ではないほど、詩作からプライベートなことに至るまで支援を求め、パットナムはそれに応えた。二人のやり取りは、1899年2月、ノグチがまだカリフォルニアにいた時に手紙を通して始まったと思われ、1900年5月末にシカゴで初めて実際に面会したようである。当時、既に妻子のあったパットナムは、家族ぐるみでノグチを大歓迎したようである。ノグチは、パットナムとの出会いについて、誰に宛てたかは不明だが、知人への手紙に以下のように書いている。

Life is not altogether without joy: today we find a flower, tomorrow another. I came to Chicago of smoke and rush, as a breeze of California of sunshine and freedom, and it was my greatest fortune to find the most noble, most sweetest soul not affected by the smoke and typical rush. That is Frank Putnam's. He is the great poet.

I have had a glorious times spending a few weeks with him, under his most warmest hospitality. I slept well and long, I ate much; he was happy and acted toward me as a summer wind of the great prairie of Illinois.¹⁰⁵

¹⁰³ From Anna McGill to Yone Noguchi. no date. *Ibid.* no. 42

¹⁰⁴ 亀井俊介「ヨネ・ノグチとアメリカ詩壇」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965)p. 61

¹⁰⁵ From Yone Noguchi to unknown. June 1900 (no date). *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 3

その後数十通送られたノグチからパットナム宛の手紙には、彼の家族への挨拶が必ずというほど書き添えられている。パットナムも、ノグチの英語の不完全さを認識し、ノグチが詩を発表し続けられるよう、英語の不完全部分を補う役を買って出た。ノグチはシカゴで、当時有力な新聞であった *Chicago Evening Post* に依頼され、シカゴの印象についての記事を10本ほど執筆したが、これもおそらくパットナムとの繋がりで得た機会だろう。

1900年7月には、ノグチはニューヨークへ向かった。ニューヨークにはノグチにとって、頼ることのできる知り合いのいない新しい都市であった。詩であろうと小説であろうと、とにかく名前を世に広めることを目標と定めて執筆活動をしていたノグチは、やはり自身の英語は母語話者のレベルではないため、母語話者による校正は欠かせないと思ったのであろう。1900年12月、遠距離だがニューヨークからシカゴのパットナムへ校正を依頼した。

..... And have you time that you can spare for me? I suppose you have! Just an hour or so for my poetry! Now I am going to write a poem, but I have no one who is kind enough to read and poetical enough to understand, and with good English so that my poem gets to be corrected and criticised. How lonely I feel in this great city! I saw a few poets here who are much for themselves only. They are so busy that they cannot give an hour for anybody. How horrible. Dreadful beyond speech!

So I want someone for my companion and English teacher (how it sound strange!) Will you do such a task for me as you did while I stayed at Chicago with you? Just one poem a week! It don't take much work. Twenty minutes for typing, and half an hour for correction perhaps, and some poem don't require correction, I suppose. And if you get any delight in reading I shall be very glad.

I don't know much know [*sic*] to use article. I often use "the" in the place of "a" or I put it in an unnecessary place. I wish you will be careful.

Here are a thousand typewriters who can write good English (good enough to correct my little mistakes in English composition) but my poem is too divine to go to their desk. So I don't want to be done by them.

I will send the poems in my handwriting, so if you wish to keep them (Oh, dear me, I am no great poet!) you will keep them.

Here is my first poem to submit to you. Will you kindly read it and think about and criticize and correct if any mistakes was there? How do you like it?

Criticize it! And send me a copy! I wish I could send one poem a week, if possible. What do you think of that?

I have no other copy of "Under the Moon". I hope you will not lose it.

I have here a copy of Bliss Carmen's latest book, in which I hardly find one poem for which I care. He is merely a rhymers with a queer mystic (of course someone is good sometimes.) I will send you that copy tomorrow or day after tomorrow.

I think that I will devote myself and everything for poetry this whole year and see how I can improve myself.

And I will go to England and publish them.

Can you send some new poems by you? Merry Christmas to you all again.¹⁰⁶

同手紙に出てくる“Under the Moon”をはじめ、この時期パットナムが校正した数々の詩は、第3章で扱うロンドンで自費出版した英詩集 *From the Eastern Sea* に含まれている。なお、同手紙からもわかるように、ノグチの英語は、伝えたい内容は殆ど伝わるレベルであるが、文法の間違いは顕著であった。“It don’t take—” “I don’t know much know to use article” “little mistakes” “correct if any mistakes was there?” “some poem don’t require correction” など、全て些細ではあるが母語話者レベルでなく英語を習得した者によくある間違いである。にもかかわらず、ノグチ自身は冠詞が苦手という程度の認識しか持っていなかったようである。それどころか、ノグチは、タイピストたちは彼の文章における間違いは直せるものの、彼の詩はタイピストの手にかかるのは“too divine” というほど、詩人としてのプライドが高かったのである。

パットナムはノグチの詩を校正することを快諾し、ノグチは彼の恩に甘えた。パットナムからの返事は概ね好意的なものであったのだろう。次のノグチの返信からも、浮かれ気分な様子が伝わってくる。

Don’t flatter me much! I will be big-header in a minute. However I am very glad to know that you are pleased with “Valley of Peace.” I like it too. I do not know how to express my thanks to you. I wish you understand how sorry I am to trouble your busy head.

Here are two poems which are not first class at all, but I wish to be fixed. So I send you.

One of them with the title of “Dante at the Dawn of the Shore” is my own expression about Dante’s entering into the purgatory, coming out from the Hell. You may laugh on my blind boldness.

For the other (O Hana san), some one may say, is an imitation of Poe’s “Annabel Lee,” but it is not all. As you see there’s a great difference in sentiment and expression. It is not so beautiful like Poe’s anyhow.

Pray, correct them!¹⁰⁷

ここで注目したいのは“O Hana san” という詩である。突然日本語の単語が登場している。これまで、カリフォルニアで出版された二冊の英詩集と文芸雑誌に掲載されている詩には、日本語の単語がこのようにローマ字となって登場する詩は一つもない。先にもふれたとおり、これまでは自然や宇宙や沈黙、そして孤独を詠っていた。それらは、日本人らしさが際立つ題材ではないが、主にノグチの英語の使い方や表現を以て、アメリカ人は東洋らしさを見出し、日本からの詩人を歓迎

¹⁰⁶ From Yone Noguchi to Frank Putnam. (日付不明だが恐らく 1900 年 12 月) *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 6

¹⁰⁷ From Yone Noguchi to Frank Putnam. *Ibid.* no. 8

した。ところが、ここではじめて日本語の単語がローマ字で登場したのである。内容も日本の紹介とも思えるものである。この詩は、後にロンドンで出版された *From the eastern Sea* に含まれたが、長い詩なので、同書に掲載されたものの前半三分の一を以下に紹介したい。(この詩は後に多くの好評を得た。)

O Hana San

It was many and many a year ago,
In a garden of the cherry-blossom
Of a far-off isle you may know
By the fairy name of Nippon,
That a maiden who was dressing her hair
Against the mirror of a shining spring,
Casting over me her sudden heavenly glance,
Entreated me to break a beautiful branch
Of the cherry-tree: I cannot forget.
I was a boy on the way home
From my school; I threw aside
All my books and slate, and I climbed
Up the tree, and looked down
Over her little anxious butterfly face:
Oh, how the wind blew fanning me
With a love that was more than earthly love,
In a garden of the cherry-blossom
Of a far-off isle you may know
By the fairy name of Nippon! (後略)¹⁰⁸

ノグチは何故、突然、日本を題材に詩を書くようになったのであろうか。可能性として二つの理由が挙げられる。まず、ジャポニズムである。アメリカでは日本ブームで、日本を題材にした小説だけではなく、多くの雑誌もこぞって日本の文化や文学を紹介した。実際、1897年に *The Voice of the Valley* が出来上がった時にある人物からの感想として “I find myself wishing sometimes, that you could give us something of the Japanese life and feeling: but this is not said as the expression of more than a passing thought. You must do what is in you,¹⁰⁹” という手紙もあるように、カリフォルニア時代にも、ノグチの詩を読んで日本人の書く詩でありながら日本について書かれていな

¹⁰⁸ Noguchi Yone. “O Hana san” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 28-30

¹⁰⁹ From Adeline Knapp to Yone Noguchi. 19 November 1897. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 15

い点に注目した人がいた。だが、当時のノグチは「高丘」^{ザ・ハイ}におり、ミラーやボヘミアンたちに囲まれていたからか、ジャポニズムとは全く別の、ホイットマンやポオを見本にした、もっとアメリカらしい詩ばかりを追求していた。ところが、東海岸に渡り、ジャポニズムの影響の強さを目の当たりにしたと推測できる。もう一つは、ジャポニズムの小説を書いていたオト・ワタンナからの影響が考えられる。

ノグチにオト・ワタンナ (Onoto Watanna) というアジア系アメリカ人の女流作家を紹介したのはパットナムであった。現在も、ノグチよりも名前の知られているワタンナの本名は Winnifred Eaton Babcock Reeve (1875-1954) といった。ワタンナは英国系の父と中国系の母の間に生まれた14人兄弟姉妹の八番目で、一度も訪れたことのない日本を舞台に、英語で小説を書いてアメリカで出版していた女流作家である。19世紀末にアメリカ社会で起きたジャポニズムにのり、Onoto Watanna という、日本を知らない者にとっては一見日本名に見えるような名前で、半分日本人になりすましていたのである。これは、現在では考えにくい状況であるが、当時のアメリカではそれほどに日本と中国の区別もなく、また、日本という国が知られていない時代であったから、彼女の生い立ちにも疑いは持たれず、彼女の小説もジャポニズムの波に乗りきわめて好評であった。そのようなワタンナについて、アメリカのジャポニズムを研究する羽田美也子は、「折からのジャポニズムを好機として捉えて多産した職業作家と呼んでもよい¹¹⁰」と論じている。時代性に則った作家という点が、ノグチとワタンナに共通したところだろう。パットナムは、ノグチがまだカリフォルニアにいる時代から手紙を通じて初めてワタンナについて書いており、ノグチは “You say Onoto Watanna? Such is not Japanese name. Is she real Japanese lady?¹¹¹” と書き送っている。ところが、シカゴでパットナムを介して実際本人にあったノグチは、ストッダードに手紙で以下のように書いているところを見ると、当初はノグチも、何故か彼女を半分日本人と認識していたことがわかる。

You will write me at 3105 Groveland Avenue where my dearest friend lives and I visit nearly every evening. She is a half caste woman with the name Onoto Watanna; her mother was Japanese, father being an English; she herself being very bright write now and then very clever short stories for magazines. she is awfully clever; but no sound mind and sweet philosophy. She is woman after all!¹¹²

ワタンナはシカゴに住んでいたこの時期、精力的に多くの文芸雑誌に短編小説を投稿していた。執筆で忙しいはずのワタンナが、何故毎晩のようにノグチと会っていたのか。羽田は、ノグチがワタンナにとって日本に関する重要な情報提供者であった可能性と、ノグチがサンフランシスコ時代から書き始めた小説 “O’cho san’s Diary” の物語の構成が、ワタンナとの会話を通してまとま

¹¹⁰ 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京:彩流社, 2005)p. 201

¹¹¹ From Yone Noguchi to Frank Putnam. 15 February 1899. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 1

¹¹² From Yone Noguchi to Charles Warren Stoddard. 19 June 1900. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 54

って来た可能性の二点を指摘している¹¹³。ワタンナにとっては、一度も訪れたことのない日本について書くのであるから、本物の日本人と話すに超したことはなかったのである。そして、ワタンナとの会話から、ノグチは詩作でもジャポニズムを上手く利用するヒントを得たと思われる。ノグチがニューヨークに向かった1900年、ワタンナもシカゴからニューヨークへと渡った。二人ともニューヨークに渡っていたのを知っていたパットナムは、1901年1月1日付けの手紙で“Give my warm regard to Onoto when you see her¹¹⁴”と書いていることから、ノグチとワタンナは、ジャポニズムをめぐり、ニューヨークでも意見を交わしていたと考えられる。ノグチの詩“O Hana san”がパットナムの校正を受けたのは、この時期である。このように、ノグチはワタンナとの出会いを通して、アメリカで全盛期であったジャポニズムに則った詩を書くに至った可能性が高い。

ワタンナがニューヨークで初めて出版した小説は、*A Japanese Nightingale* (1901)という、全盛期のジャポニズムに則ったような物語であった。同書は20万部売れた程の注目を集め¹¹⁵、後述(1.4章)するが、ノグチの小説は彼女のものとは比較にならない売れ行きの悪さであった。

ワタンナの同小説は、1903年にブロードウェイで芝居化された。ところが、新聞社からの依頼で日本人としてこの芝居を見に行ったノグチは、その内容に絶望している。

And Frank, Onoto's play – a certain young adapted from her Japanese Nightingale – was a flat failure. It is pity, but no one can help it. I was sent by some newspaper to criticize it from Japanese eyes. I thought that to say nothing was only the way to be kind to the play. Such a poor production! I am afraid the play will be stopped. Onoto expected much of it, you know. She begun to try to put it in the stage some four years ago when we were in good terms. When it appeared finally, it was such a mess.¹¹⁶

ノグチがいつの時点で、ワタンナが半分中国人と知ったかどうかは不明である。だが、この芝居を鑑賞する時点では知っていたのだ。後に執筆した記事でも“The saddest part about Miss Watanna is that she is still posing as a Japanese, half a caste at the least. ... I wonder why she must write a Japanese story as she does.¹¹⁷”と書いている。さらに、彼女の日本についての知識が不正確で、彼女がどれだけ物語に都合のよいように日本を作り上げているか、それらは日本について書かれた書物の中で最低の質であり、そのようなものが出回っているのに無念さを感じると続く。先に引用した羽田の言葉「ジャポニズムを好機として捉えて多産した職業作家」に明らかのように、ワタンナこそ、当時の時代の波に乗ったのであった。それを確信させるのは、ワタンナが日米開戦時のインタビューで“Actually, I'm ashamed of having written about the Japanese. I hate them

¹¹³ 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京:彩流社, 2005)p. 241

¹¹⁴ From Frank Putnam to Yone Noguchi. 1 January 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975) no. 61

¹¹⁵ Birchall, Diana. *Onoto Watanna The Story of Winnifred Eaton*. (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2001). p. 75

¹¹⁶ From Yone Noguchi to Frank Putnam. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 27

¹¹⁷ Noguchi, Yone. “Onoto Watanna and Her Japanese Work” *Taiyou* 13:8 (June 1907): 18-21; 13:10 (July 1907): 19-21

so¹¹⁸”と答えたところにもある。1915年にワタンナが執筆、刊行した自伝 *Me: A Book of Remembrance*¹¹⁹ にはノグチは登場しない。結果的にノグチとワタンナは友情を保つことは出来なかった。だが、ワタンナとの出会いを通して得たジャポニズムは、ノグチのその後の文筆活動に大きな影響をもたらしたのである。

1. 4 編集者レオニー・ギルモアと小説出版

ジャポニズムが盛んな20世紀はじめ、アメリカ人知人であるシカゴのパットナムやサンフランシスコのブランチ・パーティントンに詩人であると自称していたヨネ・ノグチは、最終的にニューヨークでは、詩ではなく小説でジャポニズムに挑んだ。ノグチは1902年9月、小説 *The American Diary of a Japanese Girl* を出版した。ノグチはアメリカ人にはならなかったものの、同小説は日系アメリカ人による初の小説という位置づけでもあり、近年、アジア系アメリカ人文学の中でその位置づけが重要視されてきている¹²⁰。

The American Diary of a Japanese Girl は、その題名のとおり、日本人少女のアメリカ滞在中の日記である。少女の名前は“Morning Glory”だが、太平洋を船で渡り、サンフランシスコ経由でニューヨークに来るところや、サンフランシスコで世話になったミラーのミドルネームから取ったと思われる“Heine”という詩人が出てくるなど、ノグチ自身の経験は物語のはしばしに見られる。また、「メリケン見物」「つまらない」「おやおや」「障子」「ごめんください」「仏様」などなど、日本語の単語をローマ字で表現し、エキゾティシズムを演出した。この頃アメリカで出版されていた小説には、日本語の単語をローマ字で表すという方法は既に使われており、例えば、ノグチの手紙から、同じように日本語の単語がローマ字表記で使われている小説 *My Japanese Wife: A Japanese Idyl* を彼が知っていたのは明らかであるから¹²¹、ノグチがその手法を真似たことになる。だが、それまで出版された物語が、アメリカ人によるジャポニズム小説であったのに比べ、ノグチの小説では常に日米を比較し、特にアメリカに関して、自由主義から白人の肌の白さや足の長さ、文明化などへの憧れと劣等感の両方を持ち、時には皮肉が込められて書かれている点などは、ノグチが日本人の立場から意識し、特徴として盛り込んだ可能性は考えられる。

これまで取り上げて来たように、ノグチの英語は母語話者レベルではなく、出版に耐えうるものを書くには編集者が必要不可欠であった。ノグチは、遠距離のパットナムに手紙で編集を依頼するのを辞め、新聞広告を通じてニューヨークで編集者を探した。これに応募してきたのがレオニー・ギルモア (Léonie Gilmour: 1874-1933¹²²) である。本節では、ノグチの作品がいかに関係者の手

¹¹⁸ 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京:彩流社, 2005)p. 214

¹¹⁹ Eaton, Winnifred. *Me: A Book of Remembrance*. (New York: The Century Company, 1915).

¹²⁰ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). p. 144 Edward Marxによると、初めての日系アメリカ人の小説は1957年に出版されたジョン・オカダの *No-No Boy* であるという。

¹²¹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. July 1901? Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 85

¹²² ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上) (東京:講談社, 2003)には1874年生まれと書かれているが、Wikipedia (日本語版 <http://ja.wikipedia.org/wiki/レオニー・ギルモア> 英語版

によって完成したか、作品はジャポニズムの潮流においてどのような評価を受けたのか、という二つに焦点をあてたい。

同小説は、レオニーの手に渡るまでに、何度か挫折した。先にもふれたように、ノグチはカリフォルニアに住んでいた頃から、“O’cho-san’s Diary”という長篇を書き始めていた。カリフォルニアからシカゴに向けて発つ約一年前の1899年4月には、書き始めた“O’cho-san”をさらに書き進めたいと、*San Francisco Call*の記者で知り合いのブランチ・パーティントンへの手紙にある¹²³。この時、ノグチがジャポニズムを意識していた証拠は残っておらず、どこで、題材の切り口を見つけたかは不明である。1899年8月にはブランチに校正を依頼し、紙面上で活字になるのを早く見たいから毎日でも作業してほしい、と依頼している¹²⁴。また、同じ手紙には、書きたいのは日記であり、筋書きのある物語ではないことや、異国に到着して間もない少女に恋愛などさせられない、と反論していることから、ブランチがこの作品に意見したのが読み取れる。同年9月に入ると、ブランチは東海岸の文芸雑誌への出版を考えているようだがノグチとしてはサンフランシスコの新聞で十分と思っており¹²⁵、収入が必要であるから、どこかに出版して欲しいと書き送っている¹²⁶。この後、小説の題名が“O’cho-san’s Diary”から“Miss Cherryflower”と改められており、同小説の出版時には著名者としてヨネ・ノグチの代わりに“Miss Cherryflower”にしたいことや、雑誌か新聞のどちらに掲載するかという点でブランチと意見の相違があったのが読み取れる¹²⁷。最終的には、ノグチはサンフランシスコでは何も出版せずに東海岸へ向かい、ブランチからはノグチが渡した原稿の半分も返却されなかった。このように失敗に終わった一度目の小説執筆であるが、二度目はワタンナと出会いの後、一人でニューヨークで執筆に臨んだものの気に入らずに暖炉で燃やしてしまった。ノグチが二度目と呼んでいるが実は三度目であった執筆で、“My second attempt was done within four months. And how I did find it? (I smiled seeing it. Good satisfaction!)¹²⁸”と喜んだように、四ヶ月掛けて原稿がついに完成したのである。

この三度目の執筆をノグチの満足いく完成度に仕上げたのが、編集者レオニーであった。ノグチからレオニーへ送った最初の手紙には“‘I don’t need any English teacher—yes, I do! I want one who can correct my English composition. Can you take such a task? I suppose that you are able, with good English and literary ability. About three pages a week.¹²⁹’”というものであったが、実際はこれを遥かに上回る責任を受け持った。パトナムには、どれだけレオニーの編集力に依存しているかには触れず、“My American friend typewrites for me. Very convenient. She knows

http://en.wikipedia.org/wiki/Léonie_Gilmour 2012年11月12日参照。)では、1873年生まれでドゥスの本は間違いだという。

¹²³ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 10 April 1899. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 37

¹²⁴ From Yone Noguchi to Blanche Partington. August 1899. *Ibid.* no. 44

¹²⁵ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 9 September 1899. *Ibid.* no. 46

¹²⁶ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 21 September 1899. *Ibid.* no. 47

¹²⁷ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 16 (no month) 1899(?). *Ibid.* no. 49

¹²⁸ From Yone Noguchi to Charles W. Stoddard. 23 July 1901. *Ibid.* no. 88

¹²⁹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 4 February 1901. *Ibid.* no. 62

English grammar, you know.¹³⁰」と書いているが、レオニーは、ただ文法を知っているアメリカ人として原稿をタイプしただけではなく、小説そのものを一緒に作り上げたことは、後に紹介するノグチからの手紙から明らかである。

レオニー・ギルモアは、ニューヨークでアイルランド系移民の両親のもとに生まれた。彼女は幼少期に「エティカル・カルチャー・スクール」という名の、宗教や階級などを問わずに入学できる環境で様々な背景の子供たちと一緒に教育を受けた。大学は、奨学金を得て、名門のプリンマーカレッジでフランス語とフランス文学を専攻し、在学中にパリのソルボンヌ大学へ一年留学した経験も持つ。レオニーは当時としてはきわめて先駆的な教育を受けた優秀な女性であった。大学卒業後は希望していた編集関係の仕事に就けず、卒業三年目に教職に就き、フランス語とラテン語を教えていた頃、このノグチの出した新聞広告を見た。レオニーにとって、英語を直すという作業は本来求めていた編集作業とは程遠かったかもしれない。それでも、自身も執筆活動で忙しかったレオニーがこの仕事を引き受けたのは、編集という項目に惹かれたのではなく、追加で母親の手術費用を稼がなくてはいけなかった為だとドウス昌代は見ている¹³¹。

二人はまずノグチが書き溜めてきた詩の校正からとりかかった。ノグチはパットナムによって既に校正されていた詩も、レオニーに再度校正を依頼した。その後、小説の校正を始めた。執筆そのものが、レオニーとノグチの頻繁な手紙のやり取りと会談を通して二人三脚で行われていたのは、当時のノグチからレオニーのおびただしい数の手紙から推し測ることができる。レオニーからノグチへの返信はおそらく現存していないと思われるが、ノグチの手紙を見ればレオニーの積極的な対応が推測でき、ノグチが全面的かつ完全に彼女に依存していたと言ってよい状況が読み取れる。

Here are next three chapters. Say, listen, can't you fix them according to your own idea? I think that you would better make those horribly long paragraph more shorter. Say, cut them to very short stick. I think that better. Of course you cannot do so, some place. Anyhow I wish you will arrange them to your idea. And this is broken English, but it got to be literature, you know. Therefore I wish that you will take out some unnecessary words, and condense them nicely. Try it, please. I am in mood of writing, but somehow my mind is scattered, so cannot write really clever thing. So I ask you such a task to complete. This is not poor stuff, but it got to be more careful, but I can't do it. Please, try best you can. I think that you can fix it remarkably, since I gave you my specimen of broken English. I wouldn't say anything for what you shall do with it. This broken English is not refined so well, so you might change as much as please. O please, do it!

After I finish this business, I must do some other work. Are you busy? Don't you take my interest in this girlish stuff? Change it entirely. Somewhere it is so poor, I

¹³⁰ From Yone Noguchi to Frank Putnam. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 15

¹³¹ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社, 2003)p. 23

think, make it perfect.¹³²

詳細にわたって何をどのように直す、というノグチからの指示がなく、レオニーの一存で気づいたところを全て変えてほしい、というこの手紙が、二人が小説に取りかかり始めたごく初期に書かれた手紙である。書きたい気持ちはあっても賢いことが書けないからレオニーに依頼しているところにも、ノグチの依存度の高さが伺える。ノグチは、小説で使われる英語を“Broken English”で芸術的に仕上げたいと強調しているが、それはつまり、レオニーという英語母語話者が、ノグチの描いた日本少女が使うであろう“Broken English”を学んで仕上げたということになる。

この後も、文中に“Bully”という単語を使いたい、という特定の内容以外は¹³³、ノグチからレオニーへの明確な指示は一切なかった。次に引用するノグチの手紙の数々のうち、特に下線を引いた部分からは、いかにノグチがレオニーに任せ切っていたかが浮き彫りになる。(下線は引用者による)

I thought some while ago I will change the whole thing. But I don't think it is so bad. Leave the thing to your judgment. I send here another revision that will come next to what I sent yesterday. I am deadly tired. I cannot write correct and well. You will fix what you please.¹³⁴

If you see any sentence which has a bad sound and has no good expression you have not to hesitate to change as you please. I am afraid that I ask you too much, but I cannot help it.¹³⁵

Say, Leonie, cut short if you want! Change words if they don't fit properly. You have all the liberty to make those all right. Don't be afraid! Write soon how you do think.¹³⁶

また、次の手紙を見れば、ノグチは自身の英語にハンディキャップを感じていたのは明らかである。

Simply I am afraid my vocabulary isn't very fine, so you have liberty to make it beautiful as much as you want. You take interest in my work, don't you? Change the word or sentence if you want! Please, you do!¹³⁷

¹³² From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. April or May, 1901?. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 75

¹³³ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. April 1901? Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 79

¹³⁴ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. April 1901? *Ibid.* no. 78

¹³⁵ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. April 1901? *Ibid.* no. 79

¹³⁶ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 1901? *Ibid.* no. 80

¹³⁷ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. (no date) *Ibid.* no. 87

ノグチがレオニーに書く手紙ですら、ノグチの意図が通じているかどうか怪しいものであった。例えば、上記の手紙に出てくる、“my vocabulary isn’t very fine” という表現にしても、ボキャブラリーの数で十分でないのか、持っているボキャブラリーが洗練されていないのか明確でないが、漠然とボキャブラリーが良くないのだろうとは読み取れる。このようなレベルの英語の手紙を受け取り、手本になる“Broken English”を参考にしながら、レオニーはノグチの意図をくみ取り、最良と思われるものに仕上がるよう手を入れていたのである。このように英語のハンディキャップを抱えながらも、ノグチはこの小説が芸術であると信じ、ジャポニズムの全盛期に良い反応があるだろうと信じていたことは、“I wish to make a diary good and artistic in English.¹³⁸” や、“Diary! Diary! Charming, isn’t it? I think that it is very clever. After I came here I thought of the diary. I must keep up, and make some success. It has some literary art and originality, I think. …… I think that I need not to feel any ashamed doing such a writing, because it is art.¹³⁹” というレオニー宛の手紙からも読み取れる。

では、レオニーの手により編集され、ノグチが芸術と誇った小説はどのように受け取られたのであろうか。同小説の200ページ余りの原稿のうち、一部は1901年11月と12月の *Frank Leslie’s Popular Monthly* に“By Morning Glory”という著者名で掲載された。この雑誌の出版社がノグチに紹介した Frederick A. Stokes Company から *The American Diary of a Japanese Girl* が同じく“Morning Glory”の著者名で出版されたのは1902年9月であった。

この小説は最終的に約70もの書評が書かれたほど、話題を集めた小説であった¹⁴⁰。書評が出始めた頃は、誰が“Morning Glory”なのかということが話題の一つであった。初期の頃書かれたものは *Buffalo Express* が“an impossible feat for anyone with a drop of Western blood”と書いたように、日本人が書いたと信じられていたようである¹⁴¹。ところが、出版から一ヶ月経つと *Philadelphia Inquirer’s* が “[it] purports to be written by a Japanese Girl” と書き、*Milwaukee Wisconsin* も “[Morning Glory] expresses herself like a ‘Jap,’ and her observations are such as seem natural for one new to the concomitants of Occidental civilization ... yet there is a something ‘between the lines’ that seems to reveal the cunning work of one who is more American than Japanese” と推測した¹⁴²。また、*Des Moines Register-Leaders* からは、“if born in the land of the fuzzy flowers, has at least lived long and much in this country” と、深読みされたのである¹⁴³。この辺りはレオニーの編集に依るところが大きいであろう。

物語の筋書きがないというのも批評の一つで¹⁴⁴、おそらくこの小説が売れなかった大きな理由のひとつでもあるだろう。ノグチが、サンフランシスコでこの物語の初期段階の編集を手がけたブ

¹³⁸ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. April 1901?. *Ibid.* no. 79

¹³⁹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 1901?. *Ibid.* no. 70

¹⁴⁰ ドウス昌代『イサム・ノグチー宿命の越境者—』(上) (東京: 講談社, 2003) p. 57

¹⁴¹ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). p. 136

¹⁴² *Ibid.* p. 136

¹⁴³ *Ibid.* pp. 136-137

¹⁴⁴ *Ibid.* p. 139

ランチ・パーティントンへ、この小説は筋書きのないものだと主張していたことは先にふれたとおりだが、レオニーにも筋のある物語は大嫌いであると書いている¹⁴⁵。彼女らからノグチへの手紙は残されていないものの、彼女らが筋のある物語を書くように勧めたことが想像できる。読者となるアメリカ人を代弁するような意見を聞かず、ノグチは自身の信じるままに小説を書き進めた結果、とうとうアメリカ人の心を捉えることができなかった。筋書きのないノグチの小説というものは、例えば“Morning Glory”がアメリカに到着した“In Amerikey”と題する章の書き出しにもあらわれている。

“Good-Bye, Mr. Belgic!”

I delight in personifying everything as a gentleman.

What does it mean under the sun! Kitsune ni tsukamareta wa! Evil fox, I suppose, got hold of me. “Gentlemen, is this real Amerikey?” I exclaimed.

Oya, ma, my Meriken dream was a complete failure.

Did I ever fancy any sky-invading dragon of smoke in my own America?

The smoke stifled me.

Why did I lock up my perfume bottle in my trunk?

I hardly endured the smell from the wagons at the wharf. Their rattling noise thrust itself into my head. A quad of Chinamen there puffed incessantly the menacing smell of cigars.

Were I the mayor of San Francisco—how romantic “the Mayor, Miss Morning Glory” sounds! I would not pause a moment before erecting free bath-house around the wharf.¹⁴⁶

まとまった段落というものがなく、一行ごとに改行されており、ごくごく断片的な固有名詞と“Morning Glory”の頭の中に無意識に浮かぶ印象や想像が並べられている。“Belgic”はノグチが横浜で乗船し太平洋を横断した船の名前であるのは、その前章である“On the Ocean”に書かれているが、読者は初めの二行で“Morning Glory”がアメリカに到着したと理解を求められる。その後、唐突に「狐につかまれた」と続くが、これは「狐につままれた」の間違いであろう。だが、この表現が意味することの明確な説明がなく、日本語単語の持つエキゾティシズムが効果的に使われているとは言いがたい。その後、夢にみてきたアメリカの印象が崩れて落胆するが、次の瞬間には、突然サンフランシスコ市の市長として呼ばれたら、と思いを廻らせる。これでは、読み手は、彼女がどこに立ち、何を眺め、初めて外国に上陸する心境はどのようなものであったか、など何ひとつ掴めず、小説に入り込めないと読者は感じたことであろう。

¹⁴⁵ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. July 1901? Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 85

¹⁴⁶ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). p. 19

さらに、アメリカ人の持つ日本人の印象と違うものが描かれていたことにも批評が寄せられた。*New York Evening Sun* は “Morning Glory” への不満を書評にしたためている。(この書評の執筆者は、同書の作者はイラストレーターのエトウ・ゲンジロウだと勘違いしていたようである。)

It is hard to believe that a real Japanese girl’s conversation, when translated into English, is anything like that of Miss Morning Glory in “The American Diary of a Japanese Girl” by “Genjiro Yeto.” We have always understood that women’s Japanese—which, by the way, differs materially from the men’s talk, both in words and form of sentences, was poetic, charming and anything but grotesque.

“The Diary of a Japanese Girl,” however, has a little too much of the consciously grotesque and of smart effect to convince one that it is genuinely Oriental. “Genjiro Yeto” may possibly be Japanese, but there is a fair showing of the twentieth century Occidental hand in the diary, although the writer of it clearly knows something of Tokio ways.¹⁴⁷

“Morning Glory” の少女らしさに疑問を持ったところから、この小説の著者はアメリカ人ではないかとも疑っている、鋭い洞察である。また、*Town and Country* に書かれた “Morning Glory” に対する以下の書評は、批判の中でも厳しいものであろう。

Although the little Japanese girl here published in every attractive form the diary of her visit to the States, she gives us really very little insight into the impression made upon her by the extraordinary novelty which our customs must have been to her. This is probably because she is merely an unsophisticated little Japanese mousmi [*sic*], with a mind untrained to the analysis of emotion. These pages mainly contain the artless prattlings of an Oriental maiden interested more in her pretty self, her pretty clothes and pretty compliments, than in the vast differences between the East and West. There is a fullness, an ingenuousness in her confidences that is delightful, and as there is no plot and barely a suggestion of a love theme, the book is evidently genuine.¹⁴⁸

ここに紹介した2つの書評が指す、“Morning Glory” に落胆した文章というのは、例えば次のようなものが上げられるのではないだろうか。

7th –Dear Baby! Kawaii koto!
I hugged the baby of Mrs. Schuyler Jr. and kissed it.
Her husband is away in Japan for the tea business.
It was the darling baby, I thank the Gods, who received my first kiss.

¹⁴⁷ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). p. 136

¹⁴⁸ *Ibid.* p. 137

.....
 The Baby had blue eyes.
 My preference wasn't for blue eyes. I often snapped at them, saying that they
 were like a dead fish's eyes.
 But how long can I keep up my ill-will, when I look with delight upon the
 blueness in water, sky and mountain?
 Isn't it precious to see the blue pictures on china?
 A blue pencil is just the thing to mark on the margin of a pleasing book.
 Blue is a poetical hue.
 Robert Burns was blue-eyed.
 I recall the first American I met in Tokio, who seriously questioned whether
 it was a fact that Japs butcher a blue-eyed baby.
 Bakabakashii wa!
 Japan has no blue eye.
 And Japanese are worshippers of any sort of baby.¹⁴⁹

全体としてまとまった筋がなく、“Morning Glory”の独り言が書き留められている。明確な描写もなく、一つの出来事や思想を表現したいのでもなく、きわめて断片的である。“Morning Glory”は日本人女性が持つ女性らしさや幻想的で美しい印象を描写するのではなく、率直で批判的で独特の価値観を抱いている。無知な日本人少女の想像する内容だとすれば、書評で書かれているようにあまりにグロテスクで洗練されていない。このような発言をする“Morning Glory”のような女性がアメリカ人の目に魅力的に映るとノグチは思ったのであろうか。

エドワード・マークス (Edward Marx) によると、19世紀後半から、*The American Diary of a Japanese Girl* なども含む “Confessional diaries” というジャンルが人気であり、数ある中からノグチがどれを読んでいたかは不明であるが、このような作品群によってアメリカ人読者は既に鍛えられていたから、それらの作品が読者に “Morning Glory” の “mannerisms, her egoism and apparent lack of seriousness, and her snippy attacks on bourgeois culture” という辺りに目を向かせ、ノグチの小説は最終的に評判の悪い下位のジャンルに位置づけられたようである¹⁵⁰。*Pittsburgh Dispatch* は “The tone of the book is light to frivolity and the satire is light, even frothy” と論じ、*Chicago Record-Herald* には、“Pierre Loti and John Luther Long have given us portrayals of delicately feminine creatures whom by the way, Miss Morning Glory ridicules. But candidly we prefer their fiction to her truth, if truth it be. She is funny sometimes and lively, but unmaidenly, in our sense of the word, and she betrays a curious familiarity with the alleys of life.” と論じられた¹⁵¹。このような反響を呼ぶとは思ってもせず、ノグチは、既にアメリカ人の読者を引きつけていたピエー

¹⁴⁹ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). pp. 51-52

¹⁵⁰ *Ibid.* p. 139

¹⁵¹ *Ibid.* p. 139

ル・ロティ(Pierre Loti:1850-1923)の *Madame Chrysanthème* やジョン・ルサー・ロング(John Luther Long:1861-1927)の *Madama Butterfly* をノグチの小説の中で次のように皮肉っているのは、羽田も指摘しているとおりである¹⁵²。

“Madame Butterfly” lay by me, appealing to be read.

“No, iya, I will never open! I erred in buying you,” I said.

I dislike that “Madame.” It sounds indecent ever since the “gentleman” Loti spoiled it with his “Madame Chrysanthème.”

The honourable author of “Madame Butterfly” is Mr. Wrong. (Do you know that Japanese have no boundary between L and R?) Undoubtedly, he is qualified to be a Wrong.

Authorship is nothing at all, nowadays, since authors are thick as Chinese laundries. Well still, it can be honourable, if it is honourable.

Japanese fiction penned by the tojin!

It is a completely sad affair. I wonder why the author (God Bless him) didn’t fit himself for brooming the streets instead of scrawling.

.....

Your Oriental novel, let me be courageous enough to say, is a farce at its best.

Oh, just wait, my sweet Americans! A genuine one will soon be offered to you by Morning Glory.¹⁵³

ここまで意気込んで小説を出したノグチだが、羽田は、アメリカの大衆が望む日本と、ノグチが小説を通して伝えたかった日本には「かなりの温度差」があったのでは、と指摘する¹⁵⁴。ノグチが芸術と誇った小説は、*Oriental* という情緒を多少は醸し出したようだが、芸術とは評されなかった。“Morning Glory”の正体については、最終的に、小説が出版された1902年の12月号 *National Magazine* で、同誌の編集者を務めていた、ノグチの友人であるフランク・パットナムが “Is This Another of Noguchi’s Pranks?” という記事で著者はノグチだと仮説した¹⁵⁵。

このような数々の書評からもわかるとおり、同小説は Frederick A. Stokes Company が期待したほどの売れ行きが出ず、発行から二ヶ月経った頃には、同社が出版すると承諾していた続篇 *The Letters of a Japanese Parlor Maid* の原稿は返却された。Frederick A. Stokes Company が手がけたジャポニズム関連の小説で、例えば *My Japanese Wife: A Japanese Idyl* は、1901年の第一版で六万部も売れ、翌年、ノグチの *The American Diary of a Japanese Girl* が出版される数ヶ月前

¹⁵² 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京:彩流社, 2005) p. 236

¹⁵³ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). pp. 119-120

¹⁵⁴ 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京:彩流社, 2005) p. 235

¹⁵⁵ Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). p. 141

の四月には改訂版が出されたほどの売れ行きであった¹⁵⁶。ノグチの小説が何部発行されたかは不明であるが、六万部も売れたジャポニズム小説の出版を手がけていた出版社としては、期待外れと思わせる部数しか売れなかったということだろう¹⁵⁷。書店によっては、内容を確認せずに注文し、中身を知ってから異議を唱え、在庫を返却してくるところもあったという。この状況を知ったジレット・バージェスは、彼自身がエイジェントとして、McLane や Doubleday, Page & Co. などの出版社に勤務する知り合いに掛け合うと申し出たり¹⁵⁸、パットナムも McClure か Harper に勤める知り合いに打診すると申し出ているが¹⁵⁹、結局どれも上手くいかなかったようである¹⁶⁰。続編の *The American Letters of a Japanese Parlor Maid* は、結局アメリカでは出版できず、ノグチは帰国時に持ち帰り、1905年に富山房から出版した。

だが、本小説は、ジャポニズム全盛期において、70もの書評が執筆される程の話題性を持ったという観点からは、成功だったと言えるだろう。

¹⁵⁶ Holland, Clive. *My Japanese Wife: A Japanese Idyl*. (New York: Frederick A. Stokes Company, 1902). Introduction

¹⁵⁷ 堀まどかは、ノグチの *The American Diary of a Japanese Girl* の売れ行きについて、「4版を売りつくすほどの好評だったという」(堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012). p. 67)と書いているが、出典がない。だが、ノグチとレオニーの手紙のやり取りや、ノグチと出版社の手紙のやり取りからは、4版まで刷ったことや好評であったことの記録はなく、また Edward Marx による Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007). にも、同様の記載はない。

¹⁵⁸ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 19 April 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 185

¹⁵⁹ From Frank Putnam to Yone Noguchi. 15 May 1903. *Ibid.* no. 193

¹⁶⁰ McClure からは断りの手紙も残っている。From McClure Phillips & Co. to Yone Noguchi. 9 June 1903. *Ibid.* no. 206

第2章：ヨネ・ノグチとイギリス

ヨネ・ノグチは *The American Diary of a Japanese Girl* を刊行した二ヶ月後には、ニューヨークからイギリスのロンドンへ渡り、1903年1月、*From the Eastern Sea* と題する英詩集を自費出版した。そして、ロンドンの作家、評論家たちに郵送したのである。その結果、ノグチはアメリカで刊行したどの作品よりも多数の反応を受け、ノグチの名前は広まり、現在も英文学史に名を刻むような人物たちとの交流をもつに至った。本章では、19世紀に著名な作家や英文評論家たちの多くが健在であったという時代背景や、1902年の日英同盟という社会背景、さらに初めて英語で詩を書いた日本人という要素を踏まえ、ノグチの詩集に集まった注目の意味を再検証する。

2.1 自費出版した詩集と1900年のイギリス文学

ヨネ・ノグチがロンドンに渡った目的は二つあったと考えられる。一つは詩集の出版であり、もう一つは、*The American Diary of a Japanese Girl* のロンドン版の出版であった。だが、ロンドン到着後、アメリカ社会との違いに戸惑い¹、また、アメリカからの小説の売れ行きなどを手紙で知ること、小説出版はあきらめ、詩集の出版に集中したようである。

ノグチは、ロンドンに到着後、それまで書き溜め、フランク・パットナムやレオニー・ギルモアが手を入れた数々の詩を手し、ロンドンの出版社を訪ね歩いた。だが彼の詩の出版を引き受ける出版社は見つからなかった。ロンドンに六ヶ月滞在する予定でいたノグチは、そのままでは滞在期間内に出版にたどり着けないと判断し、クリスマスの時期にパリへ見物に行くために取っておいた資金で、詩集 *From the Eastern Sea* の出版に踏み切った。

From the Eastern Sea は、八篇の詩から成り立つ、わずか16ページの薄い詩集で、ノグチはパットナムへの手紙で、本と書いた後に (pamphlet) とカッコ書きを付け足したほど²、本と呼ぶには小さなものだったようである。表紙には、一目見て日本人の作品であるということを明確にするため、YONE NOGUCHI (JAPANESE) と記載した。自費出版された *From the Eastern Sea* が現存しているかどうかは不明だが、その詩集の批評が書かれた手紙や文芸雑誌記事から、“The Myoto” “The Apparition” “O Hana san” “Dedication to the Spirit of Fuji Mountain” などの詩が含まれていると推測できる。前章でふれたように、ノグチはニューヨークに渡った頃から、日本文化を題材にした詩を書き始めており、これらのタイトルからも日本らしさを特徴の一つにしたことが表れている。

ノグチはロンドンに到着した直後から、滞在費を抑えるため、ホテルではなくロンドンで画家を志していた日本人、牧野義雄の下宿先に部屋を借りて移っていた。牧野とは、サンフランシスコ時代に知り合ったのだった。印刷されてきた詩集を一緒に取りに行った牧野は、半生を綴った自伝

¹ From Yone Noguchi to Frank Putnam. 14 December 1902. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 29

² From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Ibid.* no. 31

A Japanese Artist in London に、その時の様子を次のように書いている。「とても寒い夜で、手がかじかんで感覚がなくなっていた。すっかり凍りついた歩道は滑りやすく、私のぼろぼろの靴ではひどく歩きにくかった。ヨネは私に、もう一度印刷し直す金はないんだから、本を泥の中にぶちまけないようにしてくれよ、といった。³」やっと捻出した印刷代だったことがわかる。ノグチは印刷所から持って帰った200部のうち、約50部あまりをロンドンやその近郊在住の作家や評論家、詩人たちに送ったところ、多くの反響を得た。数々の書評が文学雑誌に掲載され、ノグチは個人的に多くのイギリス人評論家や詩人、作家から好評の手紙を受け取ったのである。

それらからノグチが個人的に交流を深めた人物たちの中には、現在でもイギリス文学史に揺るぎない名前を刻むようなウィリアム・マイケル・ロセッティ、アーサー・シモンズ、アーサー・ランサム、ロバート・ブリッジズなどがいた。そして、自費出版から約二ヶ月後の1903年3月には、第二版がユニコーン・プレスという出版社から刊行されたほど、ノグチの詩集は大きな注目を集めたのである。本節では、まず、この詩集が20世紀初頭のイギリス文学という文脈の中で、どのような反響を得たのか、また何故そこまで大きな反響を得たのかを見てみたい。

ノグチの詩集への反応の一つに、ノグチはジョン・キーツ (John Keats: 1795-1821) や、ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth: 1770-1850) の詩を読んでいるだろう⁴、と書かれたものがあった。ノグチの詩から、それらイギリスのロマン主義の詩人を思い起こさせる要素を感じ取ったのであろう。ノグチは、イギリス人の詩と言え、確かにキーツやワーズワースの詩を好んで読んでおり、シェリーやバイロンなどの詩も好んでいた。イギリスに憧れを抱いて好んでいたのはロマン主義の詩人たちの作品だったようである。ノグチが憧れていたこれら18世紀末から19世紀前半のロマン主義を象徴する詩人たちの後、ヴィクトリア朝の詩人たちがいたが、独学で英米文学に関する知識を得、自らの詩を模索していたノグチには、ヴィクトリア朝の詩人を詳しく学ぶ機会がなかった可能性が考えられる。さらに、ノグチの渡英した1902年から1903年は、ヴィクトリア朝から次のモダニズムへの移り変わりの時期であった。ヴィクトリア朝のイギリスでは科学や文明が発達し、産業革命と植民地支配で発展し、帝国として栄えたのである。栄えたイギリスは、「英国中心のとも言うべきものの考え方⁵」に支配された。このように物質に走り、排他的であった一方、19世紀末には“Art for art’s sake” (耽美主義) という考え方もあり、この時代の抱える不安を詠った詩人としてコルリッジ (Samuel Taylor Coleridge: 1772-1834) やトーマス・ハーディ (Thomas Hardy: 1840-1928) らが代表として挙げられる。だが、ノグチが渡英するまでに、これらの詩人たちの詩を読んだという記録はない。一方、ヴィクトリア朝には、ロマン主義の影響が見られるものの、それほど強くなく、自信がなく、時代遅れと見られがちであった。にもかかわらず、ロマン主義を引き継ぐ詩人としては、ロマン主義の詩人シェリーを見本にしていたテニソン (Alfred Tennyson:

³ 牧野義男著、恒松郁夫訳『霧のロンドン —日本人画家滞英記—』(東京:雄山閣, 2007) p. 62

⁴ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 19 “The Outlook’s”

⁵ 吉田健一『英国の近代文学』(東京:筑摩書房, 1974) p. 260

1809-1892)やブラウニング (Robert Browning: 1812-1889)がおり、ノグチの手紙や自伝からは、ブラウニングやテニソンを好んで読んでおり、ニューヨークではテニソンの詩 “The Lotos-eaters” を意識して自作した詩も作っていた記録はあるが⁶、渡英前に特に当時のイギリス文学界の主流詩人たちの詩を勉強していた記録はない。このような背景があつての、モダニズムへの移行期ともいえる1903年であつた。英文学者の斎藤勇は、1910年頃までは、19世紀のヴィクトリア朝に名前を挙げたハーディ、ブリッジズ (Robert Bridges: 1844-1930)、ハウスマン (Laurence Housman: 1865-1959) が創作を続けていたが、彼ら全員が60歳以上であることを挙げ、若者たちは彼らの活躍の場が到来したと感じたであろうと書かれている⁷。ノートン・アンソロジーでは、モダニズムとも言うべき20世紀は1890年代から始まったと書いている⁸。いつまでがヴィクトリア朝で、いつからがモダニズムなのかは統一された見解はないようである。ノグチはこのようなイギリス社会の時代の変化には全くといっていいほど無頓着で、アメリカで作った詩を携えてきたのである。

それにもかかわらず、ノグチの詩が大きな反響を得たのには、一つには当時を代表する評論家ウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti: 1829-1919) の影響力が大きいだろう。ロセッティは、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti: 1828-1882) の弟で、アメリカ詩人ホイットマンの代表作である詩集 *Leaves of Grass* をイギリスでいち早く認めた人物であつた。ホイットマンの同詩集を手に入れ、“Walt Whitman’s Poems” と題する論文を発表して、彼の詩を “incomparably the largest poetic work of our period” と論じ *Poems by Walt Whitman* という、イギリスの文学界にホイットマンの名前と意義を広く知らせた選集を刊行したのである⁹。亀井俊介は、ロセッティがホイットマンをここまで称讃した理由として、ホイットマンより前の時代のアメリカ人詩人たちはイギリス派文学 (British School) に吸収されてしまったが、ホイットマンは『独創性』を持つ、純粋なアメリカ派であつた点をあげている¹⁰。つまり、ノグチの詩が認められた背景には、ノグチの詩は当時のイギリス文学界の流れには沿っていないものであつたが、ノグチの「独創性」のあらわれとも言える詩が、ロセッティというホイットマンを認めた人物によって発掘されたということが、一つの大きな出来事だつたように思われる。ロセッティはノグチに次のように書いている。

You will hardly need to be informed that your poems do not read exactly as if they had been written by an Englishman: indeed, in my opinion, they ought not to do so—they ought to evince their eastern origin. Occasionally there is a phrase which is not English; and oftener a very bold use of epithets, such as “Velvet-footed moonbeams”—but this one can allow for, as a daring transfer of one impression of sense into a different but

⁶ From Yone Noguchi to Frank Putnam. 11 January 1901. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 9

⁷ 斎藤勇『イギリス文学史』(東京:研究社, 1980) p. 571

⁸ M.H. Abrams, general ed. *Norton Anthology of English Literature seventh edition*, vol.2. (New York and London: W.W.Norton & Company, Inc., 2000) p. 1897

⁹ 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京:研究社, 1970) p. 146

¹⁰ 同上 p. 148

このロセッティの文章にはっきりと書かれているように、ノグチの詩は、イギリスの時代の風潮や文脈の中とは全く別の次元の、ユニークな作品という位置づけで取り扱われ、評価されたのであった。

ロセッティが英語を修得中の日本出身の若者を受入れ、かつ激励しようとしたことは、ノグチの送って来た16ページの詩集に手直しを加えてノグチに返送したり、文芸雑誌に掲載されたノグチの詩集の書評を頻繁にノグチに郵送したり、ノグチを自宅に招待したことも表れている¹²。また、ロセッティ宅へ招待された出来事については、ノグチはパットナム宛への六ページにも亘る長い手紙に詳細に書いている¹³。それには、ロセッティ宅でノグチは、書齋へ招かれノグチの詩について語り合い、君は詩人だと言われ、ノグチの詩について議論し、ロマン主義の詩人シェリーが息を引き取ったと言われる椅子に腰掛け、スウィンバーンやワッツ・ダントンに紹介したいと言われたなど、詩人として認められた数々のエピソードが描写されている。さらに、日本画家である広重の東海道五十三次の絵が一面に飾られているロセッティの娘の部屋へ案内され、日本画についての豊富な知識に驚愕させられたことも、ノグチを改めて日本に立ち返らせたのだった。

このように、ホイットマンを称讃したロセッティが当時健在で、ノグチをも認めたことが、ノグチがイギリスで認知される過程で重要だったのである。

2.2 日英同盟と詩集の評価

では、ロセッティ以外のイギリス人は何故そこまでヨネ・ノグチの詩に反応したのだろうか。ノグチに寄せられた手紙や、文芸雑誌、新聞に掲載された書評に目を通せば、ヨネ・ノグチという日本人が彼らの言語である英語で詩を書いたということ、ノグチがそれを試みた初めての日本人であったこと、そしてその試みは日英同盟の締結された翌年である1903年であったということなどが、彼らがノグチの詩に反応した要素として浮かび上がってくる。当時のイギリスにとって日本は、自国から人材を送り出してその近代化を手伝った国であり、留学生を受け入れ、その近代化された国の知識や技術を伝授する国、というのが一般的な位置づけではなかったか。そこに、教えられるのではなく、自分が書いたもので勝負しようとした日本の青年が現れたのであるから、イギリス側の注意を惹くのは当然であった。また、日英同盟は、西洋とアジアの国の中で初めて締結された同盟であった。ノグチが日英同盟を意識していた記録は見当たらない。だが、日英同盟という歴史的な大イベントは、ノグチのこの試みをさらに注目させる一役を買ったといえる。

¹¹ From William M. Rossetti to Yone Noguchi. 17 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 130

¹² さらに、亀井俊介から、ロセッティの家は一種のサロンのようであり、若い文学者たちを自宅に招いては彼らの文学の発表の場を作って彼らを激励し、彼らの能力をも発掘するような機能を果たしていたと口頭で伺った。このロセッティ家にノグチが招かれたことも、一つの大きな出来事と言える。

¹³ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 31

では、このような時代背景の中でノグチの詩には、具体的にはどのような評価が寄せられ、どのような点がイギリス人にとって印象的であったのか。まず、反応の全貌である。先にふれたように、ノグチは約200部印刷したうち、約50部をイギリスの評論家や作家、詩人たちへ郵送した。その反応として彼が個人的に受け取った手紙は30通ほどが書簡集に含まれている。そのうちの四分の一ほどは、一、二行にまとめられた事務的とも言える謝辞に過ぎない。次の四分の一はきわめて無難な称讃で、特に特定の詩や表現に対する評価もないが、大変に丁寧に謝辞が書かれているものや、東洋出身という要素にふれずに称讃しているものである。例えば次のようなものである。

I have read and reread them with the keenest pleasur; in fact, my pleasure is greater at each perusal. You will allow me to say that your power as an impressionist painter is very remarkable, boldness, accuracy and delicacy being equally evident in all your descriptions---not a common combination of excellence. ¹⁴

残りの半分は、ノグチの詩に表れている東洋的な面、また英語というノグチにとっての外国語を修得し詩を書いていることへの称讃や反応であった。文芸雑誌に書かれた書評は、*From the Eastern Sea* が1903年10月に日本の富山房から再版された際に付録として収められているものだけで19篇あるが、その殆どが、手紙の半分を占めた内容と同じく、ノグチの詩の東洋的な面や英語に関するコメントだったのである。それは肯定的なものから否定的なもの、具体的にノグチの詩が分析されているものや、全体の雰囲気や語ったものなどさまざまであったが、これだけ多くのイギリス人がノグチの英詩を読み反応したという表れでもあった。

個人的に受けた手紙の約半分の反応には、ノグチが英語を修得したことを称讃し、ノグチの独特の英語の使い方故に、ノグチの詩がオリエンタル風、又は日本風だと解釈されたと受け取れるものがあつた。また、その独特の英語の使い方を、西洋的ではない、むしろ西洋人に新しい、と表現した者もいた。次に紹介する幾つかの手紙や書評には、それらが表れている。

I congratulate you upon your familiarity with our language. Your work seems to me to be full of fine Oriental imagining.¹⁵

And you open so strange and new a world of thought and expression to us of the West (not the Wild West but the tame West!).¹⁶

Of course, the metre of your blank verse is unfamiliar to the British eye, but I am sufficiently acquainted with the beautiful poetry of Japan to be able to appreciate your stanzas, and I sincerely admire the many exquisite ideas embodied therein. Your poems

¹⁴ From W.L.Coller to Yone Noguchi. 8 April 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 182

¹⁵ From Austin Robson to Yone Noguchi. 30 January 1903. *Ibid.* no. 113

¹⁶ From Iza Duffus Hardy to Yone Noguchi. 14 January 1903. *Ibid.* no. 133

are pervaded with the true Japanese love of nature.¹⁷

Many, many thanks for the beautiful poems. I am astounded at your great command of our language.¹⁸

You are, I suppose, the first of your countrymen to write poems in the English, and I find in them all the very genuine poetical feeling of a kind rather new in our literature, and in one or two a real felicity of expression, especially that one which is printed on the outside page at the end.¹⁹

It has an atmosphere of beauty and suggestion which is peculiar to itself and unlike anything we have already. It is astonishing that you can use English with such mastery.²⁰

He is a young Oriental with his own way of looking at the world, so different from our Western way, and at the same time with a practically untried language at his command. For his use of English has all the daring which a man born to the tongue could never attain; and often, it must be admitted. This courage leads to startling felicity of metaphor or phrase. Mr. Noguchi feels none of the restraints of traditional usage in English diction. Sometimes, of necessity, this quality verges on the grotesque quite as often, however, it approaches the strange mysteriousness of beauty.²¹

The English is very Eastern English, the verse is no more than rhythmical prose, but there is genuine poetic feeling struggling through, and occasionally, for a few lines together, expressing itself in a new, personal way, which seems to bring some actual message or fragrance to us from the East. ... Mr. Noguchi is perhaps trying to render what can never be rendered, even with the best aid of words; but his brave attempt, in a language not his own, is full of interest.²²

これらは、日本人が外国語である英語で詩を書くということのハードルの高さに共感し、その具体的な出来映えよりも、その試みに高い敬意を表したと見てよいだろう。ノグチによる独特の表現をもハンディキャップと見るのではなく、好意的である。

また、次に引用するように、ノグチの英語がまだ修得途中であることを指摘したものもあった。だが、ノグチの詩的な部分を認識し、英語さえ修得すればさらに表現できるようになる、という、激励の意味が込められたものであったと受け取ることもできる。

¹⁷ From Arthur Diosy to Yone Noguchi. 18 January 1903. *Ibid.* no. 136

¹⁸ From Charlie Hormes to Yone Noguchi. 22 January 1903. *Ibid.* no. 149

¹⁹ From Sidney Colvin to Yone Noguchi. 24 January 1903. *Ibid.* no. 150

²⁰ From Laurence Binyon to Yone Noguchi. January 1903? *Ibid.* no. 151

²¹ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 5-6 “Reader” New York

²² *Ibid.* p. 7 “The Saturday Review”

It seems to me to contain genuine poetry, but you have not yet mastered English verse. I think you should try to do so, because you have something to say worth saying.²³

If Mr. Noguchi can learn the technique of English verse as well as he has learned to write the English language, he will certainly not be without something to say or sing.²⁴

反対に、これまで紹介した共感や励ましとは違って、ノグチが外国語を修得して詩で表現したという事実を、きわめて冷静に、淡泊な言葉でまとめて評価した次のようなものもあった。

It seems you have not wasted your time in this country in so far as a mastery of the English language is concerned.²⁵

If the adoption of Western civilization by Japan has in many, or any, more cases than the present effect of making a Japanese poet write in English, Europe can only have the greater occasion for congratulation.²⁶

ノグチが受け取った手紙の中には、詩集に書かれているノグチの英語は、誰の手も加えられていないものなのだろうとのコメントもあった。パットナムやレオニーがノグチの詩に手を入れていたということは公になっていなかったのである。これには、ノグチの英語が非母語話者のものとしては良くできすぎているという暗示も込められているかも知れない。

We are not told that any European or American poet has had a hand in the Englishing of the verses, we must assume that both their Japanese content and English diction are of Mr. Yone Noguchi's own production.²⁷

以下に引用するように、中にはノグチの詩が日本語の詩から翻訳したものかと疑問を持ったイギリス人もいた。

At all events your work leaves me full of interrogations—why is it in just that form,

²³ From Arthur Symons to Yone Noguchi. no date. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 129

²⁴ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 7 “The Saturday Review”

²⁵ From W.S. Arton to Yone Noguchi. 17 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 135

²⁶ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 10 “The Scotsman”

²⁷ *Ibid.* pp. 14-15 “The Outlook’s”

which cadence no doubt, but without metre or rhyme? Is it a translation from poems of your own in Japanese? Is it the work of a quite young writer? Is it intentionally a little unEnglish in some of its phrases?²⁸

同じく、ノグチの詩が日本語詩からの翻訳と映ったという次の反応は、きわめて興味深い。

Your knowledge of English is quite remarkable, but it is not perfect, and your metres are not known in English verse. Your work, if I may say so, produces the effect of a translation from some foreign language; and is indeed (I presume) translated from Japanese poems existing, if not on paper, at any rate in your mind.²⁹

頭の中で翻訳しながら外国語を話したり理解したりするのは、語学を学ぶ上で初期段階に起こる現象である。外国語が身に付いてくれば、頭の中で翻訳するという課程は自然となくなり、修得した言語で考えて話し、理解するようになる。ノグチがこの時、実際にどの程度、英語が流暢であったかを確認する記録は手紙以外に残っていないが、この手紙の差出人は、ノグチの詩からは英語が完全に彼のものになっているという姿が浮かんでこなかったということになる。

また、ある書評では、次のノグチの詩に使われていた“eye-shrines”や“silken faith”は日本語から文字通り直訳したものであろうと断言している。

And the woman worshipped her own God.
In the eye-shrines of the man,
And compared her silken faith
With that of his sea-like bosom of profundity.
The patience and valour of the man
Were those of the old mountain under an autumn moon
The love and mellowness of the woman
Were those of grapes with purple grace.³⁰

詩というジャンルでは、時にきわめて大胆に形容詞が使われたり、単語が繋げられたり、比喩が使われたりし、それらの使用例には日常の言語の使い方を越えた例外も多いはずである。だが例外が、自然に豊かなイメージを醸し出す表現もあれば、いくら詩であるとはいえ不自然な響きを持つ表現もあり、ノグチが詩で使った表現は後者であったのだろう。“Eye-shrines”や“silken faith”が、そこまで異国情緒溢れる響きがあったということになる。ノグチは、英語で詩的な響きを持つよ

²⁸ From Laurence Housmand to Yone Noguchi. 14 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 131

²⁹ From William Arthur to Yone Noguchi. 18 January 1903. *Ibid.* no. 146

³⁰ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 16 “The Outlook’s”

うにと意識しながら詩作したのであろうが、イギリス人やアメリカ人と同じレベルの言語感覚を身につけていなかったというあらわれであり、この詩はきわめて感覚的なことによっても、ノグチの英詩がイギリス人にとって日本的と映った例といえる。

他にも、翻訳とまで言われなかったものの、ノグチの表現の中には、彼らの感性にとってはきわめて新しい響きを持つと反応を得たものもあった。次の三つは、*The Daily Chronicle*, *The Daily News*, *The Scotsman* それぞれから引用している例である。

(*The Daily Chronicle*)

The poet tells in English of things very strange to the English mind. —

What a bird

Dream in the moonlight is my dream:

What a rose sings is my song.³¹

(*The Daily News*)

Now and again we are startled by some subtle conceit that is quite new to the Western mind:

After all the winds ceased their voice song,

Singing on in voicelessness.³²

(*The Scotsman*)

“red-lipped tranquility in the face of the Summerland”-- phrases hard to understand but making point after point of the impression of beauty.³³

このようなノグチの詩集は一種のオリエンタル・メソードのブームをも起こし、ノグチの詩のスタイルを真似たと称する詩を幾つか掲載した雑誌まで登場した。そこには、次のようなものが書かれた。

To the Sleeping Beauty of Devonshire.

By Load R-s-b-ry

The deafness of my Beloved is the deafness of the Sea.

Her peach-blossom lips are parted,

Her chin droops like a nocturnal petal

On the indolence of her heaving bosom.

³¹ “Opinion” *Ibid.* p. 8 “The Daily Chronicle”

³² “Opinion” *Ibid.* p. 11 “The Daily News”

³³ “Opinion” *Ibid.* p. 10 “The Scotsman”

My song is wasted on her; my
Song is no more to her than
A rivulet trickling from the unresponsive dome
Which is the back of a duck.

O Yohi

By Mr. Arth-r B-lf-r

My soul was a fairy-lantern with
The tallow sagging just anyhow,
Till you came back, my O Yohi,
Till you came back from the bottomless
Breezes of Ocean's commanding silence.

(後略)³⁴

彼らなりに、ノグチの詩を真似ているのである。これは、ノグチを笑いものにしていても受け取れるが、一方ではノグチの詩は、ここまで反応させるほどイギリス人の目には強烈に映ったという証拠となる。“O Yohi” というのは、日本語を知らないものにとっては日本語の単語のように映るかもしれない。これらの詩の作者は、ノグチの詩に見られる“O Hana” “O Haru” “O Cho” などから、「お」を人の名前の前につけて呼んでいるところまで分析し、再現を試みている。ノグチの作品を読んだイギリス人は、表面的に目を通したのではなく、ここまで深く読み込んでいたのである。さらに、雑誌 *Morning Leader* は、この試みに反応し、“The parody as to form was excellent, but the utter failure to catch anything of the spirit of the young Japanese writer is the best proof of his originality.”³⁵” としている。ノグチの詩の「独創性」が認識されていたという証拠であろう。

日英同盟に関して言えば、ノグチからパットナムの手紙に書かれている、*Outlook's* の “A Friendly and Allied Poet!”³⁶” というタイトルの三ページに亘る記事とは、おそらく次の記事だろう。この *Outlook's* の記事は、日英同盟をイギリスと日本の結婚に例え、結婚後にますます仲睦まじくする夫婦は稀であるが、日本はこの度詩人を送ってくれた、と始まる。ノグチの詩の中から、“The Apparition” を褒め称えたり、“The Myoto” の英語らしくない表現など批判するが、長い記事は次のようにまとめられている。

But when all has been said, we are grateful to Japan for sending us Mr. Noguchi, and to Mr. Noguchi for publishing his brown paper book. And we promise both of them that if ever we be tempted to return their complement by writing and printing a few little things in Japanese we will make a hundred howlers to Mr. Noguchi's one.³⁷

³⁴ “Opinion” *Ibid.* pp. 21-22 “Either Punch or London Charivari”

³⁵ “Opinion” *Ibid.* p.24 “Morning Leader”

³⁶ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 31

³⁷ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected*

この文芸雑誌が時代性をうまく利用し、日本が国を挙げて一人の詩人をイギリスに送り込んだと書いてしまうほどに、ノグチはまるで日本の代表と受け取られても違和感のない時代に詩集を出したのである。また、エディス・グード (Edith Goode) は、そのノグチへの手紙で、“In England people are generally indifferent to poetry. It is a very rare thing for a poet to get much practical encouragement.”³⁸ と書いているが、これはイギリス人でも驚くほどにノグチの詩集が話題を呼んだということの裏付けとなる。

具体的な詩に対する評価もいくつかあった。最も反応を集めたのは、次に紹介する “The Myoto” で、賛否両論あった。まず、その詩を紹介しよう。

The Myoto

The woman whispered in the voice that roses have lost:
‘My love!’
The man said, ‘Yes, dear!’
In the voice that seas cannot utter.

The woman whispered in the voice of velvet-footed moonbeams:
‘My love!’
The man said, ‘Yes, dear!’
In the voice that mountains keep in bosom.

The woman whispered in the voice of eve calling the stars to appear:
‘My love!’
The man said, ‘Yes, dear!’
In the voice of dawn for Spring and Life.

The woman whispered in the voice of a young summer rivulet:
‘My love!’
The man said, ‘Yes, dear!’
In the voice of forests unto the sky.

* ‘Myoto’ is Japanese for ‘couple’ in English.³⁹

ウィリアム・ロッセティは、“‘The Myoto’ is truly a beautiful little piece, marked by feeling equally simple and deep” と褒め称え、*T・P・Weekly* などにノグチの詩を紹介する場合はこの詩が良いだ

English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 18 “The Outlook’s”

³⁸ From Edith Goode to Yone Noguchi. 22 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters.* (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 141

³⁹ Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays.* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 16

ろうとノグチに書き送っている⁴⁰。だが、批判もあった。この詩の中で議論の焦点となったのは、“Yes, dear!” という表現の使われた状況であった。次に紹介する二つの批判は、この “Yes, dear!” の使い方に、ノグチが英語を修得し切っていないという点が明確に表れているという。まず、*The Daily News* は、次のように力説している。

Though certainly Mr. Noguchi has a remarkable feeling for the English language, it is not unerring. It is hardly conceivable that an English man would have used the words “my love!” and “Yes dear!” as in the following stanza, and repeated them with cumulative emphasis in three succeeding stanzas:

The woman whispered in the voice that roses have lost.
“My love!”
The man said, “Yes, dear!”
In the voice that seas cannot utter.

The whole poem is grotesque, simply because the author does not feel that “Yes, dear!” is, in English, ridiculous. But there is nothing seriously at fault with the idea, had the expression been adequate. This is one example of several lapses, which result in bathos, and doubtless occur because Mr. Noguchi is not an Englishman.⁴¹

また、*The Outlook's* には、次のような批評が掲載されている。

Here and there Mr. Noguchi comes heavily to earth through an insufficient acquaintance with our colloquialisms. A foreign-born poet who knows the King's English but not the English of vernacular of the hour is in as parlous a case as a home-born poet who lacks the sense of humour. ... And this is the sole reason why Mr. Noguchi's “Myoto” (Myoto is Japanese for “couple”) despite its fine conception and many beauties will not do. ... Either Mr. Charles Warren Stoddard, or someone else, should have told Mr. Noguchi that his “Yes, dear!” has become an expression heard nine times out of ten from the empty shells of dead affections.⁴²

上記した二つの書評は、“Yes, dear!” とは、ノグチの描写するようなロマンチック場面で使われる言葉ではないと、指摘しているのだ。この “Yes, dear!” の使用される場面については、アメリカ人とイギリス人のそれぞれ何人かずつに聞いたが、この表現は殆どの場合が極めて日常的な状況

⁴⁰ Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 31

⁴¹ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 12 “The Daily News.”

⁴² “Opinion” *Ibid.* pp. 17-19 “The Outlook's”

で「わかった」と反応する際に使われ、特に長年連れ添った夫婦間で常に何か頼み事をする妻に対して夫が“yes, dear”と反応する際など、「又か」と半ばうんざりした気分が込められている場合が典型的なようである。つまり、この表現の持つイメージは、中立的な雰囲気飛び越して、ロマンティックと正反対のイメージを与えやすい言葉であるが故に、*The Daily News* は“Ridiculous”に聞こえると論じたと受け取れる。これら二つの批判が目にしたのは、先にふれたようなイギリス人には不自然と思われる単語の組み合わせに表れるオリエンタル、日本らしさ、西洋人は書かないなどという批評とは違い、単語の組み合わせとしては紛れも無い英語であるにも関わらず、それが使われた場面だったのである。*The Outlook's* にはストッダードの名前が上げられ、何故彼がノグチにニュアンスの違いを説明しなかったかと書いているが、矛先がストッダードに向けられたのは、*From the Eastern Sea* がストッダードに捧げられていることに加え、“To Charles Warren Stoddard” という詩が含まれているからであろう。実際は、これまで見て来たように、フランク・パットナムかレオニー・ギルモアがこれらのノグチの詩の手直しをしたであろうが、彼らも文法的に極端に間違えているもの以外は口を出さず、“My dear!” の使い方のように、英語母語話者であれば使わないような言葉の使い方に関しては、逆にノグチのユニークさの表れと、敢えて手をつけずにいたのではないか。このような表現が、ロセッティには「独創性」のあらわれと受け取られ、上記の雑誌には批判的となったものの、これらはノグチの詩が実際に読まれていた証拠でもある。

また、ノグチの詩の中には、イギリス人に受け入れられやすい作品も幾つかあった。例えば、“Apparition” という詩は、そのような作品の代表で、多くの肯定的な評価を得た。これも、“The Myoto” のように、四連から成り立つ詩である。

Apparition

‘Twas morn;
I felt the whiteness of her brow
Over my face; I raised my eyes and saw
The breezes passing on dewy feet.

‘Twas noon;
Her slightly trembling lips of passion
I saw, I felt, but where she smiled
Were only yellow flakes of sunlight.

‘Twas eve;
The velvet shadows of her hair enfolded me;
I eagerly stretched my hand to grasp her,
But toughed the darkness of eve.

‘Twas night;

I heard her eloquent violet eyes
Whispering love, but from the heaven
Gazed down the stars in gathering tears.⁴³

この詩を、*The Literary Letter* は、“striking piece of suggestion. beautifully complete in a small compass⁴⁴”と称讃した。*The Saturday Review* は、“[it] has a kind of achieved merit, more within limits than any of the other pieces, in which from time to time words seem to fail altogether, or to render but a treacherous service⁴⁵”と書き、*The Daily Chronicle* は、例えば“Like a Paper-lantern”という詩は西洋人にはその詩に表れる風情を共有するのが難しいとしながらも、この“The Apparition”については“Nearer to ourselves”という表現と共に最後の二連を引用している。*The Outlook's*も、この詩について、“whose form suggests either that Mr. Noguchi has assimilated a familiar Western conversation or that the traditions of poetical expression have an unsuspected universality⁴⁶”と論じている。また、オースティン・ロブソン (Austin Robson) もノグチへの手紙で、この詩を最もよかった詩の一つに上げている⁴⁷。

同じように、“The Face in the Mirror”については、“The Myoto”について批判した *The Daily News* も評価した作品であった。

The Face in the Mirror

Why do you cry so, dear little girl?
Come, dry your tears,' I said,
'Like a dew-bathed butterfly in the sun rays,
And then tell me of yourself.'
The girl said:
'My kind Danna San, 'twas this morn
When the breath of Spring blew along the mountain path,
That I went up alone to gather wild-flowers,
And there naughty neighbour's children shouted at me:
"Look at the dirty motherless girl!"
Then I retorted that I had my mother in the mirror,
And I ran home and I saw the mirror, —
Alas, my mother's face was crying,
Because I cried.

⁴³ Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. Kamei, Shunsuke. ed. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 7

⁴⁴ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 4 “Literary Letter”

⁴⁵ “Opinion” *Ibid.* p. 7 “The Saturday Review”

⁴⁶ “Opinion” *Ibid.* p. 15 “The Outlook's”

⁴⁷ From Austin Robson to Yone Noguchi. 30 January 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 113

Then I felt still more sad,
 And cried still more,
 And now still I cry.’
 I said to the girl:
 ‘Sweet child the face in the mirror
 Isn’t your mother’s, but your own.’
 The girl flinging a quick opposing look,
 Impatiently said:
 ‘So many many years older than I you are,
 So much more wiser than I you are,
 But my great load, you know nothing of my mirror.
 The face in the mirror is my mother’s,
 So mother said:
 My dear mother never told a lie.
 The mirror was left me
 When she died, and she said:
 “Whenever you want to see me,
 You will find me in the mirror,
 I a thousand times have looked in it,
 And hidden there my truest face.”
 Since then, every eve at dusk,
 When the church bell sounds to me like mother’s call,
 I hurry to my mirror,
 And I see my mother looking at me.’
 (後略)

小さな女の子が亡き母の面影を鏡の中の自らの顔に見る、という比較的普遍的な内容だからだ
 ろうか、*The Daily Chronicle* も、“Full of plaintive tenderness” と称讃した。

だが、この *The Daily Chronicle* は一方で、ノグチの詩が全体的に日本らしくないと評した。この
 書評には次のようなくだりがある。

..... Poems are brief in Japan. Limitation is the secret of all art, and why call
 yourself a poet if you cannot utter all your soul within the limit of the seventeen
 syllables that makes poetic form? But for the perfection of brevity you want the
 cherry-stone language of the fairy artificers, and in working with our fluid western
 speech the poet has been obliged to spread out into many syllables—sometimes to three
 pages, once to nearly six. Indeed, he is very seldom entirely Japanese—so Japanese as to
 be difficult. But the whole book is full of dim lights and strange odours, and voices
 that seem to come from a land set in a different star to ours. ⁴⁸

⁴⁸ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 8-10 “The Daily Chronicle”

この書評を書いた者は日本文学の中でも俳句を取り上げ、日本の詩は17の母音で表すものであり、そのような“Limitation”が芸術の秘密なのであるから、それで表せなければ詩人とは呼べないと言う。*From the Eastern Sea*に含まれていた詩には、ノグチが“Lines”と題した四～十行ほどの短い詩もいくつかあったが、詩によっては多い時には三ページ、最も多くて六ページ近いものを書いてきた。この書評は約三ページに亘って論じられており、これもノグチの詩集がきわめて話題性のあった証拠である。

このようにノグチがロンドンで注目を集めたことを、アメリカの文芸雑誌 *Literary Letter* が書いている。

Mr. YONE NOGUCHI, the young Japanese poet, who writes English poetry with a charming Japanese accent, has recently achieved quite a notable success in London, and won a most cordial and distinguished recognition of his gifts, not only from the English press, but from the leading English writers. I am inclined to deprecate the label as likely with many readers to classify Mr. Noguchi as an interesting literary curiosity rather than the very real poet—real English poet—that he is. And, if Mr. Noguchi were not so true a poet, his command of English would seem to me but a dreary accomplishment. To my thinking Mr. Noguchi at his best is not so much of a Japanese poet writing English as an English poet in love with Japan, and permeated with its atmosphere and dreaming its dreams.⁴⁹

この書評の筆者は、敢えてノグチを“the very real poet—real English poet”と呼び、単なる“interesting literary curiosity”ではないと論じた。だが、ノグチが詩を発表した時期が日英同盟翌年というタイミングと重なり、日本人として初めての試みであった故に大きく評価されていたのは、本章で見て来たとおりである。“Real English poet”というよりも、この特定の背景の中で大きく評価されたことが、文化現象を巻き起こしたといえる。

なお、ノグチは、本章で見て来たようにイギリスで自費出版の英詩集を受入れられたという成功を抱えてアメリカに戻りながら、その約8ヶ月後の1903年12月、ノグチの小説を初めに出版した雑誌である *Frank Leslie's Popular Monthly* に掲載されたノグチの記事“Admiration from Japan – An Oriental Critic on the Anglo-Saxon Girl⁵⁰”では、イギリスの女性とアメリカの女性を比較し、前者を軽蔑して後者を褒め称える記事を執筆している。“How monnerless some of those girls were in enterig a room!” “Who says, I wish to know, that the English girl is fresh as a daisy? Look at her dampish hair! She doesn't look like anything but a pudding.” “She [English girl] is

⁴⁹ “Opinion” Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea* (3rd ed.). (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 1-2 “Literary Letter”

⁵⁰ Noguchi, Yone. “Admiration from Japan – An Oriental Critic on the Anglo-Saxon Girl” *Frank Leslie's Popular Monthly*. December, 1903. (New York: Frank Reslie Publishing House) 参照先は、大西直樹『19世紀後半における日米文化交流:研究成果報告書』(国際基督教大学, 1991) p. 122

stubborn in the extreme.” “Poor English girls I am not the first to denounce their poor taste in dress.” という具合にイギリス人女性を軽蔑し、“How pleasing the frankness of American girls!” “Look at the American girls! Not only do they know how to talk—they understand perfectly how to raise and drop their eyelashes.” “A Jap writer once said that the American woman is more than woman. She can be a wife and a geisha girl at the same time.” というように様々な側面からアメリカ人女性を称讃しようとしている⁵¹。小説 *The American Diary of a Japanese Girl* では日本人の少女の視点から見たアメリカを描き、そこでは日米を比較していたのが、渡英を経て、比較の対象は英米へと発展したのである。ノグチによる、日米および英米の比較に見られるのは、二つ以上の文化を比べるとき、それぞれの良さを尊重するのではなく、どちらかが優位に立つという見解を持つ点である。日英同盟を締結した後に、チャーミングに振る舞ったノグチを受入れたイギリスをこのように雑誌の材料にしてしまう一面もあった。

⁵¹ Noguchi, Yone. “Admiration from Japan – An Oriental Critic on the Anglo-Saxon Girl” *Frank Leslie’s Popular Monthly*. December, 1903. (New York: Frank Reslie Publishing House) p. 451-454

第3章：ヨネ・ノグチと夏目漱石

ヨネ・ノグチは私費で海外へ飛び出し、文学を通して成功したいという夢に向け、現地で知り得た知人友人を捲き込み、日本を離れて10年目に入った1903年1月にロンドンで英詩集を自費出版した。

ノグチがアメリカのニューヨークからイギリスのロンドンに渡ったのは、偶然にも夏目漱石が約二年の留学を終えて帰国する直前であった。ノグチがイギリスに到着したのが1902年11月20日、夏目がイギリスを発ったのが1902年12月5日であるから、二週間ほどイギリスでの滞在が重なっていたことになる。だが、ノグチが第2章で見たように日本人として華々しく注目されたロンドンで、殆ど同じ時期に二年を過ごした夏目は「倫敦に暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり¹」と書いている。夏目とノグチの海外でのこのような違いはどこから来るのだろうか。

その違いをもたらした要素を一般化することはできないが、要素の一つとして、渡航時の背景や条件が考えられる。ノグチが私費で渡航したのと大きく違い、夏目の渡航は明治政府から送り出された官費留学だった。日本は幕末から海外に日本人を送り、海外社会の視察や知識の修得をさせていた。明治政府になってからも国内を近代化させるのに全力を尽くし、選び抜いた人材を海外に送っていた。そして、送られた人材は、帰国して日本社会に貢献することが最も重要な使命だった。このような枠組みが、夏目の渡航先での経験を左右する一つの決定的な要素であったといえる。

夏目漱石といえば、1905年に『我輩は猫である』でその名前が知れ渡り、その後数々の作品を通して現在も、明治の大文豪として揺るぎない知名度を保つ。また、彼の作品は翻訳を通して世界各地でも知られている。一方、ノグチは海外で著名になった日本人として1904年9月に帰国し、国内でその名が知られていたのだが、当時の二人の知名度には興味深いものがある。例えば1907年7月28日『読売新聞』の「よみうり抄」には、以下のような記事が書かれている。

野口米次郎氏 近々家族同伴日光に旅行すべし。夏目漱石氏 9月頃慶應義塾大学部に於て文学上の講演を試む由。(傍点、原文のまま)²

ノグチが殆ど忘れられた存在となっている現代からは、このような記事が書かれていたとは考えにくい。だが、当時全く違う経緯で名を知られるようになったノグチと夏目の、きわめて個人的な事柄と公的な告知が、横並びで掲載されていた時代もあったのである。

本章では、まず夏目が渡航するきっかけを作った官費留学の歴史の概要に触れたあと、官費でイギリスに派遣された夏目漱石の滞在と、私費で渡航したヨネ・ノグチの海外経験を、その滞在中の日本との繋がり、および現地社会との繋がりという観点から比較する。

¹ 夏目漱石『文学論』(上)(東京:岩波書店, 2007) p. 24

² 『読売新聞』1907年7月28日

なお、夏目とノグチの海外滞在には、顕著な相違点はいくつかある。まず、夏目は留学したのに対して、ノグチは留学ではなかった。渡航時も、夏目が既に社会経験もあった34歳という大人であったのに対して、ノグチは18歳直前という青年であった。また、滞在期間は、夏目が二年という短期間であったのに対し、ノグチは約11年であったから、ノグチの三年目以降と夏目の二年間を比較するのはバランスが取れず不公平かもしれない。だが、それでも海外渡航という共通点があり、今は殆ど忘れられているヨネ・ノグチが29歳で帰国した日本でその当時、夏目と並んで著名であったのは注目に値する。何故ノグチの名はそれほどまでに海外で知られることとなったのか、そして帰国後にその知名度に何が起きたのか。それらに光をあてるため、相違点を認識しつつも、あえて比較しようとするものである。

3. 1 明治初期における官費留学の概要

約200年以上にも亘る鎖国の後に開国した幕末の日本は、欧米の近代国家に近づくために、まずは諸外国に実際に赴き、知識や技術を学ぶことが必須と認識した。江戸時代の終わり、使節団が二回派遣された後に、1862年、幕府はオランダへ数人を留学派遣した。この時期、私費で海外へ渡った者もいた。当時、国が、国の外に出る者を厳しく管理しようとしていたことが、いくつかのエピソードから読み取れる。例えば、1861(文久元)年に遣欧使節団の一員であった福沢諭吉は、渡航した先でも管理下におかれていることを次のように書き残している。

...日本は其時丸で鎖国の世の中で、外国に居ながら兎角外国人に会うことを止めようとする。...[御目付役などが]一切の同行人を目ツ張子で見て居るので、なかなか外国人に会うことが六つかしい。同行者は...何でも有らん限りの物を見やうと許りして居ると、ソレが役人連の目に面白くないと見え...何か見物に出掛けやうとすると必ず御目附方の下役が附いて行かねばならぬと云う御定まりで始終附て廻る...マア何の事はない、日本の鎖国を其のまま担いで来て、欧羅巴各国を巡回するやうなもの[であった]³。

一瞬の自由もないような管理である。また、1862(文久2)年に、幕府から初めてオランダへ派遣された日本人15名は、幕府から、現地での服装について、「黒紋付若くは羅紗の羽織に小袖、立付袴をはき両刀を帯し、頭髪は常の如く結び、草履ばき」と細かい指示があったという⁴。これらは些細なエピソードであるが、開国前の日本幕府がいかに慎重に、いかに手探りで、日本人を海外へ送るという一大事に取り組んだかを垣間見る事ができる。この後、1866(慶応2)年、幕府が正式に留学を許可する通達を行ない⁵、イギリス、フランス、オランダなどを中心としたいくつかのヨーロッパ諸国、アメリカへ若干名が留学したのであった⁶。

³ 石附実『近代日本の海外留学史』(東京:中央公論社, 1992)p. 28

⁴ 同上 p. 36

⁵ 同上 p. 110

⁶ 同上 p. 142

本格的に留学というものが推進されたのは明治に入ってからであった⁷。明治政府は一貫して留学という考えを支援し、積極的に取り組んだ。だが、その留学の形体は何度も改訂された。では、夏目漱石も送り出した、明治政府の打ち出した官費留学も含む海外渡航の歴史はどのようなものであったのか。石附実著『近代日本の海外留学史⁸』を参考にしながら、次の表にまとめたその経緯に目を通してみたい。

明治	出来事とその内容
2～3年 (1869-70)	既に留学している者のうち若干名を、あらたに「新政府の留学生に任命して」そのまま継続して留学させ、滞在費などは政府が持つという方針をとる。
2年4月	「 海外旅行規則 」を定める。手続きの仕方や心得を定め、条約を締結している国のみ渡航が許される。10年を一応の期限とし、帰国後は「旅行中之始末委細」を提出。
3年正月	「 外国渡海出願規則 」渡航希望者が士分か否かで手続きの方法を2つに明確に分ける。
3年3月	「 大学規則 」により、「高等教育が法制的に組織化」。
3年12月 22日	「 海外留学規則 」(同年6月に出た外務省の「意見書」を元に作成された) <ul style="list-style-type: none"> ➤ 留学生はすべて大学の管轄、大学からの留学免状と外務省からの渡航免状が必要。 ➤ 留学中の諸事務は在外の弁務使が行い、これに従う。 ➤ 「留学生ハ尊卑ノ別ナク皇族ヨリ庶民ニ至ル」。 ➤ 官費と私費に区別。官費は、大学や各府藩県で、性質、年齢(16-25)、学力(語学力など)の夫々に課された基準で選び、学科は本人に任せるが、年限は5年。支給額は不明だが、留学中は外国人から借金しないことなどという既成もある。私費の場合も年間予算600-700ドルの用意がなければ認めない。
3年10月	兵部省は陸軍兵学寮の生徒10名をフランスへ派遣。
4年8月	工学寮 が設置。教員は全員が外国人で衣食住も西洋式、「土木、機械、電信、建築、実地科学、鉱山など6つから構成」した6年コース。ここから、毎年2、3人を国外に留学させたかったが、工学寮自体に人が集まらず、設立から明治10年ほどまでは国内の修学が主であったという。
4年11月	「 岩倉使節団 」 「現に海外に留学している生徒の学業、就学状況を査察し、留学費に関する具体的な処理の方法を確立することも任務」であった。明治4年に藩が廃止となり、藩が経済的に支援していた留学費は政府が負担することとなり、「学習効果の上がない者には帰国させる」ようにするなど、官費生を整理したという。
4年	教育や学術方面でも、アメリカやイギリスへ派遣。開拓使からも7名の留学生を伴って次官自ら渡米視察、その後も農業、工学、鉱山などで20名ほどが、アメリア、ロシア、フランス、ド

⁷ 同上 p. 182

⁸ 石附実『近代日本の海外留学史』(東京:中央公論社, 1992)

	イツへ派遣。民部省も農事取調のためアメリカへ留学、大蔵省の勸農寮でも農業、牧畜、酒造などの研究のために約10名をアメリカに派遣。海軍兵学寮でも4名をアメリカ、12名をイギリスへ派遣。
5年8月	「学制」の中に「 海外留学の規定 」ができ、大学ではなく文部省が留学生を管轄することに。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 官費のうち、初等は中学卒業以上で定員150名、上等は大学卒業で定員30人、両者とも年限3年。 ➤ 在外の弁務使を通じて文部省の監督を受け、大学を卒業しなかった場合は帰国後に試験を受ける。 ➤ 帰国後に官職につかない場合は費用を返還 ➤ 私学留学もおおむね官費留学生に準じる。
6年12月 26日	官費生全員の帰国命令。(陸軍関係を除く) <ul style="list-style-type: none"> ➤ 留学への支出が文部省の予算の1割以上をしめるなど、経済的に負担であったことが認識されていた。 ➤ さらに、留学前の教育が不十分のため、留学生の多くが渡航先で大学には在籍していません。帰国後の試験で、留学生の学力や結果が不十分であったと明らかになる。
8年 (1875)	「 文部省貸費留学生規則 」(明治7年に設置された「海外留学生監督」が留学生監督)「留学生の質の向上と留学の効率化」を目指しつつ国の財政状況を踏まえた規則。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 学力、品行、健康の優れたものを試験で選抜。専門性を追求する上等の学生のみ。 ➤ 貸費制。現地での費用と旅費、支度金を貸費。卒業後3年から返済を開始し、20年以内に返済する。 ➤ 年限は5年。専攻は留学生監督の指導と指示に従う。 ➤ 卒業証書があれば、帰国後の試験を免除。
10、11年	政府の財政難で、「文部省貸費留学生規則」は中止。12年から再開。
15年2月	「 官費海外留学生規則 」 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 貸費の時は、学科の選択や帰国後の就職先など本人の意志によるところが大きかったが、この制度は「国家にとってより効率的な留学のシステムを確立しようとした」。 ➤ 文部省が帝国大学の卒業生の中から「将来大成ノ望アルモノ」を選び、学科から渡航先、年限や留学機関を指定、帰国後は留学期間の2倍分、文部省指定の場所で勤務。
36年 (1903)	「 文部省外国留学生規程 」公布 「特ニ外国留学ヲ必要トスル學術技芸ヲ研究セシム」とあり、文部大臣が、文部省直轄学校の卒業生、教官から検定によって選抜し、命じた。学科その他については、15年の制度と規則と同じで文部省が決めた。

この表を見れば、明治には短期間で制度が激しく入れ替わり、送り出す政府としても試行錯誤の

日々であったことが読み取れる。明治3年に初めて「海外留学規則」が出来たことや、当時は政府が留学・洋行を奨励・支援していたこともあり(洋行は、例えば明治3年11月には全国の大きな15の藩から代表二名ずつを、政府が一年の洋行に送りだし、欧米の社会や政治、文化、軍事関係等の視察に行っている⁹⁾、明治3、4年は「明治前半期における海外留学ピーク」だったという¹⁰⁾。ところが、明治5年になると、留学の対象者のうち「初等」の枠を中学生以上に広げたため¹¹⁾、文部省の留学に費やす経費が年間予算の1割以上をしめた割に効果が見えず¹²⁾、既存のプログラムを走らせながら制度を整えるのに無理を感じたことが、結果的には明治6年の全員帰国を招いたようである。明治8年から始まった「文部省貸費留学生規則」は、この制度で留学した学生が東京大学の前身の一つである東京開成学校の出身者が大半を占めたことや、明治15年には再び貸与から授与に変更する代わりに、渡航者たちの人選を、彼らの渡航先や渡航後まで日本にとって有益にするという観点から一貫して管理し、明治8～23年で90人が渡航したうち67名が学士号などの学位を受けて帰国している程優秀であったという¹³⁾。このように、対象者の条件を変更することで、効果的な結果をもたらすことができ、「お雇い外国人」を雇うよりも、優秀な留学生在が帰国して日本の教育を担えば経済的にも安く済むという考えは、実際に明治10年代半ばから外国人に替わって国内の事業を推進していった実績などから¹⁴⁾、固まっていたようである。さらには、明治15年の制度改革にも表れているとおり、この時点で政府は、留学というものを、高等教育の一部としてではなく、高等教育の上に位置づけ、「官立の高等専門教育諸機関の卒業生、教官」を留學生の主体とし「東京大学を中心とする官学と連続されて、国家の必要と要請のもとで、学術研究」に移行していったという¹⁵⁾。夏目漱石は、1900(明治33)年、この「官費海外留學生規則」で留学が取り仕切られていた時代にイギリス留学を命じられ、イギリスに約二年滞在した。

数年ごとに制度の改正があったものの、総合的に「公費」で留学した日本人が、「文部省貸費留學生規則」の始まった明治8年から、「官費海外留學生規則」半ばである明治30年の間に159名という少数であったというから¹⁶⁾、他にも私費やその他の公費で海外へ渡航した人はいるものの、官費留学する者はいかに選抜された人材であったかがわかる。そして、上の表に表れる官費留学の初期の歴史を見てみれば、制度の変化は管理体制や条件の詳細こそ変化するものの、官費留学とは、基本的に日本政府に管理されながら、決められた条件の中で求められている目標を満たすことや、留学で得た知識を日本の発展に活かすことが最大の目的なのは一目瞭然である。

このように、海外に派遣されながらも、日本政府の管理下に置かれ、その成果を帰国後の日本

⁹⁾ 石附実『近代日本の海外留学史』(東京:中央公論社, 1992) pp. 186-187

¹⁰⁾ 同上 pp. 208-209

¹¹⁾ 同上 pp. 224-225

¹²⁾ 同上 p. 242

¹³⁾ 同上 p. 265

¹⁴⁾ 同上 p. 271

¹⁵⁾ 同上 p. 306

¹⁶⁾ 同上 p. 268

で活かすことが条件であった官費留学生らは、外国に滞在中も日本社会に所属し、評価もその後のキャリアの舞台も日本社会にあったといえる。その結果、私費で渡航した者たちと比較すると、その現地への適応度合いが違ったのである。明治時代に官費留学した者の中には、夏目漱石の他に森鷗外、芳賀矢一などがおり、私費で渡航した者たちには、ノグチの他に藤田嗣治、永井荷風、牧野義雄などいるが、本章ではその違いを、夏目漱石とヨネ・ノグチのケースで見たい。

3.2 海外滞在中の日本との繋がり

本節では、夏目漱石とヨネ・ノグチの海外滞在を、その間、日本とどのように繋がりを保っていたか、保っていなかったか、またそれはどのような意味をもたらしたか、という角度から見てみたい。その前に、まず夏目漱石の生い立ちから留学に至るまでの経緯について、簡単にふれておく。

夏目漱石は、1867(慶応3)年1月5日、東京に生まれた。本名を夏目金之助という。彼が誕生した翌年には明治政府が誕生し、日本が激変するまただ中に育った夏目は、将来は漢学者か漢詩人になろうと思っていた時期もあったようだが、高校受験の前から、『『文明開化の世の中』にふさわしい道として英学』を選考したのだという¹⁷。第一高等中学校では英文学を専攻し、彼の英語は「極めて優秀」であるのが、その当時彼が書いたものからも読み取れる、と亀井俊介は論じる¹⁸。1887(明治20)年に帝国大学に新設された英文科に1890年に入学した夏目は、同科にとつて2人目、かつその学年では唯一の同科の学生であった¹⁹。彼の英語力は同校での夏目の教員ジェイムズ・メーン・ディクソンの認めるところでもあったという²⁰。

1893年、東京帝国大学英文科を卒業した夏目漱石は、1900年6月、熊本第五高等学校で教鞭を取っていたところ、文部省から「英語研究ノ為満二年間英国へ留学ヲ命ズ²¹」という辞令を受け取った。この短い辞令の中に、研究内容から期間、渡航先まで詰まっている。明治政府は、1900年から、帝国大学を卒業したもののうち高等学校教師をしている者も海外留学に送る対象に含めると方針を改め、その第一回目に選ばれたのが夏目であった²²。夏目は、他にもっと相応しい人がいれば、と一度は辞退したようだが、そこは議論すべきところでないとの上司の返答に、受け入れたのであった。前節でふれた官費留学の歴史からも、将来を見込まれて選ばれた人事とわかり、上司の言い分は尤もであるといえよう。だが、実は夏目には、この留学を喜んでいただけであったようである。中学教師として松山へ行った目的は「金をためて洋行の費用を作る」と言っていたこともあり、また世話になった人物に「菲才の身にて誤つて選に当たり候事全く校長始め先生の御尽力と深く感謝致候」と書いているというから²³、一度行くと決めた後は、前向きな気持ちが強かったのかもしれない。ところが、納得して渡英したのにもかかわらず、帰国後に渡航を振返った

¹⁷ 亀井俊介『英文学者 夏目漱石』(東京:松柏社, 2011)p. 2

¹⁸ 同上 p. 15

¹⁹ 同上 p. 5

²⁰ 同上 p. 16

²¹ 江藤淳『漱石とその時代 第二部』(東京:新潮社, 1970)p. 38

²² 亀井俊介『英文学者 夏目漱石』(東京:松柏社, 2011)p. 73

²³ 同上 p. 73

文章ではきわめて否定的である。『文学論』には次のようなくだりがある。

個人の意志よりもより大なる意志に支配せられて、気の毒ながらこの歳月を君らの麴麴の恩沢に俗して累々と送りたるのみ。二年の後期満ちて去るは、春来つて雁北に帰るが如し。(中略)されど官命なるが故に行きたる者は、自己の意志を以て行きたるにあらず。自己の意志を以てすれば、余は生涯英国の地に一步も吾足を踏み入る事なかるべし。²⁴

辞令がなければ一生イギリスに行くことはなかつただろう、というほどに自発的には外国行きに興味を持たなかった人物がイギリスで数年間を過ごすというのも、官費留学の特徴の一つであったといえるだろう。ドイツ文学者谷口茂が、「いったい外国の文化を学んでいて、せめて一度はその土地を踏みたいと願わないものがあるだろうか。その土地の人々の生活がにじみ出ている文学に親しみを覚えているのなら、なおさらである。作品のなかの会話すら目で読むしかない状態にもの足りなさを覚え、それは一種の渇きとなって彼をいらだたせずにはおかない。²⁵」と論じるように、夏目の学問と実学を重んじない態度の間には、ギャップすら感じられる。

辞令が下りてからわずか三ヶ月後に日本を出発した夏目は、1900年10月28日、ロンドンに到着した。夏目のロンドンでの約二年間の滞在の概要は次のとおりである。ロンドンに到着した五日後には、ケンブリッジ大学を見学したものの、結局はロンドンに落ち着くことにする。ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジでケア教授の講義を受け始めたが、わずか二ヶ月弱で止めてしまい、自分で購入した洋書を読む以外は、ケア教授から紹介されたシェイクスピア学者クレイグ (William James Craig: 1843-1906) を訪ねて個人レッスンを受けながら一年目を過ごした。一年目は日本語で日記も残している。二年目になると、クレイグ宅へも行かなくなり、ひたすら読書をして勉強した。また、約二年間の滞在下宿先を五回変更した。1902年12月5日、ロンドンを立ち、翌年早々、日本に到着した。

ここから、夏目漱石とヨネ・ノグチの比較に入る。まず、その滞在期間である。夏目の場合、辞令にも明記されているとおり、二年と決められていた。初めから滞在期間が決まっているということは、さまざまな面で夏目に大きな影響を与えたものと思われる。夏目は二年という期限を意識し、帰国を心待ちにしながら、異国で感じる不便を我慢で通していたようである。それは、例えば次の文章にもあらわれている。「倫敦消息」に収められている文章で、元はイギリスに到着した翌年である1901年の正岡子規宛の手紙だったものが、同年5、6月の『ホトギス』に掲載された²⁶。

なにこんな生活もただ二、三年のあいだだ。国へ帰れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食う物を食って普通の人の寝る処へ寝られる。少しの我慢だ、我慢しろ我

²⁴ 夏目漱石『文学論』(上)(東京:岩波書店, 2007) pp. 24-25

²⁵ 同上 pp. 39-40

²⁶ 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990) p. 233

慢しろ、と独言をいって寝てしまう。寝てしまう時は善いが、寝られないでまた考えだすことがある。元来我慢しろというのは現在に安んぜざるわけだ——だんだん事件がむずかしくなってくる——時々やけの気味になるのは貧苦がつらいのだ。(中略)しかるに国へ帰れば楽ができるからそれを楽しみに辛防しようというのは果敢ない考えだ。国へ帰れば楽をさせると受け合ったものは誰もいない。(中略)のみならず報酬を目的に動くのは野暮の至りだ。(中略)国を立つまえ五、六年のあいだはこんな下等な考えは起こさなかった。(中略)それで少々得意に成ったので外国へ行っても金が少なくても一簞の食一瓢の飲然と呑気に洒落にまた沈着に暮らされると自負しつつあったのだ。自惚れ自惚れ！ こんな事では道を去ること三千里。まず明日からは心を入れ換えて勉強専門の事。こう決心して寝てしまう²⁷。

ロンドンでの暮らしを「普通」でないと形容していることから、彼にとって如何に居心地の悪いものであったかが読み取れる。そして、その「普通」でない生活も、孤独や淋しさも、二年間という期間があったから何とか向き合い、我慢で通していた。同じ時期にドイツへ留学中の友人・藤代禎輔宛ての書簡で「僕は幸い無事だ。安心して呉れ給え。友達がなくて淋しい。倫敦へ遊びにこないか。²⁸」と書いているが、現地で親しい友達を作ろうとした形跡はない。二年という期限があったから、東京の暮らしと比較して見えてくる全ての欠点を我慢していたようである。

ヨネ・ノグチの海外滞在の場合は、決まった期限は無かった。日本を発つ時点でどのぐらいの期間行っているのかという決まりを立てている記録はない。夏目とは対照的で、自らの意志で海外に行ったのだから、我慢したという気持ちはなかった。ロンドンに行くを決めたのも、ニューヨークで小説が出版される一年も前である1901年10月に“*For last week I was scamping in the books of English society. I came to conclusion that I will go to London next year (perhaps May or June) and write about ‘M.G. in England.’*”²⁹とレオニーに唐突に書いている。ロンドンに滞在する期間も、六ヶ月の予定で来たとはいうものの、到着してから“*But my friends insist, saying that London is nothing without summer weather. Must I stay till that time, I wonder?*”とアメリカのフランク・パットナムに書いているように曖昧なものであった。渡英の目的は渡英直後には詩集の出版としばられ、決まった期間を念頭にしていなかったのは、英詩集を出版すると直ぐにアメリカに戻ったことから明らかである。

次に経済面の比較である。夏目が文部省から支給されたのは、留学費年額1800円と、家族への生活費年額300円であった³⁰。夏目の滞在費が、日本の家族に支給された生活費の六倍ということからも、留学が当時の政府にとって如何に経費のかかるものであったかがわかる。夏目の滞

²⁷ 「倫敦消息」夏目漱石『文鳥・夢十夜・永日小品』(東京:角川書店, 2003) pp. 153-154

²⁸ 1901年2月9日 藤代禎輔宛 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990) p. 81

²⁹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 22 October 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 99. “M.G.”とは“Morning Glory”でノグチの英語小説 *The American Diary of a Japanese Girl* の主人公である。

³⁰ 夏目鏡子述 松岡譲筆録『漱石の思い出』(東京:文藝春秋, 1994) p. 40

在費は、月額にすると150円であったが、それは夏目にとっては「お話しにならないくらい少なくて、一冊でもよけい専門上の書物を買って帰りたい欲」のために相当切り詰めた生活をしたあまり、時には、そのリバウンドで、「本もなにかえなくても善いから為替はみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮らしをしようという気」になると後述している³¹。夏目は生活費の約三分の一を書籍代に宛てていたようであるが、亀井の計算によれば、それは、それほど『『あわれなる生活』をしたのか「疑わしいところもある」とは書いている³²。だが、彼自身の蓄えはなく、自分で現地で稼ぐわけでもなく、文部省からの留学費でやりくりする他に方法はなく、夏目にとっては小額と感じられた支給金で、我慢とリバウンドとのせめぎ合いで二年間を過ごしたのであった。この小額については、後にもいくつか関連したエピソードを引用するが、彼の滞在中さまざまな決断の要素になっており、辞令を以てイギリスに行った夏目にとっては決定的な条件の一つだったようである。

一方ヨネ・ノグチは、渡航時に持参した100ドルに満たない支度金は、サンフランシスコに到着した翌日に参加した愛国同盟の集いに参加した際に全て散財してしまい、その後は主に、現地での自身による稼ぎと日本からの仕送りで暮らしていた。だが、経済的に自立したいという考えが根本にあったようであり、それはノグチにさまざまな経験をさせただけではなく、ノグチをアメリカ社会のインサイダーとなることの手助けをした。愛国同盟の活動を離れ、サンフランシスコやその周辺でスクールボーイをして30ドルほど蓄えたが、愛国同盟の仲間たちは相変わらず一文無しであり、彼らに同情して靴下や上着などを買い与えているうち、自らまた一文無しに成ったというエピソードも自伝に書かれている³³。彼らに比べて、ノグチには現地で生活する力があったといえよう。また1899年、24歳のノグチがサンフランシスコで小説を書き始めた動機の一つは、収入の為であった可能性もある。仕上がった原稿を雑誌か新聞のどちらかに売り込むかと、ノグチから当時の友人ブランチ・パーティントンへ書いている手紙では次のように書いている。

Oh money! I hate to speak of it, but I need it because I will leave the Heights pretty soon and live in the city and my home in Japan will not send any more money (how sad!!). I suppose that your magazine with not many subscribers can not pay much. How it can! We must get the money enough that we are to share each other. You don't think me awful talking of money!³⁴ (実際には、日本からの仕送りはその後も続いた。)

アメリカ人に協力を頼むのであるから、彼女にとっても公平に、そして彼が貪欲と聞こえないようにと、体裁を気にしている文章である。1900年にニューヨークへ到着した直後はスリに会い、ストッダードに10ドル札を送ってもらったり³⁵、翌年10月にはレオニー・ギルモアに5ドル貸してくれるよ

³¹ 「倫敦消息」夏目漱石『文鳥・夢十夜・永日小品』(東京:角川書店, 2003) pp. 150-151

³² 亀井俊介『英文学者 夏目漱石』(東京:松柏社, 2011) pp. 78-79

³³ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 39

³⁴ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 21 September 1899. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 47.

³⁵ From Yone Noguchi to Charles Stoddard. 12 July 1900. *Ibid.* no. 57.

う依頼しており³⁶、また、ノグチがロンドンからアメリカへ戻る時には、外国人として上陸するにあたり必要な40ドルを持ち合わせていないことからパットナムに埠頭まで来てくれるように依頼している³⁷。カリフォルニアで四年に亘りノグチを居候させたミラーだけではなく、彼らも時にはパトロンのような存在であったことがわかり、ノグチにとって彼らは、現地で頼ることの出来る人物であった。1901年6月には、パットナムへの手紙で、“I am thinking I never can make money in my life, but I ought to make my own living. I cannot ask money all the time from Japan, you see. I am trying to do something.”³⁸とあり、日本を発ってから七年半経っていても、日本から仕送りが続いていたことや、ノグチが経済的な自立を目指していたのがわかる。ニューヨークで出版した *The American Diary of a Japanese Girl* は、初めに雑誌に掲載した出版社である Frank Leslie's Popular Monthly からヨネ・ノグチ宛の手紙には、1回につき20ドルの原稿料が支払われると書かれていることから³⁹、小説出版はノグチの作家になりたいという野望を満たしただけでなく、大きな収入をもたらしたのがわかる。このように、ノグチは決して裕福ではなかったが、それが逆に現地で可能性を広げるきっかけになったのである。

では、日本に残して来た家族との関係はどうか。渡航当時に34歳であった夏目の場合、既に妻と長女がおり、イギリス滞在中に次女が生まれた。身重な妻や、第二子の誕生、小さな子供の成長やその躰など、父親として様々なことが気がかりなのが、手紙からも読み取れる。だが、家族への心配だけではなく、それ以上に、むしろ自身が家族を恋しがっている様子が、文面から伝わってくる。1901年2月20日付の妻への手紙には、次のように書かれている。

国を出てから半年許りになる。少々厭気になつて帰り度なつた。お前の手紙は二本来た許りだ。其後の消息は分からない。多分無事だらうと思つて居る。御前でも子供でも死んだら電話位は来るだらうと思つて居る。夫だから便りのないのは左程心配にはならない。然し甚だ淋しい。(中略)段々日が立つと国の事を色々思ふ。おれの様な不人情なものでも頻りにお前が恋しい。是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ。⁴⁰

このように書いたものの、一向に妻から手紙のない夏目は、1901年3月8日には、妻が無事に出産したか否かを再び尋ねる手紙で「おれは丈夫だ。よほど肥えたようだ。しかし早く日本に帰りたい」と、再び自身の淋しさにふれている。ロンドン滞在も二年目の半ばとなった、1902年2月2日付の妻に宛てた手紙では、彼女から四ヶ月程手紙が来ないことを責め、多忙で頻繁に音信でき

³⁶ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 2 October 1901. *Ibid.* no. 96. 結局、他から現金を工面したようで、レオニーには返却すると書かれている。

³⁷ From Yone Noguchi to Frank Putnam. 11 March 1903. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 32

³⁸ From Yone Noguchi to Frank Putnam. Around June 1901. *Ibid.* no. 14.

³⁹ From Frank Leslie's Popular Monthly to Yone Noguchi. 25 July 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 89

⁴⁰ 谷口茂「漱石の留学」松本道介編集『留学の思想』(東京:三修社, 1972) pp. 54-55

ない場合は初めに断るように、と注文を付けている⁴¹。ロンドンでひとり書物と向き合いつつも、心は常に日本にあったと読み取れる。1902年3月18日に妻に宛てた手紙では、「倫敦では日本人が大分いるが少しも交際をしない。会などへも出た事がない。土井とも近頃は滅多に遇わない。たった一人で気楽でよろしい。」と書いている。1902年4月17日、妻へ「当地には桜というものなく春になっても物足らぬ心地に候。かつ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之、文明がかくの如きものならば野蛮のほうがかえつて面白く候。」という書簡を書いている。折に触れて日本を恋しがっていた様子が読み取れる。さらに、夏目は家族だけではなく、友達にも淋しさを伝えていた。渡英して約四ヶ月後の1901年2月9日には、日本の友人たちに「僕はなかなか手紙をやらないから諸君に頼むのは妙だが、時々何か書てよこしてくれ給え。御願だ。⁴²」と依頼している。一時的に下宿が一緒であった日本人である、長尾半平や田中孝太郎、池田菊苗などとは、その時だけ交流していたようである。特に、田中とは公園への散歩や劇場など一緒に出掛けたり、池田とは共に外出した他にも、文学などについて話し込んだ、と日記に綴られている。だが、彼らが去ったあと、改めて会いに出掛けていくほど親しくしている日本人はいなかった。ある下宿先では、知合いの中に下宿先を探している人がいるか聞かれ、「さよう実にお気の毒だから周旋してあげたいのだが、ロンドンには別に朋友というものがないんだから...」と答えている。だが、夏目は、実は決して人付き合いが下手ではなかったようである。夏目鏡子述(松岡譲 筆録)『漱石の思い出』からは、経済的に余裕がなかった若い頃から書生を置いていた他、数回の引っ越しの度に手伝ってくれる人は事欠かなかったようであるし、「木曜会」と称して家に人を招いては夜中まで話し込んだりするほど、人の集まる家であった様子が見て取れる。ということは、英国滞在中の友達のない淋しさは一時的と割り切って我慢し、その淋しさは現地での人付き合いで埋めるのではなく、日本との手紙による繋がりでも埋めていたのである。

一方、ノグチは、日本に残して来た家族といえ、両親と四人の兄妹たちであった。実家とは手紙のやり取りはしていたようである。だが、家族を恋しがっている様子は殆どない。一度だけ、ノグチが母親の病気の容態を心配する記録がある。1901年7月、“The report said that my dear Mama is awfully sick. And I fear I shall not see her again. I am sick also.”⁴³とレオニーに手紙で書いており、同年10月には、“Say, I heard again from my home about my mama. She is really serious. My brothers (three in all) returned to my native country from Tokio to see my mama. One of them wrote me from her sick bed. But he said that the danger had passed.”⁴⁴とある。現代と違って簡単に日米間を往復できないという当時の事情も十分に考えられるが、このような重大なニュースが日本から届いても、母に会うために帰国しようとした気配は、少なくとも残されている資料からは読み取る事はできない。また、この時以外、日本の家族を心配したり恋しがっている様子はない。ノ

⁴¹ 1902年2月2日 夏目鏡子宛 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990)pp. 102-103

⁴² 1901年2月9日 狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990)p. 91.

⁴³ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. July 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 84

⁴⁴ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 22 October 1901. *Ibid.* no. 99.

グチの母親は元気を取り戻し、ノグチの1904年9月の帰国時に故郷の津島で再会したが、その時も、「余は思はず知らず夫れ程老父母が余のことを思つて居て呉れる其百分の一も思はなかつた罪を謝せねばならぬと思つた次第である、余は親不孝であると思つたのである⁴⁵」と書いている。孤独は感じていたようであるが、第1章で触れたように、それを詩の材料にしたり、アメリカ人への手紙には書いてはいるが、むしろ淋しい気持ちは現地の社会で解決法を考え、日本の家族に淋しさを訴えている記録はない。自身の意志と責任で海外に滞在し、野望を抱いてがむしゃらになっていた当時、日本に思い残していることはなかつたのだろう。

夏目とノグチでは、和食に対するアプローチも全く違う。夏目がロンドンで和食を恋しがっていたのは所々に残された記録から読み取れる。例えば、到着して約三ヶ月後の日記には、「こちらにて少々六かしき字を使えば分からぬくせに先方にてはくだらぬ字を会話中に挟みてこの字を知っているかと一々尋ねられるには閉口なり⁴⁶」というような、イギリス人への不満などが書かれているが、締めくくり「長尾氏方に至る。角野氏方にて牛鍋の御馳走あり。非常にうまかりし。」とあり、牛鍋がその日の嫌な感情を帳消しにした印象すら与える。滞在して一年半経った頃の手紙にも「日本に帰りての第一の楽しみは蕎麦を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる縁側に寝ころんで庭でも見る、これが願に候⁴⁷」と書かれている。和食を食べるか、又は帰国したら食べたいと思う事で彼は滞在中をしのいでいたようである。

一方、ノグチの場合、和食恋しさの為にそれを食べた記録は残っていない。逆に和食は、日本の文化を海外に紹介する一つの道具と捉えていた節がある。1904年には、ニューヨークで、Helen Bridyman という女性とその夫が、ノグチの家へ和食の夕べに招待されて大変気に入ったようで、再度招待してほしいという依頼を、詳細なメニューと共にノグチに書いている。

I want this menu if I can have it:

- I. Tea and bean paste as before
- II. The same soup as before
- III. Raw fish, pickled and spiced, in square, such as you said you had
- IV. “Steamed bowl” with chicked [*sic*] and “pine dews” as Miss Gale had it
- V. The gas stove by your elbow, with tender green onions simmering, and raw oysters poured over it, as Miss Gale described
- VI. Salad as before
- VII. Tea

Also, I should like saki served with the more substantial courses. Is there any Japanese sweet that might be served with the concluding tea, possibly in place of salad, if they did not care for so much? I want spoons served with that steamed bowl. If it is far too good to lose

⁴⁵ 野口米次郎『帰朝の記』(東京:春陽堂, 1904)p. 83

⁴⁶ 1901年1月12日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店, 1990)p. 28

⁴⁷ 1902年4月17日 夏目鏡子宛 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990)p. 112

between the chop sticks.⁴⁸

手紙中の Miss Gale は作家ゾナ・ゲイル (Zona Gale:1874-1938) のことで、ノグチがニューヨークに住んでいる間に個人的に付き合いのあったアメリカ人の一人であり、1921年、アメリカ人女性として始めてピューリッツァー賞戯曲部門を受賞した人物である。この手紙から、ゲイルもノグチの料理した和食を食べて気に入っていたことも分かり、この夫婦やゲイル以外にノグチの和食を食べたアメリカ人がいる可能性もある。20世紀初めのニューヨークで、金銭的な余裕がない中で日本食を振る舞うのは簡単でなかったであろう状況で、外交的なノグチの一面が垣間見えるようである。

次に、海外滞在中における日本での出版に注目してみる。夏目が正岡子規に宛てた手紙は「倫敦消息」として『ホトギス』に掲載されていた。夏目は、妻宛には比較的短い手紙の最後に「余り長くかくと時がつぶれるからこれ位にして置く⁴⁹」などと書いているが、子規には長い手紙を書き、ロンドンでの暮らしや自身の心境を観察しながら文章にしてまとめていたのである。

それに比べてヨネ・ノグチの場合、誰の発想なのか、滞在中も日本の雑誌に発表していた。例えば、1897年7月の『早稲田文学』にはノグチの英詩二篇が掲載されている。“The Song of Songs, Which is the Mikado’s” と、“The Song of Songs, Which is Noguchi’s” の二篇で、巻頭には「本篇は在米野口米次郎氏がはるばる彼の土より寄せしもの、氏が作は彼の土にても好評なりといふ、読者其の心して見よ」とある⁵⁰。これは、初めての詩集 *Seen and Unseen* が刊行された約半年後である。また、1903年10月には『学燈』に「小冊子『東海より』の歴史」と題してノグチの日本語が掲載されており、1903年1月12日に *From the Eastern Sea* の自費出版をイギリス人に送ってから、何日に誰からどのような反応があったかという内容が日記風に詳細も含めて記されている⁵¹。ある種の成功を念頭においていたノグチは、淋しさや恋しさからは日本と連絡を取らなかったものの、自身の知名度を上げるためには日本との連絡も惜しまなかったのであった。

このように夏目漱石とヨネ・ノグチにおける、海外滞在中の日本との関係を見てみると、夏目の場合は日本との繋がりをきわめて強く保ったまま二年間を送ったといえる。夏目漱石研究者の一人出口保夫が、「二年間の異国での生活そのものが、本質的には旅そのものの延長にすぎなかった⁵²」と論じているように、夏目は二年間の滞在中、現地社会を外から眺めているだけで、ロンドン社会や自分の暮らしの基準は日本であった。キャリアの舞台も日本であったから、滞在先には競争相手や評価する者もおらず、夏目がイギリス人と親しくなる理由もなかったということになる。滞在期間も決まっており、日本に残して来た妻子もあり、文部省からの辞令があったからロンドンへ渡ったことなどが、ロンドン滞在中も彼を日本社会に所属させたと言えるのではないだろうか。

⁴⁸ From Heren Bridyman to Yone Noguchi. 18 April 1904. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 165.

⁴⁹ 1901年1月22日 夏目鏡子宛 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990) p. 79

⁵⁰ 『早稲田文学』第37号 1897年7月1日 pp. 51-61

⁵¹ 『学燈』第12号 1903年10月 pp. 8-15

⁵² 出口保夫『漱石と不愉快なロンドン』(東京:柏書房, 2006) p. 27

一方、ノグチの場合、滞在中は日本との繋がりを重要視していなかったといえる。彼には決まった期限がなく、残してきた家族に気配りはなく、海外でも経済的に自立しようとした。彼のキャリアの舞台はもはや完全に日本の外であった。評価する人から、競争相手まで現地の人達であり、そのために、その立場を理解し、協力する人物も現地の人達だったのである。

3.3 現地社会との繋がり

次に、夏目漱石とヨネ・ノグチを、その海外滞在中の現地社会との繋がりという観点から比較したい。

まず、渡航目的であるが、夏目の場合、文部省から命じられた研究の題目は、英文学ではなく、英語の研究だと強調しているかのように見える⁵³。亀井俊介によると、夏目は「英語を学ぶ意欲も強く持っていた」ものの文学に関心を持っていたことにも触れ⁵⁴、名目上は英語研究であっても、文部省にその詳細を問い合わせ、その回答をもって、本人は「『英文学』研究の留学であることを確かめたともいえる」と論じている⁵⁵。英語と英文学のどちらであったとしても、渡英とは、それまで活字を通して学んできた英語や、英語で成り立つ実際の社会と文化を身をもって学ぶ機会となり得た。ところが、夏目は研究するにあたり、洋書を買って読む事を主な手段とした。これは、政府からの指示ではなく、夏目が選んだ手段である。谷口茂が、「彼にとって英文学とは書物そのものでしかなかった⁵⁶」と書いているとおり、同じロンドン市内には多くの英語学者、作家や詩人、英文学者など在住していたはずだが、彼らと直接の関わりは積極的には持とうとしなかった。先にもふれたが、夏目は初めの二ヶ月弱は大学の講義に出席し、その後はクレイグ宅で英語の個人講義を受けており、夏目の日記から、ロンドン滞在一年目は、月に一から五回ほどの頻度で通っていたことがわかる。だが、夏目は後にクレイグとの個人講義を振り返り、「もっとも何を教えてくれるのか分からない。(中略)わるく言えば、また出鱈目で、よく評すると文学上の座談をしてくれるのだが、今になって考えてみると、一回7志ぐらいで纏った規則正しい講義などのできるわけのものではないのだから、これは先生のほうがもっともなので、それを不平に考えた自分は馬鹿なのである⁵⁷」と書き、月謝の少なさが、教えられた、または教えられなかった内容に結びついたという見解であった。夏目には、自ら個人講義の舵をとって、自身で先生から学び取るような積極性はなかった。ノグチが、ミラーからは一言も詩について教えられなかったと言っているものの、ミラーとの暮らしで詩を学び、出版するようになったことと比較すると大きな違いである。

夏目がこのように書物に頼って研究していた理由の一つは、二年では英語を話す事などマスター出来ないことと初めから決めていたことによるのだろう。彼は日本にいる友人らには、次のように書いている。

⁵³ 夏目漱石『文学論』(上)(東京:岩波書店, 2007)p. 13

⁵⁴ 亀井俊介『英文学者 夏目漱石』(東京:松柏社, 2011)p. 13

⁵⁵ 同上 p. 74

⁵⁶ 谷口茂「漱石の留学」松本道介編集『留学の思想』(東京:三修社, 1972)

⁵⁷ 「長日小品」夏目漱石『文鳥・夢十夜・永日小品』(東京:角川書店, 2003)p. 114

僕は英語研究のため留学を命ぜられたようなものの二年間おたつて到底話す事などは満足には出来ないよ。第一先方の言う事が^{しか}確と分からないからな。情けない有様さ。(中略)元来日本人は六ずかしい書物を読んだり六ずかしい語を知っているが口と耳は遙かに発達しておらん(中略)こういう訳で語学その物は到底僕には卒業が出来ないから書物読の方に時間を使用する事にしてしまった。従って交際などは時間を損するからなるべくやらない。^{しかのみならず}加之西洋人との交際となると金がいるよ。御馳走ばかりになっているとしても金がいるよ。まずい洋服などは着ていられないシタマには馬車を駆らなければならないし、しかもよほど親密にならなければ一通りの談話しか出来ない。興味のあるシンミリした話なんかはやれないからね。それも二年で語学がよほど上達する見込みがあれば我慢してやるが、それは以上の理由でだめだから時間を損し金を損してこれという御見やげがない位なら始めからやらない方がいいからね。僕は下宿籠城主義とした。⁵⁸

このようにして、生きた英語を経験として学ぶよりも、書物から知識として学ぶ事を選んだのであった。そして、イギリス人とは距離を置いたのである。

英文学翻訳家の吉田健一は、自身もケンブリッジ大学に在籍していた経験があることから、夏目が渡英直後にケンブリッジ大学を訪問した時のことを論じている。夏目は、ケンブリッジで学生同士が運動したり、教授たちとお茶や夕食などを共にするところを一日足らず見学し、そのような学生生活には支給されている留学費では参加できないと結論を出しロンドンに戻った。吉田健一は、「漱石は主に経済上の立場から交際のことを考えて⁵⁹」いたようであるが、本来、「一国の文学を知る為には大学の講義を聞くだけよりも、彼が金と時間の浪費を恐れてしなかつた、『交際もしたり図書館へも這入たり討論会へも傍聴に出たり教師の家へも遊びに行たり』することの方が遙かに役に立つと考えられ⁶⁰」ると、実際にイギリス社会に入り込むことの必要性を強調している。更に、「オックスフォードやケンブリッジには英国の一流の人材があつまっているものであり、所謂、社交界と違ってさういふ人々と交際するのに金は掛らず、又彼が代表する知識階級に接するのでもなければ、何も漱石が英国まで行く必要はなかつた筈だ⁶¹」と論じている。一方、谷口茂は夏目の年齢に触れ、「他の世俗の街には見られない青臭いばかりの若々しさ(中略)、その表面的にはきわめて浮薄な雰囲気、漱石が当惑したことは十分にありうる。もし彼が二十台の青年だったら、感激に燃えてそのなかへ飛び込んだかもしれない。⁶²」と論じるが、はたして真意はどうであったか。予算か年齢か、いずれの要素が邪魔したにせよ、ケンブリッジ大学で見た学生生活が、夏目の中では、その国の言語の基になっている文化を学ぶ方法と映らなかつたのであろう。

⁵⁸ 1901年2月9日 狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990)p. 87

⁵⁹ 吉田健一『ポエティカ 第二巻』(東京:小沢書店, 1974)p. 156

⁶⁰ 同上 p. 158

⁶¹ 同上 p. 156

⁶² 松本道介編集『留学の思想』(東京:三修社, 1972)p. 49

特に強い希望があつて渡英したのでもなく、ロンドンでも下宿に引きこもつて本を読んでいた夏目だが、自ら興味を示したものもあつた。その一つは、二年間のロンドン滞在後に半年ほどフランスへ行き、フランス語を学びたいということであつた。「どうも仏蘭西語が出来んと不都合だ。折角洋行のついでにやつて行きたいが、四ヶ月か五ヶ月でいいが留学延期をして仏蘭西に行く事は出来まいか。⁶³」と知人に書き、文部省の役人に問い合わせしてくれるよう依頼している。だが、滞在中にこのような変更が不可能なのが文部省の官費留学の特徴の一つでもあつた。家族や知人に淋しいと洩し、いろいろと不都合を感じていた海外滞在中で、フランス行きは際立つほどに積極的な発想であつたが、結局、夏目の願いはかなわず、予定通りロンドン滞在中に帰国することとなつた。

では、夏目は実際のところ、自身の留学をどのように捉えていたのだろうか。1901年6月19日付の手紙で「僕はね、留学生になつて何も所得はない。少しは進歩したことがあるかと思つて考へて見ても心が許さんから仕方がない。自惚れるより少しはよいかも知れぬ。⁶⁴」とある。この約10ヶ月後の1902年4月17日付けの妻へ宛てた手紙でも、「日本へ帰へればかやうにのんきに読書も思考も出来ん。それだけは洋行の御蔭と思ふ。その他に別段洋行の利益もない」という⁶⁵。まるで実際のイギリス社会での暮らしが何ももたらさないと感じているような感想であつた。

では、ノグチの場合はどうか。個人の意志で、私費で渡航した分、それを経済的に支援した家族への責任はあつただらう。だが、思いつきでアメリカに渡り、無謀と思へたような詩集や小説の出版も、自分の思うまま、心ゆくまで取り組んでみることのできる自由な立場にいた。そして夏目と違い、途中の進行状況により、計画やその行動をいくらでも変更できたのである。もし、夏目のように政府に計画された留学であつたとしたら、サンフランシスコから東海岸へアメリカ大陸を横断し、さらにはロンドンへ行き、それら各地で著書を刊行などという壮大な計画は無謀と映り、認められなかつたであらう。ノグチが結果的に多くを達成できたのは、彼が自由であつたことが大きな要素の一つだらう。

では、彼らは現地の人々とどこまで深く関わろうとしたか、しなかつたか。夏目の場合、ケア教授の講義を二ヶ月、クレイグ宅での個人講義を受けていた初めの約一年は、出掛けて行く先があつた。だが、クレイグとの関係は、契約に縛られた固いものであつた。クレイグ宅へ通つて三ヶ月ほど経つた1901年2月12日の日記に「Craig に至る。文章を添削せんことを依頼す。extra charge を望む。卑しき奴なり。⁶⁶」とあり、それ以降、彼に何か追加で依頼した記録がない。この時、追加料金を払つて文章の添削を依頼したかどうかは不明だが、滞在の初期にこのような出来事があれば、初めから小額だと思つていた文部省からの予算の中で、ますます行動範囲の狭さを感じ、イギリス人にも距離をおいたのではないか。二年目はクレイグ宅へ行くのも辞め、下宿先のみが現地のイ

⁶³ 1901年2月9日 狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990) p. 91

⁶⁴ 1901年6月19日 藤代禎輔宛 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店, 1990) p. 81

⁶⁵ 1902年4月17日 夏目鏡子宛 同上 p. 111

⁶⁶ 1901年2月12日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店, 1990) p. 36.

ギリス人と関わる場所であった。夏目は、例えば妻への手紙で、「当地日本人はあまた有之候へども交際すれば時間も損あり、かつ金力にも関する故なるべく独居読書にふけり候⁶⁷」という文章にも表れているように、時間と資金の浪費を避けるために、現地に滞在する日本人ともイギリス人ともなるべく社交しないと決めていたようである。そんな夏目も、イギリス人に招待されたり、実際に出掛けた記録はある。1901年2月16日の日記に「Mrs. Edghill より tea の invitation あり。行かねばならぬ。厭だなー。⁶⁸」とある。その“tea”に行った様子を後日の日記で次のように書いている。

外国人の、しかも日本人を一度も逢ったこともないのに ‘at home’ に呼ぶなんて野暮な奴だと思ったが仕方がなく、向も義理で呼んだんだろう。こちらも義理で行ったのだ。茶が出る。きまりきった事を二、三言話す。その内に亭主が出て来た。白髪頭の坊主だ。余り善い人ではないようだ。妻君は好い顔をしている。善い英語を使う。早々に還った。全く時間つぶしだ。西洋の社会は愚な物だ。こんな窮屈な社会を一体だれが作ったのだ。何が面白い。⁶⁹

夏目は、一応は参加したものの、このような機会を積極的に利用して自身の勉強に役立てた様子はない。この後、下宿に戻ってから家の者とカルタとドミノをしたと日記に書いてあることから、夏目日本人の言う通り、時間はともかくとして資金を掛けないでイギリス人と交流する最良の方法が下宿先の家の者との交流だったことになる。

一方、ノグチに関しては、海外生活11年で、サンフランシスコ、ミラーの住処である「高丘」、シカゴ、ニューヨーク、ロンドンの各地で理解者を見つけた。特に、その11年の大半を過ごしたアメリカでは、ウァキーン・ミラー、チャールズ・ウォレン・ストッダード、フランク・パットナム、レオニー・ギルモアという四人のアメリカ人に支えられ、彼らはノグチの生活から文章の校正、時には精神的な面も支援した。夏目のように、時間に合わせて決められた謝礼を払う関係ではなく、どちらかという、その社会に所属する対等な友人同士が助け合うような関係に近かったのではないかと思われる(ノグチが彼らに何かして上げたという記録はないが)。例えば、1900年にニューヨークへ渡った後、シカゴに住むフランク・パットナムに自筆の詩を送り、添削した後にタイプライターで清書を打ち込み返送を依頼していた時も、金銭のやり取りはなかった。

I really afraid I am imposing on you too much if I will send more the poems of mine.
“Let me be bold!” I said myself, and I will venture again to send some more.

If you be tired of such a work, you have not to hurry about. But I don’t know anybody in this large world who does take an interest in my writing, and is kind enough to correct and criticise. Except you!!

⁶⁷ 1901年1月22日 夏目鏡子宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990) p. 75

⁶⁸ 1901年2月16日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店,1990)p. 37

⁶⁹ 1901年2月21日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店,1990)pp. 39-40

Although I fear very much that I ask you too much, I do myself bold enough to send to you.

Isn't it pity I was born in a foreign country?⁷⁰

好意に甘えるのを悪いと言いつつ、頼れるのは貴方しかいないと口説いている。真意でもあろうが、何とか頼み込む話術とも取れよう。これがノグチが示した、彼らの好意に対する感謝であった。ノグチはこのように少々図々しいまでに彼らに支援を求めていたのである。また、ノグチの場合はロンドン滞在中にイギリス人から食事やティーに招待された場合も、臆することなく喜んで出掛けていった。その興奮は、レオニーに宛てた次の手紙の文面にも表れている。

I made many a nice young, lovely, kind friend among literary genius (attention!) W. B. Yeats or Lawrence Binyon, Moore and Bridges. They are so good; they invite me almost everyday. They are jolly companions. Their hairs are not long, I tell you.⁷¹

この他にも、ノグチが受信した手紙から、Lawrence Housmand, Iza Duffus Hardy, Arthur Diosy, Vera Campbell, E. J. Oldmeadow, Sidney Colvin, C. L. Brownell, Mary Foster などから招待を受けたことがわかる。ノグチは日記を残していないので、彼ら全員との面会が実現したかは不明だが、これらの招待に興奮しているノグチの姿がある。招待されて「厭だなー」と反応する夏目とは正反対である。また、次に引用するのは、ノグチからパットナムに書かれた手紙の一節だが、ウィリアム・マイケル・ロセッティの家に招待された際、パーシー・シェリー (Percy Bysshe Shelley: 1792-1822) が亡くなる前夜に横になったという椅子に座った時の興奮である。

Really? I – sitting on Shelly's sofa! What an unexpected luck! I would be great for a Japanese to come to London, and doubtless it is the greatest thing to sit on Shelly's sofa and talk with Rossetti. I secretly congratulated myself on my fortune.⁷²

体験を個人のものにとどめず、日本人としてという枠組みに入れて体験を捉え、興奮しているのである。海外で経済的な自立を目指していたノグチは、財布に余裕があった時期はないようだが、それでも残っている何枚かの写真 (Appendix 参照) を見れば、少なくとも写真撮影時には着る物には気を使い、自分をよく見せようとしていたことがわかる。

滞在先で、日本人に対する現地の人々の対応については、夏目もノグチも強く意識していたようである。夏目の場合は、ロンドンに着いて二ヶ月後の1900年12月26日には、「倫敦の中央に

⁷⁰ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 10.

⁷¹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 24 February 1903. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 172.

⁷² From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 31.

ては日本人などを珍しそうに顧みるもの一人も無之、皆非常に自身の事のみ急がしき有様に候⁷³」のように予想していた程は注目されていない印象も持ったようである。ロンドンの町を歩くと、夏目を見ながら日本人か中国人かと言ひ合う男女あり、“a handsome Jap” と冷笑していく者あり、ポルトガル人ではないかと間違える者ありで、「こんなわけであらう外へ出ても、遠くにいる者が想像するように、決して愉快ではないのである」と書いている⁷⁴。そのように、日本人であるが故の体験は、彼に競争心を抱かせた。1901年1月12日の日記には「英国人なればとて文学上の智識において必ずしも我より上なりと思ふなかれ。彼らの大部分は家業に忙しくて文学などを繙く余裕はなきなり。Respectable な新聞さえ読む閑日月はなきなり。少し談しをしてみれば直に分かるなり。…彼らの胸中には日本人に負けては恥かしとの念充分ある故ならん⁷⁵」と書いている。また、1901年2月9日付の手紙では、「一般の英国人よりも我々が学者であつて多くの書物を読んでおつて、かつ英国の事情(ある事情、昔し存在して今なきような事情)には明かであると申して差違^原なし。前には語学の困難を申して我々は二束三文の価値なきように申上げたが、かような点になると彼らよりも威張れるよ。安心し給え。⁷⁶」と書いている。このようにして自らの文学における知識の優越を認識することで、精神的なバランスを保っていたのではないかと思われる。初期の日記にも、次のような記載がある。

西洋人は日本の進歩に驚く。驚くは今まで輕蔑しておつた者が生意気なことをしたりいったりするので驚くなり。大部分の者は驚きもせねば知りもせぬなり。真に西洋人をして敬服せしむるには何年後のことやら分からぬなり。土台日本または日本人に一向 interest を持ておらぬ者多きなり。つまらぬ下宿屋の爺などが日本を appreciate せぬのみか心中輕侮するの色あるを見て、自ら頻りに法螺を吹き己れ及び己れの国をえらそうに言へばいほど向こうはこちらを馬鹿にするなり。これはこちらが立派なことをいっても先方の知識以上のことを言へば一向通ぜぬのみか皆これを conceit と見做せばなり。黙ってせせとやるべし。⁷⁷

このような夏目には、日本出身ということを手前に使い、話題を自分の得意な方に向けたりするような戦略的なところはなかったようである。夏目は1900年、パリ万国博覧会に寄つてからロンドン入りしたのだが、ジャポニズムを上手く利用するような気配はない。1902年9月12日付けの手紙には、「僕の趣味は頗る東洋的発句的だから倫敦などにはむかない⁷⁸」と書いている。また、日英同盟が締結されたのは、夏目がロンドン滞在中の1902年1月であつたが、彼はその出来事や、その出来事がもたらした町中での日本人への対応の変化などについて、コメントは残していない

⁷³ 1900年12月26日 夏目鏡子宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990)p.73

⁷⁴ 「倫敦消息」夏目漱石『文鳥・夢十夜・永日小品』(東京:角川書店,2003) p.171

⁷⁵ 1901年1月12日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店,1990)p.28

⁷⁶ 1901年2月9日 狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990)p.89. なお、文中の「差違」に振られている「原」は引用文のまま。

⁷⁷ 1901年1月25日 三好行雄編集『漱石日記』(東京:岩波書店,1990)p.31.

⁷⁸ 1901年9月12日 寺田寅彦宛書簡 三好行雄編集『漱石書簡集』(東京:岩波書店,1990)p.96

ようである。

一方、ノグチも、日本出身ということは非常に意識していた。ノグチが渡米した当時、アメリカでは日本人は見下される傾向にあり、日本人を軽蔑した「Jap」という呼び方があった。だが、そのような差別の言葉に圧倒されたという記録は今のところない。それどころか、ノグチは1901年7月、*The American Diary of a Japanese Girl* の文章を校正しているレオニーの気を損ね、次のように敢えて皮肉って「Jap」と使っているほどであった。

I cannot take back what I said other night. Now you will see that a brown Jap cannot be equipped with the very quality to be a gentleman. I am only a Jap, you know, ignorant and “narrow minded.”⁷⁹

ノグチが軽蔑した呼び方に振り回されなかったのは、実際には日本人であることを誇りに思っていたところが大きいだろう。そして、西洋社会が日本文化への理解を深めるようにと努力し、西洋社会で興味を持たれているものを執筆するなど、利用できる日本文化は最大限に利用していたといえる。それは、例えば、前章でみたように、ニューヨークに渡ってから日本らしさを詩作にも取り入れたことや、小説 *The American Diary of a Japanese Girl* でジャポニズムを上手く利用しようとしたこと、また日英同盟締結後に自費出版した詩集に (JAPANESE) と明記し、日本人であるが故に注目を集めたという点にも表れている。

このように、夏目はイギリス人とはなるべく距離を置いていたのに対し、ノグチはアメリカ人やイギリス人と、なるべく彼ら同士が使うようなマナーでその仲間入りをしようとした。その結果、夏目はロンドン社会における彼の位置づけがアウトサイダーの域を出なかった分、帰国後の日本での暮らしでイギリスを懐かしがる様子もなく、帰国後の日本社会で自身のアイデンティティに疑問を持った様子はない。一方、ノグチは、現存している手紙からは、帰国後もアメリカやイギリスの知人友人たちと手紙を通して繋がっていたのがわかり、外国でどこまでもインサイダーになろうとした分、帰国後もアメリカに戻ろうかと何度も揺れた。また、帰国から17年も経って出版した初めての日本語の詩集のタイトル『二重国籍者の詩』からも読み取れるように、日本で100%日本の社会に入り込めなかった自らのアイデンティティを認識していたといえる。ドウス昌代は、「米次郎はアメリカで名声を得ることが、帰国後に日本の詩壇で認められる近道だと信じた」と論じるが⁸⁰、「故郷に錦を飾る」帰国をするためには、先ず現地で認められなければならない。ノグチが海外での成功の先に日本での成功をどのように思い描いていたのかは不明だが、海外に認められるまで現地に入り込んだことが、逆に彼を日本の詩壇で認められにくくしてしまったといえる。

夏目とノグチが帰国した日本の受け入れ態勢についても注目すべきだろう。二人の滞在期間やその目的などに違いはあるものの、帰国時期は夏目が1903年1月、ノグチが1904年9月とそれ

⁷⁹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. July 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 84

⁸⁰ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社, 2003)p. 35

ほど離れていない。日本の内情に関して言えば、200年強にも及んだ鎖国の末に開国し、国内の近代化を目指して参考にしてきた外国は、西洋と一言で言っても常に一貫していたわけではなかった。二人の帰国を受入れた当時の日本が仰ぎ見ていた外国は、アメリカではなくヨーロッパに傾いていた時であった。明治初期は、アメリカ人の自主自由の精神が目立ち、憧れの対象となり、アメリカの自由精神は日本にとって理想のモデルでもあった⁸¹。だが、明治の中頃から、アメリカの共和制や民主制が果たして日本にとって相応しいかということに疑問が持たれ始め、日本と同じく歴史の長いイギリス⁸²、また、思想的に活気を見せているドイツなどに⁸³憧れを抱き始めた。同時に、政治、学問、教育、思想などの分野においても、アメリカよりも、むしろヨーロッパに傾いたのだ。明治初期の日本人の留学先も断然アメリカ行きが多かったのに対し、明治20年頃になると、公費での留学の殆どの行き先はヨーロッパになった⁸⁴。アメリカで学べるものはないという風潮であったのだ。そして、ノグチのように、「無一文の苦学生」であるにもかかわらず外国に行きたい若者がアメリカに行き続けたのであった⁸⁵。また、ノグチは日露戦争勃発の年に帰国したが、日露戦争後、アメリカは日本と距離を置いた。

このような状況から、公費でイギリスに留学した夏目に比べれば、アメリカから帰国したノグチの経歴は、日本で彼が受け入れらにくい立場に追いやるのに一役買ったと考えられる。だが、同時に、官費留学した夏目からは考えもつかぬようなスケールの目標と現地への適応をとおして外国で有名になった日本人としての知名度だけは高まったのであった。

⁸¹ 亀井俊介『自由の聖地』（東京：研究社、1978）pp. 54-65

⁸² 同上 p. 78

⁸³ 同上 p. 154

⁸⁴ 亀井俊介『自由の聖地』（東京：研究社、1978）p. 167

⁸⁵ 同上 p. 167

第4章 ヨネ・ノグチと西脇順三郎

ヨネ・ノグチと、ノグチより19歳年下の西脇順三郎には共通点が多い。地方出身のノグチと西脇は、早くから英語に夢中になり、英文学を好んでいた。ノグチは1903年に日本人として初めて、西脇は1925年に二人目の日本人として、イギリスのロンドンで英詩集を自費出版した。それぞれ帰国後に日本語の詩集も発表している。また、二人は慶應義塾で英文学を教える同僚でもあった。このように共通点がありながら、ノグチは生前に知名度が高かったのにも関わらず今日知る人が少ないのに対し、西脇は現在も詩人としての揺るぎない知名度がある。その違いについて光をあてるため、彼らが何故はじめに日本語ではなく英語で詩を書くことを選んだかという動機から、彼らが当時のイギリスや日本の詩人とどう関わりを持ったか、そして、ノグチの二度目の渡英、および西脇の渡英で、それぞれイマジズムおよびモダニズムをどうとらえていたか、などの観点から比較する。

4.1 何故はじめに日本語ではなく英語で詩を書いたのか

ノグチと西脇は、共に親族一同揃って日本人の中に育ったにも関わらず、日本語ではなく英語で詩を書き始めたという出発点を共有するが、二人の英語や英詩に対する考え方は顕著に異なる。

ノグチは1875年(明治8年)12月8日、現在の愛知県津島市に生まれた。10歳の時、ウィルソンのスペリング・ブック(おそらくマーカス・ウィルソン著 *Willson's Primary Speller*)という本を父親に買ってもらい、その本を毎晩枕元において外国の匂いを感じたというほど、幼い頃から英語に興味を持っていたというが¹、英語そのものだけではなく、英語を通じて知る異国に興味を持っていたのではないだろうか。ノグチの生まれ育った明治時代は、英語の習得が重要視されており、国を挙げて英語教育に取り組んでいたが、同じ明治時代でも前半と後半ではその手法が異なる。明治の前半20年では、高等教育は「お雇い外国人」としてやって来たイギリス人やアメリカ人教師によって英語で学ぶものであり、その時代に輩出された人材には、現在もいわゆる英語名人として知られている新渡戸稲造や内村鑑三、岡倉天心などがいる。ところが、この方針はノグチが10歳になるころまでに衰退していった。外国人を雇用するのは費用がかかり、同時に、そうして外国人から教育を受けた世代が教えられる年代に達したため、日本人が英語を教える時代が到来したのであった。ノグチが11歳になる1886年(明治19年)には、10歳から14歳が対象の高等小学校の科目の一つに英語が加わった。ノグチは、初めは英語担当教員の知識に感銘を受けたが、ノグチにとって生まれて初めて目にした外国人となる宣教師が彼の学校を来訪し、英語担当教員が宣教師の英語を全く理解していなかったように見え、ノグチはその教員の能力に疑問をもったと述懐している。13歳で名古屋に出、仏教系の大谷学校に通い、その後愛知県立中学校(現在

¹ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 1

の愛知県立旭丘高等学校)に通った。同校は明治元年に東京や大阪など各大都市に設立された英語学校の後身であり、同校に進学できるのは中学校のクラスから一、二人というほど、成績の優秀な学生の行く学校であった。名古屋では、宣教師の家の塀越しに、本物の英語に耳を傾けていたこともあるというから、ノグチは余程、日本人教師から学ぶ机上の英語に物足りなさを感じていたのだろう。また、英語の教科書だけでなく、サムエル・スマイルズ著 *Self-Help* などを読んだという²。

ノグチは14歳になると、父親に無断で東京の兄を頼って上京し、やがて慶應義塾に入学した。大学では経済や歴史、ハーバート・スペンサーの『教育論』などを学んだというが、アメリカ人の先生による英語の会話のクラスに出席するよりも、一人でアーヴィングの『スケッチブック』やトーマス・グレイの『田舎の教会墓地で読んだ悲歌、挽歌』を読み、オリヴァー・ゴルドスミス『廃村』を読んで和訳も試みたというから³、英文学に対する意欲は旺盛だったようである。だが、好きな英文学を存分に読みたいノグチに大学という環境が合わなかったのか、長く通わぬうちに大学を退学してしまった。先にふれた愛知県立中学校といい、慶應義塾といい、非常に優秀である証とも取れる教育機関に入学したにも関わらず、それらの学校を出れば将来の可能性が広がるという考えはノグチになかったようである。大学を中退したノグチが志賀重昂^{しげたか}という、後に地理学者や教育者として知られることになる人物の家に寄宿していたところ、米国から一時帰国中の日本人、菅原伝の訪問に遭遇し、米国行きを決意したことは先にふれたとおりである。

このように英詩というものを日本で学ばずに渡米したノグチだが、サンフランシスコ時代から、バイロンやシェイクスピアなどの英詩を自身で見つけて読んでいた。そんなノグチにとって、ミラーとの出会いは、ノグチも好きな英詩人たちの詩を好み、かつ自身も詩作をするという人物に初めてふれた機会であった。だが、初めから詩人になりたいという願望があつてミラーを訪ねたのではないということは、次の文章に明らかである。

私は渡米後、ゆっくり眠ったことも無く又悠々として読書したことも無いので、勿論給金はいらぬから朝晩一時間位の労働で置いて呉れる家がほしいと私が一友人に洩すと、『それではミラーの家へ出掛け給え。彼は非常な日本人好きだ、それに仙人じみた不思議な生活だ……あそこなら君が寝たい放題寝れる、又読みたい放題本も読める、以前に日本人がいたことがあるから、君が置いて呉れと頼めばきっとミラーは承知するに相違ない。』⁴

ミラーを訪問したノグチは、詩人ミラーの詩的な世界にノグチを詩人として迎え入れてくれたとノグチが感じ、さらに、第1章でもふれたが、ミラーが「全ての日本人が詩人であるやうに、野口君も恐

² Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 5

³ *Ibid.* pp. 7-8

⁴ 野口米次郎「米国文学論」『野口米次郎選集』第3巻(東京:クレス出版, 1998)p. 39

らく詩人であらう⁵」と言ったのを聞き、詩人となることを決めたのである。ミラーが全ての日本人が詩人と言った意味は、日本人全員が偉大な詩人となりうるというよりも、いわゆる詩的な感覚を持ち合わせた人達という意味で使ったのだらうと思われる。ところが、ノグチはミラーの言葉を自分の都合のよいように素直に受け取り、本格的な詩人となることを目指したのであった。

詩作に関しても、初めは手探りであり、自分がどこまで出来るのか、やりたいのか、それを初めから決めていたというよりは、有名になりたいとの思いで、その時々目標を掲げながら、最終的にロンドンで詩集を出版するに至ったということのようである。1889年に、既に二冊の英詩集をサンフランシスコで出版した後にある知人に送った手紙には、“I came to this America with some ambition that is earthly, but not with a purpose to write poems.”⁶と書かれている。また、ニューヨークに移動した後、フランク・パットナムに書かれた手紙に次のようなくだりから、世の中で成功するための手段として英詩を書き続けていたことが読み取れる。

I am almost alone in this big city, having no one to talk with except a few Japs who don't know of my literary ambition, I feel dreadfully lonesome. So I try to seek my own joy and delight in writing poem.

If the world acknowledges my poems, what a pleasure it will bring! Even poet cannot live without some sympathy from people. That you know very well.⁷

また、ここまで英詩に全力を傾けたかと思えば、ニューヨークでは詩作が思うように進まず、日本人として初めて出版した英語小説 *The American Diary of a Japanese Girl* を通して話題を集めたように、詩作自体は最終目標ではなく、世の中で名の知られた人物になる、という漠然とした最終目標への手段の一つだったと受け取ることができる。

では、西脇順三郎の場合はどうか。西脇は、1894年1月20日、新潟県小千谷きっての資産家の分家の次男として生まれた。ノグチよりも19歳年下である。西脇は中学校に上がる少し前から英語が好きで、それは「言語に関する限り英国人と完全に同じくすることを目的とした⁸」というほどの意気込みだった。中学時代の西脇のニックネームは「英語屋⁹」だったというから、周りも西脇の英語好きを認識していたようである。とにかく西洋文化が好きで、フランス文学やロシア文学も英語で読んでいた。ただ、西脇家は叔父や兄など親戚の多くが慶應義塾の理財科(現在の経済学部)を出ている一家で、西脇順三郎自身も当然同学部への入学が期待されていた。本人は英文科への入学が希望であった。西脇の大学入学は1914年春のことであるから、ノグチも同学部で教え始めて九年目に入り、永井荷風なども教えていた時代であった。だが、「学校に入らないで、

⁵ 同上 pp. 41-42

⁶ From Yone Noguchi to Blanche Partington. 11 October 1898. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no.20

⁷ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley. no. 7

⁸ 工藤美代子『寂しい声:西脇順三郎の生涯』(東京:筑摩書房, 1994) p. 39

⁹ 新倉俊一『評伝西脇順三郎』(東京:慶應義塾大学出版会, 2004) p. 26

自分の勝手なことをやるということは許されなかった¹⁰」という家庭の事情があり、家族の希望どおり理財科に進んだのである。理財科に通いながら英語で詩を書き始めたのは18歳の時であった。「英語で書こうとした。形は韻をふむ伝統的な詩形であった。(中略)なぜ日本語で詩をかかなかったか。日本語で詩を書くということはあめした古めかしい文学語とか雅文体で書かなければならないと信じていた。英語で書けばその困難を避けることができた。¹¹」という。西脇の目からみると、当時の日本の詩の文体は島崎藤村と上田敏の二つの派があったように見え、「日本語で書かれた詩の文体にはどうしても関心がもてなかった」というから¹²、西洋には、懂れる詩人や目指す文体があり、日本語の詩には関心を持つと試みてみたが駄目だったというようなニュアンスである。西脇は、「小説家は職業になるが詩人は職業ではないし、ただ文学の中に生きよう¹³」と思い、イェイツ、オスカー・ワイルド、ウォルター・ペイター、シモンズなどを熱心に読んだ。また、シモンズを読んでフランス文学を好み、ボードレールやランボウ、マラルメなどの詩と、フローベルの小説を読んだという。理財科に在籍していたのに文学への強い熱意が感じられる。また、西脇は大学卒業論文をラテン語で書いたというが、それは日本語に対する余程強い抵抗や、西洋に対する憧れ、西洋言語への情熱の産物とみることができる。

西脇は慶應義塾卒業後、ジャパントイズに半年ほど就職したが会社の都合で解雇され、その後、肺の病で休養したりしていたが、1920年、27歳の時、卓越した英語力を買われ母校の慶應義塾で英語教員として採用されたのだった¹⁴。この採用が転機となり、同校から1922年に29歳でイギリス留学に派遣されたのである。

ノグチはアメリカで偶然にきっかけを得て英詩を書き始め、サンフランシスコ時代から渡英までの期間で得た好意的な反響が、さらに彼のやる気を高めた。ノグチにとって、日本語で詩を書き始めなかったのは、それよりも英詩を書くきっかけが先にやってきた、ということにすぎなかったということになる。それに対し、西脇は英語と日本語の詩を天秤にかけ、後に説明できるほど明確な理由をもって英語で詩を書くことを選び、自身が置かれている状況など気にせず、周囲からの反響もなく、静かに詩に向き合っていた印象である。

4. 2 イギリスで自費出版した英詩集の評価

1903年にヨネ・ノグチが、それから22年後の1925年に西脇順三郎が、それぞれ英詩集をロンドンで自費出版した。1903年にノグチが自費出版した詩集 *From the Eastern Sea* が大きな反響を得たのは第2章でふれたとおりであるが、これとは反対に、西脇が得たものはごくごく小さな反応であった。この反応の違いは、現在の彼らの認知度とは対極である。

ノグチがロンドンで自費出版した英詩集がイギリスで大反響を得たのは日本でもニュースとなり、

¹⁰ 工藤美代子『寂しい声：西脇順三郎の生涯』(東京：筑摩書房, 1994)p. 75

¹¹ 西脇順三郎『剃刀と林檎』西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京：筑摩書房, 1994)p. 322

¹² 同上 p. 547

¹³ 同上 p. 323

¹⁴ 新倉俊一『評伝西脇順三郎』(東京：慶應義塾大学出版会, 2004)p. 57

同書は原文である英語のまま、1903年10月に日本の富山房からも出版された。ノグチが帰国する前のことである。その日本版には海外の文芸雑誌などに書かれた書評や、イギリスの作家や批評家からの感想が付録として載せられている。同書に序文を寄せたのは、はじめにふれた新渡戸稲造の他、経済学者の和田垣謙三、そして跋には志賀重昂が文章を寄せた。この日本版出版は日本の新聞や雑誌でも大きく取り上げられた。『朝日新聞』には次のように書かれている。

「日本唯一の英詩人・在米野口米次郎著」本書は日本唯一の英詩人野口米次郎君の詩集にして今春倫敦に於て出版せられ欧米の文壇を震駭せしめたるものなり。君の名声今や彼土に籍甚し、君の肖像はあらゆる新聞雑誌に掲載せられ、君の詩賦は世界の才子佳人を泣かしむ。『日英同盟が政治上近代の驚事たるが如く亦実に文学上の驚事なり』とは英国某新聞の評言なり。一篇の詩集能く邦家の名誉を世界に発揚したるもの実に未曾有の快事にあらずや。(後略)¹⁵

『読売新聞』にも次のように掲載された。

『野口氏の英詩集』厨川白村 海をへだてて祖国を距ること幾千里、身遠く北米の地に在てその彩筆をふるひ、典雅の想を巧みに異邦の語にうつしたる我が同胞の詩人野口米次郎氏の盛名、今や遂に大西洋の兩岸に高しと聞く。(中略)おもふに身は東洋の一孤客にして、よく異邦の語を用ひて其作を出せる、すでに尋常の事にあらず。(後略)¹⁶

これら二つの書評からもわかるとおり、日本人として海を隔てた海外で英詩集出版という偉業を成し遂げた初めの日本人ということに、日本のメディアも大きく反応したといえる。他に書評を載せたのは、同書第三版の最後に記載されているのを見るかぎり、萬朝報、中央新聞、二六新報、都新聞、人民新聞、ジャパントイムズ、ジャパン・ガゼット、日本人、江湖文学、慶応義塾学報、英学新報、太陽、新小説、早稲田学報、帝国文学、英文新誌などであった。先にもふれたとおり、ドウス昌代は、ノグチは「アメリカで名声を得ることが、帰国後に日本の詩壇で認められる近道だと信じた」と論じ、「故郷に錦を飾る」帰国をするためには、先ず現地で認められなければならない¹⁷、と書いているが、この英詩集出版をとおしてノグチが受けた反響は、まさにノグチが目標に掲げていたものであったと思われる。この詩集が日本で大きな話題となったのは、1903年10月に第一版が刊行され、僅か二ヶ月後には第三版が刊行されたという早さにも明らかである。

ノグチは後に書いている。

私が巴里で基督降誕祭する積りで別にして置いた三^{ポンド}磅を棒に振り十六頁の小冊子

¹⁵ 『朝日新聞』1903年11月26日

¹⁶ 『読売新聞』1903年11月29日

¹⁷ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社, 2003)p. 35

を作ってその面上へ投付けた... 倫敦の文壇は驚いた。どんなに倫敦は巨大な胴体の象でも、^{くすぐ}擦る所はたった一つだ... 私は僅々八章の詩で倫敦に打勝ったのである。自分の口から言っただけであるが、八つ位の詩で英国を動かしたといふ例は他には有るまい。今日から思ふと、何だか奇蹟にも近いやうな気がする。¹⁸

このノグチの回想を読む限り、詩集出版は、彼としては、後から振り返っても満足の間接される達成だったのである。

では、西脇順三郎の場合はどうか。西脇が渡英したのはノグチの渡英より19年後の1922年。29歳だった西脇は、英語教員として勤めていた慶應義塾から派遣という形でイギリスのオックスフォード大学へ留学した。西脇の評伝を執筆した一人、工藤美代子は、西脇の留学について以下のように書いている。

普通の日本人より、はるかに抜きん出た英語力を持ち、経済的にも潤沢であり、育った環境も豊かで、そしてなにより、幼少の頃から秀才の名をほしいままにしてきたために、およそ日本的なコンプレックスからは無縁であった西脇は、当時の日本人留学生の中では最も西洋の生活にアジャストする能力を備えた青年の一人だったのでないだろうか。¹⁹

目標や資金、知り合いや英語力など何もなかったノグチとは正反対である。ところが西脇は、オックスフォードに到着した時には既にその年の学年が始まっており、翌年の入学時期までの約一年間をロンドンで過ごさなければいけなくなった。このロンドン滞在が西脇のその後の詩作にとって何にも代え難い経験となったのである。

西脇は、彼と入れ替わり慶應義塾で教える詩人で批評家のシェラード・ヴァインズ (Sherard Vines: 1890-1974) から、イギリス人のジョン・コリア (John Collier: 1901-1980) という若者を紹介された²⁰。1901年生まれのコリアは、詩人を目指しており、コリアの仲間には、詩人、新聞記者などがいた。西脇はこれらの仲間から、西脇が渡英したまさにその年、1922年にジェイムズ・ジョイス (James Joyce: 1882-1941) の『ユリシーズ』と T・S・エリオット (Thomas Stearns Eliot: 1888-1965) の『荒地』が刊行されたこと、この二冊がいかに歴史的な作品であり、この二冊の刊行には、当時前衛の詩を模索していたエズラ・パウンドが大きく関わっていることなどを学んだのである。渡英前にペイター、シモンズ、イェイツなどを読んでいた西脇は、ロンドンでは既に誰もそれらのものを読んでいないことを知った²¹。西脇は当時を回想して「とにかくエリオットの『荒地』とジョイスの『ユリシーズ』をみると、私の過去をすべてすてなければならなかった」というほど、それは彼にとって劇的な

¹⁸ 『野口米次郎、三木露風、千家元麿、日夏耿之介』現代日本文学全集 73 (東京: 筑摩書房, 1956) p. 16

¹⁹ 工藤美代子『寂しい声: 西脇順三郎の生涯』(東京: 筑摩書房, 1994) p. 131

²⁰ 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京: みすず書房, 2003) p. 32

²¹ 西脇順三郎「未刊エッセイ」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第 12 卷 (東京: 筑摩書房, 1994) p. 82

出来事であった²²。美術にしても、西脇が知識として学んでいたギリシャのものやルネサンス時代の作品は時代遅れで、コリアたちは原始的なものや土人、古代エジプトなどから近代美術を発見していたし、ピカソを「一番代表的な芸術家としてあがめていた」のである²³。西脇は「フランスとドイツの新しい詩の運動を私はロンドンで見守っていた。イギリス人はその当時シュルレアリスムというフランスの詩の運動を知っていなかった²⁴」というほどに、新しい運動が目の前で繰り広げられているような環境に身をおいたのであった。西脇は後に、その運動のまっただ中での自身を振り返り、「私はそういうように文化様式の過渡時代に英国へ行ったことは全く混乱そのものであった。けれども全面的にモダニズムを好み、モダニズムを支持しようと努力した²⁵」と書き、「私の日本で学んだ文学という観念と全く異なる新しいヨーロッパ文学にぶつかってへとへとになった²⁶」と振り返っているように、その変化に遅れまいと必死で努力したのである。

モダニズムとの出会いは西脇の詩にも影響した。西脇は、日本では韻を合わせるソネットのような詩を書いていたらしいが、「そういう詩を沢山英国へ持って行き詩人とじんぎをきる時出そうとしたが、笑われそうで皆ストーブへ投げてしまった²⁷」という。そして、韻をふまない自由詩を書くようになったのである。新倉俊一は、「もしジョン・コリアというイガ栗頭の少年がいなかったら、オックスフォード大学へ行って、古色蒼然たる文学だけを紹介されてしまって、未だにソネットを書いていたかもしれません」と書いている²⁸。

1923年に入り、西脇がロンドンで新たに書いた詩の中から、コリアが雑誌 *The Chapbook* に西脇の詩「ケンジントン牧歌」を推薦した²⁹。その詩は、翌1924年11月に *The Chapbook* に掲載されたが、彼の詩と並んで掲載されたのが、前衛の詩集『荒地』で話題の詩人、T・S・エリオットの詩「うつろな人間」の一部「ドリスの夢の歌」だった³⁰。西脇は、自分の詩が認められたような気がした、と控えめに書いている³¹。つまり西脇は、イギリスに到着してわずか一年ほどの間に、その前に好んで書いていたソネットから、コリアから教えられた通り、時代のエリオットやパウンドの詩風に合わせようとし、それを学び、彼らのように前衛の詩を書く詩人の一人として認められたことになる。新倉は「西脇がこんなにも早く新時代の詩風を習得できたのは、彼自身の中にある諧謔の精神が宿っていたからに違いない³²」と論じている。

さらに新倉俊一は、「ケンジントン牧歌」の雑誌掲載という快挙が西脇の「好奇心をくすぐった。野口米次郎のように、(いや、それよりももっと本格的に)国際的な詩人になりたいとひそかに決意

²² 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房,1994)p.301

²³ 西脇順三郎「未刊エッセイ」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第12巻(東京:筑摩書房,1994)p.83

²⁴ 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房,1994)p.523

²⁵ 同上 p.304

²⁶ 同上 p.477

²⁷ 同上 p.328

²⁸ 新倉俊一「ロンドン時代の西脇順三郎」西脇順三郎を偲ぶ会編『幻影の人 西脇順三郎を語る』(東京:恒文社,1994)p.44

²⁹ 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房,2003)p.58

³⁰ 同上 p.59

³¹ 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房,1994)p.469

³² 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房,2003)p.59

したのだ³³」と書いている。そして、オックスフォード大学の学位試験を放棄してまで、詩集 *Spectrum* の制作に没頭した。このノグチについてのコメントは、西脇による言葉ではなく、新倉が解釈した西脇の決意であるというが、新倉によると、西脇にとって、ノグチは外国で有名になった日本人という認識であって、詩人としては認識していなかったという。(次節でふれる、1921年に刊行されたノグチの日本語の詩集に対する他の作家たちの評価も、西脇にこのような思いを抱かせた要素かもしれない。)となると、ノグチよりもっと本格的に国際的な詩人、というのは、ことに注目すべきところである。西脇は、ノグチが英詩集をロンドンで出版した初めての日本人であることは、当然意識していたはずである。だが、ノグチが、日本人であるということを全面的に売り込み、偶然にもそれは日英同盟締結直後であったことから、イギリスでは日本人の代表のように受け取られ、それはノグチを日本でも有名にした、という一連の流れに違和感を覚えていたのかもしれない。西脇はおそらく、そのようなノグチの二番煎じとして売り込みたくなかったのだろうし、その二番煎じではロンドンで注目されないと予想もしたかもしれない。同時に、西脇は、エリオットがアメリカ人であるにもかかわらず、アメリカ人であるからという理由でなく、純粋にその詩だけで新しい運動を起こしていることを意識したと思われる。つまり、19世紀の終わりにホイットマンやミラーの詩集が、そして20世紀の初めにノグチの詩集が、それぞれアメリカ人の独創性や、日本人としての独創性を携えてイギリスでもて囃された時代は終わったとも見たのかもしれない。そして、西脇自身も、国籍を超え、英語の詩を書く一人の詩人として、エリオットと同じ土俵で認められたかったのだろう。時代に敏感であろうとする西脇の姿勢は、次のような例にも見受けられる。1924年の暮れ、フランスで『シュルレアリスム革命』誌が創刊され、ロンドンの本屋で新しいフランスの詩の本を買いあさっていたのが、西脇とエリオットだったという³⁴。その時点で既に英詩集 *Spectrum* の原稿を出版社に渡してしまっていた西脇は、「この詩風は古くさいから原稿を返してくれ」と出版社に言い出し、担当者は「なぜ、これが古いんですか」と驚いたという³⁵。このエピソードは、当時の詩風に頻繁に激しい変化があったこと、いかに西脇がそれを察していたかを物語る。

結局原稿はそのまま出版されることとなり、西脇の初の英詩集 *Spectrum* は1925年8月、ケイム・プレスから刊行された。この自費出版には、西脇がイタリアへの旅費として溜めていた25ポンド全額を充てたという³⁶。出版後、西脇はオックスフォード大学を中退し、同年の10月にはイギリスを発って帰国の途についた。その後、西脇の詩集に関する書評がロンドンで二つ出た。一つめは *The Times Literary Supplement* である。

SPECTRUM. By J. Nishiwaki. 9 x 6, 78 pp. Cayme Press. 4s 6d.

The subtitle of Mr. Nishiwaki's book is "The Sick Period: A Novel." And the patient is delirious throughout, as the following typical passage will testify: --

³³ 同上 p. 59

³⁴ 新倉俊一『評伝西脇順三郎』(東京:慶応義塾大学出版会, 2004) p. 120

³⁵ 同上 p. 120

³⁶ 同上 p. 112

時代は既に終わっていたという証拠だろう。日本人が書いた英詩として注目される時代ではなかったのである。『荒地』の後のヨーロッパにはシュルレアリスムが盛況しており、この書評は西脇が時代の詩風に詩集をもって挑戦した結果だった。

西脇の英詩集出版や、彼の帰国も日本の新聞では記事にならなかった。西脇は後年、*Spectrum* について、「これは犬も吠えない気の毒なさすらい人の神経衰弱的な存在にすぎなかった。(中略)私は外国で詩集をその国の言葉で出してヨーロッパの人達と競ってみたいというのが若気のいたりの軽業であった³⁹。」と振返っており、この点でも、後に振返っても満足で誇らしい気持ちに浸っているノグチとは大違いである。だが、エリオットと並んで初めての詩が掲載された西脇は、晩年、福田隆太郎との対話で次のように語っている。

福田:とにかくエリオットと同時代でいられたわけですが、その頃からエリオットに対してライバル意識というものをもちましたか？

西脇:あったですね。ライバル意識といっちは向こうは嫌がるだろうけれども、何だ田舎者がと。しかしその当時のアメリカだって田舎ですよ。日本でぼくはつまり『シンボリスト・ムーヴメント』を書いたシモンズを読み、エリオットはアメリカでシモンズを読んだ。日本の青年が読む本というのはアメリカで読む本とだいたい同じだったのですね。だから教養というやつはだいたい同じわけですね。⁴⁰

このように、ノグチと西脇の英詩集の自費出版を比較しても、出版にあたり二人が目指したところや、その評価が全く違うのである。ノグチはノグチなりに、その特定の時代背景の中でその名が知られ、西脇も、その時代の詩風に一人の詩人として挑戦したと言える。

4.3 日本語の詩集の評価

ヨネ・ノグチと西脇順三郎は、それぞれ1921年と1933年に初めてとなる日本語で詩集を出版している。前節では、英詩を通してその名が日本でも知られたノグチと、同じく英詩をロンドンで出版したが余り大きな反響を得なかった西脇についてふれたが、日本語詩集の出版は、日本で詩人として評価される決定的な要素となった。そして、それを節目に二人の日本社会での立場にも変化が現れる。本節では、二人がそれぞれ、どのような背景で詩集を出版し、どのような時代背景でどのような評価をされたか、見てみたい。

ノグチは帰国後17年経った1921年、46歳で初めて日本語の詩集『二重国籍者の詩』を発表した。この詩集が出された当時、日本の詩の世界で最も影響力のあったのは、萩原朔太郎であった。1910年頃から、日本の詩は象徴詩から口語自由詩へと移った。これは、「内容面では象徴

³⁹ 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房,1994)p.542

⁴⁰ 工藤美代子『寂しい声:西脇順三郎の生涯』(東京:筑摩書房,1994)pp.251-252

詩における内面世界への閉塞からの日常生活への解放(開放)であり、形式面ではそのことと関わって文語定型律から口語自由律への転換⁴¹であったという。中でも、萩原朔太郎と室生犀星は1916年に二人で雑誌『感情』を創刊し、その感情詩社が、1917年に31歳の萩原の『月に吠える』を刊行したのは大きな出来事であった。彼を「大正詩壇の象徴⁴²」のような存在としたのである。文学選集をみても、萩原の『月に吠える』について、「特異な詩集であった。(中略)それまでに見ることのできない詩語の美を創り出したこと。——これらのいつさいを含めて、この詩集は当時の文壇から異常に注目され、近代詩の歴史に一新紀元を刻した。⁴³」という評価や、「『月に吠える』にたいする評価は、すでに詩史的に確定している——それが日本の近代詩に占める刻期的な優位は、この詩集の刊行当初から明白であり、現在もそうであり、かつ今後もそれがくつがえることはないだろう⁴⁴」、また「日本の詩の歴史を振り返ってみると、『月に吠える』の持っている栄光は、ちょっと比肩するものがないほど眩しい。(中略)私見をのべさせて貰えば、『月に吠える』一卷を出したことで、朔太郎は天才詩人としての役割は終わったのであり、その自分が切り拓いた道の、それ以上の開拓は、自分に続く時代の詩人たちに譲り、任せる以外仕方なかったのである⁴⁵」などと記載されていることから、この詩集の威力と、萩原朔太郎の強く、揺るぎない影響力を感じ取れるだろう。その影響力はしばらく続いた。1929年に安西冬衛が一行詩「てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった」を発表した際も、その詩的な価値について、萩原が最初に公に認め⁴⁶、この一行詩は歴史的な一行詩となり、それは安西の「詩人としての自分の位置を決定した⁴⁷」という点にも萩原の持続的な影響力の強さが感じられる。また、萩原と同志のようであった室生も1918年に29歳で『愛の詩集』を出版し、「この詩集によって無名の一青年、室生照道は、一気に流行詩人犀星となった。彼は1918年発行のこの詩集によって、当時の時代思潮、白樺的なヒューマニズムと民衆的感情の昂揚との時代の歌い手となった⁴⁸」程に劇的に中心人物となったのである。30歳前後の若者、萩原と室生が劇的に日本の詩の世界に躍り出たのを、当時40歳を少し過ぎたノグチは次のように見ていた。

僕等の三十前後の時代(この十年間の世界の詩壇は何んなに変化したであらう!)は今日と比較すると無意味な束縛(あるものは喜んで束縛を受けて居た)から鋭敏な『自由』のタッチに触れることが不可能であった。今日の三十前後の君等は北原君の言葉を借りると、電流体の感情に頭から足の爪先まで震え又びよんぴよん跳ねて居る。如何にも美しい。君等は僕等が十年前に感じ味わうことが出来なかった新領土の支配者となって居る。⁴⁹

⁴¹ 和田博文編『近現代詩を学ぶ人のために』(京都:世界思想社,1998)p.112

⁴² 同上 p.114

⁴³ 『高村光太郎、萩原朔太郎集』昭和文学全集22(東京:角川書店,1953)p.409

⁴⁴ 菅谷規矩雄『詩の原理』の情況と論理』『現代詩読本8 萩原朔太郎』(思潮社,1979)p.110

⁴⁵ 井上靖「郷土望景詩」3『現代詩読本8 萩原朔太郎』(東京:思潮社,1979)p.237

⁴⁶ 西脇順三郎「未刊エッセイ」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第12巻(東京:筑摩書房,1994)p.421

⁴⁷ 同上 p.421

⁴⁸ 中村真一郎「詩人の肖像」室生犀星『日本の詩歌』第15巻(東京:中央公論社,1968)p.402

⁴⁹ 野口米次郎「萩原朔太郎君の詩」『三田文学』大正6年5月号(東京:三田文学会,1917)p.83

ノグチはこのように彼らの若さと、彼らが置かれている時代の自由さを祝福し、同時に羨ましくも思っているのは、次の文章にも表れている。

萩原君、(中略)この不手際にかかれた感想文は十歳も年上の僕が君の詩をあいする(了解するとは云わぬ)といふ意味を伝えるに止まるものである。出来ることなら、僕も北原君位若くなくて、『互に四つ(君と北原君と室生君と僕)の独楽が今や将に愛触れむとする刹那の静謐』を味わってみたいと思ふ。それは出来ない相談だ。⁵⁰

彼らを羨ましく思ったと書いてから三年後、彼らの仲間に入ることはできないと自覚しながら、ノグチは初の日本語詩集を出版したのである。46歳のノグチが何故、17年もブランクを空けて日本語で詩を出版しようと思ったのか。その理由は定かではない。だが、一つのきっかけと思われるやり取りがある。日本語の詩を出版する数年前である1915年夏の終わり、岩野泡鳴からノグチへの批判があった。1916年に入り、ノグチは岩野へ公に返事をしたのだが、数ある批判の中でもノグチがその場で返答すると書いている批判は次の部分であり、これはノグチによる岩野の引用である。「日本と云ふ、世界的に欧米とは違った別種の発展をする文明国の、従って佛蘭西のヴェレーヌ(岩野君はつねにエルレンと書いて居られる)の如く日本から世界を相手にするヴェレーヌたるには、氏(私を指して居る)は自国語を以て歌ってゐない点に於て多大の根本的間隔がある。⁵¹」つまり、岩野は、英語のみで詩を書いているノグチを批判したのである。これに対しノグチは次のように書いている。

文章上の英語を宛も赤子が言葉を学んだように、自然に静かに習練した自分、之を言替えると私が使用する文章上の英語は所謂英語で無くて、私自身の英語が創作した特殊の言語であれば私のみが自由と秘密を握って居るのであると思つて居るのですから、自分は普通の論理で律せられるのを不愉快に思います(中略)私の確信と熟練は如何なる路を辿つて来たのであるかを、英語の文章上では実際の経験を持つて居られぬ岩野君は恐らく知られまいと思つます。⁵²

確かに、英語圏に住んで英語を習得していない者にとって、ノグチにとっての英詩を理解するのは難しい。また、ノグチの場合、前章までで見てきたように、日本人が英語で書いたという特権が大きな要素となつて評価された点はあるものの、異文化の中で彼が英語でそれだけの成果を出したことは注目に値する。だが、それは日本の外に出たことのない者にとってはわかりにくいことであつた。ノグチが、岩野に代表される多くの日本人に、詩人として理解されなくてよいのか、と疑問

⁵⁰ 同上 p. 89

⁵¹ 『読売新聞』 1916年1月21日

⁵² 『読売新聞』 1916年1月21日

を感じ、それが日本語の詩を書く決意に繋がったという可能性は十分に考えられる。また、外山卯三郎は、1919年～1920年のアメリカ講演旅行の際、国際詩人としてのキャリアを自覚したノグチは、その業績を日本でも理解されたいと思ったと推測している⁵³。そして、それまで書いた英詩の中から53篇を和訳し、英日対訳の『野口米次郎英詩選集⁵⁴』をアルス社から出そうとしたところ、その編集者である玄文社の長谷川巳之吉がノグチに興味を持ち、アルスに渡した和訳原稿を元に日本詩集『二重国籍者の詩』を出すことが決まったのだという⁵⁵。表紙は濃褐色のバック・スキンで、花瓶に生けられた花が金色で押された、当時としては驚くほど豪華なものであった。タイトルは、ノグチが「痛感していた当時の心境である『歩いてきたアメリカ文明の発見を見、また日本の著しい成長ぶりを考えて』自分はこの二つの国のお蔭で今日の大をなしてきたのだという記念」として『二重国籍者の詩』としたのだと外山卯三郎が説明し、外山自身は「非常にしゃれた」題名だと形容している⁵⁶。

『二重国籍者の詩』は、本論文の冒頭にも引用したが、次のような「自序」で始まる。

日本人が僕の日本語の詩を読むと、
「日本語の詩はまづいね、だが英語の詩は上手だらうよ」といふ。
西洋人が僕の英語の詩を読むと、
「英語の詩は読むに堪へない、然し日本語の詩は定めし立派だらう」といふ。

実際にいふと、
僕は日本語にも英語にも自信が無い。
云はば僕は二重国籍者だ……
日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ……
不徹底の悲劇……
馬鹿な、そんなことを云ふにはもう時既に遅しだ。
笑つてのける、笑つてのける！⁵⁷

だが、「ユーモアたっぷりの二重国籍者という言葉を使用した序詩⁵⁸」のはずであった「二重国籍者」という表現は、日本人の間で評価されにくい、または読者に違和感を与える日本語を書くノグチを表現する形容詞としてその後頻繁に使われるようになった。

それだけではない。同詩集は、さまざまな角度から議論を呼んだ。まず、この日本語詩集は、ノ

⁵³ 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩:その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』(東京:造形美術協会出版局, 1966)p. 118

⁵⁴ 野口米次郎『野口米次郎英詩選集』(東京:アルス, 1922)

⁵⁵ 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩:その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』(東京:造形美術協会出版局, 1966)p. 121

⁵⁶ 同上

⁵⁷ 野口米次郎『二重国籍者の詩』(東京:玄文社, 1921)pp. 1-2

⁵⁸ 外山卯三郎「英詩人として出発したヨネ・ノグチ」外山卯三郎編集『詩人ヨネ・ノグチの詩:その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』(東京:造形美術協会出版, 1966)

グチが日本の詩壇へ入ることを意味し、さまざまな反応があった。この詩集に関して、一番始めにコメントを出したのはおそらく川路柳虹であった。英文も読むことのできる川路は、ノグチの英語の詩の方がニュアンスがあり哲学と夢想が見えるのに対し、日本語の言葉からうける感じは少し“vulgar”で、音調やリズムの魅惑が乏しく、「ウマ味を抜いた滓のような処がある」と批判しながらも、その中でも好きな野口の詩をあげている⁵⁹。その次の書評は、年が明けた1922年1月に福士幸次郎によって書かれたもので、以下はその一部である。

野口米次郎さんの『二重国籍者』的活動は、この複雑多端な状況のなかから、如何にもぶっきらぼうに、すなわち其れは古来の民衆主義の詩人も躊躇するような、思いきった無頓着な唄い振りで、わたし等の聴神経に猛襲した。この未曾有な唄い振り、自分ひとりで矢つぎ早やに判断しきめつけ、述懐し、相手にイエスもノーも言わせない独断哲学者の詩、しかも現代詩壇は寛大にも毎号各雑誌にページを捧げさせ、野口さん無碍自由な飛躍をゆるした。寛大、しかり寛大である。⁶⁰

福士が、詩の内容云々の以前に、彼の詩作と発表の活動そのものに疑問を投げかけている書評からは、ノグチは一部の作家たちからあからさまに歓迎されていなかったことが汲み取れる。この翌月には、『読売新聞』に「僕等は混沌極りなき現詩壇に此の如き一人の『情熱と思索の』詩人を有つ事を誇りとする⁶¹」という書評が載る。また、1922年3月には、次のような書評も書かれた。

殊に我々にとっての驚異は、今まで英文ばかり一皮向ふに詩人として光つてゐた野口米次郎氏が突然、邦語の詩集『二重国籍者の詩』を以て肉の中に飛び込んで来た事である。実を曰ふと、英語が国語でない以上、ヨネ野口は詩籍を米国に持った日本人であつたし、“Seen and Unseen” から一九〇九年に出た“The Pilgrimage”に至るまでの五巻の詩は、おどろく程、離れた郷土に対する追憶、回想又は二つの土地に対する二面的な疑惑の不安定を常に保有して居た。詩人としてこれ程不幸な境遇に置かれた人があるだろうか。独逸に住み得ずして佛国に終つたハイネと比較すべくもない。さりながら私はその中にも野口氏の闘志的な然も完全な二重国籍を切り抜けてゐる人間性を見出し得る。⁶²

1921、1922年頃といえ、まだ30代前半の萩原と室生が詩壇の最前線にいた時代である。彼らの詩とは全くスタイルの違うノグチの『二重国籍者の詩』が、多くの日本人たちに戸惑いを抱か

⁵⁹ 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻（東京：造形美術協会出版局，1965）p. 95 原文は川路柳虹「大正 10（1921）年 11 月号の詩聖」『日本詩人』第 1 巻 3 号 91 頁

⁶⁰ 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻（東京：造形美術協会出版局，1965）pp. 93-94 原文は福士幸次郎「今年詩壇の概況」『日本詩人』第 2 巻 1 号（大正 11（1922）年 1 月号）pp. 81-82

⁶¹ 『読売新聞』1922 年 2 月 10 日

⁶² 『読売新聞』1922 年 3 月 11 日

せながら、肯定と否定の両方の反応をもって認識されていた様子が浮かび上がる。

また、ノグチ自ら「二重国籍」の要素であると詠った言語の不完全さの問題は、この詩集をもって公に明白になったのである。それまでは外国人として習得した英語が不完全であると英語母語話者から認識されるに留まっていたものが、日本語詩集を刊行したことで、日本語の不完全までもが明らかになったのだ。だが、実は詩だけに留まらず全般に亘り、自然な日本語と映らなかつたであろう点は、その後の研究からも察することができる。*The Spirit of Japanese Poetry* が1915年、『日本詩歌論』に和訳されたが(これは加藤朝鳥との共訳であった)、これに対して堀まどかは「日本語として不正確な部分も少なくなく、内容もわかりにくい⁶³」と書き、1904年の帰国直後ほどではなかつたが、「まだ日本語の文章の熟達した書き手ではなかつたのだろう」と論じている。だが、初めは帰国直後特有の症状と思われていた不自然な日本語は、結局その後も続けてノグチの特徴となった⁶⁴。

日本語だけではなく、英語も引き続き不完全であった。ノグチの英語は、結局、外国人として習得した言語という域を出る事はなく、ノグチの英語の文章を読む母語話者には常にそれがわかる程度であった。(ノグチの英文編集者たちは、引き続き、ノグチの原文をなるべく残しながら、最低限の手を加えるにとどめたのだろう。)帰国から10年経った1914年に執筆された、*The Bookman* の記事からも、ノグチの英語がどのように受け取られていたかが表れている。

To praise the work of Mr. Yone Noguchi on such grounds would be not only stupid but insulting, for his achievement is in spite of the limitations of his command of the language in which he writes. Sometimes, indeed, he is unable quite to convey his meaning to us—apart, that is from the unfamiliarity of his point of view—..... But for the most part we are glad to forget the imperfections of the medium in the beauty of the idea or mood which it expresses.⁶⁵

このように、言語に関していえば、彼は「自序」で書いたように、両言語においてハンディキャップを持っていると周囲に認識され続けた。ノグチ本人が言語に関するこのような指摘をどこまで深刻に受け止めていたかはわからない。このように話題を呼んだ『二重国籍者の詩』の、少なくともある程度の現実を反映していたと言える「自序」は、ノグチを引き続き有名にした。

『二重国籍者の詩』の刊行された1921年6月、萩原朔太郎はノグチの二冊目の日本の詩集『林檎一つ落つ』の書評を書いた。萩原はノグチより11歳年下であった。これは、萩原がノグチの作品について初めて書いた書評である⁶⁶。萩原は、次のように書いている。

⁶³ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 199

⁶⁴ 堀まどかは、その著書の「凡例」に「野口の日本語には不自然な箇所が多いが、特にママと明記せずに原文どおりに引用する」(堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. x)と書いていることから、ノグチの日本語の不自然さは、帰国直後だけにとどまらず、全てにおいて言えることだと堀が認識していたとわかる。

⁶⁵ Bickley, Francis. "Yone Noguchi's Essays." *The Bookman*. February (1914). p. 275

⁶⁶ 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965)p. 91

明白にいうと、氏は未だ日本語のリズムに慣れて居ない。すなわち表現が甚だ下手カスである。そのため氏の折角の深刻な思想が、殆ど、作品に現れて居ない。氏の詩をよむと、私はいつも「地中に埋もれている宝玉の光」を連想する。どこかに或る高貴な異常な本質が隠れている。それが地下から幽かに遠く感じられる。つまり立派な驚嘆すべき詩想がありながら、それが言葉の表現に明るく現れてでないのである。実に歯痒いことである。(野口氏自身は尚更歯痒いだろうと思う。)

だから氏が今後度々詩作して、日本語の美を真に把握するようになったとき、氏は確かに日本詩壇の一大驚異であろう。言い代えれば、氏が氏の持っている立派な情想を、はっきりと確的に表現し得たとき、氏の光彩は一大彗星の如く詩壇を白昼化するであろう。げに野口氏の情想ほど、私にとって絶大な敬意を感じさせるものはない。すくなくとも野口氏の詩想は、日本の現詩壇に流行しているような浅薄愚劣の思想と類型を別にする。(日本の今の詩壇では、世間並の人がだれもざらに感じているような平凡な類型的感情を歌って、それで一かどの詩として通るのだから世話はない。詩の評価も下落したものだ。)野口氏の詩想には、殆ど底知れぬ哲学的の深刻性がある。…されば野口氏にして、今後少しく日本語のリズムに慣れ、上述の如き深遠なる情想を、明確にはっきりと表現することができたとき、その時、日本の詩壇は根底から動揺されるだろう。すくなくとも、今日の詩壇で通用している如き無思想で無内容な空虚な感激的叙情詩は、この重厚なる詩想的叙情詩によって重圧され、その重力によって卵の空殻の如くみじんに粉碎されてしまうであろう。

最後にもう一つ、野口氏に対する我等の興味は、氏が「西洋の外套をきた日本人」であるということにある。即ち見せかけの上での趣味や想貌は、いかにも西洋人臭くありながら、本質に於てあまりに純粋な東洋人の感情を氏から見出すのである。⁶⁷

萩原も、他の書評にも増してノグチの日本語をはっきりと批判はした。だが、外山が『詩人ヨネ・ノグチ研究』でこの萩原の書評を引用して強調しているように、他の人達と違ったところは、彼の詩に哲学を感じていたところであり、「げに野口氏の情想ほど、私にとって絶大な敬意を感じさせるものはない」と尊敬していることであり、日本語の問題はありながらも、その中味はあくまでも日本人と言った部分であった。

その五年後、1926年にはノグチが詩を書き始めた1896年から30年経ったのを記念して、いくつかのイベントが行われたが、これはノグチが如何に名の知られた人物であったかわかる出来事であり、同時に、詩人としてのノグチの日本詩壇での影響力の小ささと孤独さを象徴するものとなった。本論文のはじめにも引用したように、1926年初め、野口は『読売新聞』に「…私は詩人であると信じて、過去三十年を経てきたものである。私の価値は私の詩で定められたいと希望せざるを

⁶⁷ 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965)pp. 91-92 原文は萩原朔太郎「詩壇時評」『日本詩人』第2巻第6号(大正11(1922)年6月刊)

得ない。⁶⁸」と書いている。だが、これと同じ紙面には、川路柳虹が「一私人への尊敬」と題した文章で、「ただ我々が文壇の人とか詩壇の人とかいうことを離れて誰でもが一樣に野口氏に感謝していいと思う事は、氏が何よりその英文による著述に於いて『日本』全体の代弁者となってくれていることである。⁶⁹」と書いている。この川路の文章は、ノグチの認識していたように、「詩人」として評価して欲しいというノグチ本人の希望とは裏腹に、日本でも西洋でも実際に詩ではなく散文や評論をとおして知られていた実態をあらわすものであった。

1926年5月には、同じくノグチの詩生活30年を記念して、『日本詩人』誌の野口米次郎記念号が出された。同誌は萩原朔太郎が編集しており⁷⁰、寄稿したのは、内田魯庵、若宮卯之助、生田長江、土田杏村、川路柳虹、井汲清治、広瀬哲士、幡谷正雄、長沼重隆、南江次郎、ロバート・ニコルスの11人である。詩生活30年といっても、日本語の詩を出したのはこれより僅か四年前であり、日本の作家たちには30年という実感がなかったかもしれない。彼らの寄稿からは次のようないくつかの特徴が浮かび上がってくる。

まず、彼らの多くが、ノグチを論じる難しさをあからさまにしていることである。その一年前である1925年に、シェラアド・ヴァインズという、西脇が渡英した際に入れ違いで来日した慶應義塾の教授で、自身も批評家で詩人でもあるというイギリス人が、『詩人野口米次郎論』を刊行した。そのため、若宮、井汲、幡谷の三人は、彼ら自身の言葉で書く代わりに、ノグチを称讃する文章の多くをヴァインズの本から引用している。また、生田は依頼されたこの原稿を何日も何も書けなかった、と文章を書き始め、土田においては、ノグチという存在が「父親」や「米の飯」のように近すぎる存在であり、「誰が自分の父の印象を正しく叙し、正しく論評したであらう。また誰が米の飯の味を正しく叙し、正しく論評したであらう。ノグチは日本の父であり、また米の飯なのだ。⁷¹」と、ノグチを論じる難しさを書いている。このように、やっと書き上げられたという印象を与える記事が約半数を占めた。

また、彼らの多くが実際にノグチの詩を読まずに論じていることも一つの特徴である。内田魯庵は、「日本の文芸家からノーベル賞金の受領者を詮衡するとしたら差向き第一に選に上がるは野口ヨネ君であろう。というは十数年前からの私の持説で、度々人に話した。⁷²」と書いた。ところが、これだけ堂々とノグチを賞賛する内田魯庵は「ヨネ君の西詩も少しは読んだが、実は私には善く解らないと露骨に云ってもシェレイもキーツも異邦人である門外漢の無理解は少しもノグチ君の名誉を傷つけないだろう。だが野口君の詩は西詩も邦詩も解らなかった...⁷³」と、書いているのだ。ノグチは、生涯で実際にノーベル文学賞の候補者となることはなかったが、この内田の一文から、そのように言われるまで著名であった人物と論じられることがしばしばあった。だが、このように論

⁶⁸ 『読売新聞』 1926年2月8日

⁶⁹ 『読売新聞』 1926年2月8日

⁷⁰ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 265

⁷¹ 土田杏村「日本の精神的大使野口米次郎」『日本詩人』野口米次郎記念号(東京:新潮社, 1926)p. 16

⁷² 内田魯庵「世界的に承認される亜細亜の詩人」同上 p. 2

⁷³ 同上 p. 4

じた内田魯庵自身がその価値を理解していないのであれば、このようなノーベル賞候補の議論は全く説得力がなかったはずである。若宮卯之助は「…野口は特殊の詩風を創生した。…彼が如何に英詩文に努力したかは、彼が浮世絵の研究に費やした歳月の類例を以て推すことが出来る。⁷⁴」と書いているが、詩の内容ではなく、別の研究に費やした時間から英詩の努力を推し量っているのだから、おそらく彼自身もノグチの詩を読んでいないのだろう。生田長江も「[ノグチの]日本語で書かれた物にさへ、読んでみないのが少くない。英語で書かれた物に至っては、殆んど読んでみないと云ってよい位であらう。⁷⁵」と書き、やはり両言語の作品とも読んでいない。土田杏村も「ヨネ・ノグチの英文著を私は怠慢にしてまだ一冊も読んで居ないが、ヘルンのものならば、其の大抵のものを読んでいる。⁷⁶」と書き始め、ヘルンことラフカディオ・ハーンの素晴らしさについて論じているが、ハーンのことをそれだけ読む英語力があつたにも関わらず、ノグチの著書は何も読んでいないとあからさまにしている。

また、彼らの多くがノグチの詩を読んでいないにも関わらず、ノグチが日本でそれほど認識されていないことに対して抗議しているのも特徴の一つである。生田長江は、「人も知れる如く、野口氏は最初に先ず外国人によって認められた。そして今は——嗚呼今でも、外国人によって認められているほど、日本人によって認められているであろうか？野口氏が日本人に依って、余りにも無視されすぎているとしても、それは氏が英語で書く時ほど、日本語でいい物を書いていないからではあるまい。そして其本当の理由はどこにあるだろう？⁷⁷」と疑問を投げかけているが、「あまりにも無視されすぎている」という部分に、ノグチの文壇での存在の薄さを見るようである。土田杏村は、ノグチの詩をおもしろいという若者を一人も知らないと言いながら、「ヨネ・ノグチはまったく英語国に於ける唯一の、日本の精神的大使だ。(中略)私はノグチと共に『我々日本人の間に第二ノグチを作る』ことを目下の急務だと叫びたい⁷⁸」と書いている。彼自身もノグチの作品を読んでいないにもかかわらず、形式的にノグチを賞賛しているようである。また、幡谷正雄は、ノグチが海外で多くの出版物を出している事実を上げ、「ヨネ・ノグチ氏の名声は日本よりも寧ろ外国に在る事は、以上の事実からしても当然な事でもあるが、氏の評価がより以上に日本に於いてなされる事は、何よりも望むべき事である。」と論じ、また、ノグチの英詩がアンソロジーに掲載された功績に対し、「恐らく20世紀の英詩史を物する英米人は、この異国の詩人のためにその幾頁を割愛することを忘れないだろう⁷⁹」と書いて、ノグチの海外での知名度に焦点を当てている。

ノグチの日本語についての批判もある。内田魯庵は「露骨に云えば常時の野口君の文章は半熟の未成語の累積で、外人の不消化の日本語に類するものであった。が、其中に野口君ならではの表現されない一脈の新味があつた。⁸⁰」と書いている。生田長江は「平たく云ってしまへば、氏は

⁷⁴ 若宮卯之助「野口米次郎論」『日本詩人』野口米次郎記念号(東京:新潮社, 1926) p. 10

⁷⁵ 生田長江「野口米次郎氏に就いて」同上 p. 11

⁷⁶ 土田杏村「日本の精神的大使野口米次郎」同上 p. 15

⁷⁷ 生田長江「野口米次郎氏に就いて」同上 p. 11

⁷⁸ 土田杏村「日本の精神的大使野口米次郎」同上 p. 20

⁷⁹ 幡谷正雄「世界的詩人ヨネ・ノグチ」同上 p. 48

⁸⁰ 内田魯庵「世界的に承認される亜細亜の詩人」同上 p. 4

表出の技巧がそれほど上手でない。… だが、野口氏の言葉は、別して日本語は非常に若い。氏の年齢に比べて何という若さであらう！ そこにはまだ硬化らしい何物もない。表出の形式といふ側から見た氏は、全然これからさきの人である。将来の人である。⁸¹と論じる。土田杏村も「彼の文章も実際日本文としてよほど特異なるものであると思ふ。彼は確かに精神において日本文の伝統をついで居る。併し其の文章の言語の陰影は、所謂日本文ではない。…… 彼の選択する語彙や語句にも、私はいつも多少非議したいものを持って居る。例へば彼は鴎外や荷風やほど精錬せられた日本語を使って居ない。⁸²」とその独特さに触れている。

長沼だけが、彼自身が若くして米国に行ったのは「第二のヨネ・ノグチになってやろうという意気込みさえないではなかった」と若い頃からノグチに憧れていたと書き、ノグチの詩集 *The Pilgrimage* も愛読したことにも触れ、1920年にニューヨークで面会した際、親切に面倒をみてくれた印象であったと記した⁸³。

堀まどかは、この『日本詩人』誌の野口米次郎記念号について、ノグチが「同世代の大御所的な文壇人らが高く評価しているのに並んで、若者たちも野口を称讃している⁸⁴」と論じるが、先に引用した言葉の数々を見れば、これらが純粹なる「高い評価」ではないことが浮き彫りとなってくる。ノグチの詩生活30周年が記念されるほどの知名度を保っていたことはわかり、ノグチはこれだけの人達が筆を取る程の人物であったことも明らかだが、ノグチを語るのにもっとも相応しいと選ばれたであろう彼らが書いた文章からは、ノグチの知名度ばかりが先行し、ノグチの素晴らしさを神話化してまつりあげていたわりに、その真の価値について語られずにいた当時の状況が浮かぶ。同時に彼らの文章は、誰がノグチの作品を読んできたのか、と疑問すら抱かせる。

上記の雑誌が発行されたのと同じ1926年5月、萩原朔太郎は『詩歌時代』誌にノグチの詩について寄稿した。

野口氏の詩をよんで第一に感ずることは、題材の取り扱い方や、観念の選び方、詩語の使い方や、そして何よりも根本の情操そのものが、いかにも日本人らしくなく、あたかも西洋人の作った詩を直訳でよむような気がする。試みに定本詩集中から『沈黙の鳥』と題する一篇の詩をあげてみよう。

風や世界の作られない以前に生まれた^{しじま}沈黙の鳥よ
お前は涙や恋よりもっと古い。
神秘の兄弟よ。

これを日本人の詩、すくなくとも日本的情操の詩と思うものがあるだろうか？ 詩語の

⁸¹ 生田長江「野口米次郎氏に就いて」同上 pp. 13-14

⁸² 土田杏村「日本の精神的大使野口米次郎」同上 pp. 26-27

⁸³ 長沼重隆「野口さんのこと」同上 pp. 41-43

⁸⁴ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 264

直訳的の言い廻しは別としても、詩の観念にまつわる情操性が、純粹に非日本的のものではないか。我々日本人は、たとえ新しい教育を受けたものであっても、伝統的に和歌や俳句の文字になづみ、建築や、美術や、音楽や、衣服や、食物や、それから特に日常の言語に於て、環境のいっさいが『日本的なもの』の中に生活している。したがって我々の感じ方も日本的で、詩人が詩作する場合にあっても、あの和歌や俳句の率直で印象の中心をつつまふとする表現の精神に習っている。現存する日本詩壇のあらゆる作家の詩風をみても、この日本の精神の本質は一つであって、西洋人の詩の如く、種々の観念をごてごてと並べ立てて廻りくどく論文的に書く人はない。現存する日本詩壇で、野口米次郎氏一人がこの点の異数者である。野口氏の詩風はどうみても西洋風の詩であって、日本人の作る詩でない。すくなくとも和歌や俳句の伝統に育った民族の、自ら作ろうとして作り得る詩ではない。詩語の使用法ばかりでなく、観念の運び方それ自体が外国語の文法的で、根本から西洋詩人の情操である。…要するに野口米次郎氏は全体として完全な外国人である。…我々から見るならば、野口氏の詩はあまりに西洋臭く、民族の情操性にぴったり合わない不満がある。この逆が、また欧州人から見た時の不満であろう。しかしながらそれ故に、彼の芸術はいつも僕等に新しく、いつも太平洋からのさわやかな潮風を感じさせる。まるでちがった、別の感じの詩があるということを氏の芸術によって教えられ、或る何かの貴重な教訓をうけるのである。⁸⁵

このように萩原は詳細にわたって分析し、何故ノグチの詩が日本語で書かれたものでありながら日本人には馴染みにくい詩であるかを説明している。『日本詩人』野口米次郎記念号に寄せられたどの文章よりも誠実に、ノグチのスタイルが日本詩壇でいかに独特であるのかという点がよくあらわれている。少なくとも、ノグチの作品を読んだ上での文章であるとわかる。さらに、この萩原のトーンは決して批判的ではなく、逆に、ノグチのこの独特さを教訓にしたいと前向きな印象すら与える。

萩原は、同時に、ノグチがその前年の1925年に刊行した日本語の詩集『表象叙情詩』について、「恐らく過去における氏の詩境の総収穫とも見るべきだろう。この詩集に於いて、日本語詩人としての氏は、その行くべき道の絶頂に達した観がある⁸⁶」と評価した。

これら記念出版物が発行されてから数日後の1926年5月11日、新宿のレストラン中央亭で、ある事件が起きた。『日本詩集』誌の出版記念の会が開催され、その宴会中のスピーチで、ノグチは、『日本詩人』の彼についての特集と萩原の『詩歌時代』に書かれた文章について、礼を述べたが、同時にそれらがいかにも義務的な態度で書いてあったので不満に耐えなかったと言ったのだ⁸⁷。萩原はこれを聞いて次のように思ったという。

⁸⁵ 萩原朔太郎「野口米次郎論」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965)pp. 18-22。原文は『詩歌時代』(1926年5月)。

⁸⁶ 同上 p. 21

⁸⁷ 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965)p. 98

野口氏のこの演説は私を非常に感動させた。野口氏が孤独な人であり、世に理解されていない心情の所有者であることを、私は前から深い興味と愛敬とで眺めていた。野口氏の本質的心境たる熱情を、世間の人は殆ど知らず、皮相なる氏の表皮からして、いたずらに氏をクラシックの師匠として所謂『世界的詩人』の無意味な神殿に祭りあげている。日本の詩壇一般、および浅薄なる世間の俗見がみる野口米次郎氏は、正に世界的詩人の無意味な空語で『神殿に奉られている道化者』の観がある。詩人的感性の著しい野口氏が、いかにしてこの孤独を感じない事があるだろう。思うに故国における野口氏の不満と寂しさが此所にある。⁸⁸

ノグチのスピーチを聞いてこのように興奮した萩原は、突然立ち上がって「野口氏の世界的に孤独の人たる事実を述べ、いかにこの先輩の心境にまで、詩人としての深き愛慕を感じるか」を話し始めたところ⁸⁹、萩原がノグチのことを先生と呼んでいた事に対して、岡本潤が「先生とは何だ！先生という必要はない」と遠くから野次を飛ばしたという⁹⁰。ノグチに対しては先生というのが最も相応しいと思っていた萩原は、自分の考えを思うように表現できず、更にノグチが気まずさからか、退席したのを見て、「せっかく、宴会に出席して、周囲の空気と容れられず寂しく帰って行く老詩人のことを考え、言いようもなく寂しく口悔しい思いを感じた⁹¹」という。その後、野次を飛ばした岡本潤が萩原のところへ何か話しに来たが、萩原と親しかった室生犀星は、萩原が好ましくない状況にいと早合点し、椅子を振り回して岡本潤に一直線にうちかかったという。誰かが室生を抑えてその場がおさまり、萩原は、「犀星らしき自然のユーモアが感じられ、ふしぎに人々の心をときほごした⁹²」といい、それで解散するときは後味は悪くなかったという。だが、その場に居たたまれなかったノグチにとっては後味の悪い晩だったであろう。ノグチは、形式上は詩生活30周年を祝福されるほどの知名度はあったものの、実はきわめて孤独な立場にいた当時を垣間見ることのできる出来事であった。萩原がノグチに強い尊敬の念を抱いていたことがわかり、その萩原も神話化されていたノグチの知名度に気付いていたこともわかるが、その萩原でも詩壇全体のノグチの見方を変えられなかったということになる。また、これより数日後の『読売新聞』では、この会合が写真入りで記事になっているが、大きな混乱には一切触れず、「テーブルスピーチに移って、野口米次郎氏は詩生活30年の記念として『日本詩人』が特別号を出したこと等についてこの機会に感謝と所感とを述べ、萩原朔太郎氏もそれについて短く答へた」とまとめられている⁹³。これでは、作家たちの間で実際に何が起きていたのか、一般の人達は知る由もなかった。

これに続く1926年5月15日には、慶應義塾の講堂で「紀年文芸大講演会」と題する会が『日本詩人』と『三田文学』共催で行なわれ、1000人を超える聴衆が集まった会であったという⁹⁴。司会

⁸⁸ 同上 p. 98

⁸⁹ 同上 p. 99

⁹⁰ 同上 p. 99

⁹¹ 同上 p. 100

⁹² 同上 p. 102

⁹³ 『読売新聞』1926年5月20日

⁹⁴ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 265

を務めたのは島崎藤村で、ノグチの他に佐藤春夫や川路柳虹などが話した⁹⁵。1000人もの聴衆を集めたのはノグチだけの影響力とは考えにくい、ノグチはこのような場で話すほど名の知られた人物であったということがわかる。

このように、日本で詩を出版した後のノグチは、詩人として、その詩が認められていたとは言い難い立場にいらながらも、既に神話化されていた、きわめて高い知名度を保ち続けたのである。

では、西脇順三郎の場合はどうか。西脇が約三年間の留学を終えて帰国したのは1925年であった。西脇は、それから三年経った1928年に雑誌『衣装の太陽』に寄稿した際には「ジェイコブ・フィリップス」というペンネームで書いており、新倉は、「この時期の西脇はまだ外国人としての意識を持った詩人で、日本語で詩を書くことをためらいがちであった⁹⁶」という。だが、彼がどのように日本語詩のデビューをしたかを考えれば、この時期は静かに日本語の詩壇の状況を観察していた可能性も高い。

少し遡るが、西脇は1922年、イギリスに向かう船の中で、1917年に刊行された萩原朔太郎の『月に吠える』を読んでいた。そして次のような感想を持ったと後日、記している。

萩原朔太郎という詩人は私にとって一つの光明であった。その内容(主としてその詩的情緒)もその言葉のスタイルも全面的に私をよろこばせた。忽然とこのすばらしい存在によって私は初めて日本の詩に対して関心をもつことが出来た。これが本当に私の好む日本の詩だと思いつづけた。けれどもその後十年間は詩を書いてみようとおもわなかった。またこの最大な日本の詩人に自ら進んで直接に弟子になってみようとも思わなかった。それというのは、当時私は詩人になろうと決して思わなかったからであろう。⁹⁷

日本を出た時にこのように感銘を受けた詩集に出会い、さらにヨーロッパで、わずか数人の斬新な作品が新しい詩風を作り上げたのを目の当たりにした西脇は、影響力の持つ詩人が詩風を支配することを学んだ教訓から、帰国後から、日本の詩壇内の政治を積極的に、かつ冷静に分析しようと試みていたのだろう。そして、誰がどのように詩壇をリードしているのか、把握しようとしていたのではない。西脇自身、「私は三十歳から五十歳位まですぐれた詩や詩論をあさって読みつづけた。自分のつくる詩の世界が他の人のつくった詩の世界や詩論とどういう関係にあるか考えて、自分の詩の世界を堅牢なものにしたかった⁹⁸」と書いているように、これは帰国直後だけの意識ではなく、自分の詩の世界が確実になるまで常に、自分の詩の立ち位置を模索し、日本詩壇に居場所を得ることに努力したと受け取れる。

とはいえ、実際は帰国した翌年から、日本語で詩を精力的に書いていた。発表こそしなかったものの、内心は日本語の詩に目覚めていたのである。西脇は次のように書いている。

⁹⁵ 同上 p. 265

⁹⁶ 新倉俊一『評伝西脇順三郎』(東京:慶応義塾大学出版会, 2004)p. 147

⁹⁷ 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房, 1994)p. 547

⁹⁸ 同上 p. 329

全く子供らしい希望であったが、十八頃から三十三位まで非常に詩が好きで詩を作っていた。それは覚束ない英語で書いたり、仏語で書いたりして努力したが、皆すててしまった。三十三位になってからようやく萩原流の語法とリズムで書き出した。僕は萩原から出発した。(中略)萩原さんは僕の MAISTER である。⁹⁹

西脇が感銘を受けた詩人萩原朔太郎が詩壇ではまだ影響力のある位置にあると知ったのも、彼が日本語の詩に情熱を注ぐ動機となったのではないだろうか。

萩原や室生と並んで、当時影響力のあったのは百田宗治であった。百田は、西脇よりわずか一歳年上だが、若い頃から活発に活動する人物だった。彼は、1914年ごろから始まった、民衆詩派と呼ばれる、デモクラシーの思想を背景にするグループを起こした一人でもあった¹⁰⁰。百田はこのような運動を通して、「詩における思想的・社会的側面を積極的に切りひらいた詩人¹⁰¹」と評され、次第に影響力を持つ一人となっていくようである。一方、西脇は詩集を出版する前から、ヨーロッパで学んだモダニズムに関する論考を1928年から『詩と詩論』誌などを通して発表していた。百田はそれも応援していたのである。そして、西脇を萩原や室生に紹介したのも百田であった。

西脇は1932年、39歳で初の日本語の詩集を出した経緯について、次のように振り返っている。「当時百田は萩原、室生と三頭政治をしているように思われたので、私は百田に詩集を出すことをすすめられたときは非常に名誉に思ったけれども、私としては気恥ずかしく思われてしばらく考えたものであった。¹⁰²」自分の詩が最大限受入れられる状況を模索しながら待ち続け、ついにまたとないチャンスを掴んだように受け取れる。西脇の詩集のタイトルは *Ambarvalia* といって、ラテン語でローマ人の農作の女神ケレースの祭りという意味であり¹⁰³、詩集に集められた詩の大部分が人類学的な角度を持っているからこのようなタイトルをつけたという¹⁰⁴。新倉俊一は、この頃の西脇の詩は「いわゆる『日本回帰』の傾向が知識人のあいだに風靡していた時代に、西脇はナショナリスト的な日本回帰でなく、もっと普遍的な古代回帰への道を密かに辿っていた¹⁰⁵」と分析しており、タイトルの背景が伺える。ロンドンで自費出版した英詩集にも日本らしさは押し出さず、一人の詩人というスタンスでのぞんでいた西脇だが、ここでも普遍的な部分を強調している。

百田は西脇の詩集について、次のような広告文を書いた。

(前略)一方に大冊『ヨーロッパ文学』を産み、他方にいまこの詩集を世に齎す著者は、合理

⁹⁹ 西脇順三郎「MAISTER 萩原と僕」西脇順三郎『現代詩読本9:西脇順三郎』(東京:思潮社, 1979)p. 205

¹⁰⁰ 山村暮鳥、福士幸次郎、千家元麿、百田宗治、佐藤惣之助『日本の詩歌』第13巻(東京:中央公論社, 1969)p. 407

¹⁰¹ 同上 p. 407

¹⁰² 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房, 1994)p. 550

¹⁰³ 同上 p. 550

¹⁰⁴ 同上 p. 454

¹⁰⁵ 同上 pp. 230-231

的な理性と論理の活動を要求するアカデミックな学問の世界と、くらい教室の光線からはるか遠く離れたポエジイの世界との間に介在する矛盾を少しも矛盾でなくしてしまった観がある。久しく日本の詩壇の上に停迷していた雨雲—感傷主義の覆ひが払われて、ここに始めてわれわれは明朗透徹な恒久の希臘の蒼空を垣間見ることができるのだ。刊行者は歓喜の念を以てこの詩集を世に送り出すものである。¹⁰⁶

百田に自信を持って刊行された西脇の詩集をまず評価したのは、西脇が「三頭政治」と意識していたうちの一人、室生犀星であった。室生は次のように書いている。

西脇順三郎詩集をよんでいると、かういう美しい一行に邂逅した。

天気

(覆された宝石)のやうな朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の生誕の日。

「覆された宝石」のやうな朝という感じは、実に美しい生新な朝である。これだけの一行が詩人の生涯をとほして見ても、ざらに見つけられる一行ではない。全く詩人といふものは気に入った一行を尋ねるために、都会の深山幽谷を跋涉する仙人であるかも知れぬ。近代という凡ゆる錯莫たる光景のなかに眼をすえて、そこに宝石のやうな朝を朝として感じる。よき頭をもたねばならない特異な人間である。まったく詩人というものの頭の中には何がチカチカ光っているか分からないくらいである。¹⁰⁷

この書評は更に続き、上記の西脇の三行の詩のうちの二行目と三行目の不要さについて説くのだが、それでも、最初の一行が時の詩人にこれだけ称讃されたのである。また、西脇が最も気にしていたであろう萩原も、1933年に出版された詩集の中で特記さるべきものとして西脇の詩集を挙げている¹⁰⁸。百田、萩原、室生の三人から認められた西脇は、これで日本詩壇にめでたくデビューを果たし、西脇の日本での詩人としての「運命を決めてしまった¹⁰⁹」のである。ノグチの『二重国籍者の詩』と違い、西脇の場合は当時、影響力のあった彼らによって純粋にその作品が認められたことが特長的である。

萩原は西脇の詩や詩論について、常に同意していたわけではなかった。例えば、1937年には

¹⁰⁶ 百田宗治「西脇順三郎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第別巻(東京:筑摩書房,1994)p.203

¹⁰⁷ 室生犀星「宝石と朝 新しきものに古い匂ひ」西脇順三郎『現代詩読本9:西脇順三郎』(東京:思潮社,1979)p.199

¹⁰⁸ 「西脇順三郎年表」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第12巻(東京:筑摩書房,1994)p.522

¹⁰⁹ 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房,1994)p.551

萩原は西脇のことを「感覚脱落者¹¹⁰」と呼び、西脇が積極的に推進していたシュルレアリスムを批判したが、それは萩原が西脇を詩人として尊敬しているが故であることは、萩原が「実際少なくとも日本の詩壇で、過去に氏ほどの理想的聡明さをもった詩人は一人も無かった。日本の詩壇に思想らしい思想が生れ、詩論らしい詩論が生まれたのは、全く実に西脇氏以後であり、それ以前は春山行夫君の所謂「無詩学暗黒時代」があったのみである¹¹¹」と書いていることや、晩年の萩原が西脇と親しくしていたことから明らかである。このように西脇は、戦略的に日本の詩壇に登場し、見事に自らの場所を獲得したのであった。

西脇は77歳となった1971年、「わが詩作五十年」という文章で次のように書いている。

…また事実として七十七歳になってもまだ詩というものを書くことは醜いことでもあり、恥ずかしくも思うのである。しかし私にとって詩は、若い時から今日までつづいている夢であって、どうすることもできないのである。…

…詩をつくるのにはまず、どういう詩がもっともすぐれているかを知るために、いろいろ勉強しつづけなければならない。この問題は死ぬまで考えなければならない。詩は私にとっては夢であるから、先決問題としてはどういうことが最高の夢であるか知らなければならない。…

(中略)

わたしは偶然過去五十年の間、詩のことを考えたり、作ったりしてきたが、詩作の価値は年限にもよらないし、行数にもよらない。また根本的にいえば、詩は何かしらの価値があるかないかも知れない。おそらくまったく価値がないだろう。という意味は多くの場合詩を作るということは虚栄にすぎないからである。名声を残したいという欲望が伴っている。名声を求める心は物欲であって、他の何ものでもない。詩というものは残そうとして書けば書くほど、残らないという宗教的皮肉の運命におちいる。…¹¹²

この文章から、西脇が、純粹に彼としての「詩の」価値だけを考えてきた点が読み取れ、それは、ノグチが「五十歳の所感」で書いた「私の価値は私の詩で定められたいと希望せざるを得ない(傍点は筆者)」とは対照的である。西脇がノグチ個人だけを意識して書いていたとは言えないが、西脇のこの文章は、ノグチを含む、詩を道具と考えて、「詩で」詩人の価値を認知されるのを目的にしていた詩人たちへのアンチテーゼとも読み取れる。また、この違いは、西脇が50年前、理財科の学生でありながら詩作を始めたのに対し、ノグチはアメリカで日本人として認められる手段の一つとして詩作を捉えていた出発点の違いも思い起こさせる。

ところで、日本語の詩集を出すにあたり、このように違いのあったノグチと西脇は、慶應義塾では

¹¹⁰ 萩原朔太郎「西脇順三郎氏の詩論」西脇順三郎『現代詩読本9:西脇順三郎』(東京:思潮社, 1979)p. 201

¹¹¹ 同上 p. 203

¹¹² 西脇順三郎「剃刀と林檎」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第6巻(東京:筑摩書房, 1994)pp. 700-702

同僚であったが、その当時の二人の関係は未だあまり研究されていないといえる。同校の『三田文学』は、永井荷風が1910年に創刊した文芸雑誌であり、ノグチはその創刊時から頻繁に記事を寄稿していた。1929年4月、同誌の編集・発行人は井汲清治から西脇へ、編集担当は平松幹夫から和木清三郎へと変わり、この人事は1944年3月まで続いた。ノグチは、西脇・和木の就任以降、一回しか寄稿していない。それは、次の表にまとめたとおりである。

『三田文学』に掲載されたノグチの作品(年代の古い順)

年	月	タイトル
1910	5	The morning glory
1910	7	The Moods
1910	12	Whistler
1911	1	Ros[s]etti as a poet
1911	4	火鉢(英文小品)
1911	5	Cherry blossom
1911	7	The wooden clogs
1911	11	京都(英文)
1914	11	蝶並に其他の詩(詩)
1914	12	花と詩人其他三篇(詩)
1915	3	倫敦で見た新派の絵画(評論)
1915	4	二評論(評論)
1915	5	評論五則(評論)
1915	7	私の懺悔録(随筆)
1915	9	純日本の詩歌(評論)
1915	10	若い詩の心(散文詩)
1915	11	ロセチ論(評論)
1916	1	今日の英詩潮
1916	2	チェスタアトンと痴言文学
1916	3	メスフィールドの忠臣蔵(評論)
1916	4	開かれた窓(随想)
1916	4	牛津思想の将来(評論)
1916	5	短編小説家としてのタゴール(評論)
1916	6	一立斎広重(随想)
1916	7	北川歌麿(小品)

年	月	タイトル
1916	10	哲学的料理人(随想)
1917	1	三行詩(詩)
1917	5	萩原朔太郎君の詩(評論)
1918	1	日本の女の駒下駄(随筆)
1918	2	「愛の詩集」を読む(批評)
1918	4	酔払った奴隷(随筆)
1918	7	原撫松の追憶(随筆)
1919	1	クロオセンに関して(随筆)
1921	11	野口氏の詩(批評)(西脇順三郎著)
1922	1	微風(短詩)
1922	2	人生の白紙(短詩)
1922	3	雨蛙(短詩)
1922	5	人生の第三章(短詩)
1922	6	新緑(短詩)
1922	7	五月の末(短詩)
1922	9	形体の釈放(短詩)
1922	10	一助言(短詩)
1923	1	鼠(短詩)
1926	4	われ山上に立つ(詩)
1926	7	過去三十年を振り返る
1927	8	感想二つ(随筆)
1927	10	彼の眼光(詩)
1928	1	詩二つ感想一つ
1928	6	浮世絵鳥居清信(評論)
1938	4	アン・ドロジマス その他

西脇と和木が担当し始めた1929年4月号の編集後記には、編集方針の変更などについては触れていないが、過去の『三田文学』の目次を追えば、編集兼発行人と編集担当者の変更に伴い、雑誌の内容に変化も見られる。例えば1922年にはノグチは一年間のうち八号に亘って短詩を発表しているが、1922年は毎号に誰かの(多い月には複数の寄稿者の)詩が掲載されていたのに対し、1924年になると年間でわずか三号に詩が掲載されているように、詩が含まれるかどうか

その時の編集方針に寄ったと思われる。また、西脇と和木の就任後唯一のノグチの寄稿となった1938年4月号の編集後記で、和木は「野口先生が詩数篇を寄せられた。御厚志をありがたく思ふ¹¹³」とあり、同寄稿が歓迎されていた様子から、ノグチの寄稿を減らした要素は、編集側だけではなくノグチ側の都合も考えられる。ノグチと西脇の関係、ノグチの慶應義塾での立場や様子については、今後の研究を待たねばならない。

4. 4 ノグチとエズラ・パウンドおよびイマジズムとの関係

ヨネ・ノグチが二度目に渡英したのは、1913年12月で、帰国したのは翌年1914年6月だから、西脇が渡英する約九年前にイギリス詩壇と直に交流して来たということになる。ノグチの渡英目的は、当時の桂冠詩人ロバート・ブリッジズに招聘されたオックスフォード大学で日本詩歌について講演することであった。他にも、ロンドンの日本協会で講演したり、1903年の一度目の渡英以来文通していた W・B・イェイツやロバート・ビニョン、アーサー・シモンズなど旧知の作家たちと再会したり、エズラ・パウンド (Ezra Weston Loomis Pound: 1885-1972) や T・E・ヒューム (Thomas Ernest Hulme: 1883-1917) らと面識を持つなど、さまざまな情報を更新したのであった。それは、折しもエズラ・パウンドがモダニズムの先駆けであるイマジズムを押し進めようとしていた時であった。1912年、アメリカ人のハリエット・モンロー (Harriet Monroe: 1860-1936) はシカゴで *The Poetry* という新雑誌を立ち上げ、エズラ・パウンドはその外国編集者として起用された。パウンドはこの雑誌で、イマジズムのキャンペーンを展開したのである¹¹⁴。イマジズムは、次の三原則を打ち立て、これに則った詩作を目指していた。

1. Direct treatment of the “things,” whether subjective or objective.
2. To use absolutely no word that did not contribute to the presentation.
3. As regarding rhythm: to compose in sequence of the musical phrase, not in sequence of a metronome.¹¹⁵

本節では、従来から論じられていたノグチがイマジズムやパウンドに与えた影響に再び光りをあて、また、ノグチはモダニズムの前兆をどう捉えたかという点にも注意しながら、それらが後のノグチの評価にどのように影響したかということを検証したい。

イマジズムといえば、日本文学の発句(俳句)の与えた影響については従来から論じられてきた。イマジズムの詩として最も有名である、1913年に発表されたエズラ・パウンドの以下の詩も、パウンド自身が “Hokku-like” と呼んだ詩である。

In a station of the Metro

¹¹³ 和木清三郎「編集後記」『三田文学』(三田文学会、1938)p. 183

¹¹⁴ 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房、2003)p. 31

¹¹⁵ F.S. Flint. “Imagisme” *Poetry: A Magazine of Verse*. Vol.1 October-March, 1912-1913. p. 199

The apparitions of these faces in the crowd:
Petals on a web, black bough.¹¹⁶

この詩の成り立ちの背景について、パウンドは次のように書いている。

For well over a year I have been trying to make a poem of a very beautiful thing that befell me in the Paris Underground. I got out of a train at, I think, La Concorde and in the jostle I saw a beautiful face, and then, turning suddenly, another and another, and then a beautiful child's face, and then another beautiful face. All that day I tried to find words for what this made me feel. That night as I went home along the rue Raynouard I was still trying. I could get nothing but spots of colour. I remember thinking that if I had been a painter I might started a wholly new school of painting. I tried to write the poem weeks afterwards in Italy, but found it useless. Then only the other night, wondering how I should tell the adventure, it struck me that in Japan, where a work of art is not estimated by its acreage and where sixteen [*sic*] syllables are counted enough for a poem if you arrange and puncture them properly, one might make a very little poem which would be translated about as follows: -

“The apparition of these faces in the crowd:
Petals on a wet, black bough.”

And there are, or in some other very old, very quiet civilization, some one else might understand the significance.¹¹⁷

パウンドはこの時点で日本の発句の詩形を勉強し、それは彼が詩に表したい瞬間的な情景と結びついたような感動を書いている。では、パウンドはどのようにして発句について学んだのであろうか。

1911年、当時26歳のパウンドは日本人から初めて手紙を受け取った。差出人は当時36歳のヨネ・ノグチであった。ノグチは二度目に渡英する二年前、手紙と共に自身の最新の詩集 *The Pilgrimage* を送っていた。*The Pilgrimage* には、ロンドンで自費出版した *From the Eastern Sea* に見られるように日本的なテーマや単語などをちりばめた作品の他¹¹⁸、“Hokku” と題したセクションがあり、発句は17の母音で構成されている日本の詩であることや、その主目標は作者の住む世界の雰囲気をごとだけ伝えられるかという点であること、そしてそれらのルールに則って英語で試みた二篇の詩が含まれている¹¹⁹。ここで二点の疑問が生じる。まず一つ目は、ノグチがなぜ英

¹¹⁶ Pound, Ezra. “In a Station of the Metro” *Poetry: A Magazine of Verse*. Vol.II. April to September 1913. p. 12

¹¹⁷ Pound, Ezra. “How I began” *T.P.'s Weekly* June 6, 1913. Stock, Noel ed. *Ezra Pound: Perspectives*. (Chicago: Henry Regnery Company, 1965). p. 1

¹¹⁸ 堀まどかは、*The Pilgrimage* が、ノグチのそれまでの詩集、例えば *Seen and Unseen* と比較して日本的モチーフが多いことを指摘しているが(堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 149)、本論文の2章で触れたように、日本的なモチーフはノグチがニューヨークに移った1900年の年末頃から導入されており、それが詩集で初めて現われているのは *From the Eastern Sea* である。

¹¹⁹ Noguchi, Yone. *The Pilgrimage*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 137-142

語による発句を作成したかという点である。ノグチは既に1903年8月、つまり詩集を自費出版したロンドンからニューヨークに戻った四ヶ月後には、『帝国文学』に英語による六篇の“Hokku”を掲載しており、そこに書かれた文章によるとノグチはアメリカの詩人社会で日本の発句を広めようと実験中であるという¹²⁰。ノグチはどこからヒントを得て、英語で発句を作り、アメリカで広めようとしたのだろうか。この点について、堀まどかは、1904年ごろから『帝国文学』で俳諧に関する論考が増え、正岡子規の用語「俳句」についての評論も書かれ始めた時期と重なっていることを指摘している¹²¹。この指摘に加えて、第一回目のロンドン滞在中、またはその直後に、何かきっかけとなった可能性もある。発句そのものが欧米に広がった経緯は、近年のものとしては1899年に出版された William George Aston の *A History of Japanese Literature*¹²² だという¹²³。同著には“Haikai”という言葉でその詩形体が紹介されてお、ノグチがイギリスで1903年にそれを手にした可能性は考えられるが、“Poetry of the Sixteenth Century—Haikai, Haibun, Kiōka”という短い章にまとめられているだけで、ノグチがこれだけに影響されたとは考えにくい。

二つ目は、ノグチはどのようにしてパウンドについて知り得て、何故興味を持ったのだろうかという点である。*The Pilgrimage* に同封された、ノグチ自身も“Businesslike”と形容した程に短い手紙には、パウンドの作品も読みたいと書かれている¹²⁴。エズラ・パウンドはアメリカ出身で、1908年からイギリスに移り住み、新しい詩について模索していた。パウンドは、文学史上ではイマジズム、そしてモダニズムを語る上では欠くことのできない人物であるが、1911年当時はまだ無名であった。パウンドは、その後、アーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa: 1853-1908) という、明治維新後の日本美術保存に貢献しロンドンで急死した人物の遺稿の整理・出版を、フェノロサの未亡人から託されるが、それは1913年のことであるから、ノグチがパウンドを親日家と見ていたとは時期的にも考えられない。これまでのノグチの傾向は、既に著名になっている人物や、著名でなくても彼の英文を編集するなど、彼が作品を世に出すのに有益と思われる人物との交流が主であった。和田桂子によると、考えられる経緯は二つあり、一つは発句などに興味を持って勉強しているパウンドの姿を間近で見ているイエイツ、もう一つは1903年にノグチが初めての英詩集を出版した後に面識をもったビニヨンが間に入ったのでははないかという説である¹²⁵。パウンドへの手紙の追伸としてノグチは “I am anxious to read not only your poetical work but also your criticism¹²⁶” と書いており、ノグチが既にパウンドを重要視していたようにも見られる。

パウンドからノグチへの返信には、既にノグチについて知っていたと書かれており、以下のような

¹²⁰ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 97 及び p. 483

¹²¹ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 97

¹²² Aston, W.G. *A History of Japanese Literature*. (London: William Heinemann, 1899).

¹²³ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 186

¹²⁴ Kodama, Sanahide ed. *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. (Redding Ridge: Plack Swan Books, 1987). p. 4
“As I [am] not yet acquainted with your work, I wish you will send your book or books which you like to have me read. This little note may sound quite businesslike, but I can promise you that I can do better in my next letter to you.”

¹²⁵ 和田桂子「野口米次郎のロンドン(13)—エズラ・パウンドとの交友—」『大阪学院大学外国語論集』第46号(大阪学院大学外国語学会: 第46号, 2002) pp. 85-86

¹²⁶ Kodama, Sanahide ed. *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. (Redding Ridge: Plack Swan Books, 1987). p. 4

内容が含まれていた。

I am reading those you sent me but I do not yet know what to say of them except that they have delighted me. Besides it is very hard to write to you until I know more about you. I can not [sic] help wondering how much you know of our contemporary poets & in what things of ours you would be likely to be interested. I mean I do not want to write you things that you already know as well or better than I do. Of your country I know almost nothing –surely if the east & west are ever to understand each other that understanding must come slowly & come first through the arts.¹²⁷

パウンドは、ノグチの詩については、“they have delighted me”と書いているのみで、詩よりもむしろノグチ自身について好奇心や警戒心を抱き、学ぼうとしている様子である。パウンドが発句を勉強しているなどとは一言も触れていないものの、この時、パウンドの中では詩に革命をもたらすことが既に大きな目標であったから、直接の情報源となりうる年上の日本人ノグチは果たして彼の仲間になりうるのかどうか、模索していたのかもしれない。だがノグチはこのパウンドからの手紙を、もっと単純に、これまでのようにノグチが日本人であるという点で注目されもてはやされたジャポニズムの延長のようなメッセージとして受け止めた可能性が強い。このパウンドの手紙に対する返信と思われるノグチの反応は、さらに短くビジネスライクなものであった。

Many thanks for your kind letter [together] with *Exultations* and Canzoni. I was glad to be acquainted with *Exultations*, and what a difference of your work from mine! I like to follow closely after your poetry.¹²⁸

パウンドも、ノグチの *The Pilgrimage* を読んで、自身の作風とは違うと感じたであろうが、ノグチも同様に、彼とパウンドの作風の違いを認識したことがわかる。

ノグチは英詩集 *The Pilgrimage* 刊行後も、1920年に *Japanese Hokku* と題した著書を刊行するまでの九年間で、発句に関する発信を続けていた。1913年には “What is a Hokku Poems?”¹²⁹ という発句に関する文章を英語で発表し、1914年のオックスフォード大学モダレン・カレッジでの講演では、ノグチは発句という日本伝統の詩歌と、その詩歌の本質的なものとして、沈黙の重要さや自然の賛美について語ったのであり、それは *The Spirit of Japanese Poetry* という著書となり西洋で刊行された。にも関わらず、西洋のパウンド研究者によるヨネ・ノグチに関する言及は驚く程見当たらない。日本文学研究者のアール・マイナーにおいては、その著書『西洋文学の日本発見』で、イマジストたちがどのように日本文学とくに発句から学んだかということを分析している箇

¹²⁷ From Ezra Pound to Yone Noguchi. 2 September 1911. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 395

¹²⁸ Kodama, Sanahide ed. *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. (Redding Ridge: Plack Swan Books, 1987). p. 5

¹²⁹ 堀まどかによると、雑誌『リズム』から1913年1月に発表された。堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋: 名古屋大学出版会, 2012)p. 141

処では、イマジストの一人ジョン・グールド・フレッチャーがノグチにも深い興味を持っていたと言及する程度である。マイナーは、パウンドが日本の発句からヒントを得て、先に上げた “In a station of the Metro” を仕上げた過程や、その間の発見に注目しながら、「自分が知りもせぬ国語で書かれた詩形のなかにこのような技法を発見したことは、パウンドの天才的な洞察力の一つのあらわれである¹³⁰」と書いているものの、彼がどのような経緯で発句を学ぶに至ったか、その理解にどのような資料が使われていたかという点に関しては特に論じていない。また、日本人のアメリカ文学者でも、例えば児玉実英においては、その著書 *Ezra Pound and Japan* の序文でパウンドにとってノグチは一番始めに直接やり取りした日本人である点という歴史的事実は示しているものの、その手紙が与えた影響には触れていない¹³¹。同氏は別の著書では、ノグチの詩にほとんどパウンドからの影響が見られない点を指摘し、「パウンドは、どの程度ヨネ・ノグチを評価していたのかよくわからない。少なくともあまり問題にしなかったことは確かである」としている¹³²。新倉俊一も、パウンドがノグチを『『二流詩人』と評価した』と書いているが¹³³、この起源は、次に引用するパウンドからその母親に宛てた手紙にあるだろう。

Yone Noguchi dined with me on Tuesday; interesting littérateur of the second order.
Don't like him so well as Sung, or Coomaraswami. Still you needn't repeat this, as the acquaintance may grow and there is no telling when one will want to go to Japan.¹³⁴

一方、日本人のヨネ・ノグチを研究する学者はヨネ・ノグチとイマジズム、あるいはノグチとパウンドに関して、これまで挙げた学者たちの消極的な見解とは異なる受け取り方をしている。早くからノグチとイマジズムに関する論文を発表している伯谷信義は、アール・マイナーの、イマジズムやことにパウンドに対してのノグチの影響の否定的な受け取り方を “surprising” と表現している¹³⁵。伯谷は、フェノロサの遺稿は発句については論じられておらず、パウンドに発句を紹介したという F・S・フリントや T・E・ヒュームは日本語を話さなかったのであるから、日本語の持つ微妙さなどは伝えられなかった筈であり、パウンドの情報源はノグチであったと断言している¹³⁶。さらに、伯谷によると1992年当時、イマジズムが論じられる際にノグチが言及されているのは Goodwin の研究のみであったが、そこではノグチがパウンドに影響を与えた詩人および評論家ではなく、パウンドから影響を受けた詩人として言及されていることに触れ、伯谷は、ノグチの主要な数々の英詩集が、

¹³⁰ マイナー・アール著 深瀬基寛、村上至孝、大浦幸男訳『西洋文学の日本発見』(東京:筑摩書房, 1959)p. 111

¹³¹ John Walsh “Preface” Kodama, Sanehide ed. *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. (Redding Ridge: Plack Swan Books, 1987).

¹³² 児玉実英「エズラ・パウンド」福田光治、剣持武彦、小玉晃一『欧米作家と日本近代文学』(東京:教育出版センター, 1975)p. 298

¹³³ 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房, 2003)p. 26

¹³⁴ 和田桂子「野口米次郎のロンドン(13)—エズラ・パウンドとの交友—」『大阪学院大学外国語論集』第46号(大阪学院大学外国語学会:第46号, 2002)pp. 87-88

¹³⁵ Hakutani, Yoshinobu. *Selected English Writings of Yone Noguchi, an East-West Literary Assimilation*. Vol.1 Poetry. (London and Toronto: Associated University Presses, Inc., 1990). p. 28

¹³⁶ Hakutani, Yoshinobu. *Selected English Writings of Yone Noguchi an East-West Literary Assimilation* Vol. 2 Prose. (London and Toronto: Associated University Presses, 1992). p. 31

ノグチからパウンドへ最初の手紙を出すまでには刊行されていたことを考えると、歴史的にはノグチがパウンドに影響を与えたという方が正しいと論じる。また、“Haikai(俳諧)”や“Haiku(俳句)”という言葉が“Hokku(発句)”と並んで用いられていた当時、ノグチが使い続けた“Hokku”をパウンドも使っていたという事実もあげている。

同じくヨネ・ノグチを研究する堀まどかも、マイナーが「野口という日本詩人の価値を否定的に捉え当時の英米文壇の日本崇拜ブームに批判を加えている」点に言及している¹³⁷。堀は、ノグチの発句紹介はノグチの海外発信の中で「最も重要なもの」であると位置づけている¹³⁸。さらに、「そもそも『パウンドが野口に触手を働かせたか否か』という問題設定自体が倒錯したものなのである。なぜなら、野口の方がパウンドよりも先に英米の文化人らの間で評価を受けていたのだから。実態に即して言えば、むしろ野口の方がパウンドのことを、英米詩壇を代表する重要な詩人として捉えてはいなかったという方が正確である¹³⁹」と論じる。また、ノグチとパウンドがそれほどに接点を持たなかったことに対し、「既に有名人」であったノグチは、当時「無名」で、しかも「アメリカの詩界から浮いた立場のパウンドに対して、一線をひいていたかもしれない」と論じる¹⁴⁰。

ノグチの書簡集を編集するなど、ヨネ・ノグチ研究の初期の段階で研究に携わっていた渥美育子も、書簡集の前書きで、パウンドの“In a station of the Metro”について、次のように書いている。

How can we interpret the fact that there is the famous metro poem of Pound in the copies of his letters to Noguchi?

To Yone Noguchi

In a station of the “Metro”

The apparitions of these faces in the crowd:

Petals on a web, black bough,

Ezra Pound

We can possibly imagine that he presented this to Noguchi as his hokku poem during Noguchi’s stay in London. The stimulation Noguchi gave to the Imagist Movement must have been more direct than the mere fact that he wrote free verse with haiku-type images in the fin-de-siècle United States and published many translations of Japanese hokku, though his influence was absorbed in the strong inward necessity of the advancement of English modern poetry.¹⁴¹

¹³⁷ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 151

¹³⁸ 同上 p. 146

¹³⁹ 同上 p. 10

¹⁴⁰ 同上 p. 218

¹⁴¹ Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). p. 15

渥美は、『詩人ヨネ・ノグチ研究 3』でも、同内容について触れている¹⁴²。だが、渥美がここで指しているパウンドからノグチへの手紙は、同書簡集には含まれておらず、堀まどかも手紙の根拠が明確でないことを指摘している¹⁴³。先に引用したパウンド自身の文章“*How I began*”にもノグチは出てこず、他の西洋の学者が、パウンドの詩“*In a station of the Metro*”について言及する時にも、ヨネ・ノグチは登場しないのである。または、渥美自身も、パウンドがこの有名なイマジズムの詩をノグチにおくったという事実を確認できていないということが、彼女の上記の文章“*can possibly imagine*”という弱い表現に暗示されているとも言える¹⁴⁴。このように、ヨネ・ノグチの研究者にとってはエズラ・パウンドとノグチの関係が歴史的に過小評価されているように見えている実態が浮き彫りになるが、パウンドがノグチから受けた影響を後押しするような証拠は、現在のところ、これ以上ないようである。

次に、ノグチがどのようにイマジズム、そしてモダニズムを受け止めていたのかという点を見てみたい。ノグチが渡英した1913年は、英語純化協会 (*the Society for Pure English*) が設立された年であった。同協会は、当時の桂冠詩人であり野口をオックスフォードに招待したロバート・ブリッジズや、ウォルター・ラレリらを支援していたのであり、これと対局の立場にいたのが、W.S.ブラントを中心として起こっていた、英語の帝国主義に対する反対運動であったのだ¹⁴⁵。ヨネ・ノグチは前者が支援する詩人たちから認められた存在であったし、パウンドが目指したり西脇順三郎が影響を受けたのは、後者がおこした運動の流れだったのだ。だが、堀まどかは、ブリッジズからノグチにオックスフォード大学での講演ではウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドについては言及を抑えるように言ったこと、それが故に、ノグチはオックスフォード大学内のペイターが在籍していたカレッジを見たいと言い出すのを控えたエピソードに触れており¹⁴⁶、ノグチが時代の風潮を感じ取ったように受け取れる。とはいうものの、ノグチは新しく運動を起こそうとしている人たちには特に感銘を受けなかったようである。ノグチが1926年に刊行した『霧の倫敦』でも、「ゴス先生の周囲に集まって組織されてある文芸的空気と全然異った空気は、ソホ・スクエア近くフリツ街に於ける『夜の接見』で発見されました」と書いており、そこでヒュームやパウンドにも会ったと書かれているが、彼らの印象については触れられていない¹⁴⁷。1913年12月16日付の Harold Edward Monro (1879-1932) からノグチへの手紙で、Monro はノグチを観劇に招待したあとでソーホーへ行き、ヒュームや他の画家や作家たちに紹介したいと書いているから¹⁴⁸、ロンドン滞在の初期であるこの時に、既にパウンドに会っている可能性もある。にも関わらず、1914年

¹⁴² 渥美育子「ヨネ・ノグチ関係英文書簡について」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局, 1963) p. 118

¹⁴³ 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 512

¹⁴⁴ さらに、東京女子大学現代教養学部教授の Dr. David Ewick というエズラ・パウンドの研究者にも問い合わせたが、同氏も、渥美育子の著書以外にパウンドからノグチにこの詩が送られたと記述した文献を見たことがないという。

¹⁴⁵ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012) p. 91

¹⁴⁶ 同上 pp. 182-183

¹⁴⁷ 野口米次郎『霧の倫敦』(東京:第一書房, 1926) pp. 75-76

¹⁴⁸ From Harold Monro to Yone Noguchi. 16 December 1913. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 401

1月17日のノグチからレオニー宛ての手紙には、“A few nights ago I dined with Robert Bridges, Poet Laureate, who was exceedingly interesting British type of poet: I am going to spend a day or two with him at his home near Oxford.”¹⁴⁹と書かれており、他にもバーナード・ショウやW・B・イェイツと食事をしたことなどに触れているが、パウンドやヒュームなど前衛の詩を押し進めていたメンバーは登場しない。ノグチは実際に彼らと話し、彼らの企てている動きや情熱も感じる機会があったにも関わらず、彼らから特に刺激を受けなかったと思われる。そして、彼らも同様に、ノグチは影響を持つ人物と捉えなかったのであろう。それが故に、彼らがノグチに関して特に何も書き残してはおらず、それは、西洋でパウンドらイマジストを研究している学者たちにノグチが知られていない理由の裏付けとなるのではないかと思われる。

1914年9月には、T・S・エリオットがパウンドを訪ね、その詩に感激したパウンドは、*The Poetry* にエリオットの詩を推薦したのを皮切りに、エリオットをプロモートし始め、1917年にはエリオットの詩集 *Prufrock and Other Observations* を出版したのだ。だが、イギリスでは、「この詩集は旧詩壇では『酔っ払った奴隷』のたわごとと嘲笑された¹⁵⁰」のである。ここで新倉俊一が注目しているのは、「その評言を受け売りして」1918年4月号の『三田文学』に「酔っ払った奴隷」という記事を寄稿した点である¹⁵¹。ノグチはその記事で、エリオットがアメリカ出身でありながらイギリスで詩を書いており、それはノグチが一時そうしたように、外国人としての特権を自由に使って詩を書いている点や、アーサー・ワフという相当以前から相当の名声を得た評論家がエリオットを「酔っ払った奴隷」と評し英国人の大部分もエリオットをそのように見ている、更にエリオットの詩集は難解な英語で書かれているから普通に読んでとはとても分からない、というような内容である。ノグチは当時43歳であったが、イギリスで *The Poetry Review* を編集していた当時38歳のハロルド・モンローも実はこのエリオットの詩集は評価していなかった¹⁵²。新倉は、当時52歳のイェイツもエリオットの詩は半分しか理解しなかった、と言った。だが、エリオットの詩は、西脇順三郎や、彼が渡英後親しくしたジョン・コリアなどの若者たちからは「新しい詩の典型として、熱狂的に歓迎され¹⁵³」たというのである。これらの点から、新しいスタイルの詩を受入れるか否かの重要な要素の一つには、年齢が関係していると言えるかもしれない。あるスタイルを信じて長年蓄積がある文芸家たちには、新しいスタイルは受け入れ難かったのではないだろうか。

ノグチは『荒地』が出た四年後の1926年の著書『海外の交友』にも、エリオットについて次のように書いている。

何といても近代の英国詩壇で最も特殊の詩人はエリオットであらう。彼は何処で生まれた男だか知らないが、外国人といふ態度で英国詩壇に立ってゐる。『外国人であるといふこと

¹⁴⁹ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 17 January 1914. *Ibid.* no. 403

¹⁵⁰ 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房, 2003) p. 44

¹⁵¹ 野口米次郎「酔っ払った奴隷」『三田文学』大正7年4月号(東京:三田文学会, 1918) pp. 131-135

¹⁵² 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京:みすず書房, 2003) p. 44

¹⁵³ 同上 p. 45

は文学的理智を磨く上に最大必要条件だ』と信ずる一人である。ジェームスは外国人として英文壇に生きた。ツルゲネエフも外国人として巴里に住んだ。英国人として乃至は仏蘭西人として取り入れることが出来ない理智と思想を、彼らは外国人という治外法権で整理し又自由に使用することの出来た幸福な人である。彼等と同様にエリオットには国籍の歴史がない。文学上の伝統を持たない。彼に二三ブラウニングに比較される作品があるがブラウニングの伝統もない。又ヘンリーの作品に類似するものがあるが、彼はヘンリーの伝統も持たない。¹⁵⁴

ノグチは、自身が1903年の詩集出版に見られるように、外国人としての特権が活かされて注目された経験を持つからか、エリオットが注目されている事実も、外国人という特権という観点からしか見ることができなかつたようである。このようにして、ノグチはモダニズムを理解し切れず、新しい動きに乗り切れなかつた。モダニズムを瞬時に察し、懸命について行こうとした日本人としては、西脇の登場を待たねばならなかつた。

最後に、本章で比較してきたノグチと西脇順三郎それぞれの詩を、パウンドがどのように評価したかという点である。堀まどかは「日本の英文学の中では、パウンドを高く評価し、パウンドと親しくした西脇順三郎はときに正当派の詩人として持ち上げられても、野口については『二流』とみなして言及を控えるという態度が未だに根強い¹⁵⁵」とあるが、実際は、西脇とパウンドは個人的な繋がりがなかつたから、親しくはしていなかつた。従って、ノグチと西脇の詩は、パウンドとの個人的な親しさとは関係のないところでそれぞれパウンドに評価されたといえることができる。まず、ノグチの詩であるが、先にふれたように、彼はパウンドに *The Pilgrimage* を送付し、加えて彼らは個人的に面識を持ったものの、パウンドがノグチの詩を評価した記録は、パウンドがノグチに宛てた手紙以外にはない。エリオットが『荒地』を持ってパウンドを訪ね、その詩が気に入られた話は知られているが、パウンドは詩人が個人的に持ち込んだ作品を全て気に入ったわけではないことは、パウンドがノグチの作品に特に注目しなかつた点からも明らかである。一方、西脇は、1958年から少なくとも1961年までの三年間、ノーベル文学賞候補者に選出された¹⁵⁶。その経緯は、次のようにいわれている。1956年秋に岩崎良三がエズラ・パウンドに手紙と西脇の詩集『京都の一月』を送ったところ、パウンドは「私が近頃みたいずれの詩よりも活力ある英語を備えており、地上の反対側に一人の立派な詩人の存在することを知ったことは心暖まることだ」と評し、パウンドの娘にイタリア語訳を出版させたり、1957年8月には「[西脇を]日本人がまだ受けていないノーベル文学賞の受賞者に推薦したらどうか」と岩崎に言って来たのがきっかけで、正式に候補になったのだ¹⁵⁷。堀まどかは、西脇が正式にノーベル文学賞候補になった時、既にノグチの死後10年が経過していることから、「この評価のみからパウンドが野口よりも西脇を評価していたとは言えないだろうし、しかもパウンド自身、第二次大戦中のファシスト党への参与を咎められ、西脇を見出した頃には

¹⁵⁴ 野口米次郎「海外の交友」野口米次郎『野口米次郎選集』第3巻(東京:クレス出版, 1998)p. 467

¹⁵⁵ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 9

¹⁵⁶ 『朝日新聞』2012年9月22日

¹⁵⁷ 「月報」西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第11巻(東京:筑摩書房, 1994)pp. 7-8

すでに詩人としての権威を失っていた¹⁵⁸」と論じる。確かに、この評価のみから、パウンドのノグチと西脇の評価は語れないが、ノグチには別の直接的なチャンスが、それも西脇がまだ国外に出たこともない時代からあったことを考えれば、ノグチと西脇それぞれがパウンドの目に留まる機会は公平にあったといえる。また、パウンド自身の詩人としての評価は別にしても、パウンドの働きがあつてこそ、西脇がノーベル賞候補になったのであつた¹⁵⁹。パウンドが西脇の詩を評価した点から、彼は英語を母語とする詩人たちの作品だけを評価したわけでもなく、また個人的な繋がりも評価の基準ではないことから、パウンドは純粹に詩を評価したと言える。

1913年のノグチの二度目の渡英から、1958年の西脇のノーベル文学賞候補までに起きたいくつかの出来事に光をあててきた。ノグチの2度目の渡英時から1920年代にかけては、彼が一度目に渡英した1903年頃とは違い、日本人が英語で書いてもてはやされる時代は終わっていたと、ノグチも察したであろう。彼なりに発句について英語で発信するなどの工夫はしていたものの、ヨーロッパでの新しい動きを認識して、タイミングよく便乗することが出来なかったことが、結果的に後の研究でノグチの名が登場しない原因の一つではないかと思われる。

¹⁵⁸ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 10

¹⁵⁹ 『朝日新聞』2012年9月22日の記事には、西脇については、1961年の時点で「情報が欠如しているため、判断ができない。様子を見る必要がある」とあり、「翻訳の少なさが響いたようだ」と書かれている。

第5章：ヨネ・ノグチと戦争

ヨネ・ノグチの生前の名声と今日の忘却を研究する上で重要な要素となるのが、日中戦争と第二次世界大戦時におけるノグチの言動である。ノグチの生前に起こった戦争と言え、日清・日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争と第二次世界大戦があげられる。10代後半からの11年間をアメリカとイギリスで暮らし、帰国後も、国内外で名の知られたノグチは、平和時は国際人として生きていった。日本を活動の拠点にしながらも、「エトランゼ」や「二重国籍者」という表現で自身の状況をあらわすなど、日本だけに所属していないという点を強調してきた。また、そのように日本と西洋の狭間に所属しようとするのは、帰国後も日本と西洋を繋ぐ日本の文化大使のように活動してきたノグチにとって重要不可欠な要素であった。

だが、戦争はノグチを日本人に立ち返らせた。先にあげた五つの戦争のうち、第一次世界大戦を除く全ての戦争で、ノグチは日本人であると強く意識して行動したといえる。(後述するが、第一次世界大戦中、ノグチは日本におり、遠く離れた地域での戦争と扱っていた節がある。)そして、それらの戦争で、ノグチは、日本と西洋両方の文化を知り、西洋に精通する日本人としての立場から、戦争と向き合ったのである。はじめの二つの戦争では、彼の立場や知名度を活かして、日本について精力的にアピールしたものの、彼の内面にも、そして外的にも、何も矛盾は生じなかった。ところが、日本人としての立場をさらに明確にしたのが、日中戦争と第二次世界大戦である。この二つの戦争では、日本が、ノグチが一時は第二の故郷とも感じたアメリカと闘わなければならない、ノグチは日本の側について言動していたといえる。それがアメリカに対しての「忘恩行為」であると本人も承知していたのは、亀井俊介も論じるところである¹。それでも、国際人であったノグチは、これらの戦争で意識的に国粹主義の立場を選択し、それ以前から名の知られた人物であった彼は、公にその立場を貫かねばならぬ立場にあった。坪井秀人は、戦時中のノグチの言動について、次のように論じている。

高村光太郎とともに重要な戦争詩人に数えられる一人に野口米次郎がいる。重要、というのは彼がすぐれた戦争詩を書いたからではもちろんない。英語で詩を書き始め日本人としては恐らく最初に欧米の文壇からお墨付きを貰ったヨネ・ノグチの詩は、日本語で書かれた物について見るかぎり読むにたえるものは少ない。彼が戦争詩の文脈で重要なのは、『二重国籍者』という過剰な選良意識が「大東亜」建設の選良意識にスライドしている点(彼には『起きてよ印度』なる著作がある)、第二に翻訳調の妙なポーズが全き日本語に豹変して熱烈な愛国詩を書き、その多くが朗読されている点からである²。

¹ 亀井俊介「ヨネ・ノグチ研究の極私的展望一序に代えて」星野文子『ヨネ・ノグチ 夢を追いかけた国際詩人』(東京:彩流社、2012)

² 坪井秀人『声の祝祭:日本近代詩と戦争』(名古屋:名古屋大学出版会、1997)p. 216

坪井がここに書いているように、一時は『二重国籍者』であった彼が、国民の愛国心をあおるような詩を多く執筆したのである。坪井は、ノグチが『二重国籍者』の自覚を「あっさりと放棄した³」とも書いている。だが、公に日本人の立場に立って言動するまでや、第二次世界大戦中に発表した詩に見られる彼の精神的な葛藤とも思える部分は、『二重国籍者』故のものとも思える。本章では、これらの戦争中、国粹主義の立場をとったノグチの言動や考え方に注目する。

5.1 日清・日露戦争、および第一次世界大戦におけるノグチの言動

ノグチは、1894年の日清戦争、および1904年の日露戦争の勃発をアメリカで経験した。ノグチが、渡米する前の約18年の間に、日本を特に意識していた記録は残されていない。前述したように、むしろ、幼少期から異国文化に興味を持ち、積極的に英語や英文学を勉強し、西洋文化に憧れを抱いていたのである。ところが、憧れていたアメリカにやっと上陸した初日、日本人であるが故に不当な扱いを受けた。*The Story of Yone Noguchi, Told by Himself* には、次のように書かれている。

I was suddenly struck by a hard hand from behind, and found a large, red-faced fellow, somewhat smiling in scone, who, seeing my face, exclaimed, 'Hello, Jap!' I was terribly indignant to be addressed in such a fashion; my indignation increased when he ran away, after spitting on my face. I recalled my friend, who said that I should have such a determination as if I were entering among enemies; I thrilled from fear with the uncertainty and even the darkness of my future.⁴

この出来事を通して、ノグチは初めて日本人であることを意識したかもしれない。また、世界における日本の立ち位置を考えるきっかけにもなったであろう。ノグチはこの文章以外に、アメリカで日本人であるが故に、あからさまな形で不当に扱われた経験は同書に書き残していない。だが、ノグチよりも半年早く、1893年6月にアメリカのカリフォルニア州に渡った牧野義雄は、自身の半生を綴った *A Japanese Artist in London* で次のように書いていることから、当時のアメリカでは、日本人の多くが立場の弱さを感じたり、物理的な恐怖を感じていたと想像できる。

I was rather amused with my poor life, but by no means did I feel pleasant with the way those Californians treated me. It was the world-known fact that they hate Japanese. While I have been there four years I never went out to the parks, for I was so frightened of those savage people, who threw stones and bricks at me. Even when I was walking on the street the showers of pebbles used to fall upon me often. And I was spat on more occasionally. Of course they were very low-class peoples, but even better-class peoples

³ 同上 p. 217

⁴ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. Kamei, Shunsuke. ed. (Tokyo: Edition Synapse, 2007) p. 28

had not a very nice manner to the Japanese. ... Such was my life in America. But I had not so bad a feeling then as I should surely have if it happened now! Because America was the first foreign country I ever visited in my life, so I thought, if we Japanese go out anywhere we shall be treated like that, as an inferior race.⁵

このような牧野による当時のカリフォルニアの描写を読めば、ノグチが初日以降は、唾を吐きかけられたり石を飛ばされたりという不当な扱いを経験しなかったとは考えにくい。だが、何故ノグチはそのことに触れていないのだろうか。おそらくノグチは、牧野のような経験があっても、だからと言って日本人が劣っている人種であるという結論は持たなかった。逆に、このような不当な扱いは、ノグチにどのような面で日本が西洋よりも優れているのかと考え、日本や日本人としての自己を顧みるきっかけを作ったようである。次の文には、改めて日本について考えた形跡が見られる。

わたくしは渡米したその瞬間からアメリカの物質的に富裕であることにおどろいた...もしわたくしどもの戦闘が物質的に行はれるとしたならば、どうていわたくしどもに勝目がない。わたくしどもは精神的かあるいは芸術的に西洋人と闘わねばならない。それが日本人をかれの地位にまでもちあげる唯一の名案であると信じた。わたくしは西洋人の弱点に打ち込む撃剣の一手がある。そしてそれは精神生活の一語で尽きる。わたくしは如何に日本人が精神的であるか、即ち芸術的であるかを立証して彼らに打勝とうとした⁶。

このように、日本は、精神、あるいは芸術の面においてのみ、西洋文化から認識される可能性をノグチは感じた。また、彼にこのような認識があったからこそ、ミラーと出会った後から、頑なにも文学にこだわり続けたといえる。

1894年、日清戦争が勃発した。ノグチにとっては初の戦争であった。ノグチがカリフォルニアに滞在し始めてから八ヶ月ほどしか経っておらず、アメリカ社会で何とか食べて行くのに必死に働いていた頃である。渡米して間もなく、英語も不自由であったから、ノグチがアメリカと日本の狭間に立っていたという意識はまだ芽生えていなかったであろう。したがって、自身の立場を、狭間から日本人という立場に意識的に戻すプロセスは未だなかったと考えられる。だが、それでも、日本人であるが故に差別すらされていたというアメリカ社会で、日本人であるという意識を強く持って行動したのが、少ない記録から読み取れる。上記した自伝によると、当時ノグチはメンロウパークのホテルで皿洗いをしていた。同じホテルで働いていた日本人シェフが英語の文章を読めず、そのシェフに戦争について英字新聞で学んで報告するのも日課のひとつであったという。当時、新聞を読むほどの知識がなかったノグチは、朝の四時には起床し、夜の十時前には仕事が終わらなかった程の重労働の毎日で、英字新聞を読むために夜中の一時前に床に就いたことはなかったと

⁵ Markino, Yoshio. *A Japanese Artist in London*. (London: Chatt & Windus, 1910), pp. 5-6.

⁶ 外山卯三郎「ヨネ・ノグチの十七字詩とその波紋」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局, 1975)pp. 16-17

いほど勉強し、一ヶ月程で何とか読めるようになったという⁷。ノグチは次のように書いている。

what a delight it was to read the paper with the battle news in my spare time! When the war was quite advanced, almost reaching the zenith of interest as Li Hang Chang, the appointed Chinese Special Envoy, had already left home for Bakan to meet Ito, my mind grew restless from a sudden burst of desire to see my friends at San Francisco, and talk over the war, if it were necessary, even to fight with them.⁸

ノグチは、ここに書いているように実際にサンフランシスコに戻り、その後三ヶ月は邦字日刊紙『桑港新聞』に英字新聞からニュースを翻訳して載せていたという。また、中国と日本についての違いをよく理解していなかった当時のアメリカで、その違いを説明し、終戦時には何故日本が日清戦争に勝ったのかと説明するのに、英語を使う機会が増えたともいう⁹。

1904年2月に日露戦争が始まった時には、ノグチは日本を離れて11年が経っていた。先述したように、アメリカでは、現地で暮らす日本人よりもアメリカ人の友人たちの方が、ノグチの文学に対する夢を理解して支援し、イギリスに渡れば自身がアメリカ化したと認識せざるを得ないほど、アメリカはノグチにとって第二の故郷のようでもあった。何よりも、既に三冊の詩集と一冊の小説をアメリカとイギリスで実際に出版していたのは、アメリカ社会とイギリス社会に入り込んでいた証拠であった。

だが、日露戦争も、ノグチを日本人に立ち返らせた。それまでにアメリカの雑誌事情もある程度知り、出版社とも多少の繋がりがあったノグチは、その特権を生かして日本の文化や文学などについて発信した。当時のノグチの活動については塩崎智著『日露戦争 もう一つの世界 アメリカの世論を動かした五人の明治人』に詳しい。同書によると、日露戦争開戦後、*The Bookman* 三月号に、“What English Books Are Known in Japan?”、同誌の四月号には“Journalism in Japan”、*Critic* 四月号には“Evolution of Modern Japanese Literature”、同誌の五月号に“Japanese Women Authors”、*National Magazine* 四月号には“The Outcome of the War for Japan”、*The Bookman* 七月号に“Japanese Humour and Caricature”、また *The Reader Magazine* 七月号には“Koyo Ozaki” いう具合に、日本の文学や文化など「ほとんど戦争と直接関係のないものばかり」を記事にまとめ、1904年に入ってから半年間で10本ほど寄稿しているという¹⁰。このように、精力的に執筆をこなしていたノグチの意図について、塩崎は、「日本が先進国の仲間入りを果たしつつあること印象付けたかった」と論じている¹¹。

ノグチは上記の記事を寄稿後、アメリカのいくつかの新聞や雑誌と、特派員として記事を寄稿す

⁷ Noguchi, Yone. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 39

⁸ *Ibid.* pp. 38-39

⁹ *Ibid.* p. 16

¹⁰ 塩崎智『日露戦争 もう一つの戦い—アメリカ世論を動かした五人の英語名人』(東京:祥伝社新書, 2006) pp. 106-107

¹¹ 同上 p. 107

る契約を結び、1904年9月に11年ぶりに帰国した。戦争を通し、日本人というアイデンティティを再認識したノグチは、帰国理由を、「わたくしはいくら住人だといったところで、わたくしはアメリカ人にもイギリス人にもなれる理由はないというきわめて簡単なことに気がついて、わたくしは外国と分かれて帰朝することになった¹²」と述べている。帰国には、他にもさまざまな理由が考えられた。イギリスからアメリカに戻った1903年4月からの一年強の間、新たな著書の刊行予定もなく、出版社から詩の掲載について断りの手紙も複数残されており、海外での活動に行き詰まりを感じていた時期かもしれない。また、ノグチの帰国は、ごく私的な理由からだという指摘もある。帰国前の一年間、ノグチからレオニーに宛てた手紙が「貴女を法律上の妻にする」という一通しか残されていないことから、ドウス昌代は、ノグチがおそらくレオニーと同棲していたであろうと見ている¹³。この間にレオニーはノグチの子供を身ごもったが、ノグチは実は同時に別のアメリカ人女性、エセル・アームズ (Ethel Marie Armes: 1876-1945) と婚約しており、「追いつめられていた」ノグチは、「父親となる運命から逃れようとして」帰国したという見方である¹⁴。私生活での状況を考慮すれば、帰国理由が日露戦争に直結していたと言い切れないかもしれない。

慌ただしく帰国したノグチであったが、同年の11月にアメリカのフランク・パットナムへ宛てた次の手紙から、早速戦争を現実と感じた様子が書かれている。(注:()は読解不可能な部分)

It is (...) for me that I will be called up to army. (...) (...) needs some more (...) (...) and soldiers immediately. If I will be here for long, I have no way to escape from duty. I am not coward, I am not afraid to be a soldier, but I know better how to save the country. I will write you more about the situation later on.¹⁵

兵士にならずに、もっと別の方法で国に貢献できると書いているが、同じ頃に書かれたと思われる次の手紙には、実は兵士になりたくないという点が明記されている。

And Japan is having a terrible time now with Russia. Perhaps I will be called up to army. If it was the case, I will hurry back to America. I (...) afraid to be a soldier now. If I was five years younger! It will be a different thing – you understand it.¹⁶

自らは兵士にはなりたくなかったが、戦争そのものに反対していたわけではなかった、と読み取れる。帰国の翌年には、ウァキーン・ミラーとの共著の英詩集 *Japan of Sword and Love* を刊行した。同書の巻頭には “To the Meiji spirit which declared war against Russia” とあり、全体的に戦時

¹² 外山卯三郎「ヨネ・ノグチの十七字詩とその波紋」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』第3巻(東京:造形美術協会出版局、1975)p. 19

¹³ ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(上)(東京:講談社、2003)p. 91

¹⁴ 同上 p. 93-94

¹⁵ Letter from Yone Noguchi to Frank Putnam. 18 November 1904. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley.

¹⁶ Letter from Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Ibid.*

中の日本を応援する内容である。帰国して物理的に西洋との距離も隔てたからか、海外滞在中に日本文化について執筆していたのとは打って変わって、西洋人を白人と呼びながら、彼らへの挑戦をあらわしている。同書の巻末には、次のように書かれている。

There is one hope most dear to the Japanese mind, which undoubtedly may come out of the war if we be a conqueror. That is nothing but to break the white nation's race prejudice against Japan. They are thinking of they are a superior people. They even declare that no nation not white can understand the real meaning of civilization. We Japanese have been learning the western civilization for the last forty years. But some people didn't hesitate to dub us a monkey-like people only clever in imitation. We have never been acknowledged as a country with a knowledge of and fit for a higher civilization. I remember some papers didn't take it seriously when England made an ally of Japan. The world wondered at least over England's terrible condescension. Is it a reason Russia's misdeed should be overlooked, because she is a white nation? Is it a reason our Japanese civilization cannot be acknowledged, because we are brown people? We have been suffering under many an injury arising from such a prejudice. But we have been taking the road of righteousness and honesty in the far-eastern question, and the world is coming to recognize us.¹⁷

ノグチを受け入れ、支援した「白人」たちも多くいるというのに、攻撃的な口調である。

逆にミラーは、同じ著書に“The Little Brown Men of Nippon”と題した文章を寄せた。ミラーは、日本は“Brown men”の国でありながら、実は文明化されている国であると訴えた。実際に来日したこともあるミラーは自身の目で見た日本を描写している。例えば、日本の主要都市には、アメリカ、フランス、イギリス、ドイツそれぞれの文化を象徴しているようなホテルがあり、工場では何でも製造可能なほどに発展している。このように日本人は働き者でいながら、桜を大事にする文化であることなど、文明化・近代化されているが、独自の文化も守りつつあるとミラーは強調した。“Brown Men”という、きわめて扱いにくい用語を用いながら、白人であるミラーに文章を寄せてもらう事を通し、ノグチは日本人が白人らと対等であると、身をもって訴えたといえる。

同詩集に含まれているノグチとミラーの詩には、日本を応援する内容の詩が多数含まれていた。次にあげる詩“Fight, fight, fight”もその一つで、戦場で闘う兵隊を激励するような内容である。

Fight, Fight, Fight!

Fight, fight, fight,

Thou Japanese soldier,

Thy glory—thy golden glory

Be as high as Fuji Mountain's top!

¹⁷ Miller, Joaquine and Noguchi, Yone. *Japan of Sword and Love*. (Tokyo: Fuzanbo, 1905). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp. 57-58

Fight, fight, fight,
 Thou Japanese soldier
 'Tis thy Mikado's command,
 'Tis thy nation's mind.
 Fight, fight, fight,
 Thou Japanese soldier,
 Thou art born of fire and surging seas,
 Thou art born of the hottest blood and steel,
 Thou art the Japanese sword,
 Thou art the sword of the Judgment Day.
 Fight, fight, fight,
 Thou Japanese soldier,
 Fight, fight, as the tempest,
 Fight, fight as the sun the clouds,
 Yea, thou art born of the rising sun
 Yea, thou art the Eastern Light,
 Yea, thou art the new-born prophet,
 Yea, thou art Triumph and Life.
 Fight, fight, fight,
 Thou Japanese soldier,
 Fight, fight, fight! Yone Noguchi.¹⁸

リズムカルにまとめられており、“thy Mikado's command” “thy nation's mind” となどという表現を使いながら、国としての主旨も前面に出していた。

同詩集の中には、帰国直前にアメリカの雑誌向けに執筆された記事の内容と同じく、戦争には直接関係のない内容の詩も含まれていた。次に紹介する詩もその一つで、“In Japan Beyond”と題されている。日本の文化が日本を超える、in Japan and beyond という意味も含めたかったのではないか。

In Japan Beyond

Do you not hear the sighing of a willow in Japan,
 (In Japan beyond, in Japan beyond)
 In the voice of a wind searching the Sun lost,
 For the old faces with memory in eyes?

Do you not hear the sighing of a bamboo in Japan,
 (In Japan beyond, in Japan beyond)

¹⁸ Miller, Joaquine and Noguchi, Yone. *Japan of Sword and Love*. (Tokyo: Fuzanbo, 1905). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007). p. 7

In the voice of a sea urging with the night,
For the old dreams of a twilight tale?

Do you not hear the sighing of a pine in Japan
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a river in quest of the Unknown,
For the old ages with gold in heart?

Do you not hear the sighing of a reed in Japan,
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a bird who long ago flew away,
For the old peace with velvety-sandalled feet?¹⁹ Yone Noguchi

このように、日本人としての立場から戦争を応援するような発言をしていた一方で、11年ぶりに帰国したノグチの内面は揺れていた。帰国直後からアメリカに「帰り」たいという気持ちがあり、それを公にもしていた。1904年10月、帰国した翌月に津島の両親の元へ帰郷した際も、母親が、ノグチの帰りを待ちわびた11年は過ぎてみれば早かった、「来年又米国へ帰って三年も経ったら家へ帰ってくるというが三年位直ぐですわ」と言ったのをノグチ自身が1904年11月20日の『読売新聞』に書いている²⁰。1905年が明けると、1月8日『読売新聞』に掲載された記事「告別の辞」では、「明日日本を去って再び帰米(帰米するはずれども)の途に就くというのでは無いけれど、表面上日本の社会よりは余は已に帰米したものと見られたいのである...左様なら諸君、余は今日日本の社会を離れて尋常一様なる外国よりの一旅客と成らむとするのである、願くは余の名を諸君の頭脳より取り去られたしと思うのである」とある²¹。ミラーとの共著 *Japan of Sword and Love* は、このようにアメリカを恋しがる発言が続いた後の1905年2月に刊行され、五月からは慶應義塾でアメリカ文学を教える仕事を引き受けた。アメリカに戻りたい気持ちと、日本人であることは、まるで相反さないかのように、ノグチはアメリカを恋しがりもしながら、日本人としての立場から発信し、日本での生活の基盤作りに努めたのである。

1914年、第一次世界大戦が勃発した。日本も日英同盟を締結している国家として参戦を依頼されたものの、第二次世界大戦中ほど日本全体が捲き込まれる事態ではなかった。ノグチは、英国の戦争詩について批判したり、知り合いのフランス人彫刻家の戦死を追悼する文章を日本の新聞に寄せていたが、これらの文章からは、遠く離れた戦地を語るような、国際的な文化人としてのノグチの姿が浮かんでくる。

このように、日清戦争、日露戦争はノグチを日本人に立ち返らせるきっかけとなった。ノグチは西洋で培った知名度をいかして、西洋に向けて発信し、日本への理解を求めたのである。また、そ

¹⁹ *Ibid.* p. 15

²⁰ 『読売新聞』1904年11月20日

²¹ 『読売新聞』1905年1月8日

のことでノグチが悩んだ様子はなく、非難もされなかった。

5. 2 日中戦争:ノグチの国粹主義と国際性

1937年の日中戦争の勃発から、事態は変化した。ノグチは、インドの詩人ラビーンドラナート・タゴール(Sir Rabindranath Tagore:1861-1941)との論争で、自身の日本人として立場や、日本軍における中国での行いについての正当性を国際社会で訴えることになったのである。

ノグチとインドとの関係は20世紀初めからの歴史がある。堀まどかがその著書に詳しく記載しているが、同書を参考にまとめてみると、1935年のノグチのインド訪問までには次のような経緯があった。19世紀後半からイギリスの植民地であったインドでは、「宗主国イギリス」において、1903年刊行の詩集 *From the Eastern Sea* 以来評価されているノグチに注目しており、同書は1912年にはベンガル語に訳されていたという²²。同時に、インドは、「近代国家の道を独自に歩んでいた日本」にも注目していたという²³。そのような中、ノグチ自身もインドを意識していたと言えよう。ノグチは1913年に二度目の渡英をした際は、インドの女流詩人サロジニ・ナイドゥ(Sarojini Naidu: 1879-1949)とも面会した他、同年のタゴールのアジア人初となるノーベル文学賞受賞も、ノグチのインドに対する意識を高めたであろう。だが、実は、ノグチは、1910年代後半からインド国内の雑誌に寄稿もしていたようである。また、1916年、タゴールが来日した際には、ノグチは先頭にたって歓迎した一人であったという。ところが、タゴールは来日時に、近代日本を批判した。日本人は、タゴールのその日本評価に反発し、井上哲次郎や岩野泡鳴など、雑誌や新聞でその反論を述べたが、当時、ノグチは「タゴールを擁護する姿勢を示し」、「『私一箇ではタ氏の嘆美者の一人』』と述べたという²⁴。1926年にも、「『タゴールは東洋人である。東洋人である我々日本人も彼を誇り彼を尊敬せねばならない。東洋人である彼の文学的功績はいかに我々の地位を高めたか知れない』』といい、堀は、ノグチが「社会に必要な詩人という存在の理想をタゴールに見てい」と論じる²⁵。また、堀はノグチがタゴールを支持する理由について、「日本の近代人が、精神倫理を失って西洋を模倣した物質主義や軍国主義に陥っていることがいかに危険かという点に関して、ノグチはタゴールと同意見なのであった」と分析している²⁶。

このような経緯があって、1935年にノグチはインドを訪問した。1935年1月26日『朝日新聞』の「インドへゆく詩人 カルカッタ大学でヨネ・ノグチを招聘」という記事によると、ノグチは実は十年前から招待されており、今回が三度目となる招待を受け、現地で日本美術を講義しに行くという²⁷。だが、それは表向きの理由であったようで、堀によると、このノグチの渡印は、実は「国際的に孤立しつつあった」日本の文化を外交的に使おうとする、外務省の「対外文化政策の一環」であっ

²² 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 345

²³ 同上 p. 346

²⁴ 同上 pp. 352-353

²⁵ 同上 p. 356

²⁶ 同上 p. 357

²⁷ 『朝日新聞』1935年1月26日

たようである²⁸。ノグチはカルカッタ大学やタゴール大学など、十数の大学を廻って講演し、合間には研究所を訪ねたり、タゴールやナイドゥとの再会、ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi: 1869-1948) などの運動家、舞踏家や実業家など多数と面会した。イギリスの植民地であるインドで、過度な貧富の差を目の当たりにし、教育の重要性なども実感しながら、「『私は今印度を旅行し、つぶさに国を亡つたものの悲哀を知つて生を日本に受けたことの歓喜が身に沁みるを感じざるを得ない。……私は、自分の流儀で《自分は何か》《日本人とは何か》を解決してみたい。』』という、自分自身についても顧みるような滞在だったようである²⁹。

1937年、日中戦争が勃発する。このニュースは、「多くのインド国民の対日感情を悪化させ、国民会議派のネルーやタゴール、ガンディーを含めて全インド的に、日本を人道の敵とする半日運動が起こり、その姿勢は強硬だった³⁰」という。そのような中で、インドの詩人タゴールとノグチの間で論争が生じた。先の渡印や、これまでのインドとの繋がりや、さらにそれまでの二つの戦争時の行動を思い起こせば、ノグチがこの対日感情を放っておけなかったのは、理解に難くない。ノグチはここで明らかに国粹主義の立場をとったのである。

タゴールとの論争は、タゴールが日本の帝国主義を批判し、ノグチはこれを日本人として擁護したというのが概要である。二人の論争は新聞や雑誌に掲載された公のものであり、「それぞれの国家を背負ったプロジェクト³¹」のように発展、アメリカや中国などの他国でも注目されるにいった。それまでインドの独立を訴えて来たノグチは、日本の中国進出を擁護しようとしたことで、タゴールに、人道的な観点から非難されたのである。だが、この論争も、実はノグチが個人の意志のみで始めたものではなかったという。堀によると、1939年7月のインド研究初会合の座談会で明らかになったものだが、実は、外務省が『インドの民衆に対して日本の聖戦の意義を徹底させる』を目的で、『人間野口、日本人野口としてやつて貰った』こと、「ようするに、外務省によるプロパガンダに野口の協力を仰いだ」ものであったという³²。その座談会でノグチは、「『僕自身としては、やらなかった方が良かったとも思はないでも無いが、日本人としてやつたと云うことは大に良かったと思ふ』』と述べたという³³。つまり、インドに行ったのも、タゴールとこのように論争することになったのも、実は外務省からの依頼であったのだ。ノグチを起用するのが良い、と思われていたほどのノグチが国際社会で持つ知名度は大きかったということになる。

では、ノグチは実際、タゴールとどのような議論を展開したのか。残されている数少ない資料から見つかるのは、1938年7月付のタゴールが中国人に向けて書いた公開書簡への返信として、1938年7月23日付のノグチからタゴールに宛てた以下の手紙(一部)である。

²⁸ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 359

²⁹ 同上 p. 375

³⁰ 同上 p. 378

³¹ 同上 p. 379

³² 同上 p. 389

³³ 同上 p. 389

Believe me, it is the war for “Asia for Asia”. the war is not for conquest, but the correction of mistaken idea of China, I mean Koumintang Government, and for uplifting her simple but ignorant masses to better life and wisdom. Since the best part of the Chinese continent is already with us in friendly terms, we are not fighting with the whole of China. Our enemy is only the Kuomintang Government, a miserable puppet of the West. If Chiang Kai-shek wishes a long war, we are quite ready for it. Five years? Ten years? Twenty years? –as long as he desires, my friend. He never happened to think for a moment that the friendship of western countries was but a trick of their monetary interest itself in his country.³⁴

ノグチはきわめて明確に、日本の立場を擁護している。だが、ノグチは自分の個人的な感情については触れていない。

1938年9月1日付の、タゴールからノグチへの返信は、以下のように始まる。

I am profoundly surprised by the letter that you have written to me: neither its temper nor its contents harmonize with the spirit of Japan which I learned to admire in your writings and came to love through my personal contacts with you. It is sad to think that the passion of collective militarism may on occasion helplessly overwhelm even the creative artist, that genuine intellectual power should be led to offer its dignity and truth to be sacrificed at the shrine of the dark gods of war.³⁵

タゴールの返信はノグチの先ほどの手紙と比較するときわめて個人的である。議論の内容よりも、ノグチからこのような議論を聞くと思わなかったという驚きと、芸術家が政治の犠牲になってしまったと、タゴール自身が悲しんでいるのが感じられる。タゴールは同手紙で、日本の武力行使を批判し、“Humanities”の正当性を訴えた。1938年9月27日『朝日新聞』には、このタゴールへの手紙に対する返信として、ノグチは次のように『朝日新聞』に書いている。

インドはいまチレンマに悩んでゐるのだ。お互ひに弱い国といふ点で支那に同情した古い仏教哲学の国といふ点で支那に見方してゐる、しかし本当にインドの開放へ進む道は日印親善にあるのです、私はインドの民衆が支那や英国の宣伝にのつて日本を誤解してゐるのみならずタゴール翁まで此の有様だ、東洋平和のため聖戦の意義をインドに徹底する事こそ急務です。³⁶

堀まどかが、その著書にまとめた「タゴールとノグチの論争の経緯³⁷」などによると、その後の二人

³⁴ Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). Appendix III

³⁵ Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). Appendix

³⁶ 『朝日新聞』1938年9月27日

³⁷ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)pp. 380-381

の論争は平行線をたどる。タゴールは日本を批判し、蒋介石に期待する一方で、ノグチは日本を擁護し、蒋介石を批判した。また、インドでは、タゴールとノグチの論争の報道ではノグチを批判する記事が多かったが、中にはノグチに同情や好意を寄せる記事もあり、インドからノグチ宛に個人的に届いた40通ほどの手紙のうち半分は、ノグチの意見を肯定するものであったという³⁸。

数ヶ月後の1938年12月8日、ノグチは『読売新聞』に「日本の真意と正義がインド全体にやがてわかる日が来よう、私はかく信じ正しい日本国民の一人として飽まで正義日本の立場を強調しようと考えてゐる³⁹」とある。タゴールの個人的感情が表出している手紙に対し、論理で攻めてきたノグチであるが、それは「正しい日本国民」としてやってきた事だと主張したいのだろう。数日後の1938年12月13日、ノグチはタゴール宛の書簡で、平行線をたどる議論に加えて、一連の議論が始まってからおそらく初めて、個人的な状況や思いにふれている。

僕は僕の現在の立場を実感せざるを得ないといふのは、恐らくそれは不幸なことであらうが、僕には君の流儀で理想の線を紡ぐことが許されないからだ。僕は夢を見る点に於て、決して君に劣るものではないが、僕に取つて夢は、国家に対して責任を果たして後に始まるべきものだ。(中略)

君[タゴール]が僕に与へた返答のなかに、ある偉大な佛国の文学者が『理智人の裏切り』を叫んだといつてゐるが、その文学者は恐らくロマン・ローランのことであらうと想像してゐる。彼は国を追出されても、身の安全をジエネバの湖畔に保護されるという地位にあつた事を考へ、心中羨望の感さへなきにあらざである。然し僕が国から捨てられた場合、世界のいつこへ往けると思ふ？ 故意に同胞に反対した結果、罪のない女房子供を餓ゑしめるに至つたとしたら、僕には彼らをひき連れて行くべきジエネバは全然無いのである。これ以外に、僕の野口一族からは、二人の甥を戦争に送り出し、場合によっては僕自身の子供も出征しなければならぬと用意してゐる。僕が彼らの愛国的感情に正しく答へることは、当然すぎるほど当然なのである。(後略)⁴⁰

当時62歳のノグチが強調したのは、自身の立場であつた。夫であり、父親であり、野口一族の一員であり、何よりも日本国家に所属する文化人という立場から生じる自らの責任をわきまえて言動をしている、という訴えである。ノグチに、立場をわきまえず、身の安全を保護される「ジエネバ [Geneva]」があつたとしたら、どのような理想を抱いて何を発言したのだろうか。この日中戦争は、ノグチを、本来であれば選択したくなかつた立場を選択せざるを得ない状況に押しやった、そのように受け取れるのである。

また、同記事が1938年11月の『文藝春秋』に掲載された際、以下のように手が加えられていたという。

³⁸ 同上 p. 384

³⁹ 『読売新聞』 1938年12月8日

⁴⁰ 『読売新聞』 1938年12月13日

僕の恐れる所は、わが同胞から、「お前は日本人の裏切り」だと云はれることだ。僕は君と違って、詩人たる前に真実なる人間となることを念としてゐる、即ち立派に独立した日本といふ国に属してゐる人間となることが、重要な問題なのだ。…⁴¹

国家を裏切ると言われるのを恐れる裏にある真意があったとすれば、それは何であったのか、今となつては答えのない問いであるが、読者はノグチの立場や建前を見せられている印象を受ける。それまでのように自らを「二重国籍」や「エトランゼ」とは言えない戦争時、このような日本人向けの文章を通して、「日本に所属している」という点を何よりも訴え、日本での居場所作りがノグチにとって最優先だったと思われる。

1939年1月の『日本評論』は、ノグチは「インドの新聞界は沸騰す」と題した記事を寄稿した。次に紹介するのは、その一部分である。自らの立場を選択するまでの彼の心の葛藤が描かれている。

私は胸中に長いながい間、国際文化的立場と国家的立場の争闘が続いた。誰が一身に西洋と日本を背負ふものの苦悩を知つたであらうか。もちろん私にこの対立的相違が別に煩悶の種にならない時もあった。また異つた二つの世界に属するがため、その長所と短所がはつきりして、批判の正鵠を失はないと心に誇つたこともあった。さらにまた、西洋でも日本でもない特殊な心理的境地を作り、清い薄暮の世界と呼んで、自己満足に陶醉したこともあった。然しそれは、平和の時のことで、今日のやうに国家が生死の大問題に立会つた場合には、当然のこととて、私は胸中の異つた荷物の一つを捨てて魂を単純化し、単純化することは強くする所以で、自らの部署をはつきり声明して生得権に忠実たるべき立場に置かれた。

私は白状するが、今回の日支事変が起つて以来しばらくの間、私は前記の争闘に煩はされて苦悩の日をすごした。(後略)⁴²

ノグチは、どのようにして、二つの世界に属する「苦悩」から、「魂を単純化」したのか。ノグチはそれをホイットマンの詩集 *Drum Taps* (1865) という作品に見出したという⁴³。同詩集は南北戦争中にホイットマンが書いた詩を集めたもので、当初は戦争を宣伝するような目的で書かれたが、彼が実際に傷を負った兵士を病院に訪ねたりするうちに、ホイットマン自身の戦争に対する態度が大きく変わり、後には人間が経験する戦争の実情を作品に書き、初版からの変化は *Leaves of Grass* (1881) の“Drum-Taps”のセクションに表れているという⁴⁴。だが、ノグチは、ホイットマンの戦争に対する態度の変化には注目せず、ホイットマンの同詩集の初期に書かれた詩に注目していたと思われる。ノグチは、「ホイットマンが南北戦争に於ての態度」、「武装詩人としての彼の雄

⁴¹ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 383

⁴² 野口米次郎「印度の新聞界は沸騰す」『日本評論』10巻10号、新年特集号(日本評論社、1939)p. 234

⁴³ 同上 p. 235

⁴⁴ Baym, Nina. General Editor. *The Norton Anthology of American Literature*. Shorter Fifth ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1999) p. 1045

姿を眺め、彼が次に来るよりよき平和のために今日の戦争を是認した態度を喜び、それは「有力な支持となる鞭撻となって、今回の事変に当って私の決心を確定させた」と書いている⁴⁵。このように、ノグチは公の文章で、自らの葛藤と、苦悩の末に決心した自らの立場を告白したのである。西洋諸国の知人たちも彼の態度を非難するだろうとしながらも、日本人であるということを選んだという。なお、このようなタゴールとの論争の後も、ノグチは一貫してインド独立を願い、積極的に発信した。

1938年、ノグチは『われ日本人なり』という題の随筆集を刊行している。繰り返すようだが、これまで数々の著作をとおして日本と西洋の狭間に生きていと主張してきたノグチが、この時期、著書に『われ日本人なり』という題名をつけるのは自らの置かれた立場を意識していた証拠だろう。同書の書評を執筆したのは、西脇順三郎であった。西脇は1938年7月11日の『朝日新聞』に次のような文章を寄せている。

私は漠然とヨネ・ノグチは非常に面白い日本人であるといふ印象をかねがね持つてゐた。... 野口氏ほど文筆によって日本人の精神を世界に紹介し主張することに努められた人は他に多くゐないと思ふ。この随筆の名が「われ日本人なり」とあるが、今更の如く寧ろ変に聞こえる程である。『神の恵みにより《我はヨネ・ノグチなり》と叫ぶ機会を得たい、少くも《われ日本人なり》と叫びたい』といふのが本の趣意であつた。... 詩人ヨネ・ノグチをつくつたものは富士山であつたと氏自ら告白するところであつた。この随筆集はヨネ・ノグチを知るには最適當の書である。... 日本を愛する熱情は『私の所説はみな諸外国人に対する真剣な挑戦状である』とさへ明言してゐる⁴⁶。

西脇はこの記事で、ヨネ・ノグチが日本人である点は、今更言うまでもないと強調している。西脇順三郎という、1932年に刊行したその日本語詩集で日本詩人たちから認められていた彼が、このように明確にノグチを支持している点に、ノグチを日本に受入れやすくする狙いが感じられる。この寄稿は、西脇による発案であつたのか、それとも西脇はノグチに依頼されて執筆したのか、その経緯は不明であるものの、興味深い。

なお、日中戦争の勃発した1937年から、1940年までの間に刊行されたノグチの著書は、次のとおりである。(それぞれの執筆言語は題名の言語に準ずる)

1937年 *The Ganges Call Me; Harunobu*; 『人生読本:春夏秋冬』

1938年 『われ日本人なり』

1939年 『強い力弱い力』

1940年 *Harunobu; Hiroshige*

⁴⁵ 同上 p. 235

⁴⁶ 『朝日新聞』1938年7月11日

本節で見えてきたように、それまでの知名度が高かったノグチは国際性を強調してきたが、日中戦争の勃発とともに、西洋ではなく日本を選択した立場とその背景を、こうして日本国民に訴えた。そして、第二次世界大戦が終戦を迎えるまで、その立場を、少なくともある程度、公に貫いたのである。

5.3 *Emperor Shomu and the Shosoin* (1941) について

ノグチは、1941年6月、*Emperor Shomu and the Shosoin* という英文の豪華本を刊行した。教文館から出ている⁴⁷。日本では、前年の1940年は皇紀2600年である。西暦紀元前660年に即位した神武天皇の2600周年を祝福する年であり、国を上げて祝典や記念行事が行なわれた。1940年は、日中戦争中であつたにもかかわらず祝賀ムードがあつたという意味で、きわめて特殊であつた。例えば、第二次世界大戦前における日本人の国内外の観光のピークは1940年であり、国内を何百万人もが、中国の旅順など外地へも何十万人も訪れたという⁴⁸。また、皇紀2600年関連グッズとしてレコードやハガキ、旗なども多く出回り、雑誌の表紙やタバコのパッケージまでもが関連のものになり、「消費主義がナショナリズム感情をあおり、ナショナリズム感情が日本人にいつもの消費を促すといったフィードバック関係が生じていた⁴⁹」という。国史も、大川周明著『日本二千六百年史』、および、藤谷みさを著『皇国二千六百年史』がベストセラーとなり、それぞれ数十万部も売れたという⁵⁰。また、1937年から終戦まで、国民は国家をたたえる定時の儀式に参加するという義務が課せられていたが⁵¹、この儀式が1940年には毎月一度という頻度であり、黙祷や、「万歳」と叫ぶなどの行動を全国民が同じ時間にすることで、「国家共同体の団結の度合いを示」そうとした、特殊な年でもあつた⁵²。

1940年秋、このような祝典の一環として、正倉院の御物を上野の博物館で特別展示した。そこに訪れたノグチは、展示を見ようと集まった多勢の観衆を目の当たりにし、同御物の海外への紹介を思いついたのが英文 *Emperor Shomu and the Shosoin* の成り立ちであるという。同書には、法隆寺や東大寺の国宝、正倉院御物である飛鳥や天平芸術の図版に、英文の解説が付けられている。序文には、同書がノグチ個人の、それらの展示物に対する感謝の気持ちのあらわれであると書かれている⁵³。同書に使用する写真は、東京皇室博物館（現：東京国立博物館）の館長が、

⁴⁷ 教文館は1885年に設立されたキリスト教出版社である。2012年6月、教文館の現社長の渡部満氏にこのような本が何故キリスト教出版社である同社から刊行されたかという経緯を問い合わせたところ、同氏から次のような返信をいただいた。「お話の本は、確かに教文館の名前で出ているようですが、教文館には出版された記録が残っていません。というか、現物がありません。こういうことは、とくに戦前のこの会社にはよくあることで、元々、アメリカの宣教師が作った会社で、頼まれて、本を流通させるために教文館の名前を貸すことがあったらしいのです。これは英語の本に限らず、日本語の本でもあります。しばしばそういう本の問い合わせを受けるのですが、記録もなく、現物もなく、事情を書いて残したものないけれど、確かに教文館の名前で印刷されて本が出ているのです。これもそのたぐいかもしれません。」

⁴⁸ ケネス・ルオフ著、木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』（東京：朝日新聞出版，2010）p. xii

⁴⁹ ケネス・ルオフ著、木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』（東京：朝日新聞出版，2010）p. xii

⁵⁰ 同上 p. 18

⁵¹ 同上 p. 19

⁵² 同上 p. 101

⁵³ Noguchi, Yone. *Emperor Shomu and the Shosoin*. (Tokyo: Kyo Bun Kwan, 1941). p. x.

宮内庁から許可を得て使用し、執筆過程では同博物館から出版された正倉院の御物のカタログ(全12巻)を参照したなど、国家機関からの協力を受けて本書が成り立っているのがわかる⁵⁴。日本では1940年夏から贅沢禁止令が発令されたが、その一年以上も後である1941年秋であったにも関わらず、同書は、次に描写されるように、きわめて豪華な装丁であった。

菊倍判で用紙の如きも特別製のアート及び奉書を用ひその収録する図版百五十葉もわが印刷技術の最高水準を行く原色およびコロタイプ印刷で、これに野口氏の英文による解説と正倉院御創始の聖武天皇の御事蹟説明を謹載した和綴二巻の豪華本だ。

55

情報局が後援したというから、豪華な装丁も可能となったのだろう⁵⁶。このように、個人の興味で始まったと説明される豪華本の刊行であるが、これだけの諸機関が協力するほど、ノグチの知名度を伺わせるプロジェクトでもあり、稲賀繁美は「国威発揚の一環をなした海外向け出版事業といつても過言でない⁵⁷」と論じている。

1941年10月23日の『朝日新聞』には「古美術使節 世界へ“文化の爆弾” 日本の余裕示す絢爛の図録」と題された記事があり、当時のノグチの言葉として、「世界が文化を忘れてみると、このやうな善美を尽くした書物が日本から送られることは、文化的な一つの爆弾だと思ひます、私はこの仕事こそ国に報ずる唯一の職域奉公だと信じ、狂人のやうにこの一年間を駆け回りました」とある⁵⁸。この文章や、同書がわずか一年で仕上がったという事実からも、ノグチが日本人としての使命を余程強く感じたプロジェクトであったと読み取れる。また、1941年11月13日の『読売新聞』には、「しかもこの大著は当の我國民に読ませる前に世界に展示されたものだ。そのことは愉快であると同時に残念なことでもある。何となればこの本ほどの正倉院記が我国の言葉で書かれたことを予は知らぬからである。……同時に今日の臨戦時下の日本にかゝる豪華版が尚生まれでたといふことを世界に誇ることもできると思ふ」と書かれている⁵⁹。そして、1941年10月23日に『朝日新聞』『読売新聞』の両紙で掲載された記事によると、いよいよ同書が戦乱中の欧米諸国へ送られる、とあり⁶⁰、送られる部数は2000部印刷したうちの500部だったようである⁶¹。

同書の復刻版の解説で、稲賀繁美は、次のように論じている。

正倉院宝物展が『前例を見ない出来事』であったことを特筆強調し、その文化事業とし

⁵⁴ *Ibid.* pp. ix-x.

⁵⁵ 『朝日新聞』1941年10月23日

⁵⁶ 秋山光夫「ヨネ・ノグチさんの追憶」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻(東京:造形美術協会出版局,1963)p.261

⁵⁷ 稲賀繁美「伴野文三郎、パリ事情による『日本文明の概略』鈴木貞美編『《Japan To-day》研究:戦時期《文藝春秋》の海外発信』(東京:作品社,2011)p.254

⁵⁸ 『朝日新聞』1941年10月23日

⁵⁹ 『読売新聞』1941年11月13日

⁶⁰ 『朝日新聞』および『読売新聞』1941年10月23日

⁶¹ 『読売新聞』1941年10月23日

ての意義を強調する。『美術史のみが永続する生命をもって栄える』のであり、政治であれ軍事であれ、その他の事柄はしよせん東の間の変動にすぎない、との価値観。ここには明らかに時局に対するノグチの立場が表明されている。… 天平時代の栄光を事挙げすることは、現今の日本がおかれた政治・軍事的な逆境に対する文化的代償措置であり、ノグチはその文化事業の一翼を担おうとする。… 時局に臨んだ詩人は、この文化的使命にこそ、おのが滅私奉公の途を見出していた。⁶²

ここに書かれているように、同書の出版を通して、西洋文化に精通している日本人としての立場からのノグチの行動が浮き彫りになり、同書にまつわる記事が新聞に頻繁に掲載されていた観点からも、ノグチがいかに国民の間で知れ渡っていた人物であったかがわかる。

なお、同書の英文は慶應義塾のノグチの同僚であった S.H.Griggs と西脇順三郎が、原稿の確認や校正の確認などを行なったと、ノグチが序文の最後に記した謝辞からわかる⁶³。西脇順三郎といえば、戦時中、公な発言を控えたと知られている。同書は、西脇順三郎全集にも含まれておらず、全集中の彼の生涯を網羅している年譜にも、本書に携わったことには触れられていない⁶⁴。

5. 4 第二次世界大戦でのノグチの言動

ノグチは、60代で迎えた日中戦争および第二次世界大戦中も執筆のペースを緩める事はなかった。1941年の第二次世界大戦の勃発から1945年の終戦までの五年間に刊行された、ノグチの著書は以下の十冊である⁶⁵。(*Emperor Shomu and the Shosoin* は英語で、それ以外は日本語で書かれている。)

1941年 *Emperor Shomu and the Shosoin*

1942年 『起てよ印度』、『宣戦布告』、『野口米次郎選集一 藝術殿』

1943年 『野口米次郎選集二 詩歌殿』、『伝統について』、『聖雄ガンジー』、
『野口米次郎選集三 文藝殿』、『野口米次郎選集四 思想殿』

1944年 『八紘頌一百篇』

1945年 なし

このうち、『宣戦布告』、『伝統について』、『八紘頌一百篇』の三冊は、戦後、GHQ に没収されている⁶⁶。戦時中にもかかわらず、これだけの著書を刊行したという事実からも、ノグチの知名度と、

⁶² 稲賀繁美『ヨネ・ノグチの浮世絵および日本美術評論集について』(東京: Edition Synapse, 2008) p. 23

⁶³ Noguchi, Yone. *Emperor Shomu and the Shosoin*. (Tokyo: Kyo Bun Kwan, 1941). p. x

⁶⁴ 西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』別巻(東京: 筑摩書房, 1994) pp. 513-577

⁶⁵ 堀まどかはその著書『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋: 名古屋大学出版会, 2012)(p.409)で、1940年から終戦までの五年間でノグチが刊行した著書として9冊を上げているが、*Harunobu, Hiroshige, Emperor Shomu and the Shosoin* の3冊が含まれていない。

⁶⁶ 「占領史研究会」主宰 澤龍『GHQ に没収された本』(東京: サワズ出版, 2005) 参照先はそれぞれ、『宣戦布告』(p. 236)、『伝統について』(p. 279)、『八紘頌一百篇』(p. 346)。

彼がいかに戦時中に発言を続けていたかが分かる。また、ノグチは著書の出版以外にも、新聞や雑誌に多く寄稿し、文学者たちの集う会などにも積極的に参加していた。本節では、1941年以降の著作について取り上げながら、彼の公の立場での国粹主義に注目する。

日本文学者ドナルド・キーンは、世界第二次大戦開戦時、日本の作家は、“with extremely few exceptions, became Japanese first and men of letters second”であったと表現している⁶⁷。つまり、キーンは、この作家たちが直面したのは次のような状況であると書いている。

It may be wondered what choice they had. With the exception of a handful of well-established authors who could live on the royalties from reprints of old works (or on the generosity of their publishers), Japanese writers had no alternative but to attempt to make a living by publishing stories or articles, and all publications were controlled by the government.⁶⁸

抵抗が死に繋がる可能性があつて公には抵抗できなかったという時代性に加えて、経済的な状況も、作家が国粹主義に走った要因の一つであった可能性については、複数の学者が指摘している。戦時中に政府指導のもと戦略的に行なわれたラジオ放送について、堀まどかも、その「ラジオ放送のための作詞・作曲は詩人たちにとって確実な収入源」となった点をあげている⁶⁹。戦時中の沈黙で知られている作家のうち、例えば西脇順三郎は、政府の戦略に反対はしていたという内面的な事情に加えて、経済的に原稿料に頼らずに済む事情があつて沈黙を通し続けられたという⁷⁰。永井荷風も、戦争中は日記をつけていて、キーンはその日記を“probably the most bitter and pointed criticism of the military recorded by anyone in Japan”と書いているが、荷風が出版の為には何も書かなかった理由は、印税と蓄え、そして友人からの援助で経済的に生き延びえる環境にいたからという⁷¹。ノグチが国粹主義に走った理由の一つが経済的なそれであったかどうかは不明であるが、国外にも逃れられないと公言していた点からも、彼切羽詰まった状況や心境が垣間見られる。

ノグチの著書および新聞や雑誌に掲載されたものには、詩も多く含まれている。戦争詩である。戦時中は、ノグチたち詩人が製作していた、いわゆる戦意昂揚詩は「愛国詩」「国民詩」と呼ばれており、当時の戦争詩が意味したのは「日中戦争の前線にいた兵士たちが、戦場での体験を素材として書いた」詩であったのが、戦後になって両者をまとめて戦争詩と呼ぶようになったという⁷²。ノグチの数々の詩も曲が付けられたり、付けられなかったりしながら、ラジオやレコードで流されて

⁶⁷ Keene, Donald. “Japanese Writers and the Greater East Asia War.” *The Journal of Asian Studies* 23.2, September (1964). pp. 224-225

⁶⁸ *Ibid.* p. 210

⁶⁹ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)p. 406

⁷⁰ Rabson, Steve. *Righteous Cause or Tragic Folly: Changing Views of War in Modern Japanese Poetry*. (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 1998). p. 10

⁷¹ Keene, Donald. “Japanese Writers and the Greater East Asia War.” *The Journal of Asian Studies* 23.2, September (1964). p. 222

⁷² 瀬尾育夫『戦争詩論 1910-1945』(東京:平凡社, 2006) pp. 135-136

いたということは、当時の新聞や彼の詩集における記載に加え、坪井秀人著『声の祝祭：日本近代詩と戦争』付録の「<大東亜戦争>下における朗読詩放送(1940—1945)⁷³」などからも明らかである。堀まどかの指摘するように、ノグチの戦時期の『雑誌や刊行著作』には、挫折感、疑問や矛盾の心境を詠った声も間違いなく混じり、「時局迎合や愛国的狂言といった解釈だけではとても収まりきらない、屈曲し、複雑で、奥深い力を持った作品群がそこには身をひそめている⁷⁴」面もあるだろう。だが、戦時中のノグチの言動をさらに広範囲に見てみれば、戦争詩だけに限らず、ありとあらゆるところで積極的に発信し続けていたノグチの姿が浮かび、それらの全てが抵抗を醸し出しているわけではないといえる。本節では、戦時中のノグチの言動を年代順に追い、可能な限り網羅的に理解することに努めたい。

1941年6月、*Emperor Shomu and the Shosoin* の刊行された月には、ノグチの他、河合醇茗、北原白秋、堀口大学、佐藤春夫らの呼びかけで「大日本詩人協会」を立ち上げた⁷⁵。「詩の精神を国民総力戦の力強い支柱とする念願」で1940年暮れから準備され、200名ほどが名乗り出て、同会が発足したという。同会が実際に行なうのは「俗悪な歌謡の駆逐、国語行政の確立と促進、各大学に詩学講座の開設などを実践要項とし、年一回国民詩祭を開催し、朗読会、講演会、研究会、図書の刊行など、書齋から街頭へ躍り出し、詩歌奉公を奏でる」とある。この後のノグチの言動とこの会の具体的な関連性の全貌はまだ掴めていないが、ノグチの言動は、ここに書かれているように多岐にわたるものであった。

1941年12月8日の真珠湾攻撃をもって、日本はアメリカと開戦した。ノグチは真珠湾攻撃からわずか三日後の1941年12月10日には『読売新聞』に「語を同胞に寄す⁷⁶」と題した詩を寄稿した。迷いは無いかのように、米国人へ直接発信するような詩であるのが特徴的である。12月12日には、同戦争の呼称が正式に「大東亜戦争」となり、同日からの10日間は毎朝7時30分から8時まで(実際には7時50分から8時の10分だったようである)、当時「愛国詩」と呼ばれた詩の朗読の時間であり、新聞などに掲載された詩の中から優れたものを扱う他、ノグチや高村光太郎、西条八十、佐藤春夫など25人の詩人に依頼して製作された詩を放送していたという⁷⁷。1941年12月13日の『朝日新聞』にも、「日本の全詩壇が烈々たる『愛国詩』献納の運動を起す」とある。これより半年前に発足した第日本詩人協会などの所属詩人らから集まった詩は大政翼賛会文化部に献納され、日本音楽文協に曲を依頼し、それをラジオやレコードで流して『国民の愛国心をそぐ』のが目標だという⁷⁸。このようにして、ノグチの詩は国民の耳に届いていたのである。

1942年には、ノグチは詩集『宣戦布告』を刊行した。同詩集は以下の「自序」で始まる。

⁷³ 坪井秀人『声の祝祭：日本近代詩と戦争』(名古屋：名古屋大学出版会，1997)pp. 14-35

⁷⁴ 同上 p. 425

⁷⁵ 『読売新聞』1941年6月15日

⁷⁶ 『読売新聞』1941年12月10日

⁷⁷ 坪井秀人『声の祝祭：日本近代詩と戦争』(名古屋：名古屋大学出版会，1997)p. 239 同書によると、1942年に入った後も1月11日から隔日で「愛国詩」の朗読放送があり、1943年末まで、月に10日程、隔日か2日おきという頻度で放送されていたという。

⁷⁸ 『朝日新聞』1941年12月13日

自序

野口米次郎

人生は永劫の宣戦布告なり。

聞くならくマホメットは、一方の手に剣を他の手に薔薇一枝を掲げしとかや。今わが日本は一億一心、決死隊の意気と熱とに依り、現実の荊棘を打破制服し、以て理想の完成に邁進せんとす。これ天壤無窮、萬世一系の神勅を奉戴し、日本将来の繁栄を全亜細亜民族に分たんとするもの、心に詩歌なく自然と人情の美と正義とを理解せざる徒輩の能くする所にあらず。

戦争と平和は二にして一なり。われ一生を詩歌に捧げ来れど、今日国家の重大時局に際会して戦争を支持謳歌する所以自ら明かなり。生を日本に得て壮嚴無比の今日をまのあたりに見る嬉しさ、涙なくして感謝すること能はず。

昭和十七年一月五日

同書に含まれていた54篇の詩のうち、少なくとも18篇の詩集が、朗読放送か曲を付けられて放送されていたようである⁷⁹。同書の位置づけについて、堀がその著書で引用しているのが、『近代戦争文学事典』(1992年)に掲載された、次のような説明である。

その大部分は時局に乗じた翼賛の詩であり、国民詩、朗読詩などと称してJOAKにより放送され、あるいは新聞などに掲載されたものが多い……。しかし著者に牢固たる国体の観念があるわけでもなく……。その時において耳障りのよい観念語の跳躑にまかせた喧嘩詩にすぎない。かような詩人をお抱えにした放送局も、責任の一半を負うべきであろう⁸⁰。

堀は、ノグチは海外生活が長く国体の観念がないにも関わらず、国際的に知名度の高いノグチを起用することが国家当局に有益とされていた時代性を指摘している⁸¹。それは、今でこそ知る人も少ないノグチだが、その当時、国家の一大事に起用することで有益とされていたほど、日本での知名度の高さを示している。

また、堀は、同詩集に含まれている作品のうち、抵抗のあらわれとも受け取れる詩に注目している。例えば、「倫敦炎上」(次版から削除処分を受けた)は「かなりストレートに戦争を呪い、破壊と焼尽を批判した詩」と論じ⁸²、「海」という詩には、「戦争に対する疑問と嫌悪感を濃厚に感じさせるこの詩に戦争賛美をみるのは無理な相談だろう」と論じる⁸³。だが、中にはノグチが相手国アメリカ

⁷⁹ 坪井秀人『声の祝祭：日本近代詩と戦争』(名古屋：名古屋大学出版会，1997)p. 217

⁸⁰ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋：名古屋大学出版会，2012)pp. 409-410

⁸¹ 同上 p. 410

⁸² 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋：名古屋大学出版会，2012)pp. 412-413

⁸³ 同上 pp. 414-415

を強く意識し、日本側の妥協を示さないような詩も含まれていた。

例えば、次の「米国人に与ふ」という詩がそれである。

米国人に与ふ

君の議論は横車だ、身勝手だ……
僕は青春と理想の横暴を問はない、
君は世界を教へんとする……出来れば結構だ、
要するに君は、感情の冒険者たるに過ぎない、
自分が喜劇役者たることを知らない。
君は物的資産の大を誇り過ぎる、
徒に夢を空に登らせようとする……これもよからう、
だが君は、机上の伝奇作者たるを知らない、
君は言葉の浪費者だ、
喫煙室の辯士だ。
僕は君に失望しない、それで君にいふ、
君が僕と共に、本当の世界の将来を思ふならば、
反抗と懐疑を捨てねばならない、
猟奇を忘れて、言葉の無益を知らねばならない、
君の眼が開いて現実を見るならば、僕の腰に両断の利剣が煌くを知るであらう、
驚いてはいけない、殺人剣でなく活人剣だ、
この時君が僕に手をさし延ばせば、
僕は君の友たり得るを知ってゐる。⁸⁴

同詩集によれば、この詩は、1941年3月2日『週刊朝日』にも掲載されたということである。日本に非は無く、アメリカの態度を一方的に責めている印象を受ける。アメリカ人に宛てて書かれたものは、この詩以外にもいくつかあるが、日本語で書かれているのだから、実際にアメリカ人に宛てて書いたのではなく、「国民の愛国心をそそぐ」パフォーマンスのような役割があったのだろう。

同じく同詩集に含まれている「神の膺懲^{ようちやう}」では、次のようなくだりがある。日本への自惚れもあらわしている。

(前略)

彼[米国人]は何の理由あつて自らを神の高きに上らせんとしたか、徒に膺懲の鞭を振つて世界の凡てを支配せんとしたか。

ああ、彼はどうして突如起つた飛行機の炸裂が、国運忽ち逆転させるに至るを想像したであらう。どうして真珠湾上朝食前の出来事が、国家の長い間の計画を無にして仕舞ふことを予想したであらう。どうして日本人がかくも知恵深く、かくも忍耐強く、かくも

⁸⁴ 野口米次郎『宣戦布告』(東京:道統社, 1942) pp. 121-123

勇敢なるを予想したであらう！

彼は見た……朝日が海を火にする壮観でない、自分の戦艦を自ら火葬にする夕日の光景であった。

彼は聞いた……それは日本の海鷲が空を往く大行進、亡びる戦艦を吊ふ葬式の合唱であった。

愚かなもの、彼は知識の探求を忘れ、他国に如何なる神秘があるかを知らうとしなかつた、彼は自己満足の全財布であった。

彼は始めて神の膺懲の痛いことを知った。⁸⁵

同詩集に書かれた詩から読み取れるアメリカへの敵意と日本への愛国心のどこまでが作り物であり、どこまでが本心かわからないものの、これらがノグチが日本人の立場から発した言葉なのであった。同詩集については、1943年3月17日『読売新聞』で、「愛国の詩は野口米次郎の『宣戦布告』を皮切りに毎朝のラジオで朗読され、新聞もまた連日詩人の新作を掲載した⁸⁶」と書かれており、ノグチが作家たちの中でも先頭をきって行動したのがわかる。

1942年7月31日『読売新聞』には、ノグチは「米英国民に与ふ」という記事を寄稿している。以下に、一部を引用する。

私は「親愛なる諸君」の言葉で諸君に呼びかけない。私は五十年の長日月に亘つた私的友情の絆を断つて、今街上に溢れる『屠れ米英われ等の敵だ』の叫びに和して声を嗶らしてゐる。諸君の国においても私の数多き友人達は、私と同じ立場にあつて、運命に服従して『屠れ日本』を叫んでゐるであらう。私は七十歳に近い老境に入つて、お互いの国がかかる国交の断絶を見ようとは思はなかつたが、運命の軌道に狂ひはない、諸君の国に残忍な運命でも、我が日本には喜ばしい運命だ … 来るべきものが遂に來たのだ。… 諸君は散々な目に遭つたが自業自得だ、諸君のだらしのない見るも哀れな状態は、十二月八日宣戦布告以来の引き続いた黒星が、諸君の額に敗戦者の烙印を捺すことになった。…

第一次世界戦争直後に見た米国は、自惚れと無智の集積であつたのである。私はこれを悲しみ嫌はざるを得なかつた。本当に私は米国の将来を気の毒にさへ思つた。私は倉皇に米国を辞して日本へ歸つたが、その時くらゐ自分が眞実に日本人たる喜びに溢れたことはなかつた…これが私の偽らない告白だ。

然し米英国民よ、私は三四十年の昔に諸君から受けた恩義を忘れるものでない。私共は忘恩行為を男子の最も恥づべき罪惡として教へられてゐる。諸君は確に私といふ人間の建築に當つて重要な役目を勤めてくれた…

諸君は日本を政治的窮地に追ひ込み、事ある毎に私共は諸君の横車に苦しめられるに至つた。諸君は日本が大きく成長して最早や根絶し難いことを残念がつたであらう。

⁸⁵ 野口米次郎『宣戦布告』(東京:道統社,1942)p. 34

⁸⁶ 『読売新聞』1943年3月17日

私共は諸君が他の国家が偉くなることを危険だと恐れ、自己崇拝に邪魔になると思つたに違ひないことを知つた。ああ、何という変化であつたであらう。...

それで米国人よ、君達はよく気を落ちつけて対日関係を過去五十年に亘つて検討し、前非を後悔するときに来たのではあるまいか。いつでも後悔するには遅いといふことはない。私共日本人は『その罪を憎んでその人を憎まず』といふ言葉があることを知つてゐる。

米国人よ、私の率直飾りのない言葉を君達は理解し得るかどうか⁸⁷。

アメリカとの「私的友情の絆を断つて」日本人としての立場から発言していると、あえて日本国民に訴えている。このノグチの文章に含まれている「屠れ米英われ等の敵だ」は、大政翼賛会が1941年に作った「決戦スローガン」の中のフレーズであつた⁸⁸。スローガンは次の通りである。

<決戦スローガン>

この一戦 何が何でも やりぬくぞ

見たか戦果 知ったか底力

進め一億 火の玉だ

屠れ米英 われらの敵だ

戦ひ抜かう 大東亜戦

この感激を 増産へ

第二次世界大戦中はおびただしいほどのスローガンがあつた。アメリカとイギリスを対象にしたスローガンは上記以外にも他にもいくつかあつたが、作成されたのが1941年で「決戦スローガン」とあることから、おそらくこれが真珠湾攻撃前後に作られた、アメリカとイギリスを扱った最初のものではないかと思われる。そして、ノグチがこのスローガンを使うことで、同文章は国民に対してプロパガンダの役割を果たしたと思われる。

1942年11月3日には、第一回大東亜文学者大会が東京で開催された。これは、日本、満州、中国、モンゴルの「文学者を一同に集め、大東亜戦下の文学者の使命を磁する」目的で開催された会合であつた⁸⁹。同大会は、第二回目は、1943年8月25日から三日間に東京で、第三回目は1944年11月12日～14日に南京で開催されている。このうち、ノグチは第一回と二回の会合に参加している。第一回の会合で、ノグチは高浜虚子、佐佐木信綱と並んで、開会式で「大会謳歌」を朗読している⁹⁰。ここでもノグチの知名度の高さを伺わせる。第二回では、ノグチは印度の独立支援について発表したようである⁹¹。ノグチの発表があつた翌日である1943年8月27日の『朝

⁸⁷ 『読売新聞』1943年7月31日

⁸⁸ 前坂俊之『傑作国策標語大全』(東京:大空社,2001)p.41

⁸⁹ 『朝日新聞』1942年11月3日

⁹⁰ 『朝日新聞』1942年11月3日

⁹¹ 『朝日新聞』1943年8月26日

日新聞』には、ノグチの発表の報告として、ノグチが「印度の独立を声援せよ！」と叫び、これには「傍観席の印度人も満面感激の色をみなぎらせ、来賓席の印度独立聯盟部長メタニー氏は、飛び入り発言を求めて感謝の挨拶をのべるなどの感激的場面を展開した⁹²」と取り上げられているところをみると、彼の発表が会合のハイライトの一つであったことが読み取れる。第三回目は中国での開催とあり、ノグチは欠席だったようである。

1943年に刊行された『伝統について』には表紙の右側に「青春文化選書」と書かれており、若人向けに出された本であったのがうかがえる。同書には、彼の西洋の体験も交えながら戦時下を意識した思想や人生教訓めいたものが書かれている。ノグチは、戦時下に於いて詩や文書を書き続ける自身の立場について、「詩的使命」という章に、次のように書いている。

私共詩人は使命をもって生まれたもの、ぜひともさう無ければならぬと信じて居る。今わが国は全力を賭して東亜の新体制を確立し以て共存共栄の實をあげんとしてゐる。重大時機に際して、詩人が国是を奉じて報国の道に上ることは、当然すぎるほど当然なことであるが、若し私どもの努力が一地方的感情のダンスたるに止って宇宙の大法を軽んずることがあつたならば、これは私どもが自分の使命を正しく理解しないことになる。即ち私共詩人の使命は、私共が日本人たると共に世界人である、今日の人間たると同時に明日の人間となつて、将来いつまでも生きることであらばならぬ。さらに別の言葉でいふならば、私共は現実の彼方に理想の光を求めて往くといふことだと信ずる⁹³。

このように、「使命」と思って言動していると書き、日本の先に世界も見据えることで、自らの立場を正当化しようとしているように思われる。

ノグチは同じく1943年に刊行された『文芸殿』の「自序」にも、日本人としての立場を改めて明確にしている。

私は若い時祖国を去り、米英生活を十数年間もつづけた。この間、私が彼地に於て知ったことは一つだった。即ち日本の国威が振るはないことであつた。私は外国を学ぶために、彼地に渡つたのであつたが、何をさて置き日本の美と誠を強調して、故国の真価を高めることが急務だと思つて、彼らより学ぶことより、彼らを教える方へ廻つた。かくて私は若い時より英米に於いて、日本の文化宣伝に従事するに至つた。然る所、私は日露戦争当時に帰朝し、それより私の同胞に対する仕事は、彼らを一地方的感情と思想を離脱して世界的たらしめ、我国に於ける詩的優越性に、目覚めさせるといふ一本槍であつた。この見地から、我が邦語で書いた数十巻の書物は生まれたもので、私は一生をこの目的のため驀地に進めて来た。もとより聖天子の御稜威の然らしめた所であるが、今日日本国民挙つての精進努力が、今の隆盛を齎すに至つたことを見て、私は

⁹² 『朝日新聞』1943年8月27日

⁹³ 野口米次郎『伝統について』(東京:牧書房, 1943)p. 179

洵に生き甲斐のある時代に生まれ、課せられた仕事に勉強して来たことを、どんなに喜んでゐるか知れない⁹⁴。

同書には、直接戦争に関係のない、日本の文学、ことに芭蕉や蕪村などの句、能楽などについて書かれており、外国向けでなく日本人読者に向けて、日本文学の再認識を呼びかけているようでもある。同書の帯には、高村光太郎が文章を寄せており、「...常に時流を抜いて一方に特立、今に至って尚ほ烈々の詩作を絶たない。われわれは彼にこそ日本に於ける予言者的詩人の風骨を見るのである」と書き、ノグチの貢献度を訴えている。

1943年、ノグチは芸術院賞を受賞した。ノグチの評価としては、次のような言葉が寄せられている。

——野口氏は詩人中詩作年代の長いこと詩的視野の博いと業績の量等において三拍子揃った第一人者—— 多年海外にあつて世界の文学を通じてわが日本伝統の詩歌並に国民芸術の純粋性と超越性を探求しそれらの全く世界に冠絶することを説いた、大東亜戦争勃発するや雄健な詩集を揮つて皇国の威武をうたひ、戦果をたたへ、或は印度の独立を高調するなど愛国の情熱を爆発させて文芸報国に邁進してゐる
...⁹⁵

当時は、このような賞を受賞する際にも、国粹主義が称讃されていた時代であつたのがわかる。また、1943年4月10日『朝日新聞』の、福原麟太郎の記事には次のようなくだりがある。

おそらく野口氏の詩集は、そのやうにして自分の血を受けた文化を発見するに至り、次第に西洋的なものを脱ぎ捨てて来たのであつたらう。いつのまにか野口氏はふるさとの人になつてしまつたのである。そして新たな詩歌はこの東方の国にたいする愛からみなぎり出で、東洋に呼びかける熱烈の叫びとなつて現はれるやうになつた。⁹⁶

戦時下という時代性だろうが、誰もノグチの西洋性などは口にせず、ノグチの日本人たる部分を強調している。1943年8月1日『朝日新聞』に、西脇順三郎も似たような主旨の寄稿をしている。

詩人野口米次郎が長く日本の芸術的精神をその詩文の中にその論文の中に説いてきたことが一つの功業として認められ帝国芸術院賞が授与された。その一つの例となるべき『詩歌殿』といふ自選詩集が出た。

全世紀末から今日に至るまでの約十六種の詩集から自選したのであるが、その半分は英詩であつたのを国語にしたのである。この詩人の詩は現来我国芸術

⁹⁴ 野口米次郎『文藝殿』（東京：春陽堂文庫出版、1943）pp. 2-3

⁹⁵ 『読売新聞』1943年4月10日

⁹⁶ 『朝日新聞』1943年4月10日

精神を説くために書かれてあるものが多い。それに皇国の詩、愛国の詩が最近の詩人の世界に虹の如く出現してある。

(中略)

彼は西国にあつて常に東国を語り英語で日本語を書いた愛国の詩人である⁹⁷。

この記事は、海外において英語で執筆したものも含め、ノグチは常に日本の国益のために執筆してきたという点を強調し、日本全体にノグチの生涯にわたる活動とその意味を西脇が改めて保証しているかのようである。

1944年に刊行された『八紘頌一百篇』には、「弾丸」「死地に乗入る二千数百」「故山本元師挽歌」「シドニー特殊潜航艇の賛」「マニラ陥落」「シンガポール陥落」「ビルマ行政長官一行を迎ふ」などと題する数々の詩が収められており、戦争もますます激化してきているのが表れている。そうした状況で、ノグチも序文で「決死の丹心を掲げて、敵軍に臨む戦士の声はいふまでもないが、文字に祖国精神を高唱して国家の重大な使命達成に協力せんとする詩人の仕事も、等しく尊い筈だと私は疑はない。⁹⁸」と書いている。同詩集の中でも、ひとときわ目を引くのが、次の「屠れ米英われ等の敵だ」と題された次の詩である。

屠れ米英われ等の敵だ

「屠れ米英われ等の敵だ」で町は溢れる、
私もこれを叫ぶ、声を嗄らして叫ぶ、泣きの涙で叫ぶ。
私の若い時代の十二年間を養つて呉れた国だもの。
忘恩行為だつて、国家の運命に替えられない、
過去の繋がりは一場の夢だ。
過去の米英は私に正義の国だつた、
ホイットマンの国だつた、
ブラウニングの国だつた、
然るに今は富の陥穽に落ちた放蕩者の国、
見てはならない夢を漁る不倫の国……
この不埒を天誅する、真実の米英を屠るのではないとする
ものもある。
私が英米時代に作った友人は多い、
最早や故人になって、私の屠れを聞かずにすんだものも
ある。
この幸福は、どんなに私の幸福であるか知れない。
今なほ存命中の友人は私にいふであらう、

⁹⁷ 『朝日新聞』1943年8月1日 インデント、原文のまま引用。

⁹⁸ 野口米次郎『八紘頌一百篇：野口米次郎詩集』（東京：富山房，1944）pp. 1-2

国と国との戦争だ、僕等の友情は破れるには神聖すぎる……
馬鹿な、そんな念佛は一億一心が承知しない、徹底的だ、徹底的だ、
友情もろ共、君たちもずばりと屠つて見せる！⁹⁹

ノグチは日本人である立場を理性で選んで、先述した「決戦スローガン」の「屠れ米英 われ等の敵だ」を叫んでいるのだろうが、これまで見て来たアメリカへ対する詩に比べて表現が直接的で強い。一方で、このスローガンを「泣きの涙で叫」んでいる、これを「聞かずにすんだもの」を幸福だといい、友情が神聖すぎるという考えは「一億一心が承知しない」と理由付けしているところに、彼がこのような決意を持ってアメリカを敵対視せねばならないのは国家の目があるからだと訴えているようでもある。「忘恩行為」は男子の最も恥ずべき罪悪として教えられている」と1942年に書いたノグチだが、それを認識しながらも、「国家の運命に替えられない」のだと敢えて訴えているのである。この詩には、ノグチの複雑な心境を見るようである。

ドナルド・キーンは、戦後直後からノグチのこの詩に注目していた。1964年2月に書かれた学会誌への寄稿では、キーンは同詩を英訳し、“could the pressures of war excuse, say, this poem by Noguchi Yonejiro?” という前書きと共に引用している。英訳は次のとおりである。

Slaughter Them! The Americans and English Are Our Enemies

The town overflows with the cry,
“Slaughter them! The Americans and English are our enemies.”
I too shout it. I shout till my voice is hoarse. I shout in tears.
These were the countries which nurtured me for twelve years
when I was young.
Even an act of ingratitude cannot be reckoned against a nation’s fate;
The ties of the past are a dream.
America and England in the old days were for me countries of justice:
America was the country of Whitman,
England the country of Browning;
But now they are dissolute countries fallen into the pit of wealth,
Immoral countries, craving after unpardonable dreams...
Some say that Heaven is punishing lawlessness, that this is no
slaughter of the real America and England.
I made many friends when I lived in America and England:
Some are already dead and never had to hear my cries of “Slaughter them!”
How much their happiness is my happiness I cannot tell.
Those friends who are still alive will probably say to me,
“This is a war between country and country. Our friendship is too sacred to be
destroyed.”

⁹⁹ 野口米次郎『八紘頌一百篇：野口米次郎詩集』（東京：富山房，1944）pp. 119-121

What foolishness! The united Japanese millions will not accept such pious palaver.
This is all-out, all-out:
We'll show you how decisively we slaughter you, friendship and all!¹⁰⁰

キーンはこの詩について、“[It] leaves a bad taste in the mouth, particularly because it was written by a man who had long lived abroad and even won something of a reputation for his exquisite little lyrics in English.”と論じる¹⁰¹。また、2009年に刊行された、同じくキーンの著書『日本人の戦争作家の日記を読む¹⁰²』にも、「外国で受けた待遇について不平を言う理由などなかった」ノグチが、「西洋に異常な敵意を示した」例としてこの詩を取り上げている¹⁰³。“Slaughter”というあまりに強烈な表現は、いくら忘恩行為であると前置きがあっても鋭く響いたのではないかと思われる。戦時中のノグチの言動と比較される作家に、高村光太郎がいる。高村光太郎も若い時にアメリカとヨーロッパに渡って数年間滞在した経験があり、戦時中には国粹主義になったところに類似点があるからである。キーンは、高村光太郎のアングロサクソンに対する敵意は、ニューヨーク留学中に「ジャップ」と呼ばれ、母国を「にっぽん」の代わりに「ジャパン」と呼ばれるのに憤慨した経験に由来するといひ、高村が戦時中にアメリカに抱いた憎しみの理由となるかもしれないという¹⁰⁴。吉本隆明も、高村の評伝で、次のように論じる。

高村のこころにある、西欧にたいする心理的な憧憬と劣等感とは、不安定なまま生涯にわたって見えかくれした。或る時期には、欧米留学時代の貧困な生活と、侮蔑を浴びせかけられたときの屈辱の記憶を掘りおこさねばならなかった。(中略)高村の欧米留学中の屈辱のようなものは報復するすべがなかった。(中略)戦争は、高村にはじめて欧米留学中のこころの惨劇を十分に解決させる機会をあたえたのである。¹⁰⁵

キーンだけではなく、吉本も、過去の経緯から、戦時中の高村の言動の方が、ノグチのものに比べて理解しやすいというのである。このような高村とは海外経験の中身そのものが違うノグチが、戦時中西洋に対して敵対意識を抱いた、あるいはそのように演出したところに、戦後振返っても簡単には理解できない、当時のノグチの決意が潜んでいるのである。

一方で、ノグチの同詩集にも、このようにアメリカに直接物を言うような詩とは別に、戦意昂揚詩の部類ではないものも含まれるのは、堀まどかの指摘するところである。例えば、ノグチが同詩集の最後の詩「虹」について、「崖のようなきわどい地点に体を横たえて詩を書いて来た自分に対す

¹⁰⁰ Keene, Donald. “Japanese Writers and the Greater East Asia War.” *The Journal of Asian Studies* 23.2, September (1964). pp.224-225. Yone Noguchi と同英詩については、キーンの近著 Donald, Keene. *So Lovely a Country Will Never Perish: Wartime Diaries of Japanese Writers*. (New York: Columbia University Press, 2010) pp. 13-14 にも掲載されている。

¹⁰¹ *Ibid.* p. 225

¹⁰² ドナルド・キーン著 角地幸男訳 『日本人の戦争 作家の日記を読む』(東京:文藝春秋, 2009)

¹⁰³ 同上 p. 21

¹⁰⁴ 同上 p. 21

¹⁰⁵ 吉本隆明『高村光太郎』(東京:講談社, 1991) pp. 185-186

る社会的な評価を批判し、「社会的要求を満たすための詩を書いたに過ぎない自分は最早『無言』のうちに自然消滅する」という意図を読みとると論じる¹⁰⁶。後年、まさか実際にそうなるうとはノグチも予想していなかっただろう。

1945年、戦争は日中戦争勃発から数えて八年目に入っていた。ノグチが同年に著書を刊行していない事実からも、いかに戦火がすぐそこまで迫り、執筆してられる状況でなくなったかが伺える。次に紹介する、ノグチの手紙や知人が残した記録からは、70歳手前のノグチが終戦間近をどのように過ごしたかを垣間見る事ができる。これらはノグチ自身が公に書いた文章ではないから、ある部分は日本人であり、ある意味では日本と西洋の狭間に生きた、ノグチの本音に近い部分が表れていると言えるかも知れない。

1945年4月19日夜、東京の東中野にあるヨネ・ノグチ宅は空襲で全焼し、ノグチらは防空壕で一夜を明かした後、茨城県結城郡豊岡村（現在の茨城県常総市）に疎開した¹⁰⁷。この疎開先は、当時、豊岡村村長であった飯田憲之助の別荘（敷地内の離れ家）であり、そこへヨネ・ノグチ一家が疎開する話しは、その前年である1944年から進められていたようである。飯田は版画に強い興味を持っており、その関係で、何時からかは不明であるが「浮世絵を通して」ノグチに「私淑」していた¹⁰⁸。疎開について、飯田花子は、「人様から先生疎開希望の話しを受け、一も二もなくよろこんで御迎え申したという次第」とあるが¹⁰⁹、後に『茨城新聞』に発表されたノグチから飯田宛の1944年8月19日消印の葉書には、「先日はお邪魔しました」「あなたの御厚意を受けることに決しました」とある¹¹⁰。また、1920年7月16日『茨城新聞』の記事によると、1919年夏に結城郡の文化協会の会合でノグチが依頼されて講演した際に、飯田憲之助の斡旋であったと書かれており、「親類でもない、さうかといつて深い知己の間柄でもない、ただ私の噂を知つてゐるだけで私は全然先方をしりません、しかし大変熱心に誘つて下さるし私も国策としての疎開を実行、老骨の御奉公をと思ひました矢先きなので話は実に順調でした¹¹¹」とのノグチの言葉もある。疎開先の下見に行ったというよりも、偶然講演した先が疎開先になったようである。また、先にふれた1944年8月19日のハガキには「荷物も残して置くことも出来ないの、その節はあなたの土蔵に入れて下さい」とあり¹¹²、実際に1945年早春から「トラック便でたびたび荷物をもち出していた」ようである¹¹³。つまりノグチは、終戦の約一年前から、疎開する準備を着々と進めていたのであった。

豊岡町の疎開先から講演に向いて来たノグチの様子を、翁久允は次のように回想している。

国民服に帽子を冠った彼[ノグチ]を迎えたときの私の胸は悲痛だった。そして私たち

¹⁰⁶ 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』（名古屋：名古屋大学出版会、2012）p. 423

¹⁰⁷ 飯田花子「疎開地での思出」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻（東京：造形美術協会出版局、1963）p. 308

¹⁰⁸ 飯田花子「疎開地での思出」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻（東京：造形美術協会出版局、1963）p. 305

¹⁰⁹ 同上

¹¹⁰ 『茨城新聞』2002年9月20日

¹¹¹ 『茨城新聞』1920年7月16日

¹¹² 『茨城新聞』2002年9月20日

¹¹³ 飯田花子「疎開地での思出」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第1巻（東京：造形美術協会出版局、1963）p. 308

は「サツマイモ」をわかち合っ食べながら講演の旅をつづけた。彼の胸も私の胸も「勝てない戦争だ」で一杯だった。だが、それを公衆の前で言うことが出来なかった。1930年ごろだったろう。私は彼を訪うて半日ほど雑談したことがあった。そのとき、『どうだろう、日本は何かというと米国を目の敵にしているが、アンタ・アメリカ人がどう思っていると思う？』ときいたことがあった。その時のヨネの眼は輝きに満ちていた。彼は笑いながら『アメリカ人は日本なんて子供ぐらいにしか思っていないだろう』と言った。私たち知米人は日米戦争の無謀さをよく知っていた。しかし、ヨネ・ノグチは詩人としての名をなした海外生活から帰って以来、『日本のよさ』を追及した。和歌、俳句、そして絵画、ことに浮世絵を通じての美の再発見は素晴らしかった。その日本の美と精神が、無謀な戦争ではあったが、何か奇跡的に発頭出来たらといった詩人的な熱望を彼の晩年に抱いたそうであった。しかし、若かりし頃の詩人ヨネ・ノグチは日本を一旦捨てたのだ。一旦捨ててそして再び日本を拾ったのだ。その気持ちは私にもよくわかっていた¹¹⁴。

また、1945年5月8日、ノグチが海軍航空隊の製靴工場で勤めていた知人の中山伸に宛てた手紙には、一人の父親としての姿を見るようである。

所で貴下の御好意にあまへて一つ御相談がある。小生の末子道夫なるもの中等学校3年生ですが、彼は身につけるもの凡てを失って靴を持たない現状です。彼も今は私共と一緒に豊岡村に来てゐますが地下足袋でやって居ります。彼はこの一週間後東京へ出て工場に勤勞奉仕しなければならぬ。せめては古靴でも与へたいと思ふのですが、貴下の手許に十モン位の古靴をお分けくださることが出来ないうせうか。御手紙にあった如く今は小包がきかないならば有っても発送が出来ない訳ですが、どうかして一足間に合はせて下さるまいか。¹¹⁵

この後、1945年6月19日付で、ノグチが同じく中山伸に宛てた次の手紙は、ノグチが公でない立場からアメリカについて意見した記録である。「実に敵米は憎みても余りあるが戦局は日々悪い。我等は米国の本土上陸を待つ可きであるか、また上陸して来た場合確かに彼らを全滅させる力はあるか。この事を思ふと夜も眠れない¹¹⁶」と書かれている。1945年7月5日付のノグチから中山伸に宛てた手紙にも、当時の状況やアメリカへの思いについて触れられている。

今更敵の暴力を云々した所で始まらないが、日本がかくも有らゆる都市を焼野原にされては、戦後これをどうしていいか。都市は無用だ、田舎で沢山だといつても居られまい。まことに米国は大変な事をしやがった。憎みても憎みきれない。...小生罹災の晩

¹¹⁴ 翁久允「ヨネ・ノグチの思出」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局,1965)p.187

¹¹⁵ 中山伸「戦後名古屋詩壇と詩人ヨネ・ノグチ」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局,1965)p.207

¹¹⁶ 同上 p.207

四足の靴を焼いて仕舞った。小生は片ちんばの下駄のまま逃げ出したのだ。…当地のものは八月が危険で敵が上陸してくるなどといっている。果たしてさういう場合になって来た時は、君の工場で直して貰った靴で十里位は逃げなければならない¹¹⁷。

ノグチの手紙の数々から、八年に及ぶ戦争で、疎開はしたものの、明日をもわからぬ毎日を送っていたことがわかる。だが、1945年7月16日の『茨城新聞』には、「都会の塵を洗つて詩人・土に還り生く」と題して、ノグチの疎開先での生活を書いたものがある。そこには、次のように書かれている。

村民の噂によると、野口氏が村民に接する態度のうちにも少しも学者肌のある気むづかしさが無くまた野口氏の家人も都会人としての見〇(読解不可能)をうち捨てて土に生きる真実の姿で接し、これら野口氏一家のゆきとどいた心遣ひのうちにも自づと親和が芽生えているのだという(後略)¹¹⁸

と書いてあり、知合いのいなかった地元にも受け入れられて、公には穏やかに生活しているような印象をもたらしただろう。ノグチの言葉として、「かうして農村で土に親しむ生活は大和民族の未来の姿に還るもので其処には逞しい力のみが感じられる、芽生え、稔るといふことは太陽と大地の力の恵みであり開国以来民族の原動力であつた、私の今までのか弱い文化的なセンスはいま太陽と大地のうちに逞しく育てられてゐる」と書かれている¹¹⁹。ノグチの感想は、手紙に書かれていた物が不足している状況や、あるいは敵が攻めて来たら逃げねばならないなどという不安とは対照的な、平和時に田舎の自然に根付いた暮らしをしたもののものである。同紙には、ノグチの「供物」という詩も掲載されていた。

1945年8月1日には、疎開先から、茨城県立水海道中学校で講演したというが、同席していた寺田蔵太郎は、「『どうしても自分はアメリカを憎む気持ちにはなれない』という意味のことを述べられたのが、未だに私の頭の隅に刻まれている」という¹²⁰。このようなアメリカに対する気持ちは、公の文章では書く事のできなかったと思われるものの、ノグチはアメリカに対して愛憎の入り混じった感情を抱えていたと思われる。

1945年8月15日に日本は終戦を迎えた。ノグチは、1945年8月25日付けで、同じく中山伸に書いた手紙には、次のようにある。

然る所貴下の御手紙着、開封すると御工場作業中止との事 … いやはや、さういふ

¹¹⁷ 同上 p. 208

¹¹⁸ 『茨城新聞』1920年7月16日

¹¹⁹ 同上

¹²⁰ 寺田蔵太郎「ヨネ・ノグチ先生の思い出」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻(東京:造形美術協会出版局, 1965) p. 211

事になったか。貴下の停戦観も小生と同様、今何をか云はんやだ。恥辱も恥辱この上なしの恥辱の武装解除に無条件降伏、何という最後だ。あゝ日本は今後どうなる事か。恐らく百年も二百年立ってもとの勇氣は取り戻せないであらう。この最後を見て我等家を焼かれ財産を失ひ、子供を戦場で葬ったものたちは今後どうして生きて行ける。余り癩にさはって涙も出ない¹²¹。

一方、ノグチは、アメリカに居たノグチの息子のイサム宛に「日本で起きた事態を心から遺憾に思っています」と書き、イサムは、それを「国粹主義を支持した父親の『反省』と受け取ろうとした」とある¹²²。

この後、日本は戦争犯罪を問い正すムードへと、急激に移行した。ヨネ・ノグチは、1947年3月頃には腎臓癌が見つかり、戦争中の言動を反省するかどうかの選択をする時間もないまま、戦後二年も経たない1947年7月13日に他界してしまったのである。戦時中に国粹主義の立場から発信し続けたノグチの知名度は地に墮ち、その後今日に至るまで、生前の頃のように知られてはいない。

¹²¹ 中山伸「戦後名古屋詩壇と詩人ヨネ・ノグチ」外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』第2巻（東京：造形美術協会出版局，1965）p. 210

¹²² ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』（下）（東京：講談社，2003）. p. 14

結論

本論文は、生前に著名でありながら他界後から今日まで殆ど忘れられてきたヨネ・ノグチを、文化現象という視点から考察するのが目標であった。生前の特殊な時代背景の中で名の知られたノグチを文化現象として捉え、忘れられた要因を探るために、神話化されていたとも思える生前の彼の名声を分解し、どのような時代背景で、どのようなところに注目され、その名声が築かれたのかという点を、五つの観点から論じた。

第1章では、ノグチのアメリカでの活動に注目した。18歳直前という若さで単身渡米したノグチは、アメリカ詩人ウァキーン・ミラーとの出会いをきっかけに詩人を志した。そして、日本人として初の英詩集出版、英語小説出版など驚くべき業績をとおり、現地で名の知られた人物となった。偉業とも思える数々の出版の背景には、彼がこのような挑戦をした初めての日本人であったことに加えて、彼を支援したアメリカ人たちや、文芸雑誌や新聞に代表されるようなアメリカ社会の読者たちが、ノグチのエキゾティシズムに惹かれたという要素があった。また、ノグチもそれを察知し、当時盛んであったジャポニズムに乗り、そこからアイデアを得て日本らしさを醸し出した作品を作るなど、時代の特徴をつかんだ彼の活動が明らかになった。

第2章では、ノグチのロンドンでの活動に注目した。ロンドンで英詩集を出版するためにニューヨークから渡英し、出版社の見つからなかったノグチは、自費出版した英詩集をロンドン周辺の作家たちに送りつけたのである。それは、当時のイギリスの詩風とは違う作風の詩であったが、当時の評論家の長老とも言えるマイケル・ロセッティの評価にも表れているように、ノグチの「独創性」とも言える日本人としてのエキゾティシズムが評価されといえる。日本人が現地で刊行した初めての英詩集であったことや、日英同盟締結の翌年であったという社会背景もあり、ノグチの詩は見事に注目されたのであった。

第3章ではヨネ・ノグチと夏目漱石を、その海外経験という側面から比較した。夏目漱石が二年の留学を終えて帰国する頃、ノグチはイギリス入りした。ノグチはロンドンで華やかな成功を手に入れて喜んだが、夏目は自らの意志ではイギリスに行かなかったであろうと帰国後に執筆するほど、その海外体験が違っている。その違いをもたらした要素の一つは、渡航条件の違いであったといえる。ノグチは私費で渡航し、滞在期間に縛られておらず、どこからも責任や義務などを課されておらず自由な身であったからこそ、異文化の社会の中に入り込めた。それに対し、夏目は官費留学であったために、条件から期間、目的や予算など全て明治政府から決められていた。帰国直後のノグチは、文学で名を馳せた夏目と新聞などで並ぶ程の知名度を持っていたが、同時に、夏目は帰国後の日本社会に再び順応できたのに対し、ノグチは日本でも「エトランゼ」「二重国籍」という立場に悩み、日本国内でのその後の評価にも影響した。

第4章では、いくつかの共通点を持ちつつも、没後は特に詩人として忘れられているヨネ・ノグチと、西脇順三郎という19歳年下の詩人で現在もその知名度を保ち続ける二人を比較した。二人には、英語で詩を書き始めたり、20世紀の初めにロンドンで英詩集を自費出版したという共通の

出発点がある。この英詩集に関しては西脇よりもノグチの方が遥かに多くの書評を集めて話題になったが、その後のイギリス文学界にはイマジズムやモダニズムという新しい運きが生まれ、西脇に比べて、ノグチはその動きに敏感ではなかったといえる。また、帰国後に日本で日本語の詩集を刊行した際も、西脇は戦略的にその時期と機会を見計らった結果、初の詩集で詩人と認識されたのに対し、ノグチは、その作品が評価されたとは言い難く、あくまでも外国で有名になった日本人としての知名度を保ち続けたのである。

第5章では、戦争時におけるノグチの言動に焦点をあてた。ノグチの生前に起きた戦争は、日清・日露戦争、第一次および第二次世界大戦である。平和時には、国際人として日本と西洋をつなぐ文化大使のように活動できたが、戦争はノグチを日本人に立ち返らせた。また、それまでのノグチの知名度から、彼は公に国粹主義を貫かねばならぬ立場にあった。名の知られた人物として、詩集を刊行したり新聞に寄稿したりと、最後まで活動し続けたノグチを網羅的に見ようと努めた。

本論文では、このように五つの観点から、ノグチの生前の名声が、如何に特有の時代背景の中で築かれたかを浮き彫りにしてきた。だが、ヨネ・ノグチは戦後丸二年経たずに病で他界した。高村光太郎や斎藤茂吉の例に見られるように、戦争に協力した者の中にはその罪を反省し、自身でその名誉を回復した者もいた中で、没後ノグチが忘れられてきた原因の一つが、戦時中の国粹主義の言動を自ら反省し名誉回復する機会が、病と死によって永遠に奪い去られてしまったのは、長年ヨネ・ノグチを研究してきた亀井俊介も指摘しているとおりで¹。また、堀まどかも、ノグチは戦後の『文学者の戦争責任』の糾弾によって『侵略戦争のメガフォン』として文学者としての生命を葬られ、現在においても、その戦時期の言論活動に対する嫌悪と軽蔑の評価軸から完全には開放されていない²と論じる²。

だが、文化現象という観点からノグチをみるのであれば、彼が没後に忘れられてきた理由の一つは時代の変化ではなかろうか。第二次世界大戦後、世界は大きく変化した。同大戦は世界の大半の国を捲き込んだ大規模な戦いに発展し、それを防ぐことのできなかつた反省から、1945年の終戦と共に国際連合が設立され、1956年には日本も加盟した。国際連合に続いて国際的な組織がいくつも設立され、国際という言葉も頻繁に使用されるようになる。ノグチの生前のように、日米、日英という二国間や、東洋と西洋で世界を見る時代は終わり、世界の多数の国々を視野に入れた国際的な感覚が求められるようになったのである。また、アメリカに特化していえば、戦前と比べて、日本人にとってアメリカは遠くて未知な存在ではなくなった。戦後直後のGHQの日本占領により、マッカーサーが新聞記事に載り、路上でもアメリカ人を見かけるようになったのをはじめ、アメリカがぐっと近くなったのである。

このような変化が起きた戦後の社会では、ノグチのように、文学、文化、社会、美術、外交など多分野を一気に引き受けるジェネラリストが第一線に出る時代は過ぎたと言えよう。戦争を機に日本

¹ 亀井俊介「ヨネ・ノグチ研究の極私的展望―序に代えて」星野文子『ヨネ・ノグチ 夢を追いかけた国際詩人』(東京:彩流社、2012)pp. 6-7

² 堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋:名古屋大学出版会、2012)p. 402

や日本語に興味を持ったアメリカ人は増え、日本について学問として専門的に学ばれる分野へと発展した。彼らは日本を広く捉えることにも努めたが、同時に特定の領域の知識を深めたのである。戦後に名が知られ始め、今日も知られる親日家と呼ばれる人物たちは皆、それぞれ特定の分野を極めたのであり、日本の映画をアメリカに広めたような専門家まで誕生した。日本でも、アメリカ文学とイギリス文学が分かれ、その他に歴史、外交、社会、文化などなど分野が別れ、それぞれ専門化されている。そして、彼らは各分野で、他の誰もを持ち得ない知識を持つようになっていく。文学の役割も変化したと言える。日本文学は、例えば古典や現代をはじめ細かく細分化さえされて、学問として学ばれている。ヨネ・ノグチの生前の著書のように、日本人が書いたものを読んで日本に対する印象を膨らませる時代は終わった。大江健三郎や村上春樹などは日本について学びたいと期待されて読まれるものではなく、日本人作家でありながらも普遍的な文学として世界各地で読まれているのである。戦前のノグチのように、一人で何もかも背負い、日本とアメリカ、又は日本とイギリスにおいて代表的な存在の人物は、戦後いなくなった。時代が変わったのである。ノグチが彼の時代における先駆的な役割と見極めた、日米や日英の間に立つ「文化大使」のような役を果たしていた点は、今日においても引き続き評価されるべき点であろう。ノグチはまさに、戦前の特定の時代背景の中で著名になった文化現象であったといえる。そして、戦後、第二のヨネ・ノグチがないのは、このような時代の変化が理由ではないかと思われる。

本論文のはじめにふれたマイナーの論点のように、ノグチが英語でアメリカやイギリスに発表・発信していた作品や論考の質が本物でないにも関わらず読まれていたという点は、このような時代背景を踏まえれば、理解しやすい。英詩に関しても、異国の文化で詩を書くのであるから、その地で名前の知られているホイットマンやポオなどの詩人の詩を真似て書き始めており、ある意味でその域を出なかったとマイナーは論じたかったのであろうが、英詩を書こうとした努力自体が先駆的で、それ故に注目されるべき出来事であり、そのような時代であったのだ。

また、このような時代背景は、ノグチの英語の程度を説明する要素の一つと言えるだろう。ノグチにとって英語は、習得した言語であって、母国語のレベルに達成しなかったのは、本論文を通して見て来た点でもある。外国人として学んだ英語には、いくつか段階がある。何とか単語を並べるレベルもあれば、際立った支障なく意思疎通できるが前置詞や冠詞など文法が不完全なレベルもあり、母語話者と変わらないレベルで執筆、発言ができる人はごくごく僅かである。ノグチの場合は、残っている手紙から、おそらく大きな支障はなく意思疎通は出来ていたと思われるが、文法的な間違いが多く、習得した言語という域を出なかった。例えば、以下にノグチの手紙から特に文法が乱れている文章をいくつか引用したが、これらを見れば、英語は彼にとって習得した言語なのが明らかである。

I saw you only yesterday as I think. (おそらく1900年12月)³

³ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley.

No, I never tried any publish, with my poem yet, and I will not, I think, in this country.
If London don't wish to read my work, I will carry to Japan and publish it, I think.
(1901年11月8日)⁴

How thankful I am for your task done for me! I feel almost sorry to pay such a little
money, but you know, I wish you will believe, that I am a poor student who can not
have much money. (1902年2月21日)⁵

Your book this morning. You were good to sent it, Frank. (おそらく1903年)⁶

I will make your name known through whole Japan. And Japan is not so small imagine.
I have had such a glorious time ever since I came home. Can't you come over and
see us here? I will make you happy as possible. (1905年1月27日)⁷

どの文章にも、母語話者は書かないであろう文法的な間違いがあるのは明らかだが、どれも彼が意図したい内容は何とか汲み取れるというレベルである。この五つの例文のうち、一番上は1900年に書かれており、この時までにはノグチは18歳直前という若い時からの八年をアメリカ社会で過ごしていた。最後の1905年に書かれたものは、既に11年のアメリカ・イギリス滞在から帰国して数ヶ月が経過していた。18歳にもならずアメリカに行き、本論文で見て来たように、可能な限り現地の社会に入り込もうとし、日本人よりも現地の人達に理解者を多く得て文学作品を出版してきたノグチの英語が、実はこのレベルであった。このレベルでは、微妙なニュアンスの違いなどを扱うことは当然困難であるから、英語は彼にとってハンディキャップであったといえる。だが、ノグチの編集者たちは、このノグチの英語を敢えてエキゾティシズムとして利用したと思われる。*Seen and Unseen* を校正したジレット・バージェス、ニューヨークで出版した *The American Diary of a Japanese Girl* やロンドンで出版した *From the Eastern Sea* を初めとする、その頃出版された著書や記事に手を加えていたフランク・パットナムやレオニー・ギルモアは、ノグチの英語に、意図的にどこまで手を入れ、どこまで手を入れないかと裁量していたのだろう。そして、あえてノグチのエキゾティシズムを上手く利用したのであろう。つまり、ノグチは、意図的に作られた英語で勝負していたことになる。当時のイギリス人、アメリカ人がこのようなノグチを称讃したのは、やはり、マイナーの言う、「英語を使って書いたほんものの日本詩人」と思われたノグチが注目される時代背景があったからなのである。

⁴ From Yone Noguchi to Charles Stoddard. 8 November 1901. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 101

⁵ From Yone Noguchi to Leonie Gilmour. 21 February 1901. *Ibid.* no. 63

⁶ From Yone Noguchi to Frank Putnam. no date. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley.

⁷ From Yone Noguchi to Charles Stoddard. 25 January 1905. Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975). no. 364

逆に、ノグチが日本社会に再び適応する際に妨げになったともいえる「二重国籍」性は、グローバル化にともない注目される時代が来たといつてよい。ノグチが日本と西洋の間に立とうとした当時、ノグチが自らを名付けたような、「エトランゼ」や「二重国籍者」のような立場は極めて珍しく、このような境遇を理解する人物が日本には殆どいなかったと思われる。だが、現在は二カ国以上にまたがる人生を送り、いくつかの言語を操り、それぞれの文化における自身を確立している人は少なくない。そのような人達の増加に伴い、学問においても異文化コミュニケーションや異文化間適応、文化とアイデンティティ、バイリンガルとバイカルチャーなどが発展している。学問の発展は、ノグチのように(又は彼以上に)異文化にまたがって生きる人生がどれほど難しくデリケートであるのかを意味し、同時にその理解が進んでいるとも言える。つまり、ノグチのように、従来の学問の枠組みに当てはめて理解しようとするとし難さが生じる人物、国際的に広く活動した人物が正しく理解されようとする時代がやっと到来したといえる。ノグチは、時代の限界の中で名声を築くことに関しては成功した人物であったといえるだろう。そして、没後60年近く殆ど忘れられて来たノグチが以前にはないほど研究され始めているのも、グローバル化が進んだ現代を象徴する文化現象だといえるだろう。

今後のノグチ研究は広がる可能性を多分に秘めている。まず、ノグチはその著書が約100冊あり、訳書や増刷などを入れると200冊近くになる。これまでの研究で取り上げられてこなかった著書を理解していくのは今後の課題の一つである。また、ノグチの英詩について、詳細な研究が可能であろう。ノグチの詩を当時名前が知られ、第一線で活躍していた西洋の詩人たちの詩と比較し、その形式や内容を詳細にわたって調べ、彼の詩が彼らの詩とどのように同じだったのか、違ったのか調べることから再評価も検討できる。また、ノグチが約40年もの長きにわたって教鞭をとった慶應義塾でどのような教員生活を送り、同僚(特に西脇順三郎)や学生とどのような関係を持っていたのか、これも重要な研究となるだろう。それと関連するが、ノグチ関係の手紙は英語のものは数百通保存されており、ノグチの生の声や本心を理解するのに役立つが、日本語の手紙に関しては殆ど残っていない。出版物からでは掴むことのできないノグチの人物像を理解するための方法も何か模索できるかもしれない。

参考文献

日本語

- 有馬研一『フランク・ノリスとサンフランシスコ』(東京:桐原書店, 1996).
- 石附実『近代日本の海外留学史』(東京:中央公論社, 1992).
- 稲賀繁美『ヨネ・ノグチの浮世絵および日本美術評論集について』(東京: Edition Synapse, 2008)
- 江藤淳『漱石とその時代 第二部』(東京:新潮社, 1970).
- 大西直樹『19世紀後半における日米文化交流:研究成果報告書』(国際基督教大学, 1991).
- 岡本彩子『アメリカを生き抜いた日本人』(東京:日本経済新聞社, 1980)
- 亀井俊介『英文学者 夏目漱石』(東京:松柏社, 2011)
- _____『解説 復刻版 ヨネ・ノグチの英文著作集～詩集・小説・評論～』(東京: Edition Synapse, 2007).
- _____『解説 ヨネ・ノグチ英文著作集3 ヨネ・ノグチとリトル・ポエトリー・マガジン』(東京: Edition Synapse, 2009).
- _____『近代文学におけるホイットマンの運命』(東京:研究社, 1970).
- _____『自由の聖地』(東京:研究社, 1978)
- キーン・ドナルド著, 角地幸男訳『日本人の戦争 作家の日記を読む』(東京:文藝春秋, 2009).
- 『近代詩 第3』日本現代詩大系6(東京:河出書房, 1951)
- 『木下杢太郎・日夏耿之介・野口米次郎・西脇順三郎 日本の詩歌』12(東京:中央公論社, 1969)
- 工藤美代子『寂しい声:西脇順三郎の生涯』(東京:筑摩書房, 1994).
- ケネス・ルオフ著, 木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』(東京:朝日新聞出版, 2010)
- 『現代詩読本8 萩原朔太郎』(思潮社, 1979)
- 齋藤勇『イギリス文学史』(東京:研究社, 1980).
- 塩崎智『日露戦争もう一つの戦い—アメリカ世論を動かした五人の英語名人』(東京:祥伝社新書, 2006).
- 鈴木貞美編『《Japan To-day》研究:戦時期《文藝春秋》の海外発信』(東京:作品社, 2011)
- 末延芳晴『夏目金之助 ロンドンに狂せり』(東京:青土社, 2004).
- 瀬尾育夫『戦争詩論 1910-1945』(東京:平凡社, 2006).
- 『千家元麿・山村暮鳥・福士幸次郎・佐藤惣之助・野口米次郎・堀口大学・吉田一穂・西脇

- 順三郎集 現代日本文学大系』41(東京:筑摩書房, 1972)
- 「占領史研究會」主宰 澤龍『GHQ に没収された本』(東京: サワズ出版, 2005).
- 高井蒼風『英詩人 ヨネ・野口の栄光: その英米における遍歴苦闘の秘録』(東京: 紀尾井書房, 1985).
- 『高村光太郎、萩原朔太郎集』昭和文学全集22(東京: 角川書店, 1953).
- 坪井秀人『声の祝祭: 日本近代詩と戦争』(名古屋: 名古屋大学出版会, 1997).
- 鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日本人』(東京: 日本放送出版協会, 1977).
- 出口保夫『漱石と不愉快なロンドン』(東京: 柏書房, 2006).
- ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』(東京: 講談社, 2003).
- 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチ研究』1~3巻(東京: 造形美術協会出版局, 1963, 1965, 1975).
- _____『詩人ヨネ・ノグチの詩: その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』(東京: 造形美術協会出版局, 1966).
- 夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思い出』(東京: 文藝春秋, 1994).
- 夏目漱石『文鳥・夢十夜・永日小品』(東京: 角川書店, 2003).
- _____『文学論』(東京: 岩波書店, 2007).
- 新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(東京: みすず書房, 2003).
- _____『評伝西脇順三郎』(東京: 慶応義塾大学出版会, 2004).
- 西脇順三郎 “A Note on the Poems of Mr. Noguchi” 『三田文学』1921年11月号
- _____『現代詩読本9: 西脇順三郎』(東京: 思潮社, 1979).
- _____『定本西脇順三郎全集』第3、6、11、12、別巻(東京: 筑摩書房, 1994).
- 西脇順三郎を偲ぶ会編『幻影の人 西脇順三郎を語る』(東京: 恒文社, 1994).
- 野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介『現代日本文学全集 73: 野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介』(東京: 筑摩書房, 1956).
- 野口米次郎「印度の新聞界は沸騰す」『日本評論』10 卷 10 号、新年特集号(日本評論社, 1939)
- _____「過去30年を振り返る」『三田文学』1926年4月号(東京: 三田文学, 1926)
- _____『帰朝の記』(東京: 春陽堂, 1904).
- _____『霧の倫敦』(東京: 第一書房, 1926).
- _____『英米の十三年』(東京: 春陽堂, 1905).
- _____「英詩」『早稲田文学』第 37 号 1897 年 7 月 1 日
- _____「小冊子『東海より』の歴史」『学燈』第 12 号 1903 年 10 月
- _____『宣戦布告』(東京: 道統社, 1942).
- _____『伝統について』(東京: 牧書房, 1943).
- _____『二重国籍者の詩』(東京: 玄文社, 1921).

- _____『日本詩歌論』(東京: 白日社, 1915).
- _____『野口米次郎英詩選集』(東京:アルス, 1922).
- _____『野口米次郎詩論』(東京: 玄文社詩歌部, 1922)
- _____『野口米次郎選集』1～3巻(東京: 株式会社クレス出版, 1998).
- _____「萩原朔太郎君の詩」『三田文学』大正 6 年 5 月号(東京: 三田文学会, 1917)
- _____『八紘頌一百篇: 野口米次郎詩集』(東京: 富山房, 1944).
- _____『文藝殿』(東京: 春陽堂文庫出版, 1943)
- 萩原朔太郎、三好達治、西脇順三郎『現代文学大系第 34 巻: 萩原朔太郎、三好達治、西脇順三郎集』(東京: 筑摩書房, 1965).
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(東京: 彩流社, 2005).
- 福田光治、剣持武彦、小玉晃一『欧米作家と日本近代文学』(東京: 教育出版センター、1975).
- 星野文子『ヨネ・ノグチ 夢を追いかけた国際詩人』(東京: 彩流社, 2012)
- 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋: 名古屋大学出版会, 2012).
- マイナー・アール著 深瀬基寛、村上至孝、大浦幸男訳『西洋文学の日本発見』(東京: 筑摩書房, 1959).
- 前坂俊之『傑作国策標語大全』(東京: 大空社, 2001)
- 牧野義男著, 恒松郁夫訳『霧のロンドン - 日本人画家滞英記-』(東京: 雄山閣, 2007).
- 松本道介編集『留学の思想』(東京: 三修社, 1972)
- 三好行雄編集『漱石日記』(東京: 岩波書店, 1900).
- _____『漱石書簡集』(東京: 岩波書店, 1990).
- 村山祐三『アメリカに生きた日本人移民 日系一世の光と影』(東京: 東洋経済新報社, 1989)
- 室生犀星『日本の詩歌』第 15 巻(東京: 中央公論社, 1968).
- 山村暮鳥、福土幸次郎、千家元麿、百田宗治、佐藤惣之助『日本の詩歌』第 13 巻(東京: 中央公論社, 1969).
- 吉田健一『ポエティカ』第 2 巻(東京: 小沢書店, 1974).
- _____『英国の近代文学』(東京: 筑摩書房, 1974).
- 吉本隆明『高村光太郎』(東京: 講談社, 1991).
- 和田桂子「野口米次郎のロンドン(2)」『大阪学院大学外国語論集』第 34 号、(大阪学院大学外国語学会, 1991 年)
- _____「野口米次郎のロンドン(7)—日本詩歌論をめぐって—」『大阪学院大学 外国語論集』第 40 号 (大阪学院大学外国語学会, 1996).
- _____「野口米次郎のロンドン(8)あやめ会の内紛」『大阪学院大学 外国語論集』第 41 号 (大阪学院大学外国語学会, 2000).

_____「野口米次郎のロンドン(13)—エズラ・パウンドとの交友—」『大阪学院大学外国語論集』第46号(大阪学院大学外国語学会, 2002).

和田博文編『近現代詩を学ぶ人のために』(京都:世界思想社, 1998).

ヴァインズ、シェラード『詩人野口米次郎』(東京:第一書房, 1925).

『朝日新聞』

『読売新聞』

『茨城新聞』

『日本詩人』野口米次郎記念号5月号(東京:新潮社, 1926)

English Books

Aston, W.G. *A History of Japanese Literature*. (London: William Heinemann, 1899).

Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975).

Baym, Nina. General ed. *The Norton Anthology of American Literature*. Shorter Fifth ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1999).

Bickley, Francis. “Yone Noguchi's Essays” *The Bookman* February (1914).

Birchall, Diana. *Onoto Watanna the Story of Winnifred Eaton* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2001).

Cortazzi, Hugh. ed. *Britain & Japan: Biographical Portraits*. Vol. viii. (Leiden-Boston: Global Oriental, 2013).

Eaton, Winnifred. *Me: A Book of Remembrance*. (New York: The Century Company, 1915).

Flint., F.S. “Imagisme” *Poetry: A Magazine of Verse*. Vol.1 October-March, 1912-1913.

Frost, O.W. *Joaquin Miller*. (New York: Twayne, 1967).

Fujita, Jun. “A Japanese Cosmopolite” *Poetry* XX. April - September (1922).

_____. *Tanka: Poems in Exile*. (Chicago: Covici-McGee., 1923).

Hakutani, Yoshinobu. *Selected English Writings of Yone Noguchi, an East-West Literary Assimilation*. Vol.1-2. (London and Toronto: Associated University Presses, Inc., 1990, 1992).

Holland, Clive. *My Japanese Wife: A Japanese Idyl*. (New York: Frederick A. Stokes Company, 1901).

Kamei, Shunsuke. *Yone Noguchi an English Post of Japan*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1965).

Keene, Donald. “Japanese Writers and the Greater East Asia War” *The Journal of Asian*

- Studies* 23.2, September (1964).
- _____. *So Lovely a Country Will Never Perish: Wartime Dairies of Japanese Writers*. (New York: Columbia University Press, 2010).
- Kodama, Sanehide ed. *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. (Redding Ridge: Plack Swan Books, 1987).
- Marberry, M.M. *Splendid Poseur—Joaquin Miller, American Poet*. (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1953).
- Markino, Yoshio. *A Japanese Artist in London*. (London: Chatt & Windus, 1910).
- Marx, Edward. “No Dancing: Yone Noguchi in Yeats's Japan.” Warwick Gould. ed. *Yeats Annual 17, Influence and Confluence*. (London: Macmillan, 2007).
- M.H. Abrams, general ed. *Norton Anthology of English Literature* seventh edition, vol.2. (New York and London: W.W.Norton & Company, Inc., 2000)
- Miller, Edwin Haviland. *The Collected Writings of Walt Whitman, the Correspondence 1868-1875*. (New York: New York University Press, 1964).
- Miller, Joaquin. *Songs of the Sierras*. (Toronto: The Canadian News and Publishing Co., 1871).
- Miller, Joaquine and Noguchi, Yone. *Japan of Sword and Love*. (Tokyo: Fuzanbo, 1905).
- _____. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay*. Kamei, Shunsuke. ed. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- Miner, Earl. *The Japanese Tradition in British and American Literature*. (Princeton: Princeton University Press, 1958).
- Noguchi, Yone. Marx, Edward and Laura E. Franey ed. *The American Diary of a Japanese Girl*. (Philadelphia: Temple University Press, 2007)
- Noguchi, Yone. “Admiration from Japan – An Oriental Critic on the Anglo-Saxon Girl” *Frank Leslie's Popular Monthly*. December, 1903. (New York: Frank Reslie Publishing House)
- _____. *The American Diary of a Japanese Girl, by Miss Morning Glory*. (New York: Frederick A. Stokes & Co. 1902). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *Collection of Letters and Papers from Yone Noguchi* BANC MSS C-H 127. University of California, Berkeley, Bancroft Library.
- _____. *Emperor Shomu and the Shosoin*. (Tokyo: Kyo bun kwan, 1941).
- _____. *From the Eastern Sea (3rd ed.)*. (Tokyo: Fuzanbo, 1903). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*.

- (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. "Onoto Watanna and Her Japanese Work" *Taiyou* 13:8 (June 1907): 18-21;
13:10 (July 1907): 19-21
- _____. Marx, Edward, ed. *Later Essays*. (Botchan Books, 2013).
- _____. *The Pilgrimage*. (Kamakura: The Valley Press / Yokohama: Kelly & Walsh, 1909). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *Seen and Unseen ; or, Monologues of a Homeless Snail* 2nd ed., (New York: Orientalia, 1920). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *The Spirit of Japanese Poetry -Wisdom of the East-*. (London: John Murray, 1914). Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself*. (London: Chatto & Windus, 1914). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *The Summer Cloud, Prose Poems*. Shunyo-do, 1906. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essay*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *The Voice of the Valley*. (San Francisco: William Doxey. 1897). Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. (Tokyo: Edition Synapse, 2007).
- _____. *Yone Noguchi Letters and Ephemera*. BANC MSS 82/130, The Bancroft Library, University of California, Berkeley.
- _____. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi*. Vol.2 (Tokyo: Edition Synapse, 2009).
- Norris, Frank. *Octopus*. (New York: Doubleday, 1952).
- Pound, Ezra. "How I began" *T.P.'s Weekly* June 6, 1913
- _____. "In a Station of the Metro" *Poetry* II. April-September (1913).
- Ransome, Arthur. *Portraits and Speculations*. (London: Macmillan and Co., Limited, 1913).
- Rabson, Steve. *Righteous Cause or Tragic Folly: Changing Views of War in Modern Japanese Poetry*. (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, The University of Michigan 1998).
- Starr, Kevin. *Americans and California Dream 1850-1915*. (Oxford: Oxford University Press, 1973).

Stock, Noel ed. *Ezra Pound: Perspectives*. (Chicago: Henry Regnery Company 1965).

Stoddard, Charles Warren. "Stoddard, Charles Warren 1843-1909." *BANC 82/2C Box 1*.
Berkeley: University of California, Berkeley, Bancroft Library.

Sueyoshi, Amy. *Queer Compulsions: Race, Nation, and Sexuality in the Affairs of Yone Noguchi*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 2012).

Walker, Franklin. *San Francisco's Literary Frontier*. (University of Washington Press, 1970).

Who was who in America. (New Providence, N.J. :Marquis Who's Who, 1993).

New York Times

The Bookman, a Literary Journal. IV. December no.4 (1896).

The Times Literary Supplement (London: News International, 1925)

Appendix 1.

ヨネ・ノグチ 略年表

(カッコ内は年齢)

- 1875/明治 8 12/8 野口米次郎、現在の愛知県津島市本町に父・伝兵衛、母・くわの四男として生まれる。兄は、野口秀之助、高木藤太郎、野口祐眞の3人、妹は星野たね。
- 1889/明治 22 (14) 愛知県立中学校(現在の愛知県立旭丘高等学校)に入学。
- 1890/明治 23 (15) 2月、愛知県立中学校を退学して上京。
- 1891/明治 24 (16) 慶應義塾大学入学。
- 1893/明治 26 (18) 同大学を退学。
11/3 横浜よりベルジック号で渡米。11/20 サンフランシスコ到着。ハウスボーイとして住み込みで働いたり、ホテルで皿洗いをしたり、また日露戦争が始まってからは日本語の新聞である桑港新聞に翻訳記事を載せたりしながら2年7カ月を過ごす。
- 1896/明治 29 (21) オークランドの詩人 Joaquin Miller を知り、彼の「高丘」に居候始める。詩人になると志す。
7月 Gelett Burgess と Porter Garnet が編集を助け、雑誌 *The Lark* に詩5篇を発表。
12月、英詩集 *Seen and Unseen* を出版。
- 1897/明治 30 (22) ヨセミテ公園を訪れる。
12月、詩集 *The Voice of the Valley* 出版。
- 1900/明治 33 (25) 5月、ミラーの元を去りシカゴに一ヶ月滞在。シカゴでは Frank Putnam の世話になる。
6月、ニューヨークに到着。9月、ワシントン D.C. の Charles Warren Stoddard の「バングロウ」を訪れ、Ethel Armes と出会う。
- 1901/明治 34 (26) 2月、新聞広告を通じて Leonie Gilmour と出会い、英文編集を依頼する。
Frank Norris の小説 *Octopus* に「ある日本人」として描写される。
11月、12月に、小説 *The American Diary of a Japanese Girl* の数章が匿名で雑誌 *Frank Leslie's Popular Magazine* に掲載される。
- 1902/明治 35 (27) 9月、小説 *The American Diary of a Japanese Girl* がフレデリック・ストークス社から出版。
11月、ニューヨークを発ってイギリスへ。11/20 ロンドンに到着。数日後、ブリクストン通りに住む友人で画家を志していた牧野義雄の下宿に住み始める。ロンドン市内の出版社に詩を売り込むが不成功に終わる。
- 1903/明治 36 (28) 1月、ロンドンで詩集 *From the Eastern Sea* を自費出版。わずか8篇の詩を掲載した16ページの小冊子であった。William Michael Rossetti をはじめとする英文学評論家や英文学者から評される。
3月、ロンドンのユニコーン・プレス社から、また10月には日本の富山房から詩集 *From the Eastern Sea* が出版される。これは先述の小冊子の拡大版で、36篇の詩を掲載している。
3/24、ロンドンを発ってアメリカに戻る。
11月、Leonie Gilmour に「貴女を法律上の妻にする」という手紙を送る。
- 1904/明治 37 (29) Ethel Armes と婚約。日露戦争勃発後、帰国を決意。ヨネは先に帰国し、Ethel Armes が後か

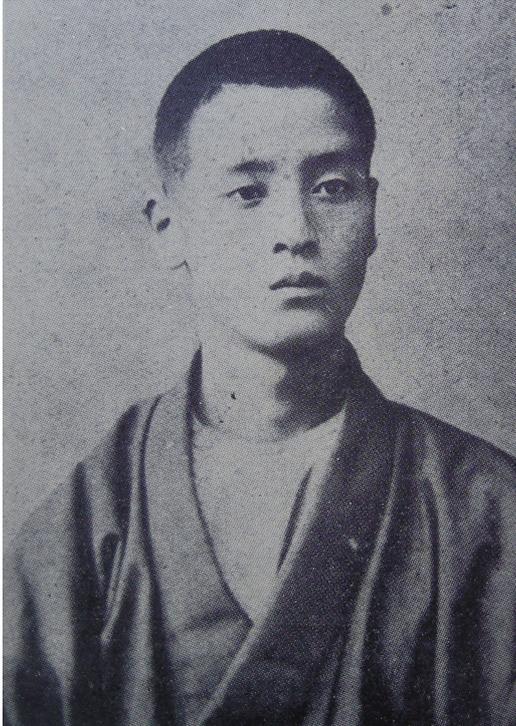
- ら日本に合流すると段取りする。
- 8月、アメリカの複数の新聞や雑誌と日本特派員として記事を寄稿する契約を結んで帰国の途に就く。
- 9月、横浜着。約十一年ぶりに帰国した。9/17&18 幸田露伴「野口米氏に寄す」を『読売新聞』に発表。
- 10月、郷里の愛知県津島に帰る、京都、奈良へも旅する。11/12 常光寺で兄・祐眞の晋山式。
- 11/17 カリフォルニア州で Leonie Gilmour がヨネ・ノグチの息子(後の Isamu Noguchi)を産んだ。Ethel は Leonie の出産を知り、来日を取りやめる。
- 『帰朝の記』、*The American Diary of a Japanese Girl*(富山房)出版。
- 1905/明治 38(30) 慶應義塾大学で英文学を教え始める。Joaquin Miller との共著 *Japan of Sword and Love*、『英米の十三年』、*The American Letters of a Japanese parlor Maid, by Miss Morning Glory* (『御小間使朝顔嬢の書簡』)、『邦文・日本少女の米国日記』を出版。
- 1906/明治 39(31) ヨネ・ノグチ、武田まつ子と結婚。「あやめ会」を結成し、詩集『あやめ草』および『豊旗雲』出版するが、約半年で解散する。*The Summer Cloud* 出版。
- 1907/明治 40(32) 3月、Leonie Gilmour が2歳4ヶ月の息子イサムを連れてモンゴリア号で来日。*Ten Kyogen in English, Kamakura* 出版。
12月、ヨネとまつ子の間に長女・一二三(ひふみ)が誕生。
- 1908/明治 41(33) Leonie Gilmour, イサムを連れて別居。
- 1909/明治 42(34) *The Pilgrimage*(2巻)を出版。
- 1910/明治 43(35) *Lafcadio Hearn in Japan* (日本とイギリスで)を出版する。
- 1911/明治 44(36) *Lafcadio Hearn in Japan* 出版。ヨネとまつ子の長男・春雄誕生。
- 1912/大正 1(37) Leonie Gilmour の長女・アイリス誕生。(アイリスの父親はわかっていない)。
- 1913/大正 2(38) 5月、次男・正雄誕生。8月、父・伝兵衛死去。
9月、東京都中野町字原 865 番地(現、中野区桜山町)に新居を構える。
12月イギリスのオックスフォード大学等で講演のため渡英。
- 1914/大正 3(39) 1月イギリス桂冠詩人 Robert Bridges の招待により、オックスフォード大学などで講演。
4月、パリで島村藤村と同宿、その後ベルリン、モスクワ経由で6月に帰国。
The Spirit of Japanese Poetry, The Story of Yone Noguchi Told by Himself, Through the Torii を出版。
- 1915/大正 4(40) *The Spirit of Japanese Art*, 『日本詩歌論』、*To Hiroshige, On Hiroshige's Ryogoku Fireworks* を出版。
- 1916/大正 5(41) 『欧州文壇印象記』出版。長男・春雄急死(7歳)。
- 1917/大正 6(42) 次女・四方子誕生。
9月、京都府南伝馬町の高島屋で「広重 60 回忌追善記念展」で講演。
- 1918/大正 7(43) 6月息子イサム、アメリカの高校へ出発。ヨネは横浜港まで駆けつけ、”You are to stay in

- Japan”というが、Leonie は “No” といい、イサムも “No” と言い残して発つ。
Lafcadio Hearn in Japan (日本) 出版。
- 1919/大正 8(44) 『六代浮世絵師』出版。
 9 月、三女・八咫子(やたこ)誕生。
 10/4、アメリカ各地の大学等で講演のために渡米。San Francisco, Berkeley, Pasadena, Los Angeles, Chicago, Buffalo, Toronto, Boston, New York, などで講演。イサムには再会せず。
 12 月、次女・四方子死去。
- 1920/大正 9(45) 3/18、母・くわ死去。
 4 月、アメリカより帰国。*Japanese Hokku*, 『日本の美術』出版。*Seen and Unseen* を New York の Orientalia から 500 部限定で増刷。
- 1921/大正 10(46) 6 月、Alfeo Faggi 作ヨネ・ノグチ胸像が、Chicago Art Club により Chicago Art Museum に寄贈される。
 12 月、初めての日本語詩集『二重国籍者の詩』を出版。
Hiroshige, Japan and America, Selected Poems of Yone Noguchi Selected by Himself, Through the Torii 出版。
- 1922/大正 11(47) 日本語詩集『林檎一つ落つ』および『沈黙の血汐』、『野口米次郎持論』、『敵を愛せ』、英詩集 *Selected Poems of Yone Noguchi, Lafcadio Hearn in Japan, Korin, Through the Torii* が出版される。
- 1923/大正 12(48) Leonie Gilmour, 娘のアイリスを連れてアメリカへ帰る。レオニーは二度と来日することはなかった。
 日本語詩集『山上に立つ』、日本語詩集『最後の舞踏』、日本語詩集『我が手を見よ』、『霧の倫敦』、*Utamaro, The Pilgrimage* を出版。
- 1924/大正 13(49) 1/5 三男・十三次(とみじ)誕生。
 日本語詩集『ヨネ・ノグチ代表詩』、『先駆者の言葉』、*Hokusai, Some Japanese Artist, Utamaro* を出版。
 息子イサム、ニューヨークで初の個展を開く。それまで名乗っていた母の性から、イサム・ノグチと名乗り始める。
- 1925/大正 14(50) 『座る人間の評論』、日本語詩集『第一表象抒情詩集』を出版。野口米次郎ブックレットシリーズ 6 冊『芭蕉論』『光悦と包一』『松の木の日本』『能楽の鑑賞』『米国文学論』『光琳と乾山』を出版。
 11 月、慶應義塾大学教授シェラード・ヴァインズが『詩人野口米次郎』を出版。
- 1926/大正 15 昭和1(51) 5 月、野口米次郎詩生活 30 周年を記念し雑誌『日本詩人』に特集が組まれる。5/11 中央亭事件。
 野口米次郎ブックレット 22 冊『春信と清長』『写楽』『歌麿北斎広重論』『蕪村俳句』『芭蕉俳句』『ポオ評伝』『小泉八雲』『万葉論』『神秘の日本』『詩の本質』『人生五十年』『蕉門俳人論』『眞日本主義』『恋愛の詩人』『自然礼讃』『印度の詩人』『米次郎随筆』『米次郎独語』『霧の倫敦』『米次郎講演』『愛蘭情調』『海外の交友』『外人の心理』、および『春信清長写楽論』を出版する。『第二表象叙情詩集』が出版される。
- 1927/昭和 2(52) *Harunobu*, 野口米次郎ブックレット 5 冊『画壇の人人』『舞台の人人』『詩人の郷土』『書斎の消息』『芸術の東洋主義』を出版。『第三表象抒情詩集』、『第四表象叙情詩集』出版。

- 1928/昭和 3(53) 『私は現代風景を切る』『放たれた西行』『日本美術読本』を出版。
- 1929/昭和 4(54) 3月、『人生詩集』出版。
4月、長女・一二三が外山卯三郎と結婚。帝国ホテルで披露宴を行なう。仲人をつとめたのは、与謝野寛、晶子夫妻。
9月、友人のアメリカ人女流作家 Zona Gale の *Romance Island* (1906)を翻訳、『世界大衆文学全集31』に「幻島ロマンス」と題して出版される。
他に、『ゴンクールの歌麿』『芭蕉論』『浮世絵解説』『芭蕉俳句選評』『鈴木春信』が出版される。
- 1930/昭和 5(55) 『ブラウニング詩集』『西行全集』『抒情英詩集』『現代日本詩人全集第三巻 蒲原有明 岩野泡鳴 野口米次郎集』『葛飾北斎』『詩人タゴオル』『夢と文学』『簡素な生活』『趣味の支那漫談』『東洲斎写楽』を出版。
ヨネとまつ子の初孫・外山恵美子が誕生。
- 1931/昭和 6(56) イサム 12年ぶりの来日。イサムは、ヨネの2番目の兄、高木藤太郎の家に滞在する。ヨネ・ノグチとイサムが会うのはこれが最後となった。
3月、四男・道夫誕生。
『喜多川歌麿』『現代日本文学全集第五十七巻 小泉八雲 ケーベル 野口米次郎集』『鳥居清長』『明治大正文学全集 三六詩篇野口米次郎篇』を出版する。
- 1932/昭和 7(57) 『日本国民読本』『六代浮世絵師決定版 喜多川歌麿』『六代浮世絵師決定版 東洲斎写楽』『六代浮世絵師決定版 鳥居清長』『六代浮世絵師決定版 葛飾北斎』『六代浮世絵師決定版 鈴木春信』を出版する。
ヨネとまつ子の孫・外山やよび誕生。
- 1933/昭和 8(58) *The Ukiyoe Primitives*, 『六代浮世絵師決定版 一立斎広重』『微笑の人生読本』『近代生活読本』『自然礼賛読本』『俳人芭蕉』『魂の記録読本』が出版される。
ヨネとまつ子の孫・外山光夫誕生。
12/31、Leonie Gilmour アメリカで死去。
- 1934/昭和 9(59) *Hiroshige and Japanese Landscapes*, 『英米文学評伝業書九三ボオ』が出版される。
- 1935/昭和 10(60) 10/16 インド各州の大学へ講演のため、インドへ向かう。10/21、上海で鲁迅と面会。インドではタゴールやガンジー、ナイズーと面会し、多くの大学で講演する。
『日本の美術』『現代詩人全集』『沈黙の血汐 山上に立つ』を出版。
- 1936/昭和 11(61) インドから帰国。『印度は語る』を出版。
- 1937/昭和 12(62) *The Ganges Call Me, Harunobu*, 『人生読本:春夏秋冬』が出版される。
1/18、四女五月子(生年月日は不明)が死去。
- 1938/昭和 13(63) 『われ日本人なり』を出版。
12月、次男・正雄応召され、野砲三隊に入る。
- 1939/昭和 14(64) 『強い力弱い力』を出版。三女・八咫子が増山忠俊と結婚。
- 1940/昭和 15(65) *Harunobu, Hiroshige* の浮世絵に関する豪華本を出版する。

- 1941/昭和 16(66) *Emperor Shomu and the Shosoin* (二巻本)の豪華本を出版する。
- 1942/昭和 17(67) 『起てよ印度』、日本語詩集『宣戦布告』、『野口米次郎選集一 芸術殿』が出版される。
12月、ヨネとまつ子の孫・増山富爽美が誕生。
イサム、アメリカで、アリゾナ州ポストン強制収容所に入所。
- 1943/昭和 18(68) 『野口米次郎選集二 詩歌殿』(自選詩集)、『伝統について』、『聖雄ガンジー』、『野口米次郎選集三 文芸殿』、『野口米次郎選集四 思想殿』が出版される。
- 1944/昭和 19(69) 『芸術殿』その他4冊の選集に対して、芸術院賞を受ける。『八紘頌一篇』を出版する。
- 1945/昭和 20(70) ある4月の明け方、空襲で中野の自宅は全焼。その翌朝には茨城県結城郡豊岡村(現在の茨城県常総市)に向かい、飯田別荘に疎開。
- 1946/昭和 21(71) 『喜多川歌麿』、『正倉院御宝物』野口米次郎ブックレット編四冊『小泉八雲伝』『西行論』『正倉院御宝物』『光悦と乾山』を出版する。次男・正雄が酒井慶子と結婚。
- 1947/昭和 22 3月、『野口米次郎定本詩集』(一～三巻)を出版する。
3月、三女・八咫子の夫、増山忠俊がヨネの疎開先へ行き、腎臓癌を発見。
7/13、疎開先で胃癌のため死去。享年71歳。神奈川県藤沢市の常光寺に葬られる。
『芳崖・雅邦・暁斎・芳年論』、野口米次郎ブックレット四冊『光琳抱一論』『能楽の鑑賞』
『芭蕉礼讃』『上代の彫刻』、『野口米次郎詩集 表象抒情詩全集』『野口米次郎随筆業者第一篇 自叙伝断章』

Appendix 2 : 参考写真(遺族提供のものを含む)



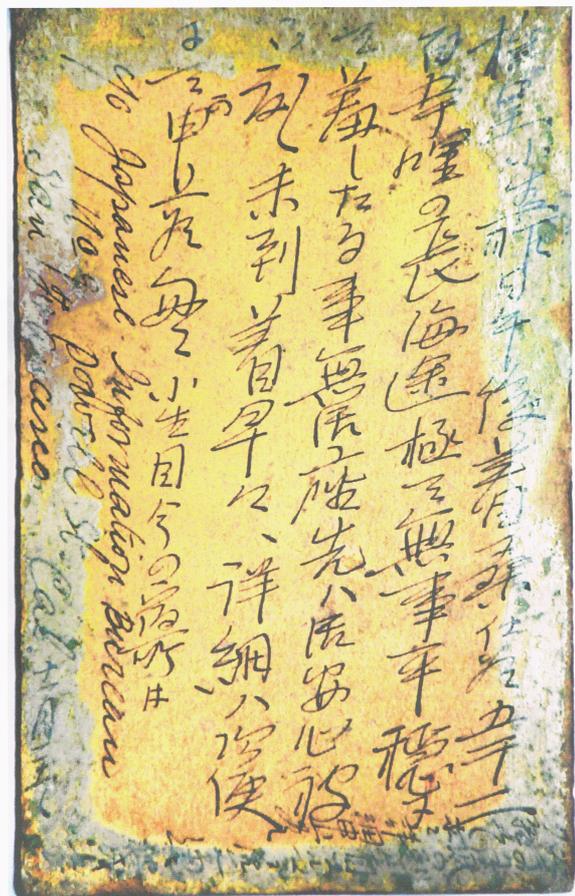
渡米直前のヨネ、1893撮影。
Hakutani, Yoshinobu. Ed. Selected English Writings of
Yone Noguchi. Vol.1 (Associated University Press,
1990)より。



カリフォルニア時代のヨネ。(撮影日時不明, Courtesy of The University of California, Berkeley, Bancroft Library)



ヨネ・ノグチが1893年11月20日にカリフォルニア州サンフランシスコに到着した翌日に、父親宛に無事の到着を知らせた葉書。
(星野正臣氏蔵)

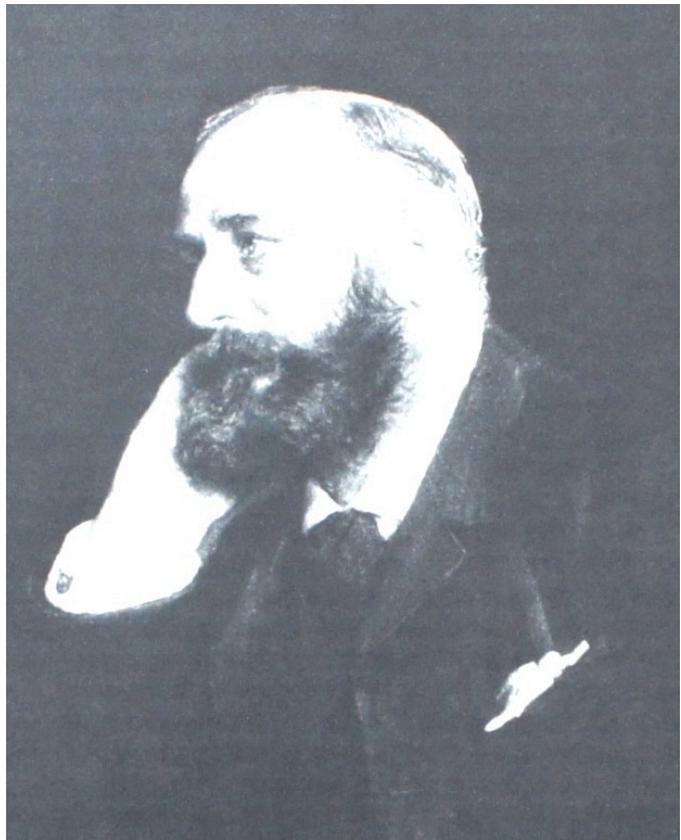


“The Heights” (Joaquin Miller’s place), Oakland, California

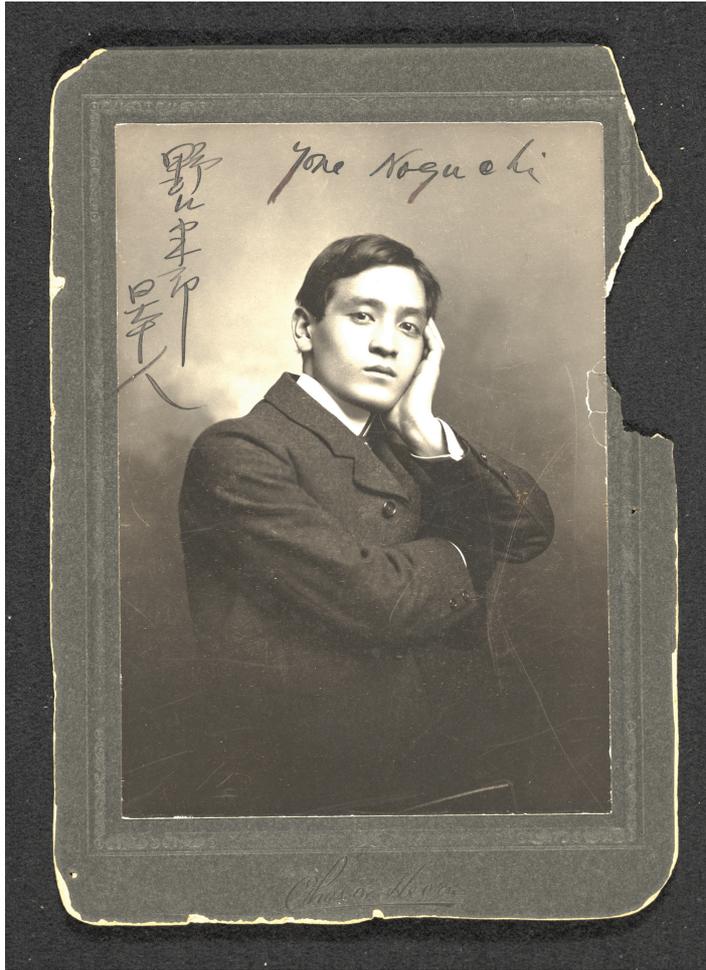




Joaquin Miller
Selected Writings of Joaquin Miller (Urion Press,
1977)より。



Charles Warren Stoddard
American and the California Dream
1850-1915 (Oxford Press, 1973)より。



Yone Noguchi (1903)
Charles H. Hearn, photographer. Miscellaneous
photographs collection, Archives of American
Art, Smithsonian Institution.



1904年9月帰国
後のヨネ。
シェラード・ヴァ
インズ著『詩人
野口米次郎』
(第一書房、
1925)より。

1904年11月12日、ヨネ・ノグチの兄・祐眞が常光寺の住職となる晋山式。中央に祐眞、その2人横の洋装姿がヨネ。(常光寺蔵)





Leonie Gilmour.
ドウス昌代『イサム・ノグチ』(東京:講
談社, 2000)より。



後列右側がレオニー、その手前がイサム・ノグチ。Sueyoshi, Amy. *Queer
Compulsions: Race, Nation, and Sexuality in the Affairs of Yone Noguchi*.
(Honolulu: University of Hawaii Press, 2012).より。



上:ヨネの両親の金婚式(1907)。
下:津島の野口家で家族と。左端がヨネ。(星野正臣氏蔵)



ヨネと長女・一・二・三。
(星野正臣氏蔵)



津島の野口家で。左端がヨネ。(星野正臣氏蔵)



 Little Fairy,
Little Fairy by a
hearth,
Flight in thy feet,
Shall I go with
thee up to Heaven
By the road of the
fire-flames?

Little Fairy,
Little Fairy by a
river,
Dance in thy heart,
Longing at thy lips,
Shall I go with
thee to Far-Away
Rolling over the
singing bubbles?

Little Fairy,
Little Fairy by a
poppy,
Dream in thy hair,
Solitude under thy
wings,
Shall I sleep with thee
tonight in the golden cup,
Under the stars?
Yours Noguchi 

ヨネによる"Little Fairy"の自筆詩。

同詩はJapan of Sword and Love (1905), The Summer Cloud, Prose Poems (1906), The Pilgrimage (1909)などに掲載されているが、それらに掲載されたものから数カ所手直しされている。

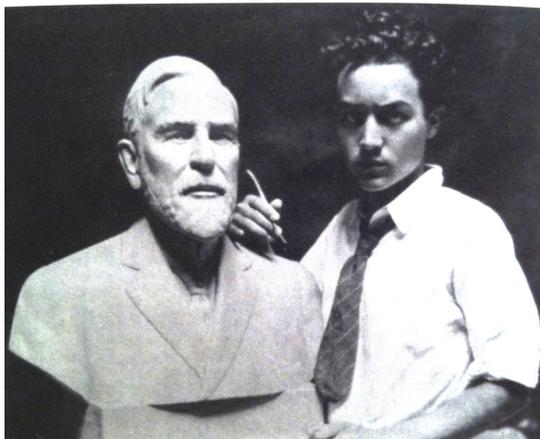
(星野正臣氏蔵)

神奈川県藤沢市常光寺のヨネ・ノグチの記念碑。



津島の天王川公園の中之島にあるヨネ・ノグチの銅像。

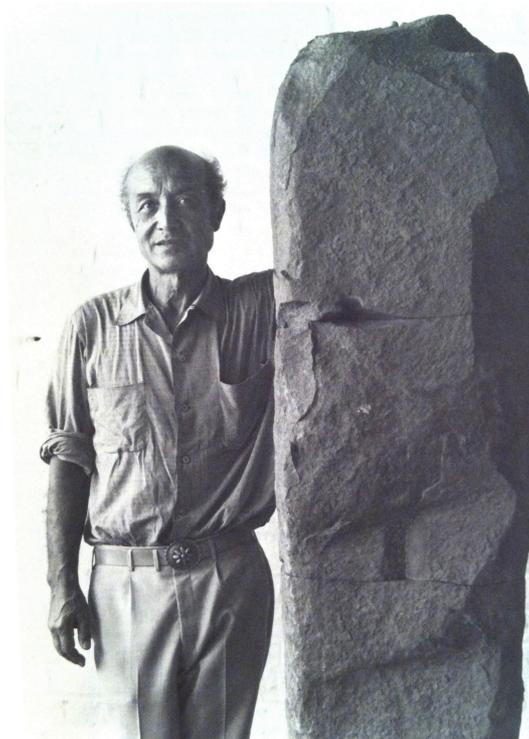
Isamu Noguchi, son of Yone Noguchi and Leonie Gilmour

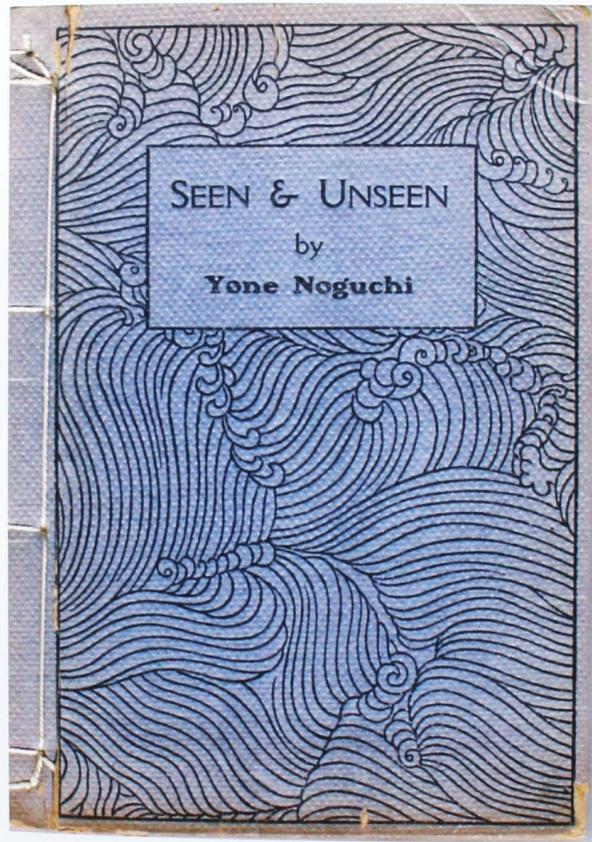


上下、Noguchi East and West
by Dore Ashton (Berkeley and Los
Angeles: University of California
Press, 1992)より。

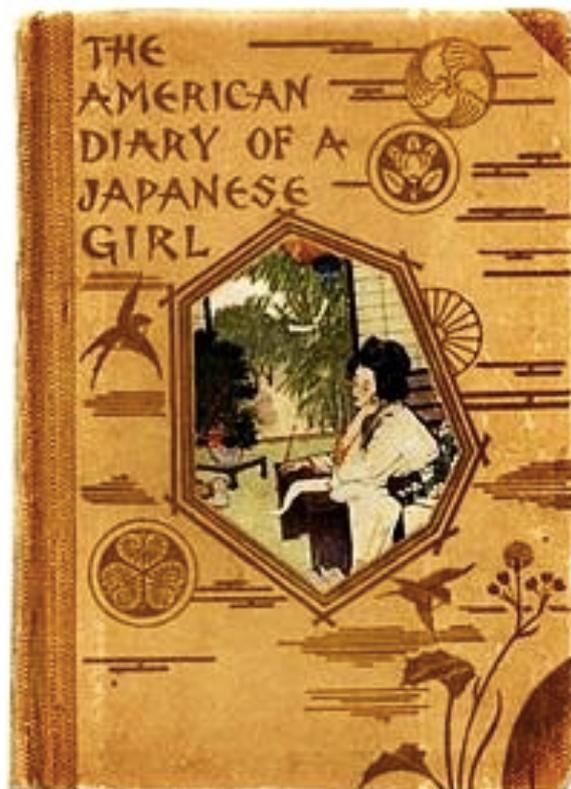


上下、ドウス昌代『イサム・ノグチ』(東
京: 講談社, 2000)より。

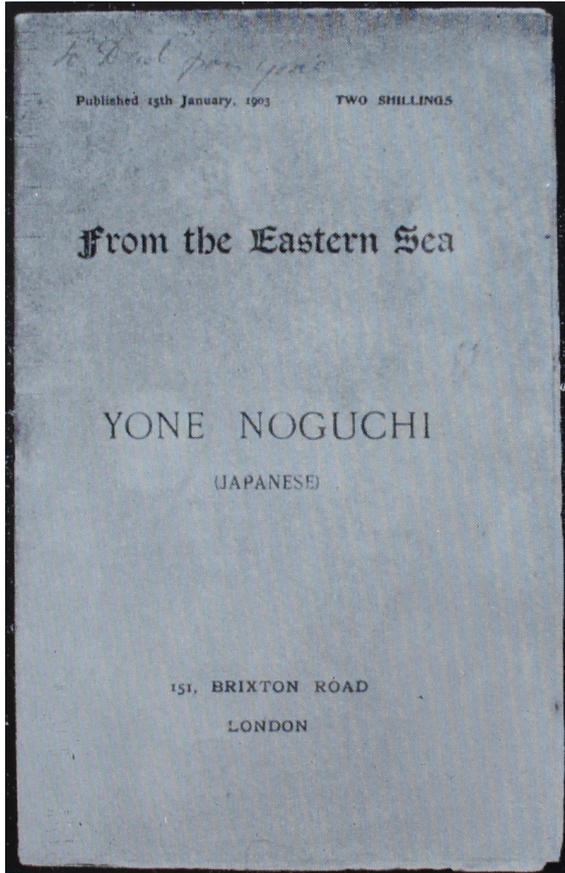




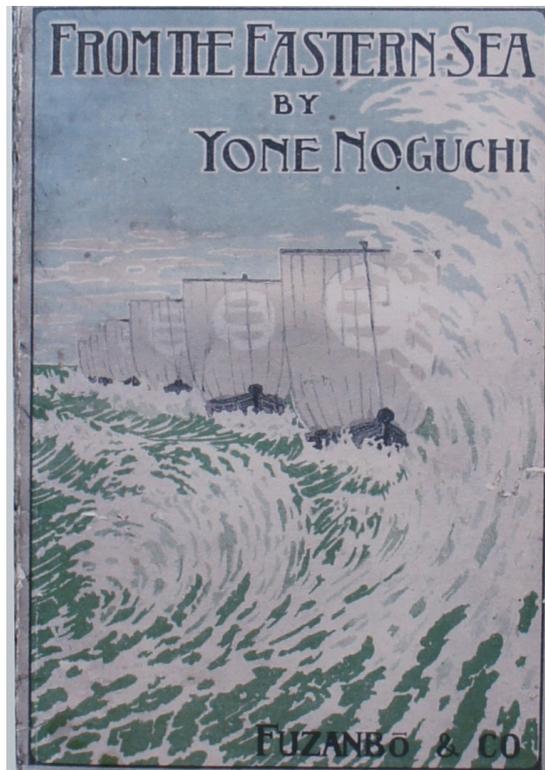
Seen and Unseen: Monologues of a Homeless Snail
(San Francisco: Gelett Burgess and Porter Garnet, 1896)



The American Diary of a Japanese Girl
by Miss Morning Glory
(New York: Frederick A. Stokes, 1902)



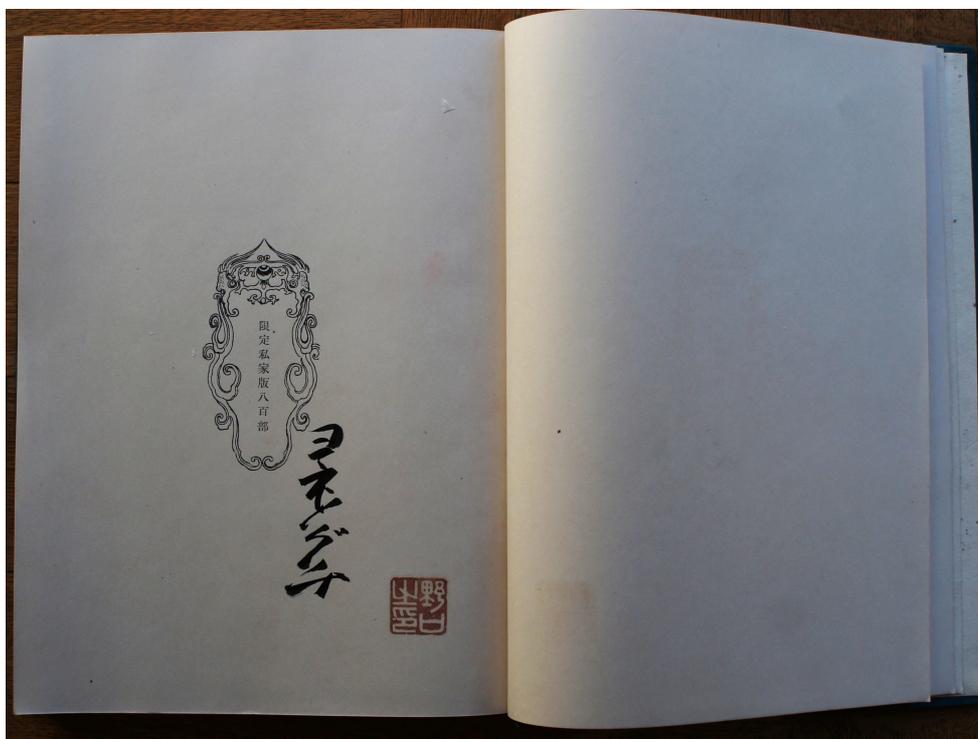
From the Eastern Sea
(London: self-published, 1903)



From the Eastern Sea. 3rd ed.
(Tokyo: Fuzanbo, 1903)

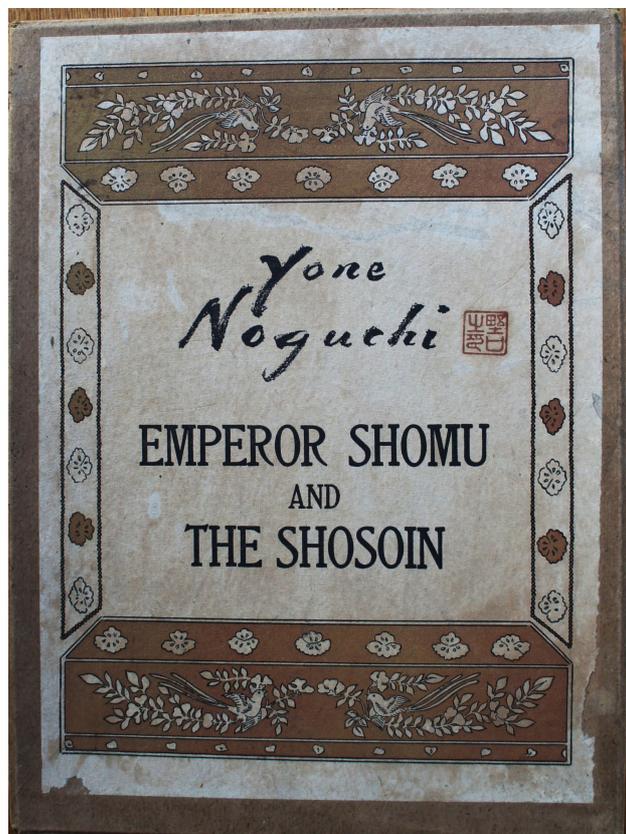


『六代浮世絵師決定版 鳥居清長』(1932)。800部限定の私家版。扉にヨネ・ノグチとサインが入っている。





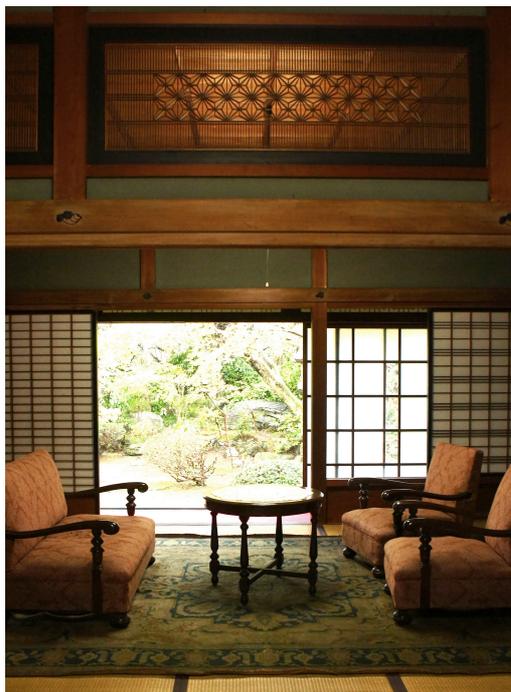
『日本詩人』野口米次郎
記念号
1926年5月。



*Empero Shomu and the
Shosoin* (Tokyo: Kyo Bun
Kwan, 1941)
Yone Noguchiとサインが
入っている。



茨城県常総市の鬼怒川。ヨネ・ノグチは、疎開先から毎日ここへ散歩に来ていた。橋も柳も当時からあったものだという。



ヨネ・ノグチ一家の疎開を受入れた飯田憲之助邸の応接間(現在の茨城県常総市)。ヨネ・ノグチは、離れから毎日、母屋のこの応接間へ来ては話し込んでいったという。部屋は当時のまま残っている。



竹林と、その前に見える門の間に、ヨネ・ノグチ一家が疎開中に暮らしたという、飯田憲之助氏の離れが建っていた。